
神様の剣と懲りない悪党

すたりむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様の剣と懲りない悪党

【Nコード】

N6914V

【作者名】

すたりむ

【あらすじ】

「……この剣は呪われている」

ひよんなことからへんな剣を抜いてしまった大悪党（自称）のライナー。触れることすら忌み嫌われる魔物を滅ぼすことを生業とする魔女・サリから受けた宣告は、あまりに唐突なものだった。

不運を嘆くも、とりあえず働かなければいけなくなったライナーだが、試練はさらに続く。草原を征する竜に狙われ、巨人族の集落では戦争に巻き込まれ、どんどんひどい目にあっていく。果たして

ライナーは生き延びることができるのだろうか？

神鳴る剣を手に神話が壊れ果てた世界を駆け抜ける少年と、彼と運命を交差させる人々が紡ぐファンタジー戦記。

(この小説は自分のサイトでも掲載してあります)

(8/12、友人の勧めに従ってあらすじ改稿)

(8/24、思うところあってあらすじ再改稿)

一日目：悪党、剣を拾う

（はあ、はあ）
角を曲がる。

追われているのを、肌で感じていた。

敵が、近い。

（はあ、はあ、くそ）

路地の出口が見えて、少し躊躇する。

だが止まっている余裕はない。思い切って一気に大通りへと駆け出した。

ひゅいつ。

音がして、頬をなにかがすすめる。

鋭い痛みとともに生温かいなにかが頬を伝っていくが、無視。

速度を緩めずに夜の大通りを横切り、べつの路地に飛び込んだ。

（はあ、はあ、ったく、この）

「なんで夜走りなんかを家の中に飼ってるんだよ、あの成金はっ！」
走りながら、毒づく。

『夜走り』という言葉に、追って来るものが、きい、と金切り声を上げた。

「いっけねえの……魔物飼ってるなんて、神殿に言いつけたらしほり首だぜ」

愚痴を言いながら、頬を流れる血を汗といっしょに手でぬぐう。

もちろん、んなことが通る世の中じゃないってのは百も承知。

この世知辛い時代、金持ちと文無しを同列に扱うなんて、金と銅を1：1で交換するようなものだ。

つまりは無理、無駄、ナンセンス。だれがわざわざ貴重な金づるをスラムのガキ一匹のために処刑するって？

「ちつくしょー！ こんな世の中にだれがしたーっ！」

なんだかよくわからないものへの怒りを叫びながら、路地から路

地へと駆け抜ける。

後方の気配は着実に近づきつつある。追いつかれるのは時間の問題だ。

(やるっきゃないか……!?)

覚悟を決めた。

いったん腹が据わったらもう迷わない。男はだまって相手を殴る、クラックフィールド家の家訓なのだ。

微妙に迷惑な家訓だということには、この際目をつぶることにしておいて。

振り返りながら、俺は腰に刺したナイフを抜いて正面に構えた。

作用のみみっちいやつだが、これしか武器を持ってない。

ほぼ同時に、目を凝らしていた闇のなかから、小さな影がぼうつと姿を現した。

全身が獣毛に包まれたそいつは、一見して小人のような華奢な身体をしていた。

だがその手は背丈よりも長く、関節が4つもあり、異常に節くれだつていて、太い。その、異様な腕を足代わりにして、身体を支えている。

足は驚くほど小さいうえに脆弱で、とても身体を支えられそうにない。

夜走り。

正式には、夜を往くもの、と呼ばれる、異形の生物。

否、生物ですらない、禁断の『ありえざるもの』だ。

「かかってこい、化け物猿！」

強きをくじき弱きを助ける世紀の大悪党、ライナー・クラックフィールド様が相手してやるぜ！」

せいっぱい威勢よく言って、ナイフを正面に構える。

応じて夜走りが、きい、と小さな金切り声を上げて……

ほと、と、そいつの目の前に、横の建物の屋根からなにかが落ちてきた。

「え？」

目を点にした俺の目の前でそいつはもぞもぞと這いまわり、節くれだった異様に長い腕で身体を支えて立ち上がった。

夜走り、だった。

「え？ え？」

ぼと、ぼとぼと、ぼとぼとぼとぼと

さらに次々に、おなじようななにかが屋根から落ちてくる。

落ちてきたそれらはやっぱりもぞもぞ動き回って、それから節くれだった腕で身体を支えて立ち上がった。

やっぱり、夜走り、だった。

「あ、あは、あははははは……」

かわいた笑い。

整列した数十体の夜走りたちが、その笑い声に反応して、ざあっ、といっせいにこっちに振り向いた。

そのうちの一体が、きい、と鳴いて、

「んなの、ありかあああああああつ！？」

叫び声は怒涛と化して迫り来る夜走りにかき消され、そして

(こうなっただってわけだ)

空が見えた。

きれいな空だ。

街とか森とか、高いものがある場所では、こつもきれいに全方位の空は見えない。

障害物のない場所というのは、ひょっとすると初めての体験だったかもしれない。

「……きれいだな」

……

「こつて、なごんでる場合じゃねえっ！」

がばつと起き上がった拍子に、くらくらと強烈なめまい。

同時に腹がぐぎゅるる、と、みじめな音で鳴いた。

「ぐえっ……」

ばたつ。

「そ、そっぴや俺、倒れてたんだっけ」

ようやく、ここ数日間になにがあつたのか、俺は思い出していた。

（あー……たしか、マリアんとこの酒場でフィーの奴が俺のことを『こそ泥』呼ばわりしやがって。

で、腹立ったからこそ泥でないとこを見せやるって宣言して、成金のウォルゲンの家に忍び込んだんだよな。

そしたら、なぜかその家で飼っていた夜走りに襲われて、）

あのときは、本気でもうダメかと思つたんだけど。

（で、どこをどうやったのか憶えてないけど、ともかくその群れをやりすごして突っ切って、）

それからマリアんとこに行つたんだっけ。

そしたら『あんたをかばったら、うちまで夜走りに襲われちゃうじゃない』って追い出された。

（冷たいよな、マリア。俺もおなじ立場だったらそう言うけど）

で、もう街なんかにはいらねえって城門よじ登って飛び出したのだが。

（飛び出してから、食いもん持つてきてなかったことに気がついたんだよなあ）

そして今に至る。

（あー、腹減った。

草は食い飽きたし、野ねずみは逃げるし。逃げなけりや食えるのに。

なんで逃げるんだろ。俺、人望ないのかな）

街道筋を離れて、森に入れば狼たちには好かれる自信があるが、その場合に食う側はたぶん俺じゃない。

（あー、だれか、食料持つてきてくれないかな）

交換……できるものは持つてないから、やっぱり追いはぎするし

かないか。

追いはぎしやすい旅人を思い浮かべる。女とか子供とか。

(いやいや。それじゃ俺、まるで小悪党じゃないか)

やっぱりここは、いかにも卑劣そう、かつ金持ってそんな小男とかがいい。

でも、男だとこの体力じゃ押さえ込めない。

ならば連れれの女を人質に取って……というのも、やっぱり小悪党っぽくてよくない。

ここはひとつ、頭の足りなさそうな悪漢に捕らわれた美少女って組み合わせで。

で、女の子を助けて、悪漢は頭が足りないからどっかそのへんの木にでもぶつかって動かなくなつて。

そして、感謝のしるしに女の子が俺に食料を分けてくれる、と。

(よおし、これなら完璧！)
拳をぐつとにぎってガッツポーズ。

なにか致命的にまちがっている気もしたが、深くは考えないことにする。男は細かいことをぐだぐだ言わない、がクラックフィールド家の家訓なのだ。

と、そのとき、視界にひとの姿が映った。

小柄な女の子と大男のコンビ。

(ラッキー、さっそく来た)

ほくそ笑む。まさに思い描いたとおりの組み合わせ。

あえて言うなら、大男が優しそうで悪漢に見えないのと、女の子が楽しそうにしゃべっているので捕らわれてはいなさそうなのが難点だったが、細かい差は気にしない。

だが、

(げ、要らないやつまで来た)

いや、思い浮かべていたのちがう人物が来たわけではない。むしろ、思い浮かべたとおりのものが来たと言っている。

つまり、ふたり連れの前に思い浮かべていた、いかにも卑劣そう、

かつ金持ちそうな小男。

「ごていねいにもちよび髭と片眼鏡のオプション付きだった。芸が細かい。」

(いまさら来なくていいのに……)

困った。3人では、どうやっても追いはぎなどできそうにない。

かといって物乞いはプライドに抵触する。

でも草食って生きる毎日はいいかげんうんざりだ。

(……どうしよう)

悩んでいると、

「あ！ あそこにひとが倒れてる！」

見つかってしまったらしい。

(ええい、もう、なるようになれ！)

やけっぱち作戦決行。ぎゅっと目をつぶって、相手が近づいてくるのを待つ。

近づいてきたら、あとはなるようになれ、だ。

「大変！ 助けてあげなくちゃ！」

(そうそう、助けてくれえ)

たたと駆け寄ってくる足音。あともうちよつと。

「やめておきましょう。どうせ野盗の擬態です」

ぎく。

かなり鋭い。

「なに言ってるんですか、サフィートさん！ こんなちびっこくてかわいい子が、野盗のはずがないじゃないですか！」

ぐさぐさ。

「ちびだからといって油断するのは考えものですぞ、ポエニデッタ様。子供とは限りません。もしかしたら、岩小人のような背の低い種族かもしれませんからな」

ぐさぐさ。

(お、俺って、そこまで言われるほどちびだっけ……?)

深く傷ついた俺には気づかないまま、ふたりの口論は続く。

声からして女の子と、たぶんもうひとりはお男のほうだろう。

「そんなこと言ったって、倒れているのは事実じゃないですか！」

「いや、ひよつとしたら人間に擬態した魔物かもしれないかもしれません。ともかく、危ないから関わらないのが身のためでしょう」

「で、でも……ほら、こんなに苦しそうに、ぎゅっと目をつぶってますよ」

「それが怪しいのですよ。寝ているだけだったり、気絶していれば、力など入れているはずありませんからな」
ぎくぎくつ。

そうとう鋭い。

「まあまあ、ふたりとも、そんなに喧嘩しなくてもよろしいではありませんか」

第三の声がした。

「でも、その……」

「しかし、スタージン様！」

「ほら、持ち上げてみればわかりますよ」

瞬間的に、なんだか知らない悪寒が全身を走った。

「お、おい、ちょっと、待」

ひよい。

遅かった。

「う、うわああああああっ！？　なんだこりゃあ！？」
じたばたじたばた。

「こちら、おとなしくしなさい」

「これがおとなしくしてられっか！　おい、こら、デカブツ！　ちよつと下ろせ！」

後ろから首筋をつかんでいる大男に、叫ぶ。

大男は肩をすくめると、

「仕方ありませんな。はい」

「おわつ、たつ、たつ！」

いきなり手を離され、足がすべる。結果、俺の身体は絵に描いた

ようにきれいにコケた。

「つてえっ！」

見上げると、大男はにこにこ笑いながら手を差しだしてきた。

「いやあ、元気そうだなによりですなあ」

「て、てめえっ！ いきなりなにしゃがる！」

どなつて、俺は奴の手をひっぱたき、起き上がりざまに拳を相手のあごにたたき込もうと

したところでもたさっきのめまいがぶり返して、膝がぐんと折れた。

「あ、あれ？」

やばい、これは倒れるなー、とひとごとのように緊張感なく考えながら、やってくるだろう地面とのキスを覚悟する。

目をぎゅっとなつぶり、

むじ。

「むじ？」

地面は、やわらかかった。

というより、ぷにぷにしていた。

つけ加えれば、ちよつち温かった。

さらにもうひとつ言えば、とく、とく、と、リズムカルに動いていた。

(やわらかくて、ぷにぷにしてくて、温かくて、とくとく動いている地面……)

「ま、まさか新手の魔物っ！？」

「んなわけあるかっ！」

どげっっ！

みぞおちに凄絶な衝撃が走った。

「~~~~~っ！」

頭が真っ白になって崩れ落ちる俺の目の前で、地面　でなくて、女の子は顔を真っ赤に上気させて、

「よ、よくも~~~~っ、ボクの胸にいきなり顔を埋めるなんて、なん

て破廉恥なヤツ！」

「1」、誤解……」

「問答無用！ 覚悟しなさいっ！」

怒りの言葉とともに、ふたたび拳が突き出されて。

そして、俺の意識はぶつつりと途絶えた。

……………

「じゃあ、この子って、ここ数日はほとんどなにも食べていなかったの？」

小娘の言葉に、いかつい体躯をした男、パゼット・スタージンが答えた。

「おそらくは。やせ具合もちょっと不自然ですし、食べ物をなにも持っていないませんでしたからな。」

おそらく家出人が犯罪者か、その種の者でしょう」

「かわいそう……殴ったりして、悪いことしちゃったな」

すまなそうに、小娘。

……これだ。どうせ、この後に「この子を助けてあげよう」と続くのは目に見えている。

それがわかっていたから、この小僧と関わり合いを持つのを避けようと何度も言ったというのに。

私は深々とため息をついた。

(そんなことだから左遷されたというのに、なぜ気づかないのだ？

これだからガキは嫌だ……)

憎々しげに見やる。

と、小娘がふとこちらを向いたので、あわてて私は愛想笑いを顔に貼り付けた。

「どうか、助けてあげることにはできないものでしょうか、サファイアさん」

ほらきた。

予想された質問だったので、私は即答することができた。

「先日、隊商を追い越したのを覚えておいででしょうか？」

おそらく、我々の位置から歩いてもさほど遠い場所にはいないと思います。引き返して、彼らに預けてはいかがでしょうか？」

これでまた1日のロスだ。ちくしょうめ。

小娘はしかし、感激した様子だった。

「サファイアさんはすごいですね。いつでも、わたしよりも多くのことに気づいているんですから」

さっき自分のことを「ボク」と言ってしまったことには気づいていないようだ。外面の作り方すら未熟なのか、小娘め。

お手本、というわけでもなかったが、私は内心をひた隠しにしつつ大仰に頭を下げた。

「神官の気づかぬことに気づき、手助けするのは神官補の役割です。当然のことですよ、ポエニデッタ神官」

（我慢、我慢だサファイア・パリーメイジ。

ただの商売人の息子が、金で作ったコネを駆使して、異例のスピードで神官補まで登りつめることができたのだぞ。

もう少しで、神官の位が得られる。そうなれば格段に権力が増す。もう少しの辛抱だ）

「もう少しだ。もう少しで……」

「？ もう少しで、どうかしたのですか？」

はっ。いかんいかん。危うく、我を忘れて内心を口走ってしまうところだった。危ない危ない。

「いえ、なんでもありません。

……そろそろ参りましょうか？」

「話がまとまりましたな。じゃあ、私が少年の身体を持ちましょう」
言って、それまでしゃべっていなかったスタージンが小僧の身体

をかつぎあげた。

(……で、どこだここ)

痛むあごをさすりながら起き上がる。

周囲を見回すと、そこは小さな部屋みたいな場所だった。

木でできた枠を丈夫そうな幌が覆って、天井を形作っている。

壁の一方に出口があつて、その外にひとの気配。

地面はさつきから不規則にがたごとと振動し続けている。移動しているみたいだった。

要するに、

「幌馬車、か？ いや、けど……」

(なんだって俺は、こんなところに放り込まれてるんだ?)

とりあえず、幌に空けられた窓から外を見る。

風景自体は見たことがなかったが、たぶんさつきとおなじ街道の途中だろう。

フマトキア

ウァントフォルン

すべての道が通じる街から北の都までをつなぐ、『紫の街道』。

地方によっては山道や、畑の間を通っていくところもあるらしいが、このあたりの地形はだいたい森ばかりだ。

黒く、照り返しをほとんどしない葉のついた『くらやみ森』の木々は、鬱蒼として果てしなく続いている。

世界の、果てまで。

(……まあ、実際にはどつかでとぎれるんだろうけどさ)

苦笑して、窓から目を逸らす。

影の伸びぐあいから見て、時刻はあれからそんなに経っていないみたいだった。夕餉にはまだやや早い、それくらいの時間。

自分の身体を調べる。拘束されてはいないが、刃物の類は取り上

げられていた。

(刃物があれば、幌をぶち破いて逃げ出せたのになー)
舌打ちする。

他になにか使えるものはないか、と馬車のなかを見回して

(へ?)

硬直。

馬車の隅に、女の子がひとり、ぽつーんと置き去りにされたように座っている。

座っている のだが、

(ぜ、ぜんぜん気づかなかった……というより、)

むしろ、向こうがこちらにまったく気づいていない感じ。

ちなみに馬車の中はけっこう狭い。彼我の距離は、ふたりが腕を伸ばせばぎりぎり届くくらい。

(な、なんだよこいつ……)

本能的にヤバげな気配を感じて、ちょっとあとずさる。
体重の移動に反応して、床がぎしり、と音を立てた。

と、

「……?」

女の子がこちらを向いていた。

「わ、あ、あのっ、そのっ」

あまりに唐突で、ついでもってしまっ。

そのとき、ようやく俺は気がついた。

(こいつ、隻眼だ)

左眼のあるべきところに黒い眼帯が垂れている。

(もしかすると、そのせいで俺の動きが見えていなかったのかな)
そう考えてむりやり納得する。けっこう音も立てていたと思った

が気にしない。うん。

と、女の子が口を開いた。

「なに?」

「え?」

「なにか、用？」
どきまぎする。

「い、いや用ってわけでもないんだけど、その、あの」
心のなかを探って、聞きたいことを探し出す。ええと、まずは、
「ここ、どこだ？」

「馬車のなか」
あたりまえだった。

(……俺の訊きかたが悪かったんだろうか)
とりあえず、答えてくれることはわかったので、遠慮なく聞いて
みる。

「俺、なんでここにいるんだ？」
「さあ」

考えているのかいないのか、ぼーっとした目でこちらを見ながら
彼女は言った。

「さあ、って、なにも知らないのか？」
「私が来たときには、もう、ここにいたから」
「そうなのか。」

「って、この馬車、そもそもなんなんだ？」
「……なんなんだ、と言われても」

「ええと、たとえばだれの持ち物か、とか」
「クランさんだと思う」
「クランさんって誰？」

「この隊商のリーダー、ね」
いきなり横合いから聞こえてきた声は、
(げ、さっきの暴力女)

幌の外からのぞきこんでいたそいつは、なんだかむっとしたよう
な表情を浮かべた。

「なにかいま、失礼なこと考えなかった？」
「べ、べつに……」

目を合わせないように気をつけながら答える。合わせたら殺られ

る。ヤバい。

相手はしばらくこちらを厳しい目でにらみつけていたが、すぐに相手を崩した。

「おいで。食事、欲しいでしょ？」

「あ、ああ……」

「サリさん、コゴネルさんが呼んでたよ。行ったほぅがいいんじゃないかしら」

「そう。助かるわ」

言って、サリと言われたその女の子は

「わっ!？」

いきなり宙に溶けるように消滅してしまった。

「な、な、な、なんだあ!？」

「こっち」

声が出たほうを見ると、今まさに彼女が馬車から外に出て行くところだった。

女の子はそこで、こちらのほうを振り返って、

「目の錯覚」

つぶやいて、そのまま外に行ってしまった。

……そんなこと言われても。

「つか、そういう次元の消え方じゃなかったぞ、あれは……」

「なに、ぶつぶつ言ってるの?」

不思議そうな声に、我に返る。

「なんでもない、なんでもない。

で、飯だつて?」

「そゆこと。まずは表に出てきなさい。話はその後よ」

女の声にうながされて幌の外に出る。

いつの間にか、馬車はすっかり停まっていた。

で。

「まあ要するに、運がよかつたつてことよ」
うんうんとうなずきながら、女　さっき全力で俺をぶん殴った
やつが言う。

俺は、与えられたパンをかじりながら、周囲を見回して観察した。
廃村、である。

どうやら村人が見捨てて廃墟になった宿場らしい。

フランクス
栄光の時代にはきちんと整備されていたという街道も、今となっ
てはこんなものだ。

とは言っても街道がある以上、往来もそれなりにある。宿場がな
くなっていけば、野宿すればいいだけのことだ。

この隊商も、どうやらそのクチらしい。今夜はここで野宿するつ
もりのようだった。

まあ、それはいいとして。

「運つて、なんのことだよ」

「おおかた、飛び出してきたんでしょ？　街だか村だか知らないけ
ど」

う。

凶星だった。

沈黙する俺を見てふふんと笑うと、女はいかにも得意げに言った。

「よかつたわねー。ここに拾ってもらえなければ、いまごろキミは
あそこに倒れたまま大往生よ」

(倒れたつつか、殴り倒されたんだけどな)

相手に聞き取れない程度の小声でつぶやく。

それにはまったく気づかなかった様子で、女は続けた。

「けどキミ、どういふ事情があるのかわからないけど、帰れるなら
家に帰ったほうがいいよ？」

「いや、俺もそうしたいのは山々なんだけど……」

「帰れない理由でもあるの？」

「……それは」

(帰ったらしばり首になるからだよ)

とはさすがに言えない。

言ったら、この手の真面目なタイプはなにをするかわかったもんじゃない。

「そんな悪いやつだったなんて！ 食らいなさい、鉄拳制裁！」

(とかいう展開になりかねないし)

「……いま、微妙にへんな目でわたしを見てなかった？」

「い、いや、別になんにも」

あわててそっぽを向いてごまかす。

と、

「いやいや。なかなか苦労しておいでですなあ、お若いの」

横手に座っていた男が口をはさんできた。

というか、

「誰だよ、このうさんくさい親父は？」

「バカっ！」

ごつん、と頭を小突かれた。

「いってーな！ なにしゃがるんだよ！」

「キミが失礼なことを言うからでしょ！」

「いやいや、ポエニデッタさん、よいのですよ。わたくしもまだ、

自己紹介しておりませんからな」

苦笑いして手を振ると、男はこちらに向き直った。

「はじめまして、ですな。」

わたくし、この隊商のリーダーで、クラン・メーヤと申します」

礼儀正しくおじぎする。

油断せず、俺は相手のことをじろじろと観察した。

金持ちは絶対信用しない、というのがクラククフィールド家の家訓なのだ。

……ヤな家訓だけど。

クラン・メーヤと言ったその男は、改めて見るとなかなかの貫禄がある風体をしていた。

年齢は50ちよつとだろうか。頭髪ははげあがっているが、それ

がかえって精力的な印象を与えている。

体型は、この年齢にしては細身。とはいえ、不自然にガリガリなわけでもない。

周囲を見ると、この周りに座っている連中はみな、こちらにそれなりに気をつかっているように見えた。おそらく彼らはこのクランの使用人なのだろう。

その点で、隊商のリーダー、という自称はうそではなさそうだ。服はこぎつぱりしているが、ところどころに刺繍やあしらいをしていて、多少は服装に気を使っているふうだった。

と、そこで俺はようやく気がついた。

「どうかしましたかな？」

「おっさん、メサイだな」

「ずばり、と、いきなり言う。」

「と暴力女がうめいた。」

「ちょ、ちよつとキミ」

「いやいや、ポエニデッタさん、よいのです。その事実を変えることはできないのですから」

「またも苦笑いして、クランは彼女をさえぎった。」

その彼の服の、ちよつどへそのあたりの右側に、メサイの身分を表すバッジが光っている。

「あなた　ああ、すみません。まだ、お名前をお聞きしておりませんのですな。あなたは、メサイについてどう思っておいでですか？」

「ライナー・クラックフィールド。ライで通ってる」

「簡潔に言い、それから、」

「俺の住んでた街にや、風変わりな神官付きのじーさんがいてな」「はあ」

「なんでも貧乏人には貧乏人の神話があるとかで、毎日毎朝、スラムの街頭で説教垂れるのさ。ま、にわたりの声の代わりってみんな思ってたけどな。」

んで、そいつがこう言つてたよ。メサイは忌まわしき愚者を生み出した最悪の高利貸しどもで、この世にいちやいけないうつてじろりとクランをにらむ。

緊迫した空気があたりを包み込んだ。

暴力女も、使用人その他の取り巻きも、みな一様にひきつった顔でこつちを見ている。

当のクランだけは涼しい顔で、こちらに向かって訊いてきた。

「それでどうします？ わたくしを殺しますか？」

「いやべつになにも。俺、あのじーさん嫌いだったし」

すてーんつ、と、暴力女がすつ転んだ。

「き、キミねえ！ それならそうと最初から」

「ま、それに俺はメサイなんて見たことねえし。知らないものについて語るな、つてのはうちの家訓だからな」

ニヤニヤしながら言う。からかい成功。

暴力女は絶句したようだったが、クランはむしろ愉快そうに笑った。

「いやいや、しかし現実には、あなたは今やメサイである私を知ってしまつたわけですが。」

それについてはどう思われます？」

「……ふむ」

問われて俺はもう一度、クランのことを観察した。

悪趣味なところのないきれいな服装。

態度だつて、ただの行き倒れに対して、これ以上ないくらい親切でていねいだ。

周囲の使用人を見る。さっきの一瞬はひきつった表情でいた彼らも、今は主人と同じようににこにこ、笑っている。

にこにこ。

にこにこにこにこ。

「……とりあえず、だましやすそうだな」がきよっ！「ぐおおあ！？」

「あんだね、ご飯食べさせてもらった相手にそりやないでしょーが！」

痛みにはうづくまる俺の横で暴力女が吠える。

……痛くてこっちはそれどころじゃない。

「だ、大丈夫ですか？ その、舌を噛んだり……」

「気にしなくていいですクランさん。しょせん舌なんかあっても無礼なことをほざくだけですから」

「って、勝手なこと言ってるじゃねえ！」

がばつと跳ね起きる。

「だいたいこの前といい今回といい、てめえは気安く俺の頭をぽんぽんぽんぽん」

「なによ！ どっちの時だってわたしは悪くないじゃない！」

「バカヤロ。先に手を出したら、その時点で手を出したやつが悪人なんだよ。道理をわかまえろ、バカ！」

「バカバカ言わないでよ！ わたしにはちゃんと、リクサンデラ・メザロバーシーズ・キルキル・ポエニデッタっていう立派な名前が」

「んな長い名前、いちいち憶えられつか！ てめえなんざバカで上等だ、やーいバーカバーカ！」

「こ、このっ……」

ぶるぶると肩が震える。

(あ、やば)

危険を察して俺は反射的に逃げようとした。
が、遅い。

「死んじゃえ、あんだなんかっ！」

ごんっ！

「あごふっ！」

悶絶。やばいすげえ痛い。

のたうちまわる俺を見て女はふん、とひとつ鼻息を大きく吐くと、クランのほうに向き直った。

「そういうわけであとはよろしくお願いします。クランさん」

「かしこまりました。ポエニデッタさん」

クランが一礼すると、女はもう一度じろりと俺を見て、

「これ以上無礼なこと言ったら、きざんで馬のエサにしてやるんだからねーっ!」

宣言して、向こうに歩いていってしまった。

「こ、この……まで……」

「まあまあ、ここはひとつ抑えてくださいよ。なにしろ、あなたを連れてきて助けるように要請したのは彼女なんですからね」

笑いながら、クランは俺を引き止めてきた。

俺はまだふらふらする頭をひとつ振ると、

「……連れてきた、って、あんたのところの身内じゃないのか？
あいつ」

うなずいて、クランはこう言った。

「彼女　ポエニデッタさんは旅の神官なのだそうです。なんでも北のほうに行かれるのだとか」

「神官、ねえ……」

よく考えたら、あの女の服は明らかに神職のそれだった。

（最初に会ったときは、腹が減りすぎてたせいでぜんぜん気づかなかったなあ）

まあ、それでだいたいの合点がいった。

「てことは、このパンは喜捨か」

「そういうことです」

……やっぱり。

メサイは、神話を司る神殿から敵視されている。

だから神殿に頻繁に喜捨をして、それで生活権を保障されているのだ。

つまりこの隊商が俺を助けてくれる理由は、あの変な名前の女へのお布施だったわけだ。

「気に入りませんか？」

「まあね。物乞いよりは物盗りになれ、ってのがクラックフィールド家の家訓だから」

「物騒な家訓ですな」

「俺もそう思う」

肩をすくめる。

「けどまあ、理由なく人を助けるやつなんかいるわけないしな。変な企みに巻き込まれたわけじゃなさそうなんで安心した」

言っと、クランはそうですかと笑った。

「で、どうします？　今回は喜捨だから無料として、これからのアテとかはありますか？」

うそをついてもしかたがないので、俺は正直に答えることにした。「草食えば生きてはいけるぞ。まずいけど」

「たまには肉やパンも食べたくはありませんか？　ここにはそのどころもあります」

勧めの口調で言っているが、内容はわかりきっている。

要するに、ここで働けと言いたいのだ。この親父は。

「……強制か？　そいつは」

「いえ、そういうわけでもありません。今日のそのパンと、明日の朝食までは、喜捨としてただで提供いたしましょう」

こほん、とクランはひとつ咳をして、

「ただし、その後の選択はあなたにお任せします。明日の昼までうちに残っていれば、働いてもらうことになるでしょうな」

静かにそう告げた。

夕暮れの廃村をぶらぶら歩いていたら、さっきのサリとかいう女の子と出くわした。

「お、よう」

「……………」

「仕事とか、しなくていいのか？　いや、ほら、みんな野営の準備

してるみたいだし」

「……………」

「ひょっとして、俺のこと覚えてない？
ふるふると首を振る。」

「そっか、それならいいんだ」

「……………ライ」

どきつとした。

「え？」

「ライナー・クラックフィールド。通称ライ。弱きを助け強きを挫く、世紀の大悪党。ただし自称」

言って、彼女は俺のほうを向いた。

「合ってる？」

「つか、どうやって調べた？」

たしか、こいつには名前すら告げていないはずだ。
相手は目を閉じて、

「あなたが名乗ったのよ」

「いつ？」

「近い未来」

……………なんだそりゃ。

「あんたは？ たしか、サリって言ったよな」

言っと、彼女はぼーっ、とした目でこちらを見返して、

「わたしが名乗った？」

「ちがう。聞いたんだ」

訂正する。

相手はなんだか残念そうに、

「そっ」

と言って、ふたたびそっぽを向いた。

……………へんなやつ。

「で、仕事とかはしなくていいのか？」

「してる」

「してるって、さつきからずつとぼーつとしてるだけに見えるけど」
「ぼーつとはしてない」

「へえ？ ま、いいけど」

「サリ！」

呼ぶ声がした。

「サリ、探したよ。センエイがきみに見せたいものがあるって……」
そこで、俺の存在に気がついたらしい。

「サリ、このひとは？」

「ライナー・クラックフィールドだ。ライでいい」

簡潔に俺は自己紹介して、それから彼女を見た。

「だれか呼んでるってよ」

「知ってる。さつき逃げてきた」

……逃げてきた？

「やっぱり、そういう話なの？」

「そうだと思う。たぶん」

「困ったね。彼女も、ああいう癖がなければいいひとなんだけど」

「なんの話だ？」

俺が口を挟んだ。

「あ、ああ。すまない、置いてきぼりにしてしまったね。」

僕はシン・ツアイ。 ディアボロス 霊魂技師のシンだよ」

「……魔人、か？」

確認すると、相手はびっくりしたような表情になった。

「あ、そ、そうだけど、」

サリのほうを振り返り、

「ひょっとして、教えちゃまずかった？」

「べつにいい。隠すことじゃないから」

そのやりとりを聞いて、俺はそのことに気がついた。

「てことは、サリも魔女なのか？」

サリはちよつと首をかしげ、俺のほうを見た。

「そんな気がするの？」

「ああ。そんな気がするぞ」

言われて、サリはしばらくそのまま考え込むような姿勢で固まったのち、

「そう」

なぜか、ちよつとだけうれしそうに言った。

……やっぱり、へんなやつ。

「しかし、初めて見たな、魔人とか魔女とか」

魔物を狩ることを生業とする者。

だが、それは神殿が毛嫌いする行為だ。

魔物に積極的に関わることは、たとえ敵対行為であっても神話への背信なのだ。

だから魔人や魔女はいつでも、社会の嫌われ者。

「でも、かんちがいしないでくれよ。魔人や魔女は、けして普通のひとに危害を加えたりは」

「んなこた、見りゃわかる」

俺はぱたぱた手を振って相手の言葉をさえぎった。

「それより、さっきの話にもどろつ。なにがどうしたんだっけ？」

言つと、相手はややほつとしたような顔をした。

「あ、ああ。いや、センエイっていう仲間の魔女がいるんだけどさ」

「さつき、サリを呼んでるって言ってた奴だな。それで？」

「……女の子が好きなんだって」

ほそりと。

とても衝撃的なことを、サリはつぶやいた。

「……マジか？」

サリはうなずいた。

「それも、嫌がる女の子をむりやりむぎゅーつとするのが好きなんだって」

「……すごい人格だな」

「それで、とても困ってる」

そりゃ困るだろつ。

「どうしてそんなのを仲間にしたんだ、おまえは」

「力量は文句ない。有能で、頼りになるひと」

「面目ない。いや、元々センエイは僕たちのチームの一員でね。サリには今回、特別に参加してもらっているんだ」

「すまなそうに、シンが言った。」

「今回って、この隊商の護衛か？」

「シンは笑って首を振った。」

「いや、これはたまたま行く方向が同じだから、ついでに護衛を申し出ただけだよ。かわりに食事といくばくかの報酬をいただいて、ね」

「ふうん」

「なんとなく、それ以上はあまり関わってはいけないことのような気がした。」

「君はどうなんだい？ 最初に旅に出発したときにはいなかったみたいだから、新入りだろう？」

「いや……」

「俺は言葉をにこした。」

正直、この隊商に居着くべきなのか、いまだに迷っている。

いいかげんな答えはできなかつた。

(いいところだとは、思うんだけどな)

「いまは、まだ居候だ」

「そうなんだ。」

では、僕はこれで失礼するよ。センエイには、サリは用事があるみたいだって伝えておく」

「告げて、シンは元来た方向へ帰っていった。」

「サリは、これからどうするんだ？」

「振り向いて。」

そこで俺はまた絶句した。誰もいない。

あわてて周囲を見回すと、すでにはるか遠く、村はずれのほうを散策しているサリが見えた。

「……なんつーか、つかめない奴だな」

ふう、と、ため息をひとつつく。

それから俺は、もう一度自分のやることについて考えてみた。
いい隊商だ、と思う。

クランは善良かどうかは知らないが、有能で、少なくとも部下に
対しては誠実でもあるように見える。

周囲の働いている連中を見ても、みんな生き生きしていて雰囲気
もいい。

街の外は危険なものだと思っていたが、しばしば魔人や魔女と組
むことがあるというのなら、それもたいしたものではないだろう。

街の片隅でこそ泥やっているより、すべてにおいて改善された環
境がそこにあった。

（ここなら、まっとうに幸せな生活を送ることが、ひよっとしたら
できるかもしれない）

素直にそう思う。

思えば、悪党を気取っていたのだった、周囲の退廃と絶望に飲み
込まれるのがいやだったからだ。

そして、そのどっちだつてここにはありはしない。

もう一度、周囲を見る。すでに夕暮れは深まり、影はどんどん濃
くなっている。

だが、その下にいる者たちの表情は明るい。

各々、焚き火のそばに集まっては、おしゃべりをしたり、寄り添
ったりしている。

考えてみれば、ここで働くのを断る理由なんて、なにもないじゃ
ないか

（なーんて、ね）

がさがさ、がさがそ。

（俺は大悪党なんだ。ちょっといい環境が目の前にあつたくらいで

妥協するなんて、そんなかつこ悪いことできるかっての)

器を月明かりにすかして品定めしながら、心のなかで毒づく。

(どうも値段がわかんねーな……いいや。次)

ほい、と放つて、今度は杖を手にとる。

豪勢なワシの彫刻が彫られた、強そうなやつだ。

(これもよくわからん……ち、早くしないと見張りのヤツが起きちまうつてのに)

ほい。

(次はなんだ？ ……馬のフンか、これ？ にしては香ばしいにおいだな。ひよっとして食べられるのか？)

がぶり。

ぶっ。

ぺっ、ぺっ。

(期待して損した……うっ、にがっ)

「ああ、もう。なんか傍目から見てもすぐわかる金目の物とか、ないのかよ」

「これ」

「ああ。ありがと。

って、これ剣か？ なんだか重たい」

硬直。

「……サリ」

「なに」

「おまえ、なんでここにいるの？」

「見回りから帰ってきたら、ライの姿が見えたから。なにやってるんだろうな、って」

大悪党、お縄の危機。

(オーケー。まずは落ち着こうライナー・クラックフィールド) そもそも、サリは俺がなんでここに居るのか理解していない気がする。

なら、うまくごまかせばなんとかなる。たぶん。

「どうしたの？」

「え、いやなんかめずらしいものがいっぱいあるなーって。そう思わないか？」

「思っ」

「だろ？ いやしかしこの剣なんかこの照り返しがみごとで」

言っ、彼女の前で鞘を軽くずらしてみせる。

露出した刃が、月の光を浴びてきれいに輝いた。

と、サリの表情が、ほんのちよっただけ変わった。

「どうした？」

「その剣、抜けるの？」

え？

「抜けるの？」

「い、いやそりゃ、抜けない剣なんてあるのか？」

「珍しい」

「いや、そう言われても……」

「珍しいから、珍しいのが好きな金持ちが買う。」

その剣は、そういう物」

……えーと、つまり。

「この剣は、抜けない剣だってことか？」

「でも抜ける」

「いや、まあ、うん。べつに普通に抜けるぜ？ ほら、こうやって」

「

言いながら、俺は剣の鞘と柄を持って、抜き放って見せた。

瞬間。

（な、なんだ!?!）

光が、抜き放った刀身から溢れるように飛び出した。

音も衝撃もない。ただ、溢れる光はどんどん強くなっていく。

すでに倉庫の中は真昼のようになっていた。それでも、光は止まらない。

（や、やばい！ なんか知らないが、これは異常事態だ!）

本能的な危機を察し、急いで剣をしまおうとする。
そのとき。

「敵襲だっ!」

「がんがんがんがんと、銅鑼を鳴らす音がした。

「な、なんだあ!?!」

「来たのね。魔物たちが」

「聞き耳を立てる姿勢だったサリが、言った。

「それから俺の方を向いて、

「手伝って」

「つて、魔物退治をかよ!?!」

「当然。」

「抜き身の剣は、戦うためにあるのよ」

「それが常識であるかのように、サリは言う。

「そうする間にも、戦いは始まっているようだった。悲鳴や怒号が

「早くも飛び交っている。」

「なかには、女の声もあるみたいだった。

「戦えるのに、見捨てる気?」

「その言葉を聞いて、俺の腹は決まった。

「わーっただよ! やったろーじゃん!」

「じゃあ、こっちへ」

「おい、おまえらいつたい　ぐえ!?!」

「いつの間にか起きていた見張りを蹴倒すと、俺はサリの先導する
まま戦場へ飛び出した。」

「剣の光はいつの間にか、たいまつくらいの明るさになっ
た。」

「飛び出したのはよかったのだが、駆け出してすぐに俺はサリを見
失ってしまった。」

「(つか、早すぎだったの、あいつ……)」

ぜーはーと肩で息をしながら、負け惜しみの代わりに毒づく。
やはり女の子とはいえ相手は魔女。魔物相手の荒事を生業にする
ものなのだ。

スラムのこそ泥とは鍛え方がちがう。

(ノリで『やったるーじゃん』なんて言ったけど、だいたい魔物に
出会ったときにどう戦えばいいのかだつてわかんねーし)

近くで女の悲鳴が上がった。

「ああ、もう！　なんで俺が戦わなきゃ

叫びながら剣をそちらに向け、

「え？」

硬直。

向けられた先にいたのは、隊商の使用人とおぼしき女がひとりと
見覚えのある異質なシルエット。

そいつは節くれだった異形の腕を器用に使つて俺のほうに向き直
り、きい、と鳴いた。

夜走り。

「な、なんでこんなやつがここに

きい、きい、と、周囲から複数の声上がる。

それは、明らかに俺のことを狙っているように見えた。

ということとは、

「も、もしかして俺を追ってきたのか？」

俺の言葉がわかったのか、目の前の夜走りが、きい、と返事をし
た。

「うれしくねー！」

叫んで俺は駆け出した。

というより、逃げ出した。

(うわ、追ってきてやがる！)

きい、きいきい、きいきいきい、と、加速度的に鳴き声が大きく
なっていく。

ともかく逃げ回って時間を稼がなければならぬのだが、どこに

逃げればいいのかわからない。

右往左往しているうち、いつのまにか村はずれまで追いつめられていた。

目の前には人外の者の領域、森。

「だからって、止まるわけにやいかねーだろーが！」
駆け込む。

(と、ともかく逃げないと)
きい、きいきい、という声が、追ってくるのを感じる。
大ぴんち。どうしよう。

と、背後に気を取られていたら、いきなり地面の感触が消えた。

(え?)
ずしやああー!

「おぐひよっ!?!」
変な声が出る。

どうも、森の中の小さなくぼみに思いっきり突っ込んでしまったらしい。

「つつつつつ……くそ、ドジった」

こうしている間にも、背後からの声はどんどん近づいていく。きいきいきい、きいきいきいきい、と、大きくなって

(あれ?)
通り過ぎて、いく。

どうも、落ちたところがちょうど崖みたいになっていて、相手がこちらを見失ったっぽい。

らっきー。

このままやり過ぎせば、あきらめて帰ってくれるかも。
とか考えていたら、足下でびす、びす、という声。

「ん?」

なんか子犬みたいなのが、足にじゃれついている。

(しっしっ、いま忙しいから、後でな)
手で邪険に追い払う。

追い払われた子犬(?)は、しばらくこっちをぼーつと見ていたが、ふと上を見上げて、おーん、と啼いた。

おーん、おーん、おーん。

声が唱和する。

(え?)

気がつくど。

俺の周りに、狼の群れが集まってきていた。

……あー、なるほど。犬じゃなくて狼かこいつ。

「あ、あはは、あははは……」

俺の愛想笑いに、狼たちは一斉にざあっ、とこちらを向いた。

ウマソウ。ニク。クイタイ。

なんかそんな意志が伝わってきた気がする。

超ひんち。どうしよう。

と。

「構築^{セツト}、把握^{グラスプ}、準備^{レディ}、実行^{ゴー}！」

声と同時に、俺の足をなにかがひつつかみ、軽々と宙に放り投げた。

「う、わわわわわわーっ!?!」

空中でじたばた暴れながら、なんとか態勢を立て直そうとする。

が、無理。どんどん地面が視界の中に近づいてきて、

「回収」

「うきゅ!?!」

ぼす、と、その俺の身体が何者かにキャッチされる。

「狼にまで喧嘩を売らないで。ただでさえ敵の数が多い」
「サリだった。」

「さ、さんきゅ……」

「立てる?」

「なんとか。」

……って、こっ、どこだ?」

あたりを見回す。

森の木々がとぎれ、小さな広間みたいになっている。

「セット
スタンバイ構築、待機」

サリが小さくつぶやくと、周囲の空気の中に、ぼお……と、鬼火
みたいなのが浮かんできた。

「な、なんだ？」

「システム
サウンドアームズ兵装、レライ千手観音、準備。」

「ここで迎え撃つ」

「な、なにを？」

「夜走り」

きいきい、という鳴き声が聞こえてくる。

それらはすぐに、森の木々を渡りながら、こちらを取り囲むよう
に聞こえてくるようになった。

「お、おい。取り囲まれたぞ？」

サリに言う。

「が、相手は聞いているのかいないのか、

「まだ、状況が整ってない。仕掛けるには早い」

「ぶつぶつ、つぶやいている。」

そうこうしている間に、あたりはすっかり夜走りたちで埋め尽く
されてしまった。

「な、何匹いるんだ……こいつら」

「現時点で43匹」

……即答された。ていうか、数えてたんかい。

と。取り囲んでいるうちの一匹が、焦れたように前に出てきた。

「セット
インターセプター構築、インターセプター迎撃、実行！」

即座に。鬼火たちが動いた。

前に出た夜走りを叩き「ぎー」「刺し」「ぎい!?!」「貫き」「ぎああ!
?」「貫き」「ぎゃあああ!」「貫き」「ぎ!……」「ばたん、と夜走りの身
体が倒れる。

「ぴくりとも動かない。」

「(うわ、すげえ)」

まわりの夜走りたちが、すこしひるんだように後ずさる。

しかし、当のサリはしぶい顔。

「しまった、やりすぎた」

「え、なにが？」

「押し返すだけのつもりだった。」

倒しちゃうと、相手も後に退けなくなるの。援軍を待つつもりだったんだけど、困った」

サリの言うとおり。

明らかに周囲の敵意が増していた。後ずさったのは一瞬、じり、じり、と逆に間を詰めてきている。

「お、おい、どうするんだ？」

「やむを得ない。ライ、剣構えて」

「え？」

「来る。構築^{セツト}、陣形^{フォーム}『剣乃舞』、準備^{レディ}、実行^{ゴー}！」

サリの声と同時に。

一斉に、夜走りたちがこちらに向けて押し寄せてきた。

「わ、た、うわ」

砲弾みたいに飛んでくるごつい腕をかわし、抜け、剣で払って応戦する。

「あまり飛び出さないで。わたしがフォローする　！？」

急にサリが飛び退く。

なにがあっただらう、とか思っていたら、めきめきばきばきと音がして、どでかい木の幹がいまサリのいた場所に落ちてきた。

「うわ！？」

ずずん、と着地。遠くで枯れ木を引っこ抜いて放り投げたとおぼしき夜走りが、きゃっきゃっとはしゃいでいるのが見えた。

すげえ力だ。こりゃ、捕まったら一巻の終わりじゃないか。

(ていうか……サリと、分断された？)

ぴんち。どうしよう。

「ええい、なるようになるっきゃねえ！」

ともかく、囲まれてるこの場にいたらジリ貧だ。なので正面にいる夜走りに斬りかかり、一気に突破を図る。

「おりゃあああ！」

かつ、と、足下でいやな感触。

(え?)

すてーん、と木の根っこにつまづいてすつころぶ。ついでに剣が手から離れ、からからから……と、転がっていった。

「い、いつつつつ……」

きいーきいー、と、声。

完全に、囲まれた。

(あ、こりゃダメだ)

なんとなく、覚悟みたいなことをしつつ、それでも殴りかかってくる夜走りの拳を受け止めようと手をクロスさせ、

瞬間。光が走った。

「え？」

目を疑った。

さっきまで自分が持っていなかったはずの剣が手にあって。

そしてその剣に、感触すらほとんどなく腕を切り裂かれた夜走りが、ぴぎゃーと悲鳴を上げて後ずさっていた。

(……………)

(なにがあったか知らないが、チャンス！)

一気に横の夜走りに斬りかかる。そいつはあわてて腕で身体をかばおうとして、やはりほとんど感触なく、腕ごと身体が真っ二つになって吹っ飛んだ。

剣、強すぎ。

調子に乗って、名乗りをあげてみる。

「よっしゃあ！ かかってきやがれ、この強きをくじき弱きを助ける世紀の大悪党、ライナー・クラックフィールド様が　ぐえ!？」

ばこん、とすごい衝撃を背後から食らって、吹っ飛んで地面にたたきつけられる。

「いてててて……」

……そりゃそうだ。いくら剣がすごかったって、背後から攻撃されたらどうにもならない。

それでもがんばって立ち上がろうとしたところを、ものすごい剛力で身体をむんず、とつかまれた。

「ぐ、ぐは……」

夜走りの腕が、俺の首をつかんで宙づりにしている。

なんとかしようともがくが、腕もつかまれてしまって剣が振れない。それどころか、めきめきめき、とつかまれた腕からいやな音がする。超痛い。

(あ、ちよ、待、これ、しやれにならな)

意識が飛びかけた、直後。

「迅雷《lightning bolt》！ いっけえー！」

ばざばざ、とすさまじい雷撃をまとった矢が、その夜走りを含む数体の夜走りたちをきゅばばばつ、と吹っ飛ばした。

「な、なんだあ!？」

「やつほ。助けに来たよ！ さ、とつとこの魔物たち、倒しちやおうー！」

「お、おまえは !?」

声とともに木々の影から現れたのは、例の暴力女だった。

「いいから指示どおり動いて！ 剣を前に構えて、ぶんぶん振りながら突撃！ 止まったらダメよ、捕まったら終わりだからね！」

「お、おうー！」

言われた通り、走る。

ブロックしようとした夜走りを剣で牽制しつつ、とにかく前へ。

俺の後を追おうとした夜走りたちが、一斉にこちらに向かって移動して 結果として、一直線に並んだ。

そこを、

「迅雷《lightning bolt》！ 貫けー！」

暴力女の弓から放たれた雷光が、一直線に俺に向かって飛び、身

体を貫通　　って

「ちよ、ま、ぐええ！？　……って、あれ？」

傷は……ない。

あたりを見回すと、俺に群がってきていた夜走りたちはみな雷光に身体を焼かれ、絶命していた。

どうやら俺に届く直前で術を消したっぽい。便利だけど、そういうのは初めに言って欲しい。心臓に悪い。

あ、でも。

「か、勝った……のか？」

「ふふん、見たかつ」

決めポーズを取る暴力女。……っーか、こいつやたら強いじゃん。サリのほうを見ると、どうやらそちらもあらかた片付いたようだった。

(……勝っちゃった)

無事に生きのびられる自信はあんまりなかったのだが、運がよかつたのかなんのか。

手には、さつき抜き放った「抜けない剣」とやらが、あいかわらずたいまつみたいな淡い光を放ったまま収まっていた。

魔物の身体を、まったく抵抗なく切り裂ける剣。

まちがいにいくわくつきの代物だろう。

さて。これ、どうしよう。

ふと、目が覚める。

時刻は夜更け。部屋の外、広間の入り口のほうに人の気配がする。おそらくは自らの主であるう軽妙な気配。それは不審ではなかったが、彼女が起きている時間帯ではないということが気にかかった。

「ア・キスイ？」

部屋から出て、声をかける。

「どうなされました、ア・キスイ？」

敬称である「ア」を略すことはしない。それは自分なりの敬意と愛情の表現だと思っている。

相手から答えはない。

「ア・キスイ」

「騒がしいぞドツソ・ガルヴォーン。少し、静かにせい」

答える声は、少女のものであり、少女のものではなかった。

「は」

平伏する。主人の主人たる所以であるものが、彼女のなかに降り立っている。それを理解した。

主人は、しばらくそのままの姿勢で宙を見上げていたが、やがてにやりと笑った。

「バルメイス、か　これはまた、騒がしいものが目覚めたことよの」

それから、彼女はこちらを見やった。

「ドツソ・ガルヴォーン。我が大臣よ」

「はい」

「これから2日ほどの後に、この地に我が旧友が訪れる。もてなす支度をしておけ。……以上だ」

言つと、主人は家へ　彼女に割り当てられた、聖なる住処へと帰っていった。

自然とつぶやく。

「我が一命に代えましても　必ず」

「いやあ、助かりました。ライさんがいたおかげで、一人の死者も出さずに済んだのですからな」

「あ、あははは。いや、そんな、ほめられるようなことはなにも……」

引きつった笑みでなんとかごまかしながら、俺は唯一の共犯者であるサリを見た。

例によって完全に無反応。

(……どうも、シラを切りとおすつもりらしいな)

あたりにいるシンとか暴力女も、やたら上機嫌だ。

「しかし、剣の光を利用して魔物を全部自分のほうに誘導してしまっうなんて、これはもう完全にプロの仕事だよ。すごいなあ」

「また、たまたま剣が光っているのを見つけるあたりもロマンチックよね。もしかしたら、剣に選ばれたのかも」

ということに、気がついていたらなっていたのである。

もちろん実際には、魔物は俺を追いかけて、結果として隊商を襲っただけなのだが。

ついでに言うと、剣だって盗もうとして手に取ったらたまたま使えるものだっただけだし。

(な、なんか微妙に良心の呵責が……)

と思うのだが、いまさら本当のことをしゃべるわけにもいかない。本当のことをしゃべったら、いったいどうなるか。

「なんてひどいやつ！ くらえ、迅雷《lightning bolt》！」

(てなことになりかねないし)

ちらりと暴力女を見る。さっきの戦闘以降、彼女は妙にゴキゲンだった。

「ごめんね、ライくん。口は悪いけど、キミがこんなにすごいひとだったなんて思わなかったから」

すまなそうに、言う。

(ど、どうしよう……)

「しかし……その、大変言いにくいことなのですが……」
克蘭が、おずおずと切り出す。

「は、はい？」

「実は……その剣、わたくしの商品です。ちょっと、そのまま使いつづけていただくのは……」

「あ、ああ、そうだな。俺もずっと持つておくのは悪いし、返すぜあわてて剣を差し出す。」

正直、こんな不気味なものを延々と持ちつづける気はしない。だが、

「無理」

全員が、サリのほうを向いた。

「無理……とおっしゃられますと、どういことですか、サリ殿？」

サリは無愛想に剣を指差すと、

「さつき調べたら、持ち主特定の呪いがかかった。」

もし、無理に引き離そうとすれば、周囲に不幸が起こる」

さらりと、シャレにならないことを言っただけだ。

「マジか？」

問いに、シンがうなずいて、

「サリの呪式鑑定術は世界屈指のレベルだから。彼女が言うなら、たぶん本当だよ」

さらに、絶望を誘うようなことを述べた。

「の、呪いって……な、なにが起こるんだよお!？」

「離れると、剣が寂しがる。」

とてもかわいそう」

「……いや、そういうことではなくて」

というか、真顔で言われても困るんですけど。」

「いやはや、それではもう、商品にはなりませんな。この剣は」

困ったように、克蘭。

「それなら、こうすればどうでしょうか？ この剣をライ氏に売る

代わりに用心棒として働いてもらって、その給料を代金に当てる、と」

「いやあ、それが……実はその剣、けっこう高値でして、いやな想像が膨らむ。俺は訊いてみた。」

「どれくらいだよ？ まさか、金貨とか必要なのか？」

「金貨なら、5000枚」

「……想像の限界を超えていた。」

クランはサリの言葉にうなずいて、

「そうですね。だいたい5000枚くらいが妥当な値段だと思いません」

と、言った。

「どう返せつてんだよ、そんなもん……」

「ま、まあ、他ならない命の恩人のライ殿ですからな。まけにまけて、500枚としましょう」

「高い。この剣には『抜けない』という付加価値があったはず。それが嘘だった以上、もっと安くするべきよ」

「そ、そうですね。では、100枚でどうですか？」

天文学的数字は、50分の1にまで下がってきていた。

ケタがちがう、ということは全然変わってなかったが。

「ええと、平均的な用心棒の給与に、剣の強さによる付加価値が+100%として……」

シンはひいふうみ、と指を折り、

「25年間くらい働けば、なんとか返せるね」

「よかったわね。少なくとも働き口には困らなくて済むわよ」

口々に言う言葉を、俺は呆然と聞いていた。

「……25年間、ただ働きしろって？」

クランは礼儀正しく、ペこりとおじぎをして、

「まあ、そういうわけでこれからよろしくお願ひします、ライ殿」

「んなばかなああああああああっ!?!」

叫ぶ俺の言葉は、誰も聞いてくれなかった。

時は神々がすでにいなくなった時代。

もはや形骸化したシステム「神話」がいよいよ崩れ去ろうとする、その最後の数瞬。

そこに、神鳴る剣を振るい、時代を切り拓こうとした若者がいた。

これはその若者が、歴史に最初に名を残すことになった事件の、記録である。

二日目・1：悪党、定職に就く

「……では、たしかにこれでよいな」

言つて、そいつ 岩巨人の大男は、ごとりと床に丸いものを置いた。

対する老人は、ひひひと笑つて、

「うむ。とりあえずはそれでよからうて。

しかし、なかなかご苦労じゃつたのう。それを手に入れるのは、おまえさんがたにはちよつとしたリスクを伴つておつたのじゃないのかえ？」

「問題はない。边境の村であれば、多少暴れたところでそれほど騒ぎになるわけでもないからな。

これが我らの領内であればべつの問題も発生するが、しょせん地上は地上。人間の首のひとつやふたつ、どうとでもなる」
首。

若い女だった。まだ、少女と言つてよい年頃だろう。

それを老人は嬉々として拾い上げ、恍惚とした表情でいとおしげに抱え込んだ。

まるで汚いものでも見るかのような目でそれを見下ろしながら、

男はつぶやいた。

「だが悪趣味だ」

「ひひ」

老人が笑う。

男は不快げに顔をしかめて、

「幸せの絶頂にある娘の生首、と言われたから、わざわざ結婚式を襲つて手に入れてきたが……こんなものをいっただいなに使うといふのだ？ 妖術師よ」

「なににも使わんよ、こんなもの」

言つと、老人はあっさりと首を放り捨てた。

男の眉がぴくりと上がった。

「なんだと？」

「おっと。そんな怖い顔をしなさんな。」

ただ、おぬしらの誠意を見せてもらっただけじゃよ。わしが手を貸すに値するほどの相手なのか、とな……」

「ふん」

鼻で笑うと、男はマントをひるがえした。

「結構だ。どのみち『生贄』奪還の手段が確保できれば私には文句はない。力を貸してもらうぞ、妖術師」

「よろしい。」

では、後ほどお主らのアジトへ向かわせてもらおう。楽しみにしておるとよいぞえ」

それには答えることなく、男はその場を去った。

あとには、奇怪な老人と静寂が取り残されるのみ

ではなかった。

「で、いつまでそこにいらっしやるおつもりかな？ 岩巨人の娘さ

んや」

女、だった。

さきほどの男より頭ひとつ分ほど小さい。

岩巨人の女性としてはおそらく標準クラスなのだろうが、それでも人間の成人男性くらいの背丈である。

その女は生首を指差して、

「使わないものであるのなら、もらっていいか？」

「……なに？」

「供養してやりたい。かまわぬな？」

老人はしかつめらしい表情で大仰にうなずくと、なるほどなるほど、それはよいことじゃて。

しかし、困ったことにひとつ問題があるのう」

「……なんだ」

「いい眺めだなあ」

「さぼるのはよくない」
がしつ。

ずりずりずり……

「おや、サリ、いったいどうしたんだい？」

「ただの散歩よ。シン」

「そうかい。それで、なんでライ氏がそんなところにぶら下がってるんだい？」

「さあ？」

「さあ？　じゃねえっ！」

叫んで、俺はサリの手を振りほどいた。

「わ、ひどいじゃないか、ライ氏。女の子にそんなつれないことをするなんて」

「……ひどい」

「おまえらが俺をからかっているのはよーっくわかる。それはもう海よりも山よりも」

頭痛をこらえながら、俺はびしっ！　とサリを指差した。

「だいたい、今は隊全体が休憩中だろ！？　なんで俺だけサボり扱いされるんだよ！？」

そう、今は昼休みのはずだった。

隊は一時停止し、女たちが炊き出しの準備をするまでの間、男は休憩していいことになっていた。

それで、とりあえず見晴らしのいい場所でごたーっとして飯を待つ　つもりだったのだが。

俺の抗議にサリは表情ひとつ変えず、ただ、ふるふると首を振った。

「休憩じゃない。野外はいつだって危険だもの。」

「どんなときでも、周囲を警戒しておくのがプロというものよ」

「するってーとなんだ。俺はみんなが休憩している間もきりきり働

けと」

「そう。しっかり働くこと」

「かあっ……………」

頭を抱える。

「どうしてこんなことになっちまったんだ……………」

「……………」

たぶん、自業自得」

ぼつり、と彼女はつぶやいて、そのまま去っていった。

(…………いや、それはそうなんだけど)

盗みに入ったのも剣を抜いたのも俺なのだから、たしかにそれは
正論だろう。

(いつもなら剣を持ったまま、さっさと姿をくらましているところ
なんだけどなあ)

俺は、今朝のサリとのやりとりを思い返した。

『この剣の呪いは、基本的には手放せないだけ、だと思っ』

『だと思っ、って……………またずいぶんといいかげんだな、おい』

『整えられた条件下で、落ち着いて調べられればもう少し詳しくわ
かるけど　でも、この呪いはたぶん、かなり複雑。』

なにかのはずみに、いきなり持ち主を取って食っ呪いとかが発動
するかもしれないから、注意はしておいて』

『んなもん、どーやって注意しろってんだよ!?!』

『ちよつとでも異常があれば、わたしか、他の魔人にすぐに言っこ
と。たぶんなんとかできると思っ』

こうして、俺はこの隊商(というより、サリ)から絶対に逃げ出
せなくなってしまうたわけで。

「その上、昼も夜もなく働けと言われたら、しまいにゃ俺は衰弱死
するぞ……………」

「まあ、そりゃそうだよな」

「……………まだいたのか、おまえ」

言っつと、シンはにこっつと笑っつて俺を見返した。

というか、こいつは俺がどういう経緯で剣を手に入れたのかは知らないはずだ。

(あぶない、あぶない。うっかり口をすべらせないように注意しとかないと)

相手はすまなそうに俺のほうを見ると、

「でも、言動は冷たいけど、サリはかなりライ氏のことを気にかけているみたいなんだよ。だから、できれば嫌わないうでやってほしいな」

「……？ いや、べつに嫌ってはいないけどよ」

「そっか。それならいいんだ」

言って、シンはあからさまにほっとしたような表情を浮かべた。

……なにか妙な誤解を受けている気がしたが、気にしないでおく。とはいえ、ちよつとあいつ、厳しすぎないか？」

シンはその言葉にちよつと考え込むと、

「そうだね。実際、ここはけつこう見晴らしのいい平地だから、なにかが襲ってくればすぐわかる。それほど警戒しなくてもよさそうだけだ。

それに護衛なんて、ひとりでできる仕事じゃないよ。休めるときにはだれか他のひとと交代して、休んでおくべきだと思う」

言われて、俺は今朝のクランの説明を思い出した。

『実は、この隊商には専属の護衛というのがおらんのですよ。』

あれは高いわりにたいした役に立ちませんからな。コストを削減するために、すっぱり解雇してしまったのです』

「交代つて、だれと交代するんだよ」

「しばらくでいいなら、僕たちがやるよ」

「……そっか。そういえば、おまえらつて魔人なんだっけ」

あまりに自然にここにいるせいで忘れていたが、彼ら是对魔物戦のエキスパートなのだった。用心棒など、それこそお手のものだろう。

シンはうなずいて、続けてこう言った。

「むしろ彼女は、いまのうちにライ氏に護衛のやりかたを教えたかったのかもしれない」

「護衛のやりかた？」

「そうさ。だって、しばらくしたら僕たちはこの隊商から離れてしまっからね。」

そうしたら、ライ氏をフォローできるような実力者は、この隊商にはひとりもいなくなるだろ？」

「……そういや、そうだったな」

それはなぜか、とても不思議なことのように思えた。

出会ったときからそうだったせいかな、この隊商と彼らは同一のもののような気がしていたのだ。

それが、いつかはこの隊商を去っていくという。

(考えてみれば、俺はこいつらの目的もなにも知らないんだよなあ) なんとなく、そのあたりを訊いてみたくなった。

きのうはあまり深入りするつもりもなかったし、なんとなくいやな予感がしたこともあって、あえて聞かなかった。

だが、俺が正式にこの隊商の人間になったからには、いちおう同行者である。目的くらいは知っておいてもいいだろう。

「おまえたちって、なにをするために旅してるんだ？」
「ずばり、たずねてみた。」

シンは、ちよつとだけ気まずそうな顔をして、
「……それは、さすがに言えない。職業倫理上」

「敵の正体も言えないもんなのか、魔人ってのは？」

「雇い主を特定されてしまう場合がありうるからね。それ以外にも理由はあるけど、ともかく、言えない」

納得する。たしかに、雇い主の情報漏れは重要な問題だ。

なにしろ、魔人と付き合うことは神殿から忌避される行為なのだ。神殿にケンカを売る覚悟でもないかぎり、おおっぴらに魔人に依頼などできるはずもない。

だから、依頼をこなして生計を立てようとする魔人にとって、口

の軽さは致命的だろう。

「わかった。じゃ、そろそろ飯ができてるだろうし、行こうぜ?」

「あ、ああ」

気まずそうな彼の声を聞きながら、俺はキャンプの中央に向かって歩き出して、

「ライ氏!」

シンが呼び止めた。

「なんだよ?」

「さっきの質問に答えるよ」

「……言えないんじゃないのか?」

「王からの直々の依頼なんだ。今回については、依頼人の事情はそれほど問題にならない。」

だから、正直に言うよ。今回僕たちが追っているのは、『北の妖術師』と呼ばれる強大な魔法使いで、

そこでいったん言葉を切って、シンは続けた。

「僕の、師匠に当たるひとなんだ」

昼飯としてもらったスープの残りをパンでぐりぐりしながら、俺はさっきのことを考えていた。

(……聞くべきじゃなかったかな)

なんだか無理にしゃべらせてしまったみたいで、ちょっと後味が悪い。

それに、無粋な詮索だったような気もする。

『名前はグラールネル・ミルツアイリンボ。強力な^{ディアボロス}靈魂技師で、邪悪な実験を何度も繰り返し返して多数の国からお尋ね者になっている。

術の研究のためと称して村ひとつを全滅させたこともある、悪名高い人物だよ』

語っているシンの表情が、妙に印象に残っていた。

(まあ、そりゃ複雑だわな。自分の師匠を殺そうとしてるわけだし。しかし……)

「あいつら、大物だったんだな」
つぶやく。

なにしろ、王から依頼がくるほどの腕前だ。たぶん、そこらの魔人や魔女など問題にもならないくらい強いのだろう。

(そっぴゃ、シンも『サリの鑑定は世界有数』とか言ってたしな。考えてみりゃ、あのととき気づいてしかるべきだったんだ)

どうも、釈然としない。

ひとつには、あのぼーっ、としたサリのイメージと『強大な魔女』という言葉から連想されるイメージがまったく合わないということもある。

(変わり者だったのは事実だけど、特におかしなやつでもないんだけどなあ)

思いながら、俺はパンを口のなかにほおぼり、遠くのサりに視線を移した。

.....

「あれ？」

我に返って、俺は目を数回しばたいた。

「あいつ、あんなとこでなにやってんだ？」
目の錯覚ではなかった。

サリは炊き出し場から遠く、隊の休息用に確保したスペースのちよんどほずれのあたりで、その外側をじーっとながめている。

傍目から見て、ぼーっ、と突っ立ってるだけに見えた。

(飯、食ったのか、あいつは?)

とりあえず、近寄って聞いてみようと思い、俺は立ち上がった。

「よお。なにやってんだ？」

言われて、サリはぼーっとした目で俺を見返した。

「……」
「おーい、起きてるかー？」

ぶんぶんと目の前で手を振ってみる。

反応、なし。

「って、ほんとに寝てるのか？」

「……」
「サリ、起きろー」

「……」

「……」

「……」

俺は、口に小指を突っ込んでびろーんと伸ばし、舌を出した。

「べろべろばー」

「……」

馬鹿？」

ぐさつ。

かなり傷ついた。

「な、なんだよう。俺はただ、おまえが寝てるのかどうか試しただけだろ」

「呼吸を見ればわかる」

「呼吸？」

「寝てる人は、呼吸がゆっくり。」

自分の呼吸と比較すれば、一目瞭然」

「そんなこと、言われなきゃ気づかないって」

「ライが無知なだけ」

ぐりぐりと、傷ついた心に追い討ちが入る。

「？」

「不思議そうな顔で見ないでくれ。頼むから」

自覚すらなく再起不能に陥らされたと思うと、なおさら情けない。

頭をぶんぶん振って気分を切り替える。それで、ようやく俺は当初の目的を思い出した。

「で、おまえ、なにやってんだ？」

「見張り」

今度は即答だった。

「見張りって、なにを見張るんだ？」

「魔物」

「魔物……？」

「って、昼休みにか？　ちゃんと昼飯は食ったのかよ？」

「食べてない」

「倒れるぞ？　んなことしてると」

「休憩が終わったら、見張りは他の人に交代する。」

その後で、残り物をもらって食べればいい」

「冷めちまうだろ、スープとか」

「特に問題ない」

「はぁ………　ったく、しょうがないやつだな」

俺は炊き出し場のほうを指して、

「行ってこい」

「……………」

「ほら、俺が代わりに見ておいてやるから」

「でも、」

「却下」

「……………　まだなにも言っていない」

「まずい飯、食わず、作らず、食べさせずってのがクラックフィールド家の家訓だな。」

その家訓に賭けて、冷えた飯なんか食わせるわけにやいかねーんだよ。俺は「

笑って、それから俺はまだ逡巡しているサリをせき立てた。

「ほら、さっさといけっての。飯が冷めちまうだろ」

「……………」。

行つてきます」

言つた瞬間、サリは猛スピードで炊き出し場へと駆け出した。

「あせつてコケるなよ……」って、もう聞こえないか」

あいかかわらず、とんでもなく足が早かった。

苦笑して、俺はさつきまでサリが見ていたほうを向き直る。

べつに不審なものはない、野原だった。

(さつきシンも言つてたけど、本当に見晴らしがいいなあ)

紫の街道は《くらやみ森》を南北に横切る道だが、このあたりはちよつど、森からはみ出ている部分なのである。

そのため、向かつて右手側の、それもかなり遠くにしか、森の黒い木々は見えない。

左手側には、シジンの原、という名前が付けられた広大な草原が広がっている。

地図によれば、この草原を抜けた先にステツジ・コースという大きな港町があるらしいが、それは地平線のはるか先だ。

(まあ、草原を通つていけるわけじゃないんだけどな)

空を見上げると、遠くの空を優雅に飛んでいる巨大な生物の姿が見えた。

ワインバウン
弧竜、という名前で呼ばれる生物だ。

なぜか街道筋には近寄つてこないのだが、それ以外の場所はヤツの縄張りだ。

草原を走つて突つ切ろうとすれば、まずあれの餌食だろう。

(怖い怖い。せいぜい、街道から離れないようにしないと)

考えつつ、視線を空から地面に移すと、

(あれ?)

いま、なにか光つたような……?

よくよく目をこらすと、どうやら草原のまんなかに光っている場所があるらしい。

きれいな、金属的な輝きだった。

つまりは、槍とか剣とか、そういうやつ。

(おいおい……あれ、ひょっとしてまずくないか?)

確かめにいくか　とも思ったが、間違っつて弧竜に食われるのもぞつとしない。

考えていると、たたた、とこちらに駆け寄ってくる足音が聞こえた。

「お?」

見ると、スープの器とパンを持ったサリが、今まさにこちらにもどつてきたところだった。

「どつした? さつさと食ってくればいいのに」

「ここで食べる」

「……俺、そんなに頼りない?」

「それもある」

遠慮のカケラもなく、サリは言った。

「せめて、なんかフオーしてくれてもいいのに……」

というか、最初から期待すべき相手じゃなかった。

「異常は?」

「ない　と言いたいところなんだけど。あれはなんだろう?」

言つて、草原の光を指差す。

「……………」

たぶん、宝石虫」

「ほーせきむし?　なんだ、それ?」

「宝石みたいな甲羅を持つている虫。地面に穴を掘つて巣をつくり、周囲の草の根っこを食い尽くす。」

畑を荒らす害虫だから、みんなの嫌われ者。ちよつとかわいそうつまりは、ただの虫だった。

「俺はまた、どこかの野盗が槍でも持つて隠れてるのかと思つたよ」

「野盗は竜を恐れるから、ちがうと思つ」

「そつだな」

食われなくてよかった。

サリは、そんなことにはたいして興味もないようで、無表情にパンをかじっている。

もぐもぐ。

もじゃもじゃ。

ごっくん。

「パンは、味がないから、好き」

無表情だが、どことなく幸せそうだった。

「ま、いつか。それじゃ、そろそろ俺は行くぜ」

言って、立ち上がる。

と、その俺の腕をサリがつかんだ。

「なんだよ？」

「ライ、これからどうするの？」

「これからって、休憩が終わった後か？」

「そう」

考えてみれば、俺は護衛の仕事をどうやってやるかとか、その辺のことがぜんぜんわからない。

「なにやりやいいんだろう……」

「あとで、わたしたちの馬車に来てほしい」

「魔人たちのか？」

「そう。ミーティングするから」

そういえば、警備は魔人たちが助けしてくれるって言ってたっけ。

（だいたい、俺より魔人たちのほうが絶対強そうだしなあ……）

ナイフなら使い方もある程度わかるが、剣なんて振ったことがない。しかも、よりによって呪いの剣ときてる。

それに、ケンカ以上の戦いをしたことがあるわけでもない。もめごとが起こったら、まず役に立たないだろうという自信があった。

（そのあたり、こいつに聞いておいたほうがいいか？）

「なあ」

「なに？」

「後で、こいつでの戦い方を教えてもらえないかな」

剣を指して、言う。

サリはちよつと考えてから、

「わたしは短剣を使ってるから、教えるのは無理だと思う」

「いや、剣の長さとか、それ以前の初歩的なことを知りたいんだけど。振り方とか」

「敵が前にいるときに振れば、殺せる」

「……そりゃ、そうだけど」

「それ以上のことを知りたいのなら、やっぱりわたしには教えられない。」

長剣と短剣は、弓と槍くらい戦い方が異なるから」

「そんなもんなのか」

「シンは、たぶん長剣を使えるはず。」

彼に聞けば、ひよつとしたら教えてくれるかもしれない」

言われて俺は、シンが剣を振るさまを想像しようとした。

「……………」

って、そもそもあいつ剣持ってないじゃん」

「魔術で剣を作るの」

「あ、そうなのか」

なるほど。さすが魔人。

「腕は問題ない。保証する」

「わかった。後で聞いてみるよ」

とりあえず、めどは立った。

「んじゃ、休憩が終わったら合流することにするわ」

言って、俺はその場を後にした。

隊の中央へともどる途中に、見覚えのあるやつがこっちに走ってきた。

「いやあ、まいったまいった」

男はそう言って汗をぬぐうと、ふとこちらを見て、にかつとさわ

やかに笑った。

「おお、これはどうも、一日ぶりですなあ！」

「……ああ」

たしか、あの暴力女の周りにいた男だった。

名前は……

「えっと……スタージン、とか言ったっけ？」

男はきよとんとした顔でこちらを見た。

「おや、手前の名をご存じで？」

「いや、知らないけど。誰かがそう呼んでいたみたいだからいいかげんに言っただつもりだったが、当たりだったらしい。」

「それはいいとして、どうかしたのか？　なんか、逃げてきたみたいな様子だったけど」

たずねると、相手はぼりぼりと鼻の頭をかきながら、

「いやあ、お恥ずかしい。実はケンカに巻き込まれそうになりました、あわてて逃れてきたのですよ」

「ケンカ？　だれとだれの？」

「手前の連れです」

言われ、俺はこいつの連れたちの顔を思い浮かべた。

「単純暴力女と陰険策略男の戦争か？」

「神官と神官補のケンカには絶対に思えない言い回しですな」

「……まあ、そうだな」

というか、あのケチくさそうな小男が神官補だったということ自体、初耳なのだが。

「ま、人を外見で判断するのはよくない、と、よく言っからな……」

「役職で判断するのもよくない、とも言いますよね」

「微妙にきわどいこと言ってないか、あんた？」

「はて、なんのことでしょう？」

とぼけて、大男。

……まあ、深くは突っ込まないことにしておく。

「しっかし、なんでいまどきケンカなんかしてるんだ、あいつら？」

「いやあ、それが……どうも昨夜の件に関係しているようでして」「昨夜？」

つまりは、例の夜走り大襲来のことだ。

「ええ。まあ、手前はぐっすり熟睡していたので、なにがあったのかは知らないのですが」

「……マジですか」

あの騒ぎで起きないなら、真横でゾウがタップダンスを踊っても熟睡していられるだろう。

「それで、どうもポエニデッタ神官が魔物と一騒動を起こしてしまつたみたいでして。」

パリーメイジ神官補は、彼女が戒律を守らなかったとひどくお怒りなのですよ」「

「戒律？」

「神殿が定めた、聖職者のための規則のことをそう言つんですよ」

「いや、それは知ってるけど、なんで襲ってきた魔物を返り討ちにするのが戒律違反なんだ？」

「魔物は『神話の欠落』ですから、関わると神話の運命律を乱されてしまうのです。」

ですから、神話を重んじる神殿は彼らと関わることを一切禁じているのですよ」「

「それも知ってる。けど、あれは」

（俺を助けてくれるためだったんじゃないのか？）

出かかった言葉を、なぜか俺は飲み込んでしまった。

大男は、残念そうに首を振った。

「動機は問題ではないのですよ。『ともかく魔物と関わっちゃダメ』というのが規則ですから」

「なんか、おかしくないか？ 襲いかかられたら、黙って殺されるって言うのかよ？」

「だれかべつの人に護衛として守ってもらつのが定番ですね。自分は死なないで済みますし」

さらりと大男は言って、それから苦笑した。

「そんなに怖い顔でにらまないでくださいよ。手前が定めたルールではないのですから」

「……そうだな」

たしかに、ここでこいつに文句を言うのは筋違いだ。

「あの女、ええと、ポレネダッタだっけ？」

「ポエニデッタ神官です。フルネームはリクサンデラ・メザロバー
シーズ・キルキル・ポエニデッタ」

「あーそれはどうでもいいや。どうせ覚えられないし。

で、あいつ、いまどこにいるんだ？」

「あつちの森のほうです。もっとも、あんまり刺激しないほうがいいと思いますけどね」

それには答えることはせず、俺はそっちのほうに向かって歩き出し

「リツサ、と呼んであげてください」

ふと。

大男の言葉に、足を止める。

「なにが？」

「ポエニデッタ神官の愛称です。だいたい、同年代くらいのひとからはそう呼ばれていたご様子でした。

異動で同じ年くらいの友達がいなくなつて、寂しそつでしたから。できればそう呼んで差し上げてほしいのですよ」

「考えとく」

言つて、俺はまた歩き出した。彼女の下へ。

相手は、すぐに見つかった。

「お、もうケンカは終わったのか」

うづくまっているリツサに笑いかける。

彼女は、こつちの言葉に反応することなく、ひたすらうづくまつてじつとしていた。

「おい、無視はひどいじゃないかよー」

ひよい、と顔をのぞきこもつとする。相手は、さらに深くうつぐまいった。

「バカー、アホー、暴力はんたーい」

目の前で手をひらひらさせてみる。無反応。

(む、むう、手ごわい……)

こうなったら、奥の手しかない。
むに。

俺は相手の口に人差し指を突っ込んで、ぐにーと左右に押し広げた。

これぞ、秘奥義、口裂けの恐怖！

かけられた相手が無視することは絶対にできない、究極の必殺技だ。

「……………」

こめかみがひくひくと震えているが、やはり無視。

(こ、このやろっ……)

ぐにぐにぐにぐに。

口に突っ込んだ人差し指を、さらに上下に動かしてみる。

さらに、中指を鼻にひっかけて、ぐいーっ、と引つ張る。

なかなか、いい感じにゆがんだ顔面表皮ができあがった。

というか、

「うっわ、すげー馬鹿面……」

「ごきゅっ！」

「ぐはあああああつ!?」

「あんたねえ、人がへこんでるときにそれがやること!?」

顔面にクリーンヒットしたこぶしを目の前に掲げて、彼女は吠えた。

「な、なにすんだ!？」

俺はただ正直に感想を口にしただけで

「まだいうかこのっ!?!」
げしげしとヤクザキックで追い討ちをかける。

「あうっ、あうっ」

「いっぺん死ねっ！ このやるっ！」

「ちよ、ちよっと、待て、落ち着けての、リッサ！」
ぴた。

言葉に、連打がやんだ。

「……あれ？ どうした？」

「なんであんた、その呼び方を知ってるの？」

「あのおまえの連れのデカイ方が、おまえのことをそう呼べて」「
スタージン神官が……？」

困惑したような表情で、リッサ。
ていうか、

「あいつも神官なのか……？」

「え？ うん、そうだけど」

シヨック。

(ぜったい下っ端だと思ってたのに……)

人は見かけによらないと言うのなら、小男よりもよっぽど見かけ
によらない。

「……神官って、そんなにうじゃうじゃいるもんだっけ？」

「そ、そういうわけでもないと思うけど……」

「だよな。だいたい、おっさん達はともかく、なんでおまえが神官
なんだよ？」

ふつう神官って言ったら、ひげもじゃのじいさんが定番だろうに。
そう言つと、リッサは急にしゅんとなったようにうつむいた。

「どうかしたのか？」

「……やっぱり、ボクって神官に見えないかなあ……？」
妙に元氣のない言い方だった。

「なんだよ、そりゃ？ まあたしかに、神官はひとをそう簡単に殴
つたり蹴つたりはしないだろうけどな」

「あ、あれはあんたが　って、けど、たぶんそれが問題なんだよ
ね。はあ……」

またまた元気なくつぶやく。

こつちとしても、もう少し極端なりアクションを期待していたのだが。

「おい、ほんとにどうかしたのかよ？　なんかおかしいぞ、おまえ」

「うん。まあ、愚痴なだけどさ」

断つてから、彼女は話しはじめた。

「わたしは、このあたりの生まれじゃないんだ」

「まあ、それは名前でなんとなくわかるが」

「うん。ほんとは、もっと東のほうの出身でさ。」

それで、こつちの神殿に弓矢の腕を買われて、神官としてスカウトされてきたんだ」

言われて俺は、そういう制度が神殿にあるという伝え聞きを思い出した。

秘儀ミラクル、という技術がある。

神の奇跡を人間がまねて作り出した、まじないみたいな技術のことだ。たとえば昨日こいつが撃つた雷撃とかも、その一つ。

弱い秘儀ミラクルは、神殿はその方法を喜捨と引き替えに教えてくれる。

神殿の重要な収入源だ。

しかし一部の極めて高度な秘儀ミラクル、いわゆる大秘儀メジャー・ミラクルは、神官とかでないと伝授してもらえない。

で、ここで困ったことが発生する。

たとえば剣舞を演じることで発動する大秘儀メジャー・ミラクルなどは、ふつうの神官では扱えない。剣の使い方なんて神官は知らないからだ。

そういった、スキルを前提とした大秘儀メジャー・ミラクルは、放っておけば途絶えてしまう。

神殿にとって、神の技術を廃れさせるのはまずい。なんとかして大秘儀メジャー・ミラクルの知識を保持していかなければならない。

そこで、神殿の外部から優秀な技術者を抜擢して神官とし、これに件の大秘儀メジャー・ミラクルを伝授することがときどきある、という話を聞いたことがあった。

リツサも、そのような優秀な技術者のひとりということなのだろ
う。

つまり、まとめると、

「ひよっとして、おまえ、すげー重要人物……？」

口より先に出る暴力娘は、実はバリバリのエリート神官だっ
た。

(い、いままでで一番、衝撃の事実……)

が、リツサは自嘲するように笑った。

「ぜんぜんダメだよ、わたしは。」

なにせ、こっちの戒律とかも知らないし、神官としての覚悟も足
りないってよく言われるし」

「え、戒律って、地方によって変わるものなのか？」

「基本はおなじだけど、解釈がちがうんだよ。魔物と戦っちゃいけ
ないなんてのも、1年前は知らなかったし。」

それで、禁を何度も破っちゃってさ。神殿長に嫌われて、地方送
り」

そう言って、彼女はあははと笑った。

「……いや、笑い事じゃないよね。わたしはともかく、あのふたり
には完全なとばっちりだったし。」

それでまた禁を破ったら、そりゃ怒るよね。彼らだってさ」
リツサはそう言って、吐息。

「はあ……わたし、なにやってるんだろ。」

いつそ、なにもしなければこんなに怒られなくても済んだのにな
あ」

「死んでたけどな」

「え？」

リツサが、こっちを向いた。

「そしたら、俺は死んでたけどな、って言ったんだよ」

「………いや、その、」

「実はさ」

言いながら、俺は立ち上がった。

「『助けてくれて、ありがとう』って言おうと思って、来たんだが。けど、おまえがそういう気持ちなら、べつに言う必要はねーや。またな」

「あっ……………」

リッサが口を開きかける。

「どうした？」

「えと、その……………」

なんだかもごもごしながら、とまどっている。

「待ってやるから、頭のなかを整理してから言え」

「あ、えっと……………」

「ごめんなさい」

「俺を殴ったことなら気にするな。痛かったけどな」

「いや、そっちを謝る気はさらさらないんだけど」

「バカたれっ！ すっげー痛かったんだぞあれは!？」

「当然。だって、痛いように殴ったし」

「うっうっうっうっーっ」

ぽかりっ。

「イタタッ。な、なにをするのよっ」

「さっきのお返しだっ!」

「倍返しっ!」

「きゅっ!」

「……………きゅーっ」

ばたん。

かなり効いた。

「お、いいところにヒット。ラッキー」

「喜ぶなっ」

ぶんっ。

すかつ。

「ぐ……………残像か!？」

「いや、単なる空振りだけど」

「なに！？ では幻術か。やるなりッサ」

「ただの脳しんとうじゃない？」

正解。

「くそお……今日のところはこの辺で許してやるっ」

捨て台詞を吐いて去ろうとするが、足がうまく動かない。

ばったり。

「ち、ちくしょう……この、世紀の大悪党にもヤキが回ったか……」

「なにわけわかんないことをぶつぶつ言ってるの？」

「く　だが、悪党の誇りにかけて、こんな単細胞暴力娘ごときにやられるわけにはいかん！」

「とどめ刺していい？」

「俺が悪かったですごめんなさい」

うすっぺらい誇りは、生命の危機の前にもろくも崩れ去った。

「ほら、いいかげん立ちなさいよ」

そう言って、彼女は手を差し出してきた。

俺はその手をつかみ、

「ていつ！」

思いつきり体重をかけて引っ張り倒す！

「おっと」

ぐいつ。

あっさり引っ張り起こされた。

「……なにげにすげー力持ちか、おまえ？」

「弓使いだからね。引く力には自信あるよ」

完全敗北。

「あはは……」

彼女は楽しそうに笑い、それからこっちを振り向いた。

「ありがとね、ライ」

「あ？」

「気をつかってくれたんでしょ？ おかげで、なんか吹っ切れたよ」

「ああ……」

べつに、そこまで深く考えて行動していたわけじゃないが、まあ、あえて水を差すこともない。

ついでに、気になることを指摘しておくことにする。

「それとな、リッサ」

「ん？」

「遠慮せずに『ボク』って言っているんだぞ」

はっとして、リッサは自分の口元を押さえた。

「『ボク』って、言った？」

「そもそも、最初に会ったときにそう言った」

「あ、あれは動揺してたから……」

あわてふためいて弁明する。

「そもそも、なんで一人称をふたつも使うんだよ」

「い、いやその、『ボク』は神官の一人称としてふさわしくない、
って言われたから……」

「それで動揺したら地がでるってか？ わかってねえな」

俺は、はあ、と、ため息をついた。

「な、なにが？」

「外面を作っていることがバレバレじゃねえか。いや、そりゃ誰だっ
て外面くらい作るけどな、表面に出しちゃいかんだろ、それは」

「う……」

「たとえば、だ。俺がクランの前でだけ『わたくし』とか言ってた
ら、おまえ、どう思う？」

「あはははははははははははは」

「そこは笑いだころじゃねーっ！」

「ご、ごめん。あんまりにも笑える構図だったから……」

刺すぞオイ。

「と、ともかく、それじゃ上に媚びへつらうバカにしか見えんだろ
ーが」

「……そりゃ、そうかもしれないけど」

「だから、遠慮なく『ボク』を使え。そのほうがよっぽどマシだろ」
「えっと、けど、でも……」

「返事は『はい』！」

「は、はい……」

よし、勝利。

「ま、これからは裏表を相手に見せないように気をつけるよ」

「う、うん。わかった」

気圧されたままリッサがうなずいたちよつどそのとき、鐘の音がした。

「もうすぐ出発か？」

「そだね。」

ライは、これからどうするの？

「これからって、昼休みが終わったあとか？」

たしか、魔人たちとミーティングをする予定があったはずだけど、俺が正直にそう告げると、リッサはちよつと顔を曇らせた。

「どうした？」

「いや、さつき、魔人とかとあまり関わるなって言われたんだけど。」

このあたりでは、それがふつつなの？

「魔物を狩る連中だからな。魔物と関わるな、ってのが戒律なら、だいたい理由は推測できるだろ？」

「そっか……そうだよな」

「リッサたちは、これからどうするんだ？」

なんか、話が暗い方向に行こうとしていたので、むりやり方向転換させてみる。

「本当は、一刻も早く任地に到着しなければいけないんだけど……」
「けど？」

「きのうの襲撃でもわかるとおり、周辺の魔物たちが活発に動いてるみたいだから。」

「少数の旅は危険そうなんで、しばらくはこの隊商と同行させてもらうつもりなんだ」

「……………」

(昨日の襲撃?)

あれは、要するに俺を追ってきた奴らだ。

つまりは、こいつが任地へと急げない理由は、おもいつきりかんちがいなわけだ。

わけなのだ、が。

(まさか、正直に言うわけにもいかないし……………)

正直に言った場合のことを、俺は想像してみた。

「よくもだましたわね！ 食らいなさい、神の鉄槌を！」

ちゅどーん！

「あ、加減まちがえてコナゴナになっちゃった。てへ」

(……………お、恐ろしすぎる……………)

「? なんでそこでだまつちゃうの？」

「い、いや、なんでもないぞ。うん」

「……………どうして目を合わせようとしなの？」

「お、もう昼休みも終わりか。またなリツサ」

「え、ちよつと……………」

逃げるが勝ち。

「ふう、さすがにここまで来れば追ってこないだろ……………」

「どうかしましたかな？」

「うおおはっ!?!」

後ろからいきなり話し掛けられ、思わず変な声を上げてしまった。

「い、いつからそこにいたんだ、おっさん!?!」

言われ、クランは困ったように、

「そう申されましても……………そもそも、ライ殿がこちらに向かって走ってこられたわけで、わたくしはずっとこの場にいましたが」

……よく考えてみればそのとおりだった。

「てゆーか、走るのに夢中でまわりを見ていなかった……」

「それで、なにが追ってくるのですかな？」

「弧竜」

「ええっ!？」

「てのは冗談で、リッサ」

「な、なんだ……おどかさないでくださいよ」

……さすがに、いまの冗談を真に受けるとは思わなかったが。

「てゆーか、弧竜に追われてたら、さすがに俺も生きてないって」

「いやあ、そう言われてみればそうですね」

(話題すりかえ作戦、成功)

聞こえないように、俺はつぶやいた。

「? なにか、おっしゃられましたかな？」

「なんでもない。」

それより、魔人たちとミーティングするという予定なんだが、ど

この馬車に乗り込めばいいんだ？」

「ああ、それなら、隊の先頭の馬車がそうですね」

「そっか、ありがと」

礼だけ言つて、俺はその場を立ち去ろうとしたが、

「ライ殿」

「ん？」

「あなたは、魔人を恐れないのですか？」

最初、冗談かと思った。

だが、こちらを見るクランの目は真剣そのものだ。

だから俺は、できるかぎり誠実に答えることにした。

「さあ？」

「さあ……って」

「魔人なんて、ほとんど知らねーし、危なそうだったら走って逃げりゃいーし。」

って思ってるからかな。連中が怖いなんて、思ったこともねーや」

ふむう、とクランはうなり、

「なかなか、面白い発想ですね」

「男はでんと構えてどかんと一発、てのが、うちの家訓だからな。まかせろ」

胸を張って言う。

「ぜんぜん説明になっていなかった気がしたが、この際気にしないことにする。」

ついでに、べつの気になることを俺はたずねた。

「あんたは、なんでそんなに魔人にこだわるんだ？」

「おや、こだわっているように見えますかな？」

「見えるね。だんぜん見える」

言い切る。

「護衛なんか邪魔なだけ、と言いながらわざわざ魔人たちに護衛を頼むあたり、特にな」

「なるほど、たしかにそうですね」

目のつけどころがよいですね、と言ってクランは笑った。

「そうですね……あえて理由を問われるならば、私がメサイであるから、でしょうかね」

「？ メサイと魔人って、なんか関係があったのか？」

「おや、ご存知ありませんか？」

相手は意外そうな顔をした。

「そうすると、もしや愚者ザ・フールがなにをした人間か、というのをご存知ないのではありませんか？」

「……………ごめん。休息日の説教、よくサボってたから」

正直、そういうことにははてんで疎かった。

「たしか、すごい数の神とかを殺したんだろ？」

「伝承には、108の神と、576の巨人を殺した、とありますな。まあ、実際は疑わしいですが。」

その愚者ザ・フールが、神を殺すために使ったとされる技が、魔術と呼ばれるものです」

「魔術？ 魔術って」

クランはうなずいた。

「ええ。魔人たちが使う、魔物殺しの技。その原型は愚者ザ・フールことフィーン・ガステイードの使った技術なのですよ。」

その縁もあって、魔人とともに旅をするのはメサイの伝統となっているのです」

「へええ、そうなんだ」

ぜんぜん知らなかった。

「しかしそうすると、愚者ザ・フールってのはメサイにとって悪人じゃないんだな」

「まあ、そうです。神殿には、おおっぴらには言えませんがね。」

それに、メサイは知ってるんですよ。愚者ザ・フールが戦った、その理由を「女の子のためか？」

言つと、クランは驚いた顔をした。

「むう、正解といえは正解ですが いや、これは驚いた。ひよつとして、ライ殿はすでにご存知だったのですか？」

「いや、あてずっぽうだけだよ」

いったん言葉を切つて、続ける。

「殺しは、あんまり金にならないからな。金稼ぎ以外の理由で、思いついたのがそれくらいだった」

「そ、そうですか。いや、たしかに」

妙に動揺していた。

「どうした？ なんか、悪いこと言っちゃったか？」

「いえ 正直、いままで当てられたことが一度もなかったもので、びっくりしたんですよ」

「そうか？ まあ、そうかもな」

というか、さっきみたいな発想は犯罪をやるうとしたことのある奴でないと思ひ浮かばないだろう。

(……うかつな発言には気をつけよう)

反省していると、ふたたびさつきとおなじ鐘の音がした。

「あとちょっとで昼休みも終わりですな」
「そつか。じゃあ、もう行かないとな」
「ええ。よろしく願いますね、ライ殿」
「ん、まあ死なない程度にな」
言って、俺は隊の先頭に向けて歩き出した。

「おーっす、ペイ。見回りから帰ってきたよー」
「風の故郷へ赴きましょう」
「まるまるー」
「よお。早かったな」

手元の課題をもてあそびながら、返事をする。
帰ってきた3人　マイマイ、ハルカ、ミーチャのうち、ハルカはいつもどおり意味不明なことをぶつぶつ言いながら馬車の壁際へ。ミーチャは妖精らしく楽しそうにぶんぶん飛び回っている。

マイマイだけが、手元のそれに興味を持ったらしく、近寄ってきた。

「それ、ドクトル・テンの課題？」
「ああ。チエノワって言うそうだ。東方の遊具だそうで、このチエインをうまくすると外せる構造になってるっつー話なんだが」
「おもちゃなんだ。たのしそー」
「……もう連続で何個やったかわからないけどな。いい加減飽きが来るところだが、構造を把握するための訓練なんだと」
「ふーん。魔^{エンチャンター}技手工もたいへんなんだねー。ところで……」
マイマイはあたりを見回して、

「男たちは？ 休憩時間だったのは知っているけど、ペイ以外いないなんてめずらしいよね」

「バグルルとコゴネルだったら、喧嘩して両方出て行ったぞ」

「ありやー。コゴネルもはんこーきから抜けないねえ。あたしみたいに素直に生きたらいいのに」

「……おまいさんは少し素直すぎる気がするがな。主に欲望に。」

シンはたぶん隊商の主のどこだ。うちのバカ師匠は……なにやっつてんだろうな。よーわからん」

「バカとは失礼ですねえ」

「うおっ!? いつからいたテメエ!」

「ほほほ、この程度の隠行で動揺するとは修行が足りませんねえバカ弟子。精進なさいよ」

「うるせえ。ていうかテメエ道具使って音消しただろいま。そんなんノーカンだノーカン!」

「ほほ、道具の使用は魔技エンチャント手工の実力のうちですよ。そこも修行が足りませんな」

「うぐぐ……」

「あははは。ペイ、みじゆくものー」

「ええいうるせえぞマイマイ。自覚はあるんだから黙ってるっ」
気がつくと、残りの連中も戻ってきていた。

「おー。みんな揃ってるじゃねえか。ぐははは」

「……うるせえから下品な笑い声立てるな。バグルル」

「まーそう言うなよコゴネルちゃんよ。さっき仲直りしただろ?」

「うせえ」

「やあ。みんな帰ってきたようだね……って、あれ。センエイとサリは?」

「お、シン。戻ってきたか。」

センエイとサリ? どうせそのへんでいつものように追いかけてこしてるんじゃないかねえのか?」

「そうなのかな……サリ、さっきは馬車に戻るって言ってたんだがなあ」

「まあ、そのうち戻ってくるだろ。どうせ定例会議があるし」

「ああ、そつだね」

シンとの会話を打ち切って、手元の課題を見る。
この分だと、会議までに課題を済ますのは無理そつだ。ため息を
つぐ。

(はやく成長してえなあ……少なくとも、いまみたいにいちばん下
つ端じゃなくなれるくらいに)

などと、思ってしまうのだった。

で、俺は魔人たちの馬車まで到着した……のだが。

(……………)

「なんだ、これ」

まあ、馬車と言えば馬車だ。

けど、その周りに張り巡らされている数多のツタみたいなものは
なんだろう。

(ちよ、ちよっとさわってみようかな……)

つんつん。

びくつ。

つんつんつん。

びくびくつ。

(お、なんか面白いぞ)

つんつんつんつんつん。

びくびくびくびくびくつ。

つんつん、つん、つ、つん。

びくびくつ、びくつ、びく、びく、びくつ。

「ほー、これは興味深い……」

「楽しんでるかな？」

「ああ。なかなか楽しいぞ」

「ははは、それはどーも。これ栽培するの、けっこう大変だったんだよ」

「へえ、じゃあやっぱ外見どおり植物なんだ。でも自分で動ける植物なんて珍しいな」

「そうかい。まあ、冥土の土産に見ておくのもいいだろうさ」

「……………なあ」

「なになな？」

「あんた、なんで俺ののどに短剣を押し当ててるんだ？」

「のどに当てられた、ひんやりした感触に冷や汗を浮かべながら、聞く。」

「やだなあ。それじゃまるで、私が君のことをいままさに殺そうとしているみたいじゃないか」

「ちがうのか？」

「ちゃんと遺言しゃべるまでは待っててあげるよ。私は寛大だから」

「あ、あははははは……………」

「ごっん、と背後でにびい音がして、のどの感触が消える。」

「ライ、死んでない？」

「ん。おおむね間に合った」

見下ろすと、だいたい20代前半と思われる背の高い女が、こめかみのあたりを抑えてうずくまっていた。

「うっ、痛いよぉ」

かなり手加減なしでぶん殴られたらしい。女は、涙目でほおを押さえながら、

「ぶったあ、サリが本気でぶったあ」

「……………センエイ、自業自得」

サリの言葉は鋼のように冷たい。

センエイと呼ばれた女は、情けない顔で俺のほうを見ると、

「私はただ、潜在的なライバルをひとり減らしておこうと思っただけなのにい……………」

「……なあ、サリ」

「なに？」

俺はため息をつきながら、

「身の危険を感じるから、帰っていいか？」

「だめ」

「だめ、つたつてなあ……」

センエイを指差す。

「こんなのが徘徊しているところ、ぜつたい近寄りたくないんだが」

「失敬だな君は。私を指示語で呼ぶのはやめたまえ」

「うるさい黙れ馬鹿。おまえには聞いてない」

きっぱりはつきり言って相手を黙らせ、俺はふたたびサリのほうを向き直る。

「どうしてもって言うなら、せめてこいつを隔離してから参加したいんだけど。それじゃだめか？」

「それもだめ。仲間外れは、よくない」

言ってサリは、むっとした顔でこちらをにらみつけているセンエイを横目で見て、

「ライはわたしが守る。それではだめ？」

「……」

なんか、照れる。

「い、行こっか」

「うん」

「サリいゝ、待ってよあゝ」

怪しい声を上げながら追ってくるストーカーは放っておいて、俺たちは馬車の入り口に向かった。

「……うわ」

馬車のなかは外観から想像していたよりは広く、そして想像以上にとんでもなく散らかっていた。

(うげえ……足の踏み場、ないじゃんかよ)

というか、このべたべたと床に貼ってある大量の護符はなんだろう。

天井にも、床にも大量に貼ってある。……厄除け？

けど、魔人がタタリを恐れるなんて聞いたこともない。

(うう……なんか、酔いそうだ。この光景)

気分転換に外を見よう……と思ったら、窓のところをツタが覆ってて、これはこれで気持ち悪い。

と。そこで気づいた。

馬車のなかの全員が、こちらを見て沈黙している。

……すぐく気まずい。

(と、ともかくしゃべらないと)

「え、えーっと、」

「あー！」

「……………」

思いっきり、出鼻をくじかれた。

出鼻をくじいてくれたストーカー女ことセンエイは、正面の大男をにらみつけて、

「こらバグルル、私の鋼呪帯を踏むなど前にも言っただろーが!？」

「おー、来やがったか、新しいの!」

「ひとの話を聞けー!」

「ちよい待て、新入りが来るなんて聞いてねーぞ俺は!」

「あたしもあたしもー!」

「さんかく〜」

「ちょ、ちよっとみんな落ち着いて……………」

「ふっほっほっほっほ! こりゃあまた、おいしそうな少年ですなあ!」

「あーそうかい。そっぴや腹減ったな。ここの飯少ないよ絶対」

「日々忍耐です」

「だからちよっとためーら俺の話を」

「とっつげきりポート！　ねえねえ兄ちゃん、ちょっと聞きたい」とが　きゃんっ!？」

「がっはっはっは！　まーそんなところに突っ立ってねーで入れ、新入り」

「なにてめーが仕切ってたんだ、バグルル」

「こ、この野郎！　おい貴様、いい加減シカト続けられるとこっちも我慢の限界つてものがだな　」

「ひしがたひしひし」

「ああそのあの、ちよつとみなさん聞ってる？　その、」

「こらペイ、あんたいま、あたしのこと蹴っ飛ばしたでしょ!？」

「聞けっつってんだろこのくそバカ野郎どもが!」

ばんっ！　と、音を立てて天井の護符がいつせいに吹っ飛んだ。

「煩い」

「……………ごめんなさい」「……………」

サリの冷え切った言葉に、全員の声が唱和する。

「……………すさんだ職場だ」

俺は、天を仰いでそうつぶやいた。

とりあえずお互いに自己紹介をつつがなく終えて、全員がその場に座り込んだ。

（えーと、男から順に、大男がバグルル、ダウンナーなガキがコゴネル、太つちよがテン、その弟子の口の悪い痩せた男がペイ。

女は、なに言ってるかわからん森小人がハルカ、チビがマイマイ。あと、よくわからんちっこいのがミーチャ、と。全部覚えたぞ）

全員の顔を見回したところで、シンが口を開いた。

「じゃあ、打ち合わせをはじめよう。まずは、例の魔物事件の続報についてだけだ」

「バンイン回廊が使えないっつー話か。どうなった?」

「待ちたまえ、ペイ。今回は新入りがいるのだから、まずは議題を

説明することからはじめるべきだろう」

「あん？ 面倒だな。センエイ、頼んだ」

「冗談。こういうのはシンの領分だろ」

「おいおい。説明なんざ前もって聞いておけよ。というわけで、聞いてなかった新入りが悪い。パス」

「だからなんででめーが仕切ってるんだよ、バグルル？」

「うるせえ！ なんか文句あんのかよ、コゴネル！？」

「べつに。おまえみたいな脳味噌のない奴が嫌いなだけ」

「んだとコラ……いてっ。な、なにすんだよ、ミーチャ」

「さんかく」

「あ？」

「さんかく」

「……なあ、なにが言いたいんだ、こいつ？」

「君のだみ声が耳障りなんだろっさ。放っておきたまえ。シン、続きを」

「はいはい。えーと、ここから一時間くらい先にバンイン回廊というトンネルがあるんだけど」

シンが俺に地図を見せながら言う。

「ああ。それで？」

「その奥のほうから、魔物があり得ないほど大量に出てきているので、通るのはちょっと危険かな、と」

「……それは、ものすごい異常事態なんじゃないか？」

「そう？ べつに、日常茶飯事だと思っけどー？」

「それは、マイマイが魔女だから、いつも魔物と遭遇しているだけのことではありませんか？」

「えー？ けどでも、あたしがバンイン回廊を通ったときは、だいたいいつでもすごい数の魔物がいるよ？」

「おまえ、そもそも一回しかあそこ通ってねーじゃんかよ」

「もー、細かいこと突っ込まないでよね、ペイ」

「まあともかく、多くの人には日常茶飯事ではないですよ。我々に

はともかく、ね」

「ドクトル・テンは、この事態をどう考えておいでです?」

「わたしですか? まあ、なかなかおいしそうだとは考えておりませんが」

「風情がありますねえ……」

「ほっほっほ。それほど」

「……なあ、センエイ。テンとハル力がどんな高高度なコミュニケーションを取り合っているのか、おまえわかるか?」

「無茶は言わないでくれたまえ、コゴネル。テンならともかくハル力の言動を解説なんてできるわけないだろ」

「……ああ、たしかに愚問だった。忘れてくれ」

「で、どうするんだよ?」

とりあえず、このままだといつまで経っても話が終わらなそうだったので、強引に割り込んでみる。

「まあ、そういうわけで迂回路を探していたんだけど、そのために遠出していた仲間からの連絡がようやくきたわけで」

「トウトからか?」

「他の誰からだってんだよ、ばかバグルル」

「……殺すぞ、ガキ?」

「はいはい、ケンカなら外でやるように。」

トウトは、なんと?」

「まるまる??」

「迂回路を発見したのはいいんだけど、途中に岩巨人の集落があるらしいんだ」

「それはまた、困りましたね」

「あん? なんで困るんだよ。テン」

「このあたりの岩巨人は、人間とそれほど友好的な関係にはありませんから。交渉に失敗すれば厄介なことになりますよ」

「なに、いざとなりやあ力づくで通ればいいだけの話だろ? 問題ないって」

「嫌よ。疲れるもの」

「即答かよ。」

「……まあ、サリに言われなくても、俺だって本気でやるうとは思わねーけどよ」

「へー、そうだったのか？ どーせ、また適当なこと言ってるのかと思った」

「うるせえぞゴゴネル。いくらなんでも、んな無鉄砲じゃねーよ。」

俺あ非公認のチンピラじゃねーんだし　　いってっ」

センエイが、バグルルの頭を呪符の束でひっぱたいていた。

「気にしないでもいいのに」

「けじめって奴さ。」

バグルル、サリの前でそういうことを言うのはやめろと言っただろう」

「ああ、そいつは無神経だった。わりい」

「えーと……展開がわかんないんだけど」

ぴたり、と周囲の動きが止まった。

「あ……いや、なんでも、」

「わたしは公認魔女でないから、みんなが気を遣ってるだけ」

「サリ！　ちよっと……」

「べつに、隠すことじゃないから」

血相を変えたセンエイに、サリはあくまで冷静に言った。

公認……と、言われても、

「魔人に、公認なんてあるのか？　俺、そのあたりぜんぜん知らないんだけど」

言うつと、みんながあきれたような表情でこっちを見た。

「な、なんだよ……」

「ま、まあ、たしかに普通のひとにはあんまり縁がないかもね……」

「あの資格取るの、けっこう苦労したんだけどなあ。世の中そんなもんかね。やれやれ」

「なんか、やる気なくなっちゃったなあ。あーあ」

「まあまあ、みなさん落ち着いて。客人がとまどってしまつてはな
いですか」

言つて、テンは事情を説明しはじめた。

「領主が、自らの領地を魔物に荒らされるのを嫌うのはわかります
ね？」

「まあ、自分の儲けが減るからな」

「さよう。しかし、神殿との兼ね合い上、正規軍で魔物を取り締ま
るわけにはいきません。そこで、表向きは領主とは独立した雇い兵
をもつて、魔物討伐を行う必要があるわけです。

一方、魔人たちも神殿から敵視されている以上、どこかから保護
してもらえなければ危険です。そういう理由で、たいていの魔人
はどこかの領主と『契約』を交わして、活動しているわけですよ」
「それが、“公認”つてことなのか？」

「正確には、王と『契約』した人間を“公認”と呼ぶのですがね」
そこで、テンはセンエイのほうをちらつと見て、大げさに咳払い
をしてから、

「一般論を言えば、試験を経て『契約』を結んだ“公認”魔人のほ
うが、そうでないよりも信頼できる場合が多いですね」

「例外もいるがな」

なぜか偉そうに言つて、センエイはぽんとサリの肩をたたいた。

なんとなく、わかった。が、疑問はまだ残つていた。

「なんで、サリはその資格、取らないんだ？」

サリ、十分強いのに。

サリは、なんだか懽然とした様子で、

「字、読めないから」

「頭悪いのか」

「ぼかりつ。と、センエイに殴られた。

「なんであんたが殴るんだっ」

「ふん、あたりまえだろうっ」

「あはは。まあ、サリは有名だからね。苦労して公認魔女にならな

くても職には困らないし、いいんじゃない？」

とりなすように、シンが言った。

「それで、そろそろ話を戻そう。トウトの奴は、なんて？」

「ああ、そうそう。その岩巨人の集落と掛け合ってみるって。だから、もう少しそこで待っていてくれ、だって」

「それじゃ、出発は見送り？」

「うん。そうなるね」

「やったーっ！」

「なにがそんなに嬉しいのかわかりませんが、よかったですね、マイマイ」

「うん！ このあたり、雰囲気が出るいから気に入ってたの！」

「そうかい。君は幸せだな……」

「なんだよ？ 妙に暗いな、センエイ」

「開けた場所は苦手だ。早く森のなかに入りたかった……」

「静謐なる森はすべてを浄化してくださいます」

「いや、べつに浄化されたいわけじゃないんだが」

「あー、ちよつといいかい？ その、見回りのローテーションについて、いまのうちに決めておきたいんだけど」

「面倒だな。俺パス」

「コゴネル、態度悪いっ」

「……態度悪い」

「さんかく」

「な、なんだよ……」

「まあまあ、ここはひとつこのバグルル様に免じて」

「おまえの恩を受けるのは死んでも嫌だ」

「なんだとてめえ！」

「難儀しそうだな、これは」

「……だね」

言って、シンは苦笑した。

二日目・2：悪党、洞窟を探検する

「つ、疲れた……」
空が赤い。

議論が終わって馬車の外に出たときには、すでに夕方に近い時刻だった。

多くの議題をいっぱい解決しなければならなかった、というのなら理解できるのだが、

（決めたの、見張りの順番だけだったし。……んなもん、くじ引きで適当に決めちまえばいいのに）

なぜか議論で決着をつけようとして、それでもめて、しょうがないから決定する方法を決めようとして、それで決定する方法を議論して、またもめだしたときにはさすがにどうかと思った。

まあ、最終的にはシンが「じゃあ、いま座っている順番を左回りにふたりずつで行こうか」と言っただけで、それでカタがついたのだが。（てか、それで決まるんなら最初からそうしろよ）

頭がくらくらして、俺は思わず立ち止まってしまった。

「？ どうしたんだい、ライ氏？」

「いつもあんな感じなのか、あいつらは？」

疲れた口調で、そばにいたシンにたずねる。

「んー、まあ、そうだね。いつもは、僕が御者をやっていて会話に参加しないからもつと長引くけど」

そういえば、今日は結局昼休みの後からまったく動かなかったんだっけ。

「だれか、クランさんには事情を伝えたのか？ 今日にはもう移動しないことにしました、って」

「ああ、それなら大丈夫。」

昼に会ったとき、そうするって伝えておいたから。問題ないはずだよ」

「そうなんだ。」

「……て、いいのか？ こっちで勝手に隊商の進退を決めて」

「魔物が絡む事態だからね。」

「こういうときに、魔人と隊商が一緒にいたら魔人が進路を決めるのが慣例なんだ。だから相手も、十分に了承してくれているさ」
「なるほど。」

「じゃあ、それについては問題なしか。けどよ、いつまでもここにとどまつてるわけにはいかないんだろ？」

「だね。なにより、糧食がなくなるし」

「なら、たとえばそのトウトとかいう奴が交渉に失敗して帰ってきたら、どうするんだ？」

「そうだねえ。そうなったら困るねえ」

「ふむ、とシンは腕を組んで、

「そしたらやつぱり、草原を突っ切ってステッジ・コースまで行くか……」

「おいおいおい！」

あわてて、俺は相手の言葉をさえぎった。

相手は、きよとんとした顔でこっちを見ている。

「どうかしたのかい？」

「弧竜はどうするんだよ、弧竜は」

「そつだよねえ……それが問題なんだよね」

言つて、またシンは考え込む。

「僕たちだけだったら、弧竜から隠れて進んでいくこともできるんだけど」

「隊商の連中までは、無理？」

「うん。カヴァーする面積が大きすぎる」

「ぼりぼりと頬を掻きながら、シン。」

「じゃあ、やつぱりその案は却下か？」

「まあ、ちよつと待つて。とりあえず、この時点ですり得る案を全部列挙してみて、それから考えよう。」

まず、最初に思いついたのは弧竜から隠れて草原を突っ切る案。

これは、すでに難しいことがわかっている」

「ああ」

「ふたつ目の案は、いったん道を引き返してべつの街道から行く案。まあ、安全策ってやつかな。」

みつつ目は、無理やりバンイン回廊を突破する案。けど、これを取った場合、全員が安全に向こうに抜けられるとは思わないほうがいい。

最後に、弧竜と戦って打ち破り、草原を横断する案。まあ、こんなところかな」

「……………」

その案だと、安全なのがひとつしかないような気がするんですが。特に、最後の案とかムチャクチャだし。

「その……竜と戦って、勝算はあるのか？」

問われたシンは、肩をすくめて首を振った。

「やめたほうが無難だね。追い返すだけなら勝ち目自体は低くないが、被害ゼロとは行きにくい。」

なにしろ、魔人たち定番の戦法のいくつかは、弧竜に効かないからね。あれは魔物ではないから」

「魔物ではない？ そうなのか？」

ちよつと意外だった。

「人間に害のある生物、つてのはおなじだけどね。けど、あれは神話の内部の生物であって、魔物じゃない。」

だから、神話に載っていないことを利用して攻撃するタイプの魔術は、あれには効かないんだよ」

「そうだったのか」

「ふつうのひとたちから見れば大差ないんだろうけどね。戦う人間にとっては死活問題だから、この相違は大きいよ」

その言葉で、俺は大事なことを思い出した。

「シン、俺に剣の使い方を教えてくれないか？」

相手はびつくりしたように俺のほうを見た。

「それはかまわないけど、なんで僕に？ それに、僕が剣を使うことなんて教えたっけ？」

「いや、サリに推薦されたんだ」

昼間の経緯を告げる。

「そっか。サリは長剣を使えないからね」

「サリにも言われたけど、そんなに差があるもんなのか？ 長剣と短剣って」

「そうだね。だいぶちがうよ」

断言された。

「武器の重さ、長さがほんの少し異なるだけで、普段どおりの使い方はできない。戦士を志すなら、最初に覚えるべきことだね。」

まあ、けど、これはライ氏にはたいして関係ない話かな。使用する剣は一本に固定されているし。

「ちょっと、その剣を見せてもらえる？」

「言われ、俺は剣を腰からはずしてシンに手渡した。」

剣を受け取ったシンは、それを鞘から抜こうとして、

「あれ？」

抜けなかった。

「やっぱり、俺にしか抜けないのか？」

「そうみたいだね。」

「うーん、これは困ったな。振ってみないと、どんな使い方をすればき剣かがよくわからないんだけど」

「ほりほりと、シンは頭を掻きながら言った。」

「けど、長さや太さのわりには軽い剣だね。材質がちがうのかな？」

「そうか？」

「だと思っ。まあ、ほとんどの呪物は風化、破壊に強いはずだから、材質の強度を心配することはないと思っけど」

剣を返される。

「で、どういう訓練をすればいいんだ？」

「そうだね。いろいろあるけど　まずは、剣に慣れることから始めないとね」

「慣れる？」

「そう。長剣は短剣とちがって重いし、体積も大きいから、へんな振り方をするとすぐに手を痛めてしまう。

だから、まずは剣を振る作業に十分慣れておかないといけないね。とっさにきちんとした振り方ができるように」

「具体的には、どうすればいいんだ？」

「やっぱり、素振りじゃないかな」

「……地味な訓練は嫌いなんだけど」

「でも、それ以外で強くなる方法はあんまり多くないよ。地道な鍛錬が一番の近道だと思うけど」

俺は苦笑してため息をついた。

「やっぱり、それしかないか……」

「決まりだね。まあ、なるべく早めに次の稽古ができるようにするからさ」

言って、にっこりとシンは笑った。

「それで、どうしたの」

「見てのとおりだ」

「へばってるように見えるけど」

「よくわかってるじゃないか」

身体が、死にそうに重い。

シンがいつもやる素振りの回数を聞いてみたところ、

『うーん。延べ1500回くらいかな。続けてそれくらいやれば適度に疲れるし』

と言われ、むきになってその回数までやろうとしたのだが、300回もいかないうちにあっさり力尽きた。

(基礎体力には、けっこう自信があったんだけどなあ)

倒れた俺の横で平然と鉄の棒を振りつづけていたシンを思い出す。
俺がへばったちようどそのころ、

『あれ……いまの一回は、1271だったけ、1272だったけ……まあ、いいか。ひとつくらい』

とかいう声が聞こえてきたのが、妙に頭にこびりついている。

(てゆうか、どういうスピードで剣振ってるんだよ?)

昨日のサリといい、今日のシンといい、魔人はやっぱりとんでもないやつばかりだ。

「……………」

「なんでもない。それより、なにか用か？」

サリは自分の後ろを向いて、手でくいくいと合図をした。

応えて、すたたと足音が近づいてくる。

「これ、死体？」

「まだ死んでない」

「うーん、けど、そうしていると行き倒れみたいだよ」

「おおきなお世話だ」

「埋めてあげよっか？」

「バカたれ、土をかぶせるなっ」

あわてて起き上がる。

見てみると案の定、そこにいたのはあのマイマイとかいうガキだった。

それはいいのだが、

(や、やばい、力がでねえ……)

くらくらくと起き上がるめまいをなんとか封じ込め、根性で立つ。

「ライ、大丈夫？」

「ま、まかせろ。これしきのこと……」

「すきありっ」

ぺちっ。

ばたん。

じたばたじたばた。

「わ、やった。サリ姉ちゃん、あたしの足払いでこのひと倒れちゃったよ」

「……マイマイ、いたずらはよくない」

「いたずらじゃないよ。だって足払いだもん」

「くおらあっ！」

不思議理論を展開させるガキに、俺は食ってかかった。

「わ、なに、どうしたの？」

「どうしたの、じゃねえっ！ 人が必死で立ってるときに蹴りを食らわすたあ何事だ！」

「さあ？ すきが大きかったから」

殺したるか、このガキ。

「だいたい、俺になんの用があるんだよてめえはっ」

叫ぶと、サリが答えた。

「今日の夜、ライといっしょに見張りをすることになるから、あいさつがしたいって」

「そゆこと。よろしくねっ」

言って、軽くウインク。

(そういや、たしかそんなふうに決まっただけ)

俺は、さっきの会議の結果を思い出してうなった。

「なんとって俺がこんなガキと……」

「こらっ」

こつんっ、と、頭に軽い衝撃が走った。

「いてっ。なにすんだよっ」

「ガキってゆーなっ。あたしはレディなんだからねっ」

「なあ、こいつの脳、どっかおかしくないか？」

「なんでサリ姉ちゃんに聞くのよっ。こら、こっち向きなさいよおっ」

「ええい、うっとおしいっ」

「ぶがーっ」

「うらーっ」

じたばたじたばた。

気が付くと、あっさりマウントを取られていた。

「しまった、素振りのしすぎで力が出ないっ……………」

「へへー、かくごしなさいよお」

「すきありっ」

「こちよこちよこちよ。」

「うひゃあああっ!?!?」

あわてて相手は飛びのいた。

「な、なにすんのよおっ!?!?」

「もちろん、わきの下をくすぐったわけだが」

「れ、れーせーに言わないでっ。もう、怒ったんだからあ!」

言っと、相手はさっ、と、視界から消えた。

「…………え?」

「ライ、ちよつと危ない」

「ひっさーっっ」

ぼふっ。

「ぐえっ!?!?」

ジャンプしたマイマイが、そのままの勢いでボディプレスをしかけてきた。

サリの忠告でとっさに腕をクロスさせて腹を守ったおかげで、直撃はせずにすんだが、

「て、てめえ、体格のわりにけっこう重いな……………」

「わっ、わかいオトメになんてしつれーなことをっ。あんたなんか死んじゃえ、このこのこのっ!」

「こらーっ、人の腹の上で暴れるなっ」

どたばたじたばた。

俺は、相手の腹に重なった腕に力を込め、身体を振り払おうとして、

(…………あれ?)

なんか、違和感があった。

相手もそれを感じたらしく、

「う、うわわわわわわわっ!？」

「またもあわてて飛びのいた。」

「な、ど、どこさわってんのよう!？」

「……いや、そんなこと言われても」

単に、へそのあたりを押し返したただけなんだが。

というか、いまの感触は……

「な、なによう」

「おまえ……実はでべ」

「わーわーわーわー!」

「ええい、うるさいっ」

ふと気が付くと、サリが所在なさげに宙を見上げていた。

「どうした？」

「サリ姉ちゃんも、なんか言ってるよー。こいつ、あたしのひみつをにぎってきよーはくする気だよ?」

「そうなの?」

「なんでそれを信じる!？」

「あはは、本気でムキになってるよこのひと。おもしろーい」
……ぷちっ。

「あれ? どしたの?」

「死ぬまでわきの下くすぐりの刑っ」

「ちよ、やめ、あ、ひゃ、ひゃああああああっ!？」

どたじたばたばた。

「……さみしい」

ひとり喧騒から取り残されたサリの声は、だれにも届かなかった。

「うー、筋肉痛が痛い」

夜。

当直のためにとりあえずの仮眠を取ったはいいのだが、起きてみ

れば身体中がきしむように痛かった。

(腕振ってただけなのに、一番痛いのがわき腹なのはどうしてだ?)
疑問に思う。

まあ、そんなことはどうでもいい。

「……どうしてだれもないんだ?」

とりあえずの待ち合わせ場所と決めたとところに出向いたのはいいのだが、そこには人っ子ひとりいなかった。

(どこで油を売ってるんだ、あのガキは)

まあ、いなければいないに越したことはないんだが。邪魔だし。

見上げると、空には雲ひとつなく、星の天蓋がくつきりと見えていた。

(星じーさんと遠眼鏡で月を眺めてたときも、だいたいこんな感じの夜空だったなあ)

星の天蓋ではなくて、大地が回っていることを証明してみせる、とか言っていた変なじーさんを、俺は思い出していた。

だれが聞いても、「こいつどっかおかしいんじゃないか」と思う珍説だが、突っかかった奴はなぜか全員論破されてしまった。

いま思えば、それはひょっとすると、あのじーさんの言っていたことが正しかったからなんじゃないか、とか

(まあ、どうでもいいことだけどなー)

回ってるのが天だろうと大地だろうと、俺の飯の足しにならないことは確実だ。

さしあたり、明日の飯のために今日はこの隊商を守らねばならない。

と、かつこよく決めてみたはいいものの、そもそも俺がまともに隊商を守るのか、実に心もとない。

実戦の経験もないし、そもそも今日は筋肉痛でまともに剣が振れるかどうか不明だった。

警備なんか、とうていひとりじゃできそうもないんだが、

(あのガキ、ほんとにサボリやがったのか?)

思っていると、遠くから言い争いの声が聞こえてきた。

(なんだ?)

不審に思って、俺はそっちの方向に向かって歩いていった。すぐに、騒ぎの原因は見つかった。

見つかった のだが、

「だから、ついてこないでって言うてるでしょっ」

「馬鹿者！ 私は親切心でついてきているのだぞ！ だいたい、自分でも『ひとりじゃ危ないかも』とか言っておったくせに」

「だあからあー、なんであなたはあたしのひとりごとを盗み聞きしてるのよっ。あんた、ひよっとしてヘンタイ？」

「し、神官補に対してなんと失礼な！ 礼儀を知れ、小娘！」

(……か、関わり合いになりたくねえ)

くるり、ときびすを返して逃げようとする。

が、

「あ、ライっ」

「しまった、あっさり見つかった」

マイマイはすたたたたつ、と近寄ってきて、俺の後ろに隠れた。

「なにやってんだ、おまえ？」

「ヘンタイに追われているのっ。助けてっ」

「だれがヘンタイかっ」

いきり立ちながら現れた男を、俺は知っていた。

あの、リツサとけんかしてた、イヤミな小物っぽい神官補のおっさん。

「たしか、サフィートとか言ったな」

「呼び捨てにするでない！ サフィート・パリーメイジ神官補と呼

べ

「ほほっ」

きらーん。獲物発見。

「それで、か弱い幼女相手にどういった変質行為に及んだんだ。サフィート・パリーメイジ神官補」

「こらこらこら！ 変な誤解を与える表現はやめんか！」

「しかし、この娘はおまえのことをヘンタイだと言っているぞ。サフィート・パリーメイジ神官補」

「そうそう。すっごいヘンタイなんだから、こいつっ」

「真に受けるな、馬鹿者！ 魔法の小娘と神官補でどちらの言が信ずるに値するか、それすらもわからぬか！？」

「だが、おまえの同僚のスタージンとやらは『役職で人を判断するのはよくない』と言っていたぞ。サフィート・パリーメイジ神官補」

「な、あ、その」

言葉に詰まる。

「おまえの負けだな。サフィート・パリーメイジ神官補」

「や、やかましい！ だいたい、さっきからいちいち人をわざとらしくフルネームで呼ぶんじゃない！ 気に障る！」

「しかし、おまえがそう呼ぶように言ったはずだが。サフィート・パリーメイジ神官補」

「うんうん、あたしもそう聞いたもんねー、サフィート・パリーメイジ神官補？」

「いつもいつもそう呼べと言ったわけではないわ！ ええい、もういいから『神官補さま』と役職のみで呼べ！」

「残念だが、『一度決めた呼び方は二度と変えるな』というのがうちの家訓なんだ。あきらめろ、サフィート・パリーメイジ神官補」

「な、なんだそのふざけた家訓は！？」

俺もそう思う。

「まあ、バカをからかうのはこのくらいにしようか」

「えー、もっとやろーよ。このひと、さっきから赤くなったり青くなったり、すごく面白いよ？」

「き、貴様ら……」

「で、おっさん。なにしに来たんだ？」

「おっさんではないわっ」

怒鳴ってから、こほん、と咳ばらいをひとつ。

「その娘が夜中に歩くつもりだと言うから、幼子の一人歩きは危険だと思っついてきたのだ」

「……やっぱヘンタイじゃねーか」

「馬鹿者！　どこの神官補が、たかがガキ一匹への悪戯のためにこんな夜中を歩き回るか！」

「てことは、やっぱり他に目的があるのねっ」

びしっ、と、マイマイが指を突きつける。

相手は多少ひるんだ様子だったが、すぐにふんぞり返って、

「ふ、ばれてしまったてはしかたがないな」

「いつとくけど、あれはあたしが見つけたんだからねっ。あたしのおたから、よこ取りしたら怒るんだからっ」

「馬鹿者！　そういうのは横取りとは言わん！　喜捨と言うのだ！」

「やっぱりよこ取りする気だったのねっ。ライ、こいつ悪人だよっ。」

やっちやおうよっ」

「まてまてまて、話がよくわからんぞ」

興奮するマイマイをあわててなだめながら、俺は説明を求める視線をサフィートのほうへ送った。

サフィートはあいかわらず偉そうにしながら、

「ふん、では説明してやるっ」

「あ、やっぱいいや。バイバイ」

「いいから聞け、馬鹿者っ！」

「だから、あたしが見つけたおたからをよこ取りしようとしてるんだってばっ」

「お宝　って、なんだ？」

「私も詳しいことは知らん。ただ、この娘が独り言を言っているのを聞きつけてな」

言われ、マイマイは深刻な顔で、

「……みつけたんだよ」

「なにを？」

「どーくつのいりぐち。たぶん、岩小人の遺跡だと思うの」

「それで？」

「ぜったいおたからがあるって、そう思わない？」

「……だから？」

「たんけんに、れつつ、ごお、とか。えへへ」

「さ、警備をはじめろぞ」

「こらーっ、信じてないでしょおっ」

「やかましいっ！ てめーだってプロだろーが！ サボることなんか考えてねーで食い扶持分の仕事くらいしろ！」

「ざいほーだよ？ おたからがっぽりだよ？ 仕事なんて、ちいさいことだと思わない？」

「まっただ。というわけで、我々が守ってやるから安心して財宝は山分けだぞ小娘」

「そうそう って、勝手に決めないでよっ。あれはあたしの見つけたお宝なんだからっ」

「愚か者っ！ くだらんことでケチケチすると地獄に落ちるぞ！」

「おまえ、ほんとに神官補か……？」

「というか、魔人にはあんまり近づいちゃいけないんじゃないんかったんかい、こいつは。」

俺の言葉に、しかしサフィートは毛ほども動じなかった。

逆に、鼻でふふんと笑って、

「青いな、小僧」

「な、なんだよ……」

「天界の沙汰も金次第。金を用いる者は神をすら傳かすかせる。神官の世界とて、この条理からは逃れられん」

「言葉が難しすぎて、言ってることがよくわからないのだが」

「神も借金取りにはかなわない。そういうことだ」

「……あ、そう」

とりあえず反論しても無駄そうなのでだまっておくことにする。

だまっておく代わりに、俺はその場からこっそり抜け出そうとしていたマイマイのえりくびをひつつかんだ。

「な、なにをするのようっ」

「バカたれ。いいからさっさと仕事だ仕事！ お宝探しはその後でやれ！」

「そうだ、抜け駆けは許さんぞ！」

「あんたは黙ってる！」

「なんでえー？ だって、おたから、ぼさつとしてたら盗られちゃうかもだよ？」

「すっぱりあきらめろ。俺には関係ない」

「ほう……そんなことを言っつてよいのかな、小僧？」

「あん？ どういう意味だよ？」

サフィートは、くくく、と、薄気味悪い笑い方をした。

「小僧、貴様の武勇伝は聞かせてもらったよ。一夜にして大量の借金を抱えてしまったらしいな？」

「それがどうした。それとこれとはなんの関係も」

「借金、さっさと解消したくはないのかね？」

「……………」

「地道に稼ぐだけでは数十年を費やすのだぞ？ このなかで、一攫千金のチャンスをもっと必要とするのは、貴様ではないのか？」

「そ、それはそうだろうけどよ……………」

「いいか、小僧」

「ずずいつ、と、サフィートは身を乗り出した。

「筋書きはこうだ。まず、運命に導かれた私が、財宝の眠る遺跡へと誘われる。

それを偶然にも発見した貴様らは、神官補を警護するために、警備の仕事の一環として遺跡に赴くわけだ。

うまく財宝を発見した私は、警護の感謝料として貴様らにその1/3ずつを分け与える。

「どうだ？ これなら、貴様らが仕事をサボったことにはならんだろっ？」

「ほほう」

にやり、と、俺は笑った。

「なるほど、面白い案だ。だが、なぜあんたは俺を誘うんだ？ 財宝を独り占めしようとは思わないのか？」

「こんなところで命を落とすのも馬鹿らしいからな。人数が多ければ、それだけ危険も減るだろう？」

「まあ　な。そして、最後まで生きていた人数が少ないほど分け前は増える、か」

「それはお互いさまだろう？」

「だな。　くくく、意見が合うねえ」

「ふふ、なに、合理的なだけだよ」

「はっはっはっはっは」

絶対零度の笑みをお互いに浮かべて、笑いあう。

「なんか……はげしく、いっしょに行くひとの人选をまちがえてる気がするわ」

冷や汗を顔に浮かべながら、マイマイが言った。

「で、いったいどこにその遺跡とやらはあるのだ？」

「うん。あっちだよ」

言って、マイマイは草原の奥のほうを指差した。

……まてい。

「思いっきり弧竜の射程範囲内なんだけど」

「うむ。退治はまかせたぞ小僧」

「できるかー！」

「なにい！？　そんな馬鹿な！」

驚くなよ、頼むから。

「小僧、貴様は竜の一匹ごときも倒せんのか！？」

「無茶を言うな、無茶を！」

「てゆーか、竜をひとりでおせる人間なんているわけないじゃん」

「なんと！　魔人ですらそうなのか！？」

だから驚くなつて。

マイマイはちよつと考え込んで、

「むかーし、竜をたおしたつていう魔人たちの話、聞いたことあるけど……」

けど、たしかそのひとたち、10人がかりで、3日くらいかけて準備した罠にかけて倒したらしいからね」

「では、ひとりでは……」

「むりだつてば。だいたい、そんなに竜が弱かったら、とつくのむかしに草原からいなくなつてるよ」

「まあ、そつだよなあ。竜とまともに戦おうなんて、根性自体がまちがつてるし」

「ぬ、ぬぬ……」

こほん、とサファイアは咳ばらいをして、

「帰つて寝るか……」

「こらこら、いきなりあきらめるなっ」

「やかましい！ 取れる見込みのない財宝になど興味はないわっ！」

「ひつどーい！ あたしが、なんのモロクミもなく」

「もくろみ」

「……と、ともかくつ。あたしが、なんのモクロミもなくおたからさがしに行くと思つたわけ？」

「つまり、弧竜をうまくやりすごす方策があるつてことか？」

「うんっ」

うれしそうに、マイマイはうなずいた。

「で、その方策というのはどういうものだ？」

「うん。これっ」

言つて、彼女が差し出したのは、小さな布切れと何本かの小枝だった。

「……なあ、マイマイ」

「しっ。しっかにするのっ」

「いや、それはいいんだが」

俺は、頭の上を指差して、言った。

「ほんとに、これ、役に立つのか？」

布製のカラフルなバンダナではさんだ、何本かの小枝。

それで、しゃがんで小さい木のふりをしてごまかす、という話らしい。

「あとで、バンダナはちゃんと返してね。おきにいりなんだから」

「いや、そーゆーことではなくて」

「無駄だぞ小僧。もうすでに我々は引き返せない場所にいる」

「……」

なんで、こんな馬鹿げた計画に乗ってしまったんだろうかと、ちよつと泣きたくなる。

「だいじょーぶだつてば。きっと弧竜だってトリ目なんだから、夜はよく見えないはずだよ」

「弧竜ってトリ目だったのか？」

「……そういえば、あんま調べたことないからわかんないや。てへ」

「……」

やっぱりダメだ、こいつ。

俺の様子を見て、あわててマイマイは言った。

「あ、でもちゃんとバンダナにはカモフラージュ感覚迷彩の魔法をかけてるから、たぶんホントに気づかないと思うよ」

「ああ……そう願ってるよ……」

頭が痛い。

「ふん、だから無駄だと言っただろう」

「そういうおまえは、なんでそんなに余裕しゃくしゃくなんだ？」
言っただけ俺は振り返り、

「いや、やっぱりいいや。ごめん」

「うむ」

見るも哀れなほど真つ青な顔で、サフィートはうなずいた。
と、

「見えた！」

先頭のマイマイが、前方の空間を指差す。

そこに、小さな塚のようなものが立っていた。

塚の表面には、おそらくは地下へと続くであろう道がぼつかりと黒い口を空けている。

月明かりに照らされて、それはとても不気味なもののように見えた。

「たしかに、いかにもなんかありそうな洞窟だな」

「でしょ、でしょ？ やったー、おたからおたからっ」

歓声を上げて、マイマイは立ち上がった。

「おっ、おい!？」

「だいじょーぶだつて。どーくつのなかに入っちゃえば、弧竜だつて追つてこれないもんっ」

言つて、マイマイは駆け出し

ばちん!

ざあああああああつ!

「うにゃああああああああああああ……」

「ど、どうした!？」

あつという間に、あたり一面が光り輝く謎の飛行体に覆い尽くされた。

というか、

「ほ、宝石虫?」

どうやら、宝石虫の巣に足を突っ込んでしまったらしい。

あわてて駆け寄つて見ると、そこにはかなり深い穴が空いていた。マイマイが落ちた穴だろう。

「ここを埋め尽くすほどの宝石虫が詰まっていたつてことか……」

とんでもない量だった。畑を荒らす害虫と言われるのも、これならばうなずける。

きらきらと、月明かりの草原を宝石虫が舞う。

それはこの世のものとも思えない、幻想的な光景だった。

傍観者だったならば、我を忘れてこの光景に感じ入っていたことだろう。

まるで光の精のように舞い踊る宝石虫が、きらきらと月明かりを反射して、まぶしいくらいだった。

というか、まぶしかった。

つまり、目立っていた。

ということとは、

「まずいっ！ おっさん、走れっ！」

あわてて俺は、後ろで取り残されていたサフィートに呼びかけた。

「ど、どうした!？」

「弧竜がこれに気づかないわけがないだろーがっ！ とにかく、いったんこの穴に飛び込んでやり過ぎすぞ！」

言ってるうちに、上空から「きしゃあああああっ！」という雄たけびが聞こえてきた。

「早くっ！」

「う、うむっ！」

あわててサフィートが飛び込む。

「あああああなんか深いいいいいいいいい……ぐえ!？」
どちゃっ、という、鈍い音がした。

「よし、生きてるな!？」

『こら、小僧！ 貴様、この穴が安全かどうかを調べる実験台として私を使つたな!？』

「細かいことは気にするな！ いま、そっちに行く！」

言つて、俺は空を見上げる。

そこに、奴がいた。

黒い、漆黒の翼。

月明かりを照り返す硬質の輝きは、この世で最も硬いと言われる竜鱗の光だ。

身体の横から伸びる髭のような打撃腕が、獲物を見つけたことを示すように、ぶるり、と大きく震えた。

弧竜。

それは赤く輝くふたつの目で俺を見下ろし、いままさに、ゆっくりと口を開いたところだった。

「おっさん！ 俺が落ちてくるから、しっかりよけるよ！」

「ちょ、ちよつと待て、腰が……！」

聞く耳を持たず、俺は穴に飛び込んだ。

どしゃああああああっ！

間一髪。

直後、俺のいた場所を炎の吐息がなぎ払った。

ずささささささつ……どかつ！

「ぐええええ！？」

「あ、ライ！」

巢穴のなかは、明るかった。

周囲をちろちろと鬼火が周回している、その光のおかげだ。

「この光、おまえの術か？」

「うん。あたし幻影イリュージョニスト使いだから、幻光を扱うのは本職なんだ」

胸を張って、マイマイ。

「ぐ、ぐるしい……おいこら貴様、さつさと私の上からどかんか！」

「んー、聞こえないなー。落ちた衝撃で耳がいかれたかな？」

「たいへん！ ライ、すぐに耳の治療してあげるから、そこからう

ごかないでね

「だーっ！」

「うわわっ！」

「きゃあああっ！？」

すごい馬鹿力で、俺は吹き飛ばされた。

「なんだよ、腰がどうか言っただけでぜんぜん大丈夫じゃん」

「馬鹿者！ 貴様には年長者を敬う気持ちはないのか!？」

「あいにくだが、年齢でひとを差別しちゃいけないというのがうちの家訓でな」

「だからなんでそんな都合のいい家訓がぼんぽんと出てくるのだ貴様の家は!？」

「うわ、一息で言い切ったよこのひと。長いせりふなのに」

「会話をしろーっ!」

「ぜえ、ぜえ、と、荒い息で言う。」

「ほら、もう年なんだから無理するなよおっさん」

「そういうときだけ年長者扱いするな、馬鹿者!」

「ねー、どうでもいいけどさ……ここって、どういところなのかな?」

マイマイに言われて、俺はあたりを見回してみた。

「洞窟」

「いや、それはわかるんだけど」

「わかってる。なんでこんなところに洞窟があるか、だろ?」

俺たちが入ったのは、たしか宝石虫の巣穴だったはずだ。

なのに、この空洞は、明らかに宝石虫が入っていた量を超過している。

「というか、むしろ広すぎる。」

鬼火で照らしきれないほど広い空間が、ここには広がっていた。

「ひょっとしては思うが 岩小人の空洞に入ったのか?」

「違うな」

「なんで?」

「やつらは、作った洞窟を彫刻などで飾り立てるからな。そうした細工が見当たらない以上、ここは岩小人の洞窟ではない」

「けど、なんでこんなほら穴が空いているわけ? 自然にこんなものができることがありうるの?」

「ありえないとは言えないだろ、たぶん」

地上に生息するどんな生物だって、弧竜は恐い。

だから、一部の生物が穴を掘ってそこで生活していたとしても、おかしくはない。

ただ、気になるのは、

「ここ、出口あるのかな……」

「きつとあるよっ。だって、たぶんここ、あたしたちが目指していたあのどーくつのなかだよっ」

「可能性はあるな。私としては、そうでないことを願うが」

「なんで？」

「貴様、ここに来た目的を忘れているのではあるまいな？」

「え？ それはもちろん、お宝」

「岩小人の遺跡ならともかく、こんなみすばらしい洞穴に財宝があると思うか？」

納得。

「まあ、どっちにしろ、出口は探さないとな……」

さつき落ちてきた穴をもういちど登る、という手もあるにはあるが、土の状態が悪いのと坂の勾配が大きいので、ちよつと分が悪い。加えて、弧竜が悪知恵を働かせて穴の前に待ち伏せをしているかもしれない。

「とすると、奥に行くしかないんだよなあ」

「たんけん、たんけんっ。きゃはは」

「……………」

「……………」

ひとりはいしゃいでいるマイマイを見て、俺たちふたりは同時にため息をついた。

（ひよつとして、こいつ　実は宝なんてどうでもよくて、ただ単に洞窟探検がしたかっただけなんじゃねーのか？）

いまさらながらに、思う。

とりあえず、擬装用のバンダナと小枝をマイマイに返し、俺たちは探索を開始することにした。

「蒼き双月の欠片　テロツツ・フィーンスターっ！」
ぴっかーっ、と、周囲がとても明るくなった。

「ほう。これは便利だな」

「でしょ、でしょ？　あたし、がんばって覚えたんだからっ」
えっへんと胸をはる、マイマイ。
それはいいのだが、

「なあ……ここ、実はすんげー広くないか？」

「なんか、おつきな宮殿の大広間みたいだね」

「そうか？」

まあ、たしかに大きさから言うとそんな感じだが。

「うん。だって、ほら、天井を見てよ」

言われて見上げると、そこには俺たちが落ちてきたのとはちがう宝石虫の巣がいくつも、ぴかぴか輝いている。

「ね、シャンデリアみたいでしょ？」

「うーん……まあ、そう見えなくもないか」

というか、こんなに穴だらけだったのか。この草原。

「おい、周囲に注意しろよ」

「なんで？」

「明かりを灯した、ということとは、我々の位置を他の生物に知らせる効果も持っているからな。奇襲が恐い。」

この洞穴の主が人間に敵対的なものである可能性は低くない。警戒する理由は十分にある」

「了解。ともかく、なるべく人間同士の間を空けないように、固まって、ゆっくりと進むことに」

『ねーねーライ、こっちのほうに道が広がってるよー？』

「あーちよっと待　え？」

気が付くと、明かりがずいぶん細くなっていた。

そして、マイマイがいなかった。
さらには、

『うきやあああああああああつ？ な、なにこれえ？』

「……………」

「……………」

「なあ。あいつ、見捨てたらダメかな」

「明かりがなくなるからな。ダメだ」

「……………だな」

ため息をついて、俺たちは明かりの方向に向かっていった。

「すつごおおおいつ」

「なにがだ」

「ごん。」

「いたたつ、なにするのよっ」

「ひとりで勝手に動くなつての。危ないだろ？」

頭を押さえる彼女に言つて、それから俺はあたりを見回した。

「……………」

「なんだ、こりゃ」

「んとね、がいこつ山」

「いや、それは見ればわかるんだが」

問題は、なんでこんなところに骸骨があるのか、ということなんだが。

「人間のものだけではないな」

「そうなのか？」

「見た限り、狗の類か　もしくは、それ以外のなにかかもしれん
言われてみれば、たしかに人間の体格とはちがう骨も多かった。

「大型肉食獣の巣かなにかか、これ？」

「わからん。が、どちらにしても不自然だな」

「なんで？」

「人間が寄り付くような場所じゃない。ここに人間の骨が散らかっているのは、いかにも不自然だ」

「……それもそうか」

ざっと数えてみると、人間の骨は全部で数体くらいしかなかった。

「まあ、偶然迷い込んだ人間、と解釈できなくもないけどなあ」

「否定はできん。が、どちらにしても危険であることには変わりはないな」

「ねーねー、こっちに変な石版があるよ」

「ああ、そうか　　って、だからひとり勝ちに動き回るんじゃないか
えっ!」

「えー、そんなのつまんない」

「……しまいにゃシメるぞ、てめえ」

「風化が激しくて読みにくいが見たところ、ここに彫られている字は神聖文字ルーンの類だな」

言って、サフィートは石版を手にとると、

「いちおう聞いておくが、貴様、ルーンは読めるか?」

「いや、ルーンどころかふつ々の文字でもさっぱり読めないけど」

「そうか。困ったな」

「あんたは読めないのか?　いちおう神官補だろ?」

「む、無茶を言うな。いくら神官補とて、専門家でもないのにルーンなどが読めるわけがなかるう」

「そうなのか?」

俺は、てつきり神官とかならだれでも読めるものなのかと思っていたが、違ったらしい。

「ルーンは、読み書きするだけで神力が宿るからね。」

あぶなくてふつ々のひとは使えないし……読み書きできるひとだつて、そうそういないと思うよ」

マイマイが、苦笑しながらフォローした。

「そっか。うーん、せつかく手がかりが見つかったのに、惜しいな」
石版を見ながら、ため息をつく。

と、マイマイが、ちょっと首をかしげながら、

「直接、読めるわけじゃないけど　ちょっと、これ貸して」

「どうした？」

「ルーンには神力が宿っているから。それを魔法でたどっていけば、なにが言いたいかくらいはわかるかもしれないの」

「ほほう、そんなことができるのか」

「はじめてやってみることだから、うまくできるかわからないけど　やってみる価値はあると思う」

「そうだな。じゃ、頼む」

言って、俺はマイマイに石版を手渡した。

彼女は石版を地面に置くと、その表面に手をかざして目をつぶった。

やがてマイマイの口から、ゆっくりと言葉がつむぎ出されはじめた。

「……シジンの……出口は崖のむこうがわ……北の王の……えーつと……あ、あとは……」

……だめ。これくらいしか読めない」

ふう、とマイマイはため息をついた。

「思ったよりは収穫が大きかったな」

「崖のむこうがわに出口があることはわかったからね。この石版、たぶん地図かなにかだったんだよ」

「地図？」

「うん。場所の情報がいくつも書いてあるみたいなかんじだった。

はつきり神力がのこっていたのはひとつだけだったけどね」

「しかし……困ったな。崖がどこにあるかがわからない以上、出口の情報も現時点では価値を持たん」

「いちおう、もうひとつだけ、方向を指し示す言葉があったよな」

「北の王、か？　ふむ、たしかに、現時点で存在する唯一の手がかりではあるな」

「いちおう、磁石は持ってきといたよ。あっちが北のほう」

指し示す先には、またも、先へと続く通路が見えた。

「決まりだな。マイマイ、今度は勝手に動くなよ」

「うー、わかったよ」

言いながら、俺たちはそこを歩み去った。

からころからころりんっ。

骨の動く、軽妙な音がした。

「で、なんでこっちに崖があるんだ？」

「私を知るか」

崖。

まさしく、それは巨大な崖だった。

あまりに巨大すぎて、崖の底にはマイマイの魔法の光も届かない。崖をはさんだ反対側を見ると、そこにも同じような断崖絶壁があつて、ちよつど同じくらしいの高さのところ通路が口を開けていた。どつちかというと、崖よりは谷と言つたほうが適切かもしれない。そんな場所。

「なんで、北に行ったのに崖が現れるんだ？ 崖は帰る方向だったんじゃないのか？」

「だから私を知るかと言っているだろっ」

……いや、そんな無意味に偉そうに言わんでも。

「まあ、いーじゃん。どつちにしても、この崖を渡れば出口にいけ

るんでしょ？ 退路は確保できたんだから、それでいいじゃない」

「そうとも限らん」

「ほえ？ として？」

「もともと石版は崖の向こうにあったのかもしれない。崖がふたつあるかもしれない。あるいは、石版自体がでたらめであるかもしれない。誤読の可能性もある。」

つまりは、石版の情報はあつてなきが如きものだ。参考にする程度ならともかく、最初から当てにすれば馬鹿を見るぞ」

「まあ、どのみちこれじゃあ、崖の向こう側に行くこと自体、無理だしなあ」

あたりを見回してみるが、安全に崖の下に降りられそうな場所や、崖の向こうに渡れる場所があるわけでもない。

ジャンプして渡るにも、対岸までの距離が遠すぎる。世界一の幅跳びの達人が挑戦して、半分飛べるか飛べないか、というレベルだ。降りるのも渡るのも無理。となると、引き返すしか方法はない。が、そこでマイマイが勢いよく手を上げた。

「はい、はい！ ライ、あたしい方法持つてるよ！」

「ん？」

「ちょうど、こーゆーときにうつつつけの魔法があるの！ ちよつと待っててね」

マイマイは両手を前にかざして、ぶつぶつと不思議な呪文を唱えはじめた。

「疑わしきはそれが疑わしきことを疑い、ありえざるはありえざることを知る賢者に、祝福の道は招かれる。」

世界を囲む虹の橋　　マールズ・カードルスター！」

ぴかーっ、と、彼女を七色の光が取り囲む。

「おおっ！？」

「さあ　出でよ、レインボー・ロード架空の橋！」

ばしゅーっ！

光が四散し、そして

「……なにも起こらないんだけど」

あいつも変わらず、目の前には巨大な崖が広がっていた。

が、マイマイは胸を張って、

「ちゃんとあるよ、橋。ライが信じてないから見えないんだよ」

「いや、そんなこと言われても」

「ほらほら」

ひょいっ、と、マイマイは空中に足を乗り出した。

「ばっ………!!」

「渡りまーす」

てくてくてくてこ。

あっさり、と、マイマイは対岸まで歩いて行ってしまった。

「えーっと………」

「ね、橋があつたでしょ？」

「いや……俺の目には、おまえが宙を浮いていったように見えただけだ」

救いを求めるようにサフィートのほうを見る。

彼もやはり俺とおなじように、信じがたいという顔をしてマイマイを見つめていた。

が、マイマイは平然と言った。

「もう、なに言ってるの？ちゃんと、橋が見えるでしょ？」

「いや、その」

「ほら、よく目をこらして見てみてよ。橋がないなんて、ぜったい思わないんだから」

言われて、俺はマイマイが飛んでいった空間を、しげしげと凝視し

「おっ？」

うつすらと、それが見えてきた。

「なんか 立派な橋だな。頑丈そうだ」

「でしょ？ がんばって作ったんだから」

「うむ。私にも見えてきたぞ」

「どんどん、橋のビジョンが鮮明になっていく。

絶対に落ちようがなさそうな、頑強で立派な石造りの橋だった。

「すっげー……こんなものを即席で作れるのか、魔法って」

「感心する。今度、やりかたを教えてください。」

「ほら、早く渡っておいでよ」

「あ、ああ」

「うむ。そうだな」

「答えて、俺たちは一歩前へ踏み出そうとして、

「あ、その橋、渡っているひとが存在を信じつづけてないと消滅するから、疑ったりしたらだめだよ」

「……………」

「……………」

結局、無難にさっきまで来た道をもどることにした。

「なんであたしのつくった橋を渡ってくれないのよつ。魔法の使い損じゃないっ」

「やかましい。あんな心臓に悪そうな橋、誰が渡るかつ」

「まったくだ。だいたい、ちょっと精神が不安定だとすぐ落ちるよ
うな橋が、実用に使えるはずがなかるう」

「うー、せっかく苦労しておぼえた術なのに」

「しっ、静かに」

「なんか、音が聞こえたような気がした。」

「から……」

（骨 か？ 風で飛ばされた音、とか？）

ともかく、ちょっとした音だけでは状況を判別しようもない。俺は耳を澄まして、

「ちよつとライ、なに勝手にひとりの世界に浸ってんのよつ。だいたいなんであたしが」

「だーっ、いいからちよつと静かにしてろっ!」

「おい! なにか来るぞ!」

からからからころからころ

音を立てながら、それらは俺たちの前に姿を現した。

「げ!?!」

それは、骨だった。

人間のもあれば、そうでないのものもある。ともかく、なんらかの生物の骨であることはまちがいない。

それらが、からころと音を立てながら、こちらに向かって動いて来ていた。

「な、なんだありや!?! さっきの広間の骸骨なのか!?!」

「ゼンマイドクロ! 魔物だよっ」

「おお、神よ! 我々を守りたまえ!」

「っておいこらおっさん、いきなり神頼みに逃げてるんじゃねー!」

「やかましい! 私はただの神官補だ! 神官補に神頼み以外のなにができる!?!」

「威張って言うことかよ!?!」

「く、来るよ! あー、も、もうだめだあっ」

「こらマイマイ、てめーもさっさとあきらめてんじやねーよ! 魔人だろ!?!」

「だ、だって、あたし戦闘はからっきしだし……」

泣きそうな顔で、マイマイ。

……要するに。

(この場にいる人間で戦力として数えられるのは 俺だけ?)
考える間にも、なんとかドクロとやらはどんどん間合いを詰めてきつつある。

迷っている時間はなさそうだった。

「ええい、わかったよ！ 俺が戦えばいいんだろーが！？」
叫びながら、俺は剣を抜き放った。

剣から、ばしゅうううっ、とすごい光が吹き出す。

それを見て取った（目はないけど）ドクロたちは、近づいてくる足を止め、威嚇するように歯をかちかちと鳴らし始めた。

「へっ……見かけ倒しの骸骨野郎どもがっ」

一歩、じやりっ、と踏み出す。

ドクロたちが気圧されたように一歩、退いた。

俺は、剣をシンに教えてもらった型に構えると、

「かかって来い、この化け物ども！ 強きをくじき弱きを助ける世紀の大悪党、ライナー・クラックフィールド様が相手」

ぐきよめりいっ！

致命的な痛みが、全身に走った。

（あ、あれ？）

すっかり忘れていたが、昼間は思いっきりハードトレーニングだったわけ。

つまり、筋肉痛で全身激痛なわけ。

というか、剣を振るのも一苦労って感じなわけ。

（や、やばっ……）

後悔するが、すでに遅かった。

『かちかちかちかちかちかちかちかちかちかち』

おたけびだかなんだかわからない音を立てながら、ドクロたちが襲い掛かってくる。

「え、ええい、こうなりやヤケだ！ やってやるぜ、こんちくしよ
おおおおおおおおおっ！」

全身を走る激痛に歯を食いしばって耐えながら、俺は骸骨の群れに突進していった。

「ていりやああああああああああっ！」

『かちかちかちかちかちかちかちかちかちかち』

ちゃかちゃか、ちゃんちゃん。

競り合いは続く。

どことなく動きのぎこちない小僧の攻撃を、骸骨たちが、これまた不気味な動きでよけたり、受けたり、飛んだり、跳ねたり。

緊迫した戦闘　のはずのだが、どことなく安物の喜劇をほうふつとさせる。

（ふん、大根役者だな）

「あわっ、ちよ、まっ、まてってばっ」

足をすべらせて転んだ小僧が、骸骨たちの袋だたきの輪からかろうじて転がり出てくる。

思わず手をたたこうとして、かろうじて思いとどまった。ここは劇場ではない。

（これで私が当事者でなければ、よい娯楽だと達観していただけるのだがな　ふん、面白くもない）

騒ぎの元凶の娘を見る。

彼女はサフィートの様子など気にとめることもなく、戦いの様子に見入っていた。

「あの小僧、見た目はヘタレだが意外とまともに戦えるものだな」

とりあえず、軽く話を振ってみる。

「……カツコイイ……」

うっとりした表情で、娘は言った。

（……………）
聞かなかったことにしよう）

最近の若い娘の感性にはついていけん、などと、ベタな感想を思いつく。

とりあえず、この状況ならばこいつらを見捨てて逃げる必要はなさそうだ。そう判断し、サフィートは地面に座って観戦モードに入った。

「も、燃えた……燃え尽きたぜ……へへっ」
ぱったり。

すべてのガイコツを壊し尽くし、俺はその場に倒れこんだ。

「ライ兄ちゃんっ」
ばたばたぱたっ。

「と、とどめをさしにきたのか？」

「そ、そんなわけないでしょっ。だいじょーぶ？」

「だ、だめだつて言ったら埋める気か？」

「だ、だからそんなことするわけないってばあ！」

「うっ、ちくしょう……もう、反撃するだけの力が残ってない……」

す、好きにしゃがめ、このやろっつ」

「んもう、ひとぎきのわるいことばかり言わないでよっ。」

それより、ホントにだいじょーぶなの？ ケガとかしなかった？」

「……………」
ええつと……

「偽者か？」

「だからなんでそうなるのよっ。もう、ライ兄ちゃんなんて知らないっ」

「いや、だつてそもそも、おまえ『ライ兄ちゃん』なんて呼び方しなかったはずだろ」

「この呼びかた、きらい？」

「……まあ、べつにいいけど」

態度がいきなり変わったのは気持ち悪いが、まあなにか企んでるわけでもなさそうだし。

「それで、ほんとにだいじょーぶ？」

「あ、ああ　まあ、なんとかな」

ぎしぎしときしむ異様な感覚をむりやり無視して、俺は立ち上がった。

(ぐああっ、やっぱり痛いっ)

さすがに、もういちどあれと戦えと言われたら、つつしんで辞退させて頂きたい感じだった。

「よかったあ……」

「小僧、ちよつと見せてみる」

サフィートはそう言っつて、いきなり俺の手をつかんでぶんぶんと振り回した。

「~~~~~!」

「やはりな。どつりで、動きがぎこちなく見えたわけだ。筋肉痛の類か？」

こくこくと、涙目でうなづく。

(な、なんて乱暴な奴だ……)

「ちよつとあんた！　ライ兄ちゃんになにするのよ！」

「少し黙っている」

言つと、彼は手のひらを俺の方に向け、

「身体を司る神ライアス・ツォイアノイの御力にて、汝が苦痛を取り除かん。　そら！」

ぱしゅっ、という音とともに、俺の身体に不思議な光が吸い込まれていった。

「秘儀^{ミラクル}、か？」

「うむ。大治癒《major healing》だ。多少は動きやすくなつたらう」

言われてみれば、あいかわらず全身がちよつと痛いものの、さっきほどはひどくない。

「あんだ、こーゆーことやらせるとまるで本物の神官補みたいだな」
「みたいもなにも、私は真正正銘の神官補だっ！」

こほん、と咳ばらいをひとつ。

「しかし……どこから湧いてきたのだ、こやつらは？」

「んとね、たぶん、さっきとおった部屋だと思っの」

「なに？」

「ゼンマイドクロって、どーくつのいりぐち近くにある特定の場所をとおったひとにおそいかかるって習性があるから。」

ほら、わたしたち、いりぐちのほうからは来なかつたじゃない？

だから、最初にはいったときにはうごかなかつたんだよ。

で、崖のほうにいく途中にその『特定の場所』があつて、そこをとおったあたしたちにおそいかかってきたんだよ、きつと

「待て。てことはやっぱり、入り口は崖の向こうにあるってことか

「？」

「たぶんね」

つまり、あの崖を通らないと、出口にはたどり着けない、ということだった。

「やっぱり、あそこ通るしかないのか……」

「まあ、待て。ひよつとしたら、奥にもうひとつくらい出口があるかもしれない。

それに、財宝があるとしたら、奥のほうだ。まずは奥を探索してから考えようではないか」

「財宝って……さつき、自分で『ない』って言っていたじゃん」

「夢のない若造だな。そんなことでは出世できんぞ？」

「年寄りの万年神官補に言われたくないせりふだな、おい」

「言ってくれるな、クソガキ」

「へっへっへっへっへ」

「ふっふっふっふっふ」

「ま、まあまあ、ふたりとも。けんかはしないで、なかよく進もう

よ。ね？」

「そうです。けんかはいけないのです。平和が一番です」

「そうそう。へーわがいちばん え？」

声は、足元から聞こえてきていた。

「平和になれば、おいらもやられなくて済むのです。平和ばんざいっ、最高！」

「ど、どわああああああっ!? な、なんだこいつ!?」

「ご、ご、く、くるし、ど、どさくさにまぎれて首を絞めるな小僧っ!?」

聞こえてきた雑音はとりあえず無視し、俺はそいつに向き直った。

「ええと あの、その、なんでしよう？」

おどおどしながら、その声の主は言った。

「おまえ、だれだ？」

「やだなあバルメイスさま、グリートフフフに決まってるじゃございませんか」

グリートフフフ、と名乗るへんなのは、そう言っただけと深々とおじぎをした。

「え、ええと、ばるめいす? って……」

「狂える戦神、だっけ? 神さまだよ、たしか」

「そ、そうなのか? おっさん あ
ぶくぶくぶくぶく。」

口から泡を吹きながら、サフィートは失神していた。

「まったく……最近の若造は乱暴でいかん」

「いやあ、びっくりしたもんで、つい」

「びっくりしただけで絞め殺されてはたまらんわ馬鹿者っ!」
俺もそう思う。

「ば、バルメイスさま、この怖い旦那はどなたさまなのでございませるか?」

「だから妖精、貴様もなぜこんなちんちくりんをバルメイス神と誤

認する！？ どうみても人間だろうが、馬鹿者！」

「え？ そんなはずありませんよ旦那。人間にバルメイスさまの剣が抜けるわけないじゃございませんか」

……はあ。

「この剣の持ち主、バルメイスって言ったのか」

「貴様もその程度の感想で片をつけるな！ バルメイス神だぞ！？」

ウルスラグナ
「十三闘神のおひとりだぞ！？」

「有名なのか？」

「もついい小僧。貴様が神話の常識に疎いということはよくわかった」

頭をかかえながら、サフィート。

「んなこと言われたってな……」

「ねえねえ、グリートくんはバルメイスの使い魔なの？」

「いえ、おいらの主人はベルフェンリーゴーさまです。ただ、バルメイスさまとは何度かご縁がございました」

「あ、その名前は知ってる」

たしか、冬の守り神だったはず。

故郷の街でも、ベルフェンリーゴーの神殿は冬になるとぴかぴかに飾り付けされるので、けっこう有名だった。

「そうか、それで『北の王』か」

「あの石版の文句か？」

「うむ。彼は北の方位と、安らかなる死を司る神だからな。彼の祭殿だったのか、ここは？」

「ちがいますよ旦那。ここは祭殿じゃなくて、要塞です」

ぴくり、と、サフィートの眉が動いた。

「要塞？」

「はい。要塞です」

なぜか胸を張って、グリート777は言った。

「あ、今、ちょっとだけびっくりしましたね？」

「要塞と言つと、巨人の軍勢と戦うための施設か？」

「へえ、そーです。この草原、竜を恐れているんな生物が穴を掘ってまして、それを改造して作ったんです。

んで、このおいらが、このシジン要塞の管理人、グリート777なんですからよ」

えっへんと、さらに胸を張る。

「けど、要塞にしちゃ、ずいぶんと簡素だな」

言うと、グリート777はいきなりしよげた顔をした。

「それが、そのう……全戦力、使い果たしちゃったんですよ。あの、崖の下の奴らと戦って」

「崖の下？」

「あれ、知らなかったんですか？ あの崖の下、巨人の攻撃拠点があるんですよ」

「もつとも、全戦力をぶつけて連絡通路を破壊したから、もうあそこには未起動の戦闘人形くらいしか残ってないですけどね。」

おかげで、こっちまですっからかんで、困ってたところなんですよ。もうおいらしかこの要塞にはいませんし」

「そうすると、もはやこの要塞を守る者はだれもないのか？」
「たずねると、グリート777は待つてましたとばかりに顔を輝かせた。」

「いえいえ、それがそうでもないんですよ！」

「ほう？ だれかいるのか？」

「へえ。じつはしばらく前に、侵入者を勝手に撃退してください、ありがとうございますお骨を拾いまして。」

それで、それを大広間に配置して以来、要塞荒らしがぴたと止まりましたのです。ああ、ありがたやありがたや」

「馬鹿者おーっ！」

「わーっ!？」

すごい大声に、思わずグリート777は飛びずさった。

「貴様、神に仕える者でありながら、魔物を戦闘用に使うとは何事

かっ!」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
いっ!」

「謝って済むことかーっ!」

「……べつにいいじゃん。便利だし」

「よくないわっ! だいたい、貴様だってあの骨には迷惑しただろ
うが!」

「ええっ!?! あの骨、バルメイスさまに襲いかかったんでござい
ますか!?!」

いや、驚かれても。

「まあ、弱かったから普通に撃退したけどな」

「そ、そんな……も、もうしわけございせんっ」

「いや、まあ、べつに謝らんでも……過ぎたことだし」

言つと、グリート777は尊敬のまなざしで俺を見た。

「な、なんだよ」

「バルメイスさま、一段とお人が大きくなりましたねえ……昔は、
よく失敗をなじられたりしたものです」

「そ、そうだったのか?」

「ええ。一度、30回くらい殺しては直し、殺しては直し　を繰
り返されたときは、さすがに気が狂うかと思いましたよ」

「……わーお」

神ならではの、スペシャルないじめ方だった。

「ライ兄ちゃん、陰険だったんだね」

「いや、やったの俺じゃないし」

「しっ」

言つて、サファイアは俺の口の前に手を当てた。

「?」

「グリート777、耳をふさげ」

「へ? 耳……ですか?」

「そうだ。これからバルメイス神と私は極秘の相談に入る。なにが

あつても聞くな。聞いたらその場で斬首だ。よいな？」

「は、はいっ！」

がくがく震えながら、グリートフフフは耳に手を当てて後ろを向いた。

そのまま、ぶつぶつと呪文のように、

「何も聞いてない何も聞いてない何も聞いてない何も聞いてない何も聞いてない何も……」

「なあ、ちょっとかわいそうじゃないか、あれ？」

「かまわん。聞かれては不都合だからな」

言つて、サファイートはズいと身を乗り出してきた。

「いいか小僧。今から貴様はバルメイス神になりませ」

「は？」

「神の時代の要塞だぞ？ それこそ宝物が隠されていてもなんの不思議もない場所だ。そう思わんかね？

貴様がバルメイス神である限り、この妖精は絶対に言うことを聞くはずだ。こいつに宝物庫まで案内してもらおう」

「サファイート、あつたまいいっ」

「ふふん、当然だ」

鼻高々で、サファイートは得意がる。

……なぜか、それを見て微妙に不安になったが、

「まあいいか。じゃ、それでいこう」

言つて、俺はグリートフフフの肩をぽん、とたたいた。

「ぎゃあああああああああああああああああああつ！？」

「おい、もういいぞ」

「……って、お、おいらはなんにも聞いてないですよ！？」

「いや、だから……」

「な、なにかお気に召さないことも！？」

「……………」

「ぺちっ。」

「あいたっ」

でこぴんをして、俺はグリートフフフに言った。

「気が晴れた」

「へ？」

「もういい。リラックスしていいぞ」

きよとん、とした目で、グリートフフフは俺を見つめている。

俺は、こほんと咳ばらいをしてから、

「グリート、宝物庫に案内してくれないか？」

と、言った。

で。

「ここが宝物庫でございますっ」

やたらはきはきした調子で、グリートフフフは言った。

「おお、これは……」

「ぴっかぴか〜！ いやほーいっ」

たしかに、部屋のなかはみごとな金ぴかだった。

部屋一面に散乱した杯やら王冠やら石ころやら、それらすべてが

黄金色の光を放っている。

なんとも豪華な光景だった。

「いや、見事見事！ あっばれだぞ、グリートフフフ！」

「すっごーいっ。これだけあれば、何年でも暮らしていけるよっ」

はしゃぐふたり。

が、しかし。

俺はため息をついた。

「なあ、グリート」

「はい？」

「これ、ぜんぶおまえがメッキしたのか？」

びたり。

歓声がやんだ。

「あ、わかりました？ そうです、これがおいらの自慢のコレクション

る。世の摂理だねえ」

「ライ兄ちゃん、あきらめがいいね」

「まあな。大悪党は引き際が肝心だって、誰かが言ってたし」

「大悪党……かっこいい……」

「ええい、なにを楽しげに歓談しているのだ貴様らは！ これは最悪の事態だぞ！？」

「まあまあ、しょうがないじゃん。運が悪かったと思ってあきらめなよ、おっさん」

俺はそう言っただけでサフィートをなだめ

その瞬間だった。

すごい音が、洞窟内に響きわたった。

「こ、これは！？」

「どうした？」

「し、襲撃の警報です！ 下の連中が動き始めたんです！」

「へ？」

下の連中 というと、巨人の施設から、敵が襲いかかってきた、ということだろうか。

「ああっ、もうだめだあ！ おしまいだあ！」

「まてまてまて、事情が飲み込めんぞ」

「敵の戦闘人形がうちの施設に侵入しはじめたんです！ た、たぶん、バルメイスさまの神力に反応して、動き始めたんじゃないっ！」

「お、おれのせいなのか？」

「責任とってちゃんと撃退してやれ小僧。我々は逃げるかな」

「がんばってね、ライ兄ちゃん」

「……コラ」

まあ、どつちにしろ戦力が俺ひとりなのはまちがいないんだが。

が、

「い、いけません、バルメイスさま！ あれと戦ってはなりません

！」

「え？」

「いかにバルメイヌさまといえども、あの戦闘人形たちとひとりで戦うのは無茶です！ お逃げください！」

「そ、そんなに強いのか？」

「う、うわさでは、その腕の一振りには山河の形を変え、城砦をも吹き飛ばし、森を荒野へと変える力を持つ、と」

「……おいおい」

さすがにそこまで行くとうさんくさい感じがしたが、ともかくヤバイ相手であることだけは理解できた。

「裏の出口にご案内いたします！ そこからお逃げくださいっ！」

「そうか。じゃあとつとと逃げ　おい、おっさん？」

サフィートは、金ぴかの山のなかに手を突っ込んでいろいろと物色しながら、

「ひとつぐらい本物があってもバチは当たらぬとは思わんかね、小僧？」

「もういい。おまえはそこで一生暮らしてる」

「じよ、冗談だっ！ 真に受けるな馬鹿者！」

あわてて金ぴかの塊を放り捨ててこっちに向かってくるサフィートをしながら、俺はため息をついた。

（なんで、こんなビタ一文儲からないバカな探索に加わってしまったんだろうか、俺は？）

「だっしゅつげき、だっしゅつげき！　わくわく、わくわく」

「……………」

ぼかつ。

「あいたっ」

二日目・3：決戦！ 草原の覇者

なんとなく目が覚めた。

「んんー……サリ、かわいい……むにゃむにゃ」

「……センエイ、重い」

「にゅ？」

いつのまにか上に覆いかぶさっていたセンエイが、目をこすりながら起きる。

「あれ、サリ？」

寝ぼけている彼女を押しつけて立ち上がり、横に置いてあったマントをすばやくまとつ。

「眠れないから、散歩に行ってくる」

「ついていつちゃ、ダメ？」

「だめ」

きっぱり答えて、わたしはさっさと歩きだした。

うしろでなにかわめき声みたいなのが聞こえるが、無視。

足は自然と、昼間にライと会った丘のほうに向かっていた。

（もつとも、それ以外に行ける場所もないけど）

あまり遠出するのは散歩の趣旨に合わないし、危険だ。

歩きながら空を見上げる。そこには満天の星明かりが、大地を照らしていた。

星の天蓋。

世界と世界でないものを隔てる壁だ。

（気分、悪い）

目をそらす。

……正直。星は苦手だ。否応なしにべつの光景を思い出す。

それは最果ての破壊。幾多の生命が消え去っていく、その最後の数瞬。

それを　綺麗だ、と思ってしまう自分が、どうしても不愉快

で。

(思えばあの時から、わたしは止まったまま)
不愉快で不愉快で、最後を否定することしかできず。

だから、 見かけた『最後』を、 けして実現させないことで自分を保つ。

それは、たとえば昨日みたいに。

(ライ ナイナー・クラックフィールド)

奇妙な少年だった。

自分が介入しなければ間違ひなく絶命していたであろう彼は、 ちよつとした介入によつて予想外の運を引き寄せ、 変な運命に巻き込まれてしまった。

それは自業自得で、 けしてこちらのせいではないのだけれど。

(少し不安。 彼は、このあとどうする気なのだろう)

などと思つてしまうから、 ついつい介入を続けてしまうのだった。 考えてみれば、 あの少年もだいぶ変な人間だ。

なによりまず、 自分を怖がらない。

大抵の人間は、 自分のまとう雰囲気や眼帯などを怖がって近寄ろうともしないのだが、 彼は度を超して馴れ馴れしいので、 かえつてこちらがとまどつてしまう。

無神経、 というふうにも見えないのだが……

(どうなのかしらね。 あるいは、 極限まで怖がらせてみたら態度も変わるのだろうけど)

それはそれで、 なんだかもつたいない気もする。

軽く頭を振る。

ちよつと注意を散らせすぎだ。 どうもここ一日、 調子が狂いつぱなしの気がする。

ため息をついて、 すぐその木に寄りかかり、 深呼吸をした。

どくん、どくん、と、 心臓が脈動する。

おかしい。

さつきから、 情動をつまぐ制御できていない。

(!?)
まずい。

これは、発作の予兆だ。
全身を怖気が走る。

たとえるなら、足が攣る直前に感じるいやな予感を、数十倍に引き延ばしたような感覚。

とつさに心のなかを探る。なにかおかしなことはないか。相手に呑まれた部分はどこなのか。

それを意識した瞬間、最初の波が来た。

「あ……っ」

かくん、と膝が折れる。

存在しているという、基本的な感覚すらない。まるで、身体が他人のものになってしまったみたいな感触。
腕を地面について、四つんばいになる。

「あ、ぐっ」

(だめ、このままじゃ打ち負ける)

《敵》の攻撃を見定めようと、意識を心のなかに集中する。

そこに、ふたつめの波が来た。

「が」

吐いた。

致命的な瘴気に内臓を掻き乱され、考える間すらなく吐瀉物を撒き散らす。

抵抗することすらできない、圧倒的な嫌悪感。

三度目の波。

「か、ふ」

全身が痙攣する。

地面がどこだかわからない。まるでさかさまに空へ落ちていっているような錯覚。

耐えようとして、耐えられない。ああ向けに横の地面に倒れ込んだ。

思考が、まとまらない。

肉体的な発作に気を取られて、まともに考えることができない。四度目。

「あああああああああああ！」

左手。

左手だけに意識を集中する。

左の腰に刺さった短剣　その、魔を灼く聖光があれば、なんとかなるはずだった。

精神力を振り絞って、なんとか短剣の柄をにぎりしめる。

とたん、はじけるような痛みが全身を走った。

「が、ぐうっっ」
痛い。

身体中の神経が剥き出しになって、火で炙られているみたいだ。考える余裕も、時間もない。

だから　わたしは、かろうじて動いた左手で短剣を抜き、その刀身をにぎりつぶした。

じゅっ……という小さな音と、焼けるような痛み。

「ひ　ぎ、いーい」

ただでさえ痛覚過多になっているところに、そんなことをしたのだ。痛みは想像を絶していた。

重度の虫歯をハンマーで何度もがつんがつんとやられるようなたとえるなら、そんな感じ。

だけど、けして離さない。

心の奥で、二重の絶叫が響いて回る。

「ま、けな、い」

ヤメロ。

声が聞こえる。

同時に、左手の支配権を奪い取られる。

我慢して、さらにぐりぐりとねじ込んでいく。
やがていびつな形ではあったが、なんとか指がもとの場所にくっついた。

（あとは、再生するまで待てばいい）
ふと顔に手をやると、涙とよだれでべとべとだった。
それを乱暴に袖でぬぐう。

（これだけひどい発作は、ずいぶん久しぶり）
三半規管、痛覚、腕の支配権を奪われるほど追い詰められたのは、
たぶん8年ぶりくらいだろう。

「はあっ……………」

上半身を起こして、吐息。

そこでようやくやく、わたしはその気配に気がついた。

「誰？」

「あ、そのう……………」

気まずそうに木の間から出てきたのは、知った顔だった。
つい最近知り合った、旅の神官。なまえはなんて言ったっけ。た
しかリクサン　だめだ、うまく思い出せない。

「えっと……………大丈夫？　なんか、すごく苦しそうにしていたけど
わー！」

ぎょつとしたように叫んで、彼女はこちらに駆け寄ってきた。

「なにそれ！？　どうしたの！？　ひどい傷じゃない！」

「なんでもない」

「な、なんでもないって、でも、」

「放っておけばすぐ直る。なんでもない」

「と、ともかく手当てくらしいしないと」

「なんでもない」

「……………」

「なんでもない」

がしっ。

「あっ」

「なんでもなくないのっ！ ほら、思いっきりやけどしてるじゃない！」

「なんでもないのに……」

「ちよつと待ってなさい！ いま、ちゃんと治してあげるから！」
言って彼女はわたしの左腕に手を添え、詠唱を開始した。

「理気を司る神ザイタイ・マークフェンケルの御力にて、宣言する、
我は天に応ずる者」

「ま、」

「疑うは時の爪痕、隠したるは聖陰、行いは荒ぶる龍となりて日輪
を食らう」

「え？」

絶句。

（これは、治癒《healing》じゃない。はるかに上級の）

「力は光のごとく、炎が再生するように、生命は再帰する 来い、

回帰《temporal reincarnation》！」

ふわっ……と、やわらかな風が吹く。

同時に、左腕からあらゆる違和感が消滅していた。

「ふう。」

これで大丈夫かな。短時間に何度もかけられない術だから、今度からは気をつけてね？」

彼女はそう言っ額額の汗をぬぐった。

わたしは……そのとき、本気で混乱していた。

わけがわからない。

「なんで？」

「ふえ？ どーかした？」

「なぜ大秘儀メジャー・ミラクルを使ったの？」

たずねる。

相手は首をちよつとかしげて、

「普通の秘儀ミラクルでもよかったの？」

「よくはない けど」

どうして、あなたは。

「あなたは、なぜ、」

「だってその剣、神光を放ってるでしょ？ それを使ってやけどしたんなら、直接神力を使うタイプの治癒術とかはまずいんじゃないかな、って思ったんだけど。」

見当ちがいだった？」

剣。

わたしは、未だ鞘に収めていなかった短剣を見た。

柄の部分には輝くルーンで『月の光も届かぬ場所で戦いつづける君が、どうか癒されますように』と書かれている。

霊剣、『新月』。

敵にとつても、そしてわたしにとつても致命的な剣だ。

（要するに、あれを見られた時点で正体は露見していたということか）

吐息。

「正解」

「あ、そう？」

「わたしは、魔物とほぼおなじだから。ただの治癒術じゃ逆効果」

「あ、それじゃ、ひよっとして最初に傷を隠そうとしていたのは、まちがって治癒術をかけられる危険性があったから？」

「それは」

ちがう。

言おうとして、思いとどまる。

かわりに、わたしはぜんぜん関係ないことを言った。

「最近の神官は、魔物の傷も治すの？」

「へ？」

きよとん、と、相手はこちらを見返してきた。

「なにそれ？」

「もついちど言っけど、わたしは魔物とほぼおなじなのよ」

「ああ、それは、その……」

相手は、困ったようにぼりぼりと頬を掻いて、

「できれば、このことはみんなに秘密にしておいてくれる？」

「どうして？」

「そのう、なんか、このあたりの地方だと、あんまり魔物っぽいものと神官は関わっちゃいけないみたいで。」

だから、バレたら怒られるかも、って」

「バレなければ、いいの？」

「いや、そのう」

困ったように、笑って、

「はは、めんぼくない。神官失格だよな、これじゃ」

「でも、わたしは助かった」

相手は、きょとんとした顔でこっちを見ると、

「キミは、ライとおなじようなことを言うんだね。なんか、ふしぎ」

「そう」

ずきん、と、心が痛んだ。

(今は 出てくるな！)

心のなかで、ふたたび湧きあがろうとしたものを押さえ込む。

早めに意識した甲斐があったのか、それはひとつの意思になる前に拡散して霧消した。

彼女は、わたしの表情の変化を見てちょっとあわてたようだった。

「ね、ねえ、ホントに大丈夫？ ほかに、痛むところとか」

「大丈夫」

「……ホントに？」

「魔物とおなじように、わたしの身体は微弱な再生能力を持っている。だから、数日で怪我なんか跡形もなくなる。気にすることはない」

「そ、そーゆー問題なの？」

本当に問題なのは、身体の傷なんかじゃない。

が、わたしはそれを言うことはせず、べつのことを言った。

「……実際、それほど痛むところがあるわけじゃないから、たぶん

大丈夫だと思うけど」

相手はそれを聞いてようやく安心してくれたようだった。

「それなら、いいんだけど」

彼女がそう言った、その瞬間。

「あ」

視界が、真っ赤に染まった。

目が燃えているように熱い。

理解する。

これは、果ての光景。

わたしだけが認識する、変えなければならぬ未来のビジョン。それを認識しようと、わたしは光景の奥に意識を固定した。

「……………」

「……………ねえ、ちょっと、ちょっとってば！」

肩をゆすられていることに気が付いて、わたしは目を開けた。

どうやら、唐突に倒れこんでしまったらしい。

一挙動で地面から跳ね起きる。

「わあ!？」

「どのくらい経った？」

「え、は、ええ?」

「わたしが倒れてから、どのくらい時間が経った？」

「え、ええと、そんなに経ってないけれど……………」

しどろもどろになりながら、彼女は答える。

よかった。

手遅れ、ということには、どうやらなっていないようだった。

「ね、ねえ。もう一度聞くけど、大丈夫なの？」

「大丈夫。それより、もっと差し迫った危機に対処しないと」

「へ?」

わたしは神官のほうに向き直った。

「手伝ってほしい」

「な、なにを？」

言われて、一瞬だけ口ごもる。

けれど、あのビジョンがわたしの予測どおりのものなら、一刻も無駄にはできない。

だからわたしは、できるかぎり直截に要点を述べた。

「竜退治」

「っだあああああ！」

どんっ！ と相手の胸から射出された槍を飛んでかわし、そのまま体重を乗せて剣を振り下ろす。

ばきっ、ばきききき……！！

にぶい感覚とともに剣は人形の頭部にめり込み、その動きを停止させた。

これで7体。

「ちつくしょう！ きりがねえぞ、こいつら！」

「あああああ、もうだめだあっ！ やっぱりだめなんだああああ！」

「ええい、うるさあいつ！ ごちゃごちゃわめいてる暇があったらさっさと出口に案内しろ、グリート！」

泣きたい気持ちでどなる。

実際のところ、一体ごとの人形の強さはそれほどでもない。

背が低いから攻撃が低い場所に集中するし、体重を乗せて打ち付けられれば堅い装甲もなんとでもなる。

問題は数だった。

洞窟の奥から無数に聞こえてくる、がっしゃん、がっしゃんという音。

(ひょっとして、100体くらいいるんじゃないのか?)

さすがにそこまで多いと、全部倒しきる前に体力が尽きる。

さらにまずいのは、取り囲まれた際に背後を守れるやつがいないことだ。

(せめて、もうひとりくらい戦える奴がいればいいんだけど……)

まあ、ないものねだりしても仕方がない。こういうときはとつとと逃げるに限る。

「ライ兄ちゃん、こっちから風が吹いて来てるよっ!」

「よし、そっちだな! おっさん、グリート、さっさと走れっ!」

「う、うむっ!」

「は、はいいいいっ!」
走る。

必死で走る。

「こっち、こっちっ!」

先行したマイマイの声が響き、

「あ」

「ど、どうした?」

問うが、答えは返ってこない。

(そこはかたなく嫌な予感がするが、今はそんなことを考えている
余裕はないっ!)

力いっぱい走る。

そして。

マイマイとおなじ場所までたどり着いたとき、俺は思わずその場
にへたり込んだ。

「……………おーい」

「ど、どうしました、バルメイス様? って、え?」

裏の出口。

そこは大量の土砂で埋まり、とても通れる状況ではなかった。

いちおう天井に申しわけ程度の穴があって、そこから風が吹き込んで
きているが……通れるような大きさじゃない。

「土砂崩れ、か？」

「そのようだな。」

ふん、いったんケチがつくとどこまでも止まらないものらしい。「投げやりに、サフィートはつぶやいた。

「なぜ！？こ、この砦の壁には、風化避けの強化ルーンが幾重にも彫りこまれてあつたはずなのに！？」

「強化ルーンって……この、よく見ればルーンみたいにも見えるくぼみのこと？」

「そう！そう！というのが目立たないところにびっしりといっぱい」

「けどこのくぼみ、地底アリさんが巣を作ってるよ」

「え？」

あ、ほんとだ。

「まあ、そりや作ってから数千年もほつたらかしにしてたら、こんなことがあつてもおかしくないよな」

「はん、理由などに興味はないわ。問題は、いまここで我々がこの通路を通れないという事実、それだけだ。」

やってられるか、くそっ」

がつん、とサフィートが壁をけっ飛ばした。完全にさじをなげたらしい。

「で、どうするんだよ？」

「も、もうだめだあっ」

「……あきらめが早いな、おい」

まあ、打開策はなんにも思い浮かばないわけだが。

「たいへんだよっ、ライ兄ちゃん」

「なんだ？」

「うん。さっき、通った道に警備の魔法をこっそりかけておいたんだけど」

「だけど？」

「20体以上、いつせいに向かってきてるみたい。それも、まっす

ぐこつちに」

げげげっ。

「絶体絶命、か？」

「バルメイスさまっ」

「な、なんだよ」

「その剣のお力で、土砂をばーんっ、とふつとばしちゃってください！　そうすればもう万事解決っ！」

「い、いや、そんなこと言われても」

じーっ、と期待に満ちたまなざしで、グリートが俺を見る。

(ど、どうしよう。剣の力の使い方なんか知らないし　)

助けを請うように、ちらり、とサフィートの方を見る。

彼はうなずくと、軽く咳ばらいをしてから、

「グリート、バルメイス神はな、巨人の策略にかかって力の使い方を忘れさせられてしまったのだ」

「そ、そうなんでございますか!？」

「……ま、まあ、そんなかんじ。うん」

てゆうか、よくまあそこまで即興で自然なうそがつけるもんだとちよつと感心する。

「た、たしか、その剣は《力の集積》をイメージしながらご自分の真名まなを叫ばれることで力を解放する、と聞いた覚えが　」

「真名まな?　この場合、『バルメイス』でよいのかな？」

「よし、ちよつと待ってる」

俺は岩の前に立ち、ゆっくりと呼吸を整える。

「小僧、急げ!　もはや時間がないぞ!」

「わーってるって!　今、集中してんだから、ちよつと黙ってる!　剣を正眼に構える。」

その剣に、俺は意識を思いきり集中させた。

(力よ　集まれ!)

ぶうう、と、虫の羽音のような音とともに、剣の輝きが増した。

「おおっ!?!」

「今です！ 真名を叫んでくださいませ、バルメイスさま！」

「おっしやあつ！」

俺は、輝く剣を大きく振りかぶり、

「バルメイスの名において　てりやあつ！」
ざく。

「だめじゃん」

「こ、今度こそもうだめだあつ」

「ら、ライ兄ちゃん！　もう、すぐそこまで敵が来てるよ！」

たしかに、マイマイに言われるまでもなく、しゃかしゃかという耳ざわりな音がすぐ近くから聞こえてきていた。

「ええい、ちくしょう！　こうなったら戦うっきゃないか！」

後ろに向き直り、剣を正面に構えて、

「かかってこい、人形ども！　強きをくじき、弱きを助ける、この

ライナー・クラックフィールド様が相手　」

ぴかあああああつ！

剣が、いきなり光を増した。

「う、うええええつ！？」

あわててその場で立ち往生する。剣の光はますます強くなり
ばしゅっ！

ちゅどーんっ！　がらがらがら、ずどどどーんっ！

斜め上に飛んだ光が、天井を打ち崩して崩落させる。

あつという間に、俺たちと人形の間を土砂が埋め尽くし、見えなくなつた。

「え？」

硬直。

「おおっ！　でかしたぞ小僧！」

「やったー！　これでとりあえずは安心だねっ」

「た、助かったー！　いやはや、バルメイスさま、いつの間に真名まな

を「ご改名なされたのですか!？」

「いや、まあ……」

単に名乗ればいいだけかよ、おい。

いや、それよりもっと重大な問題がある。

(ノリで思わずやっちゃまったけど、実はこれってすげーやばいことだったんじゃないか?)

冷や汗を垂らしながら、思う。

「ほら、なにをぐずぐずしておる! さっさと目の前の土砂も吹き飛ばしてしまえ!」

「れつつごーだよ、ライ兄ちゃんっ」

「いやおい、ちょっと待ておまえら」

頭を抱えたい気持ちを抑えて、言う。

「? なんだ?」

「あのさ 俺たち、なにか忘れてないか?」

「というと?」

「たとえば、この洞窟の上の草原にナニが住んでいたか、とか……」

「……」

「……」

「はい? どうかしたんですか?」

「いや、まあ……手遅れっちゃ手遅れなんだが……」

くいおおおおおお……と、遠吠え。

「ら、ライ兄ちゃん、来るよおっ!」

「全員、伏せろー!」

俺の声とほとんど同時。

大爆発が起こった。

「間に合わなかった　！」
ち、と舌打ちを漏らす。

「わ、なに、なにが起きたの!？」

遠くから聞こえてきた大音響に動揺して、神官が足を止めた。

わたしも立ち止まる。どのみち、こうなってしまうては手遅れだ。
次の手を講じるしかない。

「弧竜が、地面に自分の身体をたたきつけたの」

「な、なにそれ!？」

「竜の肉体そのものを使った、圧迫攻撃」

竜族の攻撃方法として有名なのは吐息だが、実際には吐息はたいした脅威ではない。魔術でどうとでもなる。

一方、竜本来の肉体的なポテンシャルを使った攻撃は、見た目の地味さに反してかなり厄介だ。

特にその大質量を利用しての体当たりは比類なく強力で、ほとんどの防御魔法を打ち砕いて対象を圧殺する。防ぐ方法はとても少ない。
それを、年経た竜は知っている。

神官はまだ事情が飲み込めていないらしく、

「だ、だからなにを攻撃してるって……!」

「ライ」

「は?」

わたしは爆音の響いた先を見つめて、

「あそこにライがいる。それを見つけた竜が攻撃したの」

「な、なんであんなところにいるのよ、あの馬鹿は!？」

「それは知らない。けど、いまはそんなことを言っていられるほど悠長な状況じゃない」

ようやく、相手にも状況が飲み込めたようだった。

「ごくり、とのどが鳴る音が聞こえる。」

「わかった。それで、なにをすればいいの?」

「最初は、竜の注意を逸らしてごまかす方法を考えていたんだけど」
「けど?」

「間に合わなかった。こうなったら、本当に竜退治するしかないみたい」

「で、できるの？ そんなことが？」

「難しい」

「……………いや、そりゃそうだろうけど」

「でも不可能じゃない。」

あれほど年経た竜族を前準備なしで撃破するのは至難だけれど、材料は揃っている」

そう。

都合がいいことに。ああいう大魔獣を相手にするのが苦手なわたしは、珍しくそういうのが得意な連中と一緒にいるのだった。

「うまくやれば、一撃でカタがつく。うまくやれば、だけど」

「うまくいかなかったら？」

「そのときのために、あなたに頼むことがあるの」

「へ？ ぼ、ボク？」

こくん、とうなずく。

そして、わたしは作戦を説明した。

がぎぎぎっぎぎぎぎぎん！

「だあああああああ！」

泣きそうになりながら、襲い来る触手をたたき落とす、切り払い、撃退する。

幸いにも、相手が落ちてきたのは俺たちの直上ではなく、俺と人形達の真ん中あたりだった。

そのおかげで相手は人形どもも敵に回してしまい、その分こっちへの攻撃が減っているのはかろうじて救いなのだが、

「ぜ、ぜんぜん切れねーぞこの触手！」

「あたりまえだよっ！ 弧竜の打撃腕は、魔力で竜鱗とおなじかたさになってるんだからっ！」

マジかよおい。

と、竜が落ちてきてぽっかり空いた天井から誰かが顔を出した。

「いつまでそこにいるつもりだ、貴様ら！」

「お、おっさん！？ どうやってそっちに登ったんだよ！」

「ええい、貴様の目は節穴か！ 竜の身体を踏み台にすればこれしきの高さ、簡単に登れるだろうがっ！」

「す、すっごーいっ。目からウロコっ。おじさん、あつたまいいっ

言っちゃ否や、マイマイはさっさと竜の身体まで走って行って、ぴよんぴよんと踏んづけて地上に上がってしまった。

……意外と度胸あるな、あいつら。

「お、おいらはどうすれば!？」

「登ればいいんじゃないか？」

「そ、そんな恐ろしいこと、おいらにはとてもできやしませんよお！」

「……まあ、その意見は理解できなくもないんだが」

言いながら、俺はグリートの身体をむんずとひつつかむ。

「え？」

「マイマイ、準備はいいな？」

「おっけーだよ、ライ兄ちゃんっ」

「え、ええ？」

「よし、ぱーすっ！」

言っちゃ否や、グリートの身体を放り投げた。

「ああああそんなああああ……ぐえっ!？」

マイマイに首を抱えられ、グリートがカエルのような奇声を上げる。

「これでよし、っと。さて、後は俺だけなんだが……」

目の前を見る。

さんざん打ちのめしてやった触手だが、いまだにぜんぜん堪えた

という素振りを見せない。

「……ともかく、がんばって登るしかないか！」

腹を決めて、俺は態勢を整え、

「っだああああ！」

触手の攻撃をかくぐり、蹴りつけるような勢いで竜の背中を駆け上がる。

「それっ！」

ばしっ。くるくるくるっ、すたっ。

華麗に着地。

「ほお……」

「へえ……」

「な、なんだよ？」

「ライ兄ちゃんって、意外と身がかかるいんだね。びっくりしちゃった」

「……意外とつてなんだ、意外とつて」

これでも盗賊だぞ、失敬な。

「まあいい。ともかく、さっさと隊商の馬車まで逃げるぞっ！」

「りょーかいつ。あ、グリートくんはあたしの肩に乗っかっていいよ」

「あ、ありがとうございますっ」

「走るぞっ！」

草原を駆ける。

後ろを振り向くと、幸いにも弧竜はこっちを追ってくることはせず、人形たちにかかりつきりになっている。

（この分なら、なんとか逃げ出すことができそうだな）

そう思った瞬間、激烈にいやな予感がした。

同時に、弧竜たちのいる場所に、ぽっ、と赤い光が灯る。

「ら、ライ兄ちゃん、あいつ、吐息を吐こうとしてるよっ」

「おいおいおい！ まさか、あの至近距離で」

その、まさかみただった。

竜の口が真っ赤に赤熱し、人形達のいる方向に向けて吐き出される。

瞬間、大地が跳ねた。

『だあああああっ!?!』

すさまじい揺れに、全員がその場で転倒する。

「な、なにが起こった!?!」

「わかんない! 弧竜の吐息が爆発したのは確かだけど」

「爆発って……: 竜の吐息って、爆発するようなものなのか!?!」

「弧竜の場合はそう。でも、どっちにしてもこの揺れは変だよっ
そう。」

爆発が原因で起こった揺れであれば、こんなに長く続くわけはない。

だが、現実には地面の揺れは収まるどころか、次第に大きくなっていつているようにすら思える。

「ま、まさか……!」

「なんだ?」

「ひょっとして、いまの爆発の衝撃でシジン要塞が崩壊しているのでは……」

「げ!?!」

その予想を裏付けるように、周囲の地面がそこかしこから陥没しはじめた。

「まずい、みんなすぐに逃げろ! 崩壊に巻き込まれて転落するぞ!」

「無茶を言うなっ! そんなもの、無理に決まっておるだろうがっ!」

「ええい、無駄に偉そうに言うんじゃねえっ! くそ、なんとかする方法は……」

「みんな、あたしにつかまってっ。飛行の魔法使っからっ」

「うむ、よきにはからえ」

「って、ごらーっ! へんなところさわるなーっ」

「いいから早くしてくれっ」

言いながらぎゅっと手をにぎる。

と、なぜかマイマイは思いっきり顔を真っ赤にした。

「あ？ どうした？」

「な、なんでもないのっ。ともかく行くよっ」

あわてて叫んで、それから彼女は目を閉じて詠唱をはじめ。

「蠟仕掛けの羽根は星の世界を回り、月を背に運命を唱えん。

星界を渡る異邦よりの船 サイクル・バイヤースター！」

そして崩壊する地面を背に、俺たちは宙に浮き

べぎめしゃごりごりごりぐきよっ！

「きゅっ……」

「……なかなか豪快に着地失敗したな、おい」

「ぐ、ふっ……そういう、おまえはなんで……無事……」

「あいにくだが『頭から地面に突っ込んではいならない』ってのがク
ラックフィールド家の家訓なんぞな」

「か、家訓は……関係……な……ぐふう」

息を吐いて、それきりなにも言わなくなるサフィート。

軟弱な奴だ。そもそも、浮いているからって油断しているほうが
悪い。

どうも定員オーバー気味だと思って、墜落する前に体勢を整えて
おいた俺の勝ちだったな。ふっ。

と。

「ライ氏！」

いつのまにか、魔人たちがみんなすぐ近くに来ていた。

「どこに行ってたんだ！ みんな心配して ああ、いや、いまは

いい。それより、なにが起こってるのかわかるかい？」

「ああ。なんか、地下にあった洞窟が、弧竜が大暴れしたせいで崩
れだしたって」

きおおおおおおつ！

ちょうどそのとき、弧竜の吠える声が周囲に響き渡った。

「……あれだけ無茶やって無事なのかよ、あいつは」

てか、鼻先で自分の吐息が爆裂したはずなんだけど。

現実離れた光景だった。

崩壊し、地下へと崩れていく地面。その地面を見放した宝石虫たちがいっせいに飛び立ち、光の吹雪を現出させる。

その光景の奥、爆発の影響で真っ赤に燃え焦げる大地に、屹立した竜が吠え声を上げる。

その目が、ぎよろりとこちらを向いた。

(……………?)

いま、自分が立っている場所を確認する。

すでに街道と草原を分けるラインの内側に入っており、竜からは攻撃を受けないだろうという位置だ。

大丈夫。

大丈夫……の、はず、なんだけど。

「なんか、この世の終わりみてえな光景だな」

「見たこともないくせによく言うよ、ったく」

「るせえ、比喩だ比喩！」

「風情がありますねえ……………」

「なあ、なんかおかしくないか？」

漫才をやっている連中に向けて、たずねる。

「なにが？」

「なんであの竜、こっちのほうを見てるんだろっ？」

「あ？ そりゃあ……………」

「適度に運動して腹が減ったから、ここにいる我々をおいしく頂こうということではないですかね？」

「……………シャレになってないぞ、おっさん」

なんか絶妙に説得力があるし。
と。

「た、たたたた大変ですバルメイス様っ！」

「……そういや、おまえまだいたんだっけ、グリート」

さつき思いきり地面に激突してた気もしたが、意外と丈夫だったらしい。

コゴネルがその姿を見て、思いつきり眉をひそめた。

「おい、こいつは何者だ？」

「え？ ああ、妖精。さつきそこで拾ったんだ」

ひどくテキトーな説明をする。

「拾ったって、お前」

「へえ、人語を発音できる妖精とは珍しいな。どれどれ」

センエイが、ひょいっ、と後ろからグリートを抱え上げた。

「う、うわわああああっ！？ な、なにごとですかあ！？」

「ふむ、やはり古代に生まれた個体だな。現在のものとは微妙に身体構造が異なる」

つぶやいてから、きらきらした目でこちらを見て、

「時に、ライくん」

「ん？」

「これ、解剖していい？」

「ひ、ひああああああああっ！？」

じたばた暴れるグリートを押さえつけて、センエイはにやりと笑った。

「まあまあ、落ち着きたまえよ妖精くん」

「助けてたすけてたーすーけーてええええ！ 殺されるーっ！」

「はっはっは。なに、大丈夫さ。まったく痛くしないから。怖くない怖くない」

「……まあ、とりあえず痛くはならないよなあ。死ぬから」

「こらこらライくん、オチを先にばらさないでくれたまえ」

「いやああああああっ！ オチで殺されるのはいやああああああっ！」

至極もつともだ。

まあ、とりあえずこっちもいまグリートを殺されるわけにはいか

ない。

「センエイ、ちょっと返せ」

「ちえっ」

言って、あっさりセンエイはグリートを解放した。

……まあ、もとから本気じゃなかったんだろうけど。

「うわああああんっ！ ば、バルメイスさまあっ！」

「あー、いいからちょっと落ち着け。グリート、さっきなにを言いかけたんだ？」

泣きついてくるグリートをいさめながら、訊く。

「はっ！？ そ、そうでしたっ！ バルメイス様、大変なんですよっ！」

「なにが？」

「あ、そのう……実は、さっき崩れた要塞のなかに、対竜用の迷彩法陣っていうのが置かれておりまして……」

「迷彩？」

「周囲集落に迷惑をかけない、兼、要塞の門番代わりにするために、『草原の中しか見えない』ようにする呪いだっただんですけど……」

「……………」

俺は、もう一度さっきの竜のほうを見やった。

相手はあいかわらずさっきの場所に留まっている。

足元では例の触手がひっきりなしにひらめき、人形たちと激しく交戦中であるのがわかった。

だが、その目はあいかわらずこちらを見ている。

「見ている、ということ、見えているということだ。つまり。」

「要塞が崩れたから、迷彩も解けたってことか？」

「た、たぶん……」

いや、なんか致命的にシャレにならないんですけど。それ。

「おや、わたしがさっき言ったことが当たりですか？」

「嬉しそうに言うな、クソジジイ」

「師匠にクソジジイとはなつてませんねえ、ペイ。まったく、いたい誰がこんなふう^に育てたんでしようね？」

「で、どうするよ？ あの竜、こっちの隊商を狙う気満々だぜ？」
バグルルのその言葉に、その場にいた全員の視線がシンへと集まった。

「こうなつてしまつた以上、選択肢はふたつ。逃げるか、倒すか」「逃げ切れますかな？」

「時間稼ぎなしには、無理だね。だから、どっちにしても弧竜との交戦は避けがたい」

しん……と、場が静まつた。

竜は、知られているあらゆる生物のなかでも最強クラスの魔獣だ。それと戦わなければならぬというのだ。沈黙するのも無理はない。

「悪い。やっぱ、俺が最初にマイマイの奴を止めておけばよかったんだよな。みんな、こんなことに巻き込んで済まない……」
つて、なんか誰も聞いてないし。

「へへへへへ……燃えてきたぜえ。やっぱ戦いはこうでなくちゃな」

ドラゴンスレイヤー

「竜殺しか。称号としちゃあ悪くねえな」

「砲撃で木っ端微塵にしてやるぜ……ひひひひ」

「……正気か、あんたら」

てゆうか、みんな目が怖いんだけど。

「そうだ。少し冷静になるんだ、君たち」

意外にも、止めたのはセンエイだった。

「竜の内臓は高値で売れるんだぞ。木っ端微塵にしたら儲けが減るじゃないか」

訂正。やっぱこいつも同類だ。

「なあ、あいつら止めなくていいのか？」

「いいんじゃないかな？ どっちにしても戦うんだし」

「ほっほ。少年、諦めなさい。魔人など、しょせんは戦闘狂の集団ですよ」

「まるまるさんかく」

「戦の風が吹いています」

……どうも、俺以外の全員がやる気満々みたいだった。

「魔術戦になる。全員、ハルカとセンエイを守る形で布陣。

ペイとドクトル・テンはマイマイ達を馬車まで連れて行って、それから隊商を安全な場所まで避難させてください」

「俺たちが!？」

「鋼鉄攻弾は竜に有効ではなさそうだからね。ふたりは今回、裏方に回ってもらおう」

「ふむ、よろしいでしょう。諸君のご武運をお祈りしておりますよ。手際よく魔人たちが準備を始めていく。

「なあ、俺は？ なにをすればいい？」

尋ねる。ここにもても足手まといにしかならなそうさだ。

シンはちらりと俺のほうを見て、

「サリがないんだ。すまないけれど、探してきてくれないか？」

そう言われてみれば、さっきからサリの姿が見当たらない。

「来るぞ！ 全員、パーティーの準備は済ませたか!？」

「ライ氏、早く!」

「おう、すぐに連れてくるっ!」

言って、俺は駆け出した。

とは言ったものの。

「サリの奴、ほんとにどこに行ってるんだ？」

こういうときには真っ先に駆けつけてもよさそうな奴なのに、なぜかどこにもいない。

周囲はすでに、森へ退避しようとする馬車やらなにやらの群れでごった返している。人が多くて探すのも一苦労だ。

(てか、こりゃあ早く呼んでこないと、「冗談抜きでシャレにならないぞいぞい」)

背後からは、きゅぴーん！ ずどーん！ よーんよーん！ とい
う、ヤバい効果音がひっきりなしに響いてきている。

怖くて振り返ることもできないが、激戦であることはまちがいな
い。

焦った。

「サリー、どこだー！」

大声でどなる。が、答えは返ってこない。

「あああああ、どこいったんだあのバカたれっ……！」

「バカはひどいと思う」

「だおあああああっ！？」

いきなり後ろから話し掛けられて、飛び上がった。

「な、な、な、なな、」

「なー？」

「ななな、なー、な、なな、」

「なな、なー、ななな」

「なななな、な、なな、なー」

「ななな、なー」

よくわからない言語で「コミュニケーションを取り合っ

つむ、なんか微妙に楽しいぞ。

……じゃなくて。

「いつからそこにいたんだよ、おまえ？」

「さっきからずっと」

「声をかける、バカたれっ！」

「気づいてくれないから、悲しかった」

(こ、こいつは……)

普段ならのーてんぐりぐりの刑に処するところだが、あいにく今
日のところは時間がない。

「と、ともかく、急ぐぞサリー」

「急ぐ？」

「ああ。弧竜のやつが襲って来やがったんだっ。もたもたしてると、

あいつら全員黒焦げになっちまうっ」

俺の言葉に、しかしサリは首を横に振った。

「って、どうした？」

「いま行く必要はない。もっとべつに、やるべきことがあるから」

「な、なんだよそれ？」

す……と、サリの表情が変わる。

あいかわらずの仏頂面のままだが、目に込められた力が違った。

金属のような それでいて強靱な意思を感じさせる、鋭い視線。たとえて言うなら、それはナイフの刃のよう。

「……サリ？」

突然、沈黙した彼女に気圧されて、呼びかける。

それには応えず、彼女はその視線を背後に向けた。

つられて俺もそつちを見る。

草原のあちこちに放たれた炎の明かりが、夜の闇のなかで行われている死闘をおぼるげに映し出していた。

あの炎の下に、竜がいる。

そして、魔人たちも。

「どつちが優勢だ？」

「弧竜」

……きっぱり言い切られてしまった。

「や、やばくないか？ それって」

その言葉にサリがなにか言い返そうとした、その瞬間。

冷え冷えする靈気が、周囲を覆った。

「！ なっ……！！」

どくん。

心臓が、跳ねる。

信じられない ありえない 考えられないほどの 強烈な

致死的なまでに濃い 悪意。

「か、はっ」

全身をにぎりつぶされるような錯覚を覚え、俺はあえいだ。見えるわけではない。にもかかわらず、それが存在するということだけははつきりと理解できる。

吐き気を催すほどの鬼気をまとった何者かが、竜の身体を受け止め、押し返しているのが『視え』た。

きいいいいっ！

弧竜が、悲鳴のような声を上げて吹き飛ばされる。

「な、サリ あれ、なんだ？」

かすれる声で訊く。

サリはちらりとこちらを一瞥して、

「ヴォルド・テイミアス。死霊の大王。

けど、あまりうまく召喚できてないみたい。瘴気の量が中途半端」

「あ、あははは……」

その中途半端な量でちびりそうになったことは黙っておこう。金輪際。一生。

サリは、あいも変わらず鋭い視線で戦場をにらみながら、

「やはり、あの術でないとだめか……」

「なあ、サリ？」

「なに？」

「そろそろ、おまえがなにを企んでるのか教えてくれないか？」

「いいかげん、わけもわからず振り回されるのは勘弁してほしい。」

「べつに、わたしはなににも企んでない」

「そうか？　じゃあ、魔人たちがどういう作戦で戦っているのか、でもいいぜ？」

「知ってどうするの？」

「え？」

サリは冷たい目で俺をにらみつけた。

「知って、戦いに参加するつもり？　冗談はよして。弧竜は、あなたみたいな未熟者が戦闘に参加して生還できるほど弱い敵じゃない」

それまでのサリとは、うって変わったような辛らつな言葉だった。
「い、いやそれは、」

「ええ、たしかにライの剣は強力よ。けれど、弧竜の前じゃそんな力はとうてい役になど立ちはしない。この際、あなたは足手まといにしかならない」

「そ、そこまではつきり言わなくても」

思わず気圧されつつ、なんとか反論しようとする。

サリは、ふっ……と表情を緩めて、

「ライ。お願いだから、だまって戦況を見守っていて。弧竜はわたしが、確実に仕留めてみせるから」

……う。

それは、危険な言葉だ。

そんな、請うように言われたら 俺だって、強く主張することはできない。

だけど、

(そんなに危険な戦いなら、なおさら気になるじゃないか！)

それほど真剣な意図で訊いたわけでもなかったが、こうなったら意地だ。ぜったい聞き出してやる。

「けどさ。参考までに教えてくれるくらい、いいじゃないか」

「なんの参考？」

「え？ えーっと、」

とりあえず、思いついたでまかせを言ってみる。

「ほら、実戦での作戦の立て方を知っておけば、後々役に立つかもしれないし、」

「無駄。魔人の戦い方は攻撃と殺戮のための戦法よ。ライが隊商の護衛をするのに役に立つ知識なんかじゃない」

瞬殺だった。

(え、ええい、負けるかつ)

「け、けどさあ、やつぱりほら、トモダチ同士で隠しごととはよくないってゆーか、そう思わない？ な？ な？」

自分でもぜんぜん心にもないことを白々しく言いながら、なおも食い下がる。

と、ふとサリが表情を変えた。

見かけはさつきと変わらない仏頂面なんだけど、目がちがう。

なんか、意表をつかれてびっくりしたような感じで、彼女は俺を見ていた。

「？ どした？」

「……………」

あ、なんかあきれたようにため息までつかれてるし。

サリは、なんだか無然とした表情でこっちを見やると、

「いいわ。教えてあげる」

「ほ、ほんとに？」

「どっちにしても、もうそれほど多くの時間はなさそうだから、手短かに話すけど」

言って、サリはふたたび視線を戦場へと向けた。

「ライの目だと、あの戦闘はどう見える？」

「え？ そ、そうだなあ……………」

視線を移すと、さっきの死霊と弧竜が空中でじゃれあっているのが見えた。

が。

「なあ…………あの死霊、押されてないか？」

「そうね」

「ひよつとして、実はけっこうピンチなんじゃないか？ あれって」

「いいえ。あれは時間稼ぎをしているだけ」

へ？

「ライ。そもそも、人間が人間を超えた相手と戦う場合、どういう戦闘手段がある？」

「え、えーつと、魔術とかか？」

「そう。魔法。あとは、神話の力を利用した秘蹟ワンダーも、場合によっては使える。

魔人の場合、上級の秘蹟ワンダーはほとんど使用できないから、もっぱら魔法に頼ることになるの」

「はあ」

なんか、話が見えないんですけど。

こつちの戸惑いなどおかまいなしに、サリは続ける。

「魔法使いには4つの大きな系譜がある。それぞれ、エレメンタラー四大使役、エ魔ン技ン手ン工ン、イリユージョニスト幻影使い、ディアボロス靈魂技師。それ以外の系統もあるけど、それは省略。

この四つの魔術系はだいたい平等に強い。けれど、単純威力で計算した場合、ディアボロス靈魂技師系がまちがいに最強になる」

「ディアボロス靈魂技師……って？」

「俗流に言えば、召喚魔術。この世に存在しないはずの存在を使役し、呼び出して戦わせる魔法。」

特に高位の召喚原理は極めて強力。他の系統では、とてもじゃないけど太刀打ちできないほど」

「高位の召喚原理……？」

「たとえばさっきのヴォルド・テイミアスだって、完全召喚に成功していれば竜なんか片手で打ち倒せる」

……おいおい。

「す、すげえ術なんだな……」

「うん、すごい。欠点も多いけど」

「欠点？」

「ディアボロスそう。靈魂技師の魔術には致命的な欠点が見つつもある。強力なわりに術者が少ないのは、そのせい。」

ひとつ目には習得の難しさ。個々の召喚原理はどれも独特な癖を持つから、長く訓練してきちんと把握しないとまともに召喚できない。

ふたつ目に消耗の激しさ。どんな微細な召喚術でも、連続使用はほとんど不可能よ。術者の疲労が著しすぎる。

最後に、単純に準備時間が長い」

ようやく、俺にも言わんとしていることがわかってきた。

「オーケーわかった。つまり、あそこで戦ってるのは本命の召喚魔法を使うための時間稼ぎってことなんだな？」

「こくん、とサリはうなずいた。

「ヴォルド・テイミアスを呼び出したのは、たぶんセンエイだと思う。今回のチームで強力な召還を使えるのは、彼女とあとひとりだけ。

残るもうひとり　ハルカが持つ最強の術、レーヴァティンが直撃すれば、弧竜だって無事ではられない」

「つまるどころ、

「要は、俺やおまえが手を出すまでもないから、黙って見とけってことか？」

「おおげさにサリが言うせいでびびってたのだが、杞憂だったらしい。

「だが、サリはまた首を振った。

「ライ。試みに訊くけれど、わたしがあなたの喉首を掻き切ったとして、あなたは生きていられる？」

「え、いや、そりゃ死ぬだろうけど」

「すると、そこからあなたはわたしがナイフを振るっただけで死ぬという結論は導けると思う？」

「……えーっと、つまり。

「当たらなければ、死なない。そういうことか？」

「そう」

「サリは、また鋭い視線で戦場のほうを見やった。

「レーヴァティンがうまく直撃すれば、それでよし。けれどそうでなかったとすれば、苦しい戦いを強いられることになる」

「じゃあ、そのときはどうするんだよ？」

「それは　」

「と、そのとき戦場の一角にぼつつ、と赤い光点が発生した。

「時間切れみたい。ライ、あなたはここで待ってて」

「え、おい、ちよつと、」

答える声が届くよりも、早く。

サリの身体は、まるで弾丸のようなスピードで戦場に向かって駆け出していた。

「ちよ、ちよつと待てよ!？」

あわてて追いかける。

「ハルカはレーヴァティンの召喚準備！ 他は全員、この場を死守しろ！ ハルカに近づかせるな！」

シンの号令とともに、一斉に魔人たちが動きはじめる。

弧竜は彼らの動きに気づいたのか、威嚇するように大きく吠えた。その口に灯る、小さな光。

「ゴゴネル！」

「わかつてるって！ そら！」

声とともに、ぶんっ……という音がして、彼らの前に半透明の障壁が現れる。

直後、弧竜の吐いた吐息が障壁に突き当たった。

爆発。

「っ、打ち消された!? 一撃でか!？」

「二撃目が来るぞ！ 早く！」

「ちよ、ちよつと待て、対応が間に合わないっ……!！」

弧竜の口がかぱつと開き、そこから赤いかたまりが顔を出す。きいおおおおおおっ！

吠える。

それと同時に、弧竜は彼らに向けて炎の弾丸を打ち出した。

「ミーチャ、頼むっ……!！」

「さんかく」

空中を進む炎の軌道が、くい、となにかに引つ張られたようにねじ曲がる。

どんっ！

関係ない場所に着弾して、炎は爆散した。

弧竜のほうは、どうやらそれで吐息は効果なしと見切ったらしい。代わりに宙に浮き上がって、こちらに向けて滑空を開始した。

「！ 突進してくる気か!？」

「早っ！ ちよつと待て、私の召喚準備はまだ整っていないぞ!？」
まるで地を這うように低空を滑空しつつ、弧竜がこちらに迫る。

「炎岨よ！ 古き約款に従い、我が敵を撃て!」

コゴネルの呪詛とともに、彼の放った呪符が無数の炎の矢に代わり、竜の胴体を乱打する。

だが、相手はまったく意に介する気配もなかった。効いたかどうかすら疑わしい。

「おいおいおい！ なんつー堅さだよ!？」

「くっ、こうなったら僕が……!」

「おおっしゃああああああっ!」

「バグルル!？」

大剣を大上段に構えたバグルルが、弧竜の突っ込んでくるタイミングに合わせて剣をたたきつけた。

ずどんっ！

「つつあっ……」

バグルルが苦悶のうめき声を上げる。

その、剣を持つ手から血がにじみ出している。無茶な圧力に耐え切れなかったせいだ。

だが、弧竜もまた、そこで停止していた。

その頭部はバグルルの大剣によって傷つき、血を流している。
ぎいいいいっ！

空中高く、弧竜が舞い上がった。

「バグルル、大丈夫か!？」

「ああ、まあな。」

けど、剣がひん曲がっちゃった。あとでサリに直してもらわんとダメだなこりゃ」

「ったく、無茶しやがる。心臓止まるかと思っただぜ」

弧竜のほうは、あいかわらず空に浮いてこちらをねめつけている。

「今度は、なにをする気だ？」

「わからない。けど、こっちへの攻撃をあきらめてはいないと思う」

そのとき、はるか上空から、ぎいあああああつ！ という悲鳴のような怒号が響いてきた。

「！ まさか、落下してこっちを押しつぶす気か!？」

「はん、トカゲの分際でなかなか頭が回るじゃないか。ま、遅いけど」

言って、センエイは呪印を組んだ。

「呪われた獣の王よ、我が敵に破滅を与えよ！ 出でよ、ヴォルド・テイミアス！」

「ごう、と瘴気が空間から流れ出し、そして

(知ってる。その光景を、わたしは知ってる。

このあと、大規模な召喚原理で足止めしてから、レーヴァティンディレクショナル・リリースの方向付け解放で弧竜を打ち倒す。

けど彼らは知らないはず。その後の展開までは
()
草原を疾る。

つま先だけを使って地面を蹴りつけ、またつま先だけで着地し、
またつま先で蹴りつける 全力疾走。

疾走しながら、わたしはなおも考える。

(ぜんぶ、わかっている。このまま放っておけば、なにが起こるのか)
()

幻覚のなかで見た、あの死骸。

おぼろげな印象だったが、だれの死体であるかは一目でわかった。ライナー・クラックフィールド。

（魔人たちが弧竜を止められなかった場合、彼がだまって事を見守っているはずはない。ぜつたいに、前線に出てくる。）

そして。前線に出てきた場合、もう止められない。確実に彼は死ぬ）

それは絶対の真実。

自分がどうあっても防がなければならない、エスカトロジック・ファンタジア終末の幻想だ。

（させない）

だから、わたしは未来を変えなければならない。

方法は至ってシンプル。普段はやらないことをやればいい。

戦闘に最初から参加はせず、ライに釘を刺すことに専念したのがそのうちのひとつ。

あとは、ライが戦う気になる前に弧竜を打ち倒してしまえば、それで済む。

（できるかな……？）

難題だ。タイム・リミットが限られている分、ただ打ち倒すよりずっと難しい。

そんなトリアルを　よりによって。あのような老獪な竜相手に行くなど、馬鹿馬鹿しいとしか言いようがない。

……それでも。可能だと、自分は信じている。

神官の言葉を思い出す。短時間にあの秘儀ミラクルは連続して使えないと、彼女は言った。

『だから、チャンスは一度だけ。それでもいいって言うなら、やってみるけど』

心臓が、ばく、ばく、と乱雑に跳ねる。

ぎりぎりの死闘。自分で意識できるほど、緊張も不安も強い。だけ。

（たいしたことはない。いつだって、わたしの戦いはそういうもの

だ)

「はあっ……」

吐息。

そして、わたしは眼帯の紐を解いた。

視界が、赤熱する。

全身が、強大な魔力に侵されてゆく。

その炙られるような感覚に身を焦がしながら、わたしは目を大きく見開いた。

「ああ」

立ち止まる。

もう、あとほんの数歩で、戦場に届く距離。

視線の先で、弧竜の放った炎の吐息に直撃され、ヴォルド・テイミアスの頭部が砕け散った。

「ハルカ！」

「わかっています、シン」

優雅に　彼女はいつも優雅だ　言って、ハルカはその手の先に灯る赤い玉を空に掲げる。

荒れ狂う魔炎剣レーヴァティンの、ディレクショナル・カーネル方向付き核。

おりしも、難敵を撃ち滅ぼした弧竜が、こちらへのダイブを続行するために身構えたところだった。

彼女が叫ぶ。

「解放！」

瞬間、赤の奔流が一条の槍となって竜を直撃した。

「やった！」

歡喜の言葉。

それを聞いてから、わたしはすっ、とみんなの数歩前に進み出た。

「……って、サリ!？」

「おい、どこへ行ってたん」

聞こえてくる声を無視して、空の光景を注視する。

炎に焼かれ、弧竜が悲痛な雄たけびを上げた。

その竜鱗が、炎の力によって一枚、また一枚と、ゆっくり溶け崩れていく。

だけど、わたしは見逃さない。

赤い視界は、見えざるものを見る。いまのわたしには、竜を取り巻く魔力の流れが、はっきりと見えた。

「受け流してる……魔力で、炎の逃げ道を作っている」

「なんだって!？」

ぎり、と歯をくいしばる。

効果はあった。けれど、これだけじゃ竜は死なない。だから。

「あああああああ!」

ずん、と周囲の空気が黒く染まる。

「うわっ!」

「ひゃあっ!？」

「うおおっ!」

「さんかく」

「うあああ……!」

「……な」

一切の手加減もなく。

微塵の容赦もなく。

ストレートな、殺意を。

全力で、弧竜に対してぶつけてやった。

竜がこちらを見た。

ぐぐぐぐぐ、と、炎に包まれたその顔がゆがむ。

笑っている。

ふつうの人間が直撃されればまず間違ひなく絶命するほどの悪意にさらされながら、竜は平然とこちらを見返している。

かまわない。

わたしに注目して、他の場所に攻撃する気をなくしたならば、とりあえずはそれでいい。

竜の周囲から、炎が消えていく。

「システム サウザンドアームズ 構築」

服の中から、たくさんフォーム ミルキウエイの短刀が出てわたしの周囲を覆う。

「陣形『天乃川』、準備」

それらが階段のように形を変え、空へ あの竜の元へ続く道ができる。

準備はこれで終わり。

さあ

破滅へ挑む、戦いを始めよう。

「だああ、サリ、ちよつと待てえええ〜〜〜つ」

ぜーはーぜーはー。

飛ぶような速度で駆けていったサリを追って走り出したのはいいのだが、当然ながら追いつくはずもない。

（それどころか、筋肉痛が復活してきやがった……うう、踏んだり蹴ったりってやつか？）

そのとき、ぴかっ、と戦場のあたりが光った。

「え？」

次の瞬間、無音で広がった炎が、突如として竜を包み込んだ。があああああああああああああ！？

竜の悲鳴。

「なんだ、やっぱり直撃しちゃったじゃないか」

サリのやつがあまりにすごい剣幕だったもんだから、ついつい不安に思ってしまったが、心配する必要もなかったみたいだ。

ほっと胸をなでおろす。

「まったく、人騒がせなやつだな……」

安心したとたん、どっと疲れが押し寄せてきた。

とりあえず、戦場のほうへと歩いていく。

魔人たちも、もう勝負は決まったということですからすっかりくつろいで いない。

「あれ？」

なんか、様子が変わだ。

シンたちも、それからサリも、みんな一様に空を見上げて、押し黙っている。

ここから見えるサリの横顔は、弧竜の焼ける炎に照らされて、赤々と……

紅い、目が見えた。

「え？」

サリが、眼帯をしていない。

眼帯の下にあったのは、丸い、宝石みたいな、紅いモノ。

あれが、目？

瞬間、そのサリの身体から、どす黒い意志が放出された。

「なっ、あっ………！」

一瞬、息が詰まる。

感じた悪寒は、さっきのキモチワルイ死霊に対して抱いたものと似たり寄ったりだった。

濃厚な、致死性の悪意。

「さ、サリ……!?!」

まるでにらみ殺そうとしているかのように、サリは空を見上げて押し黙っている。

ふと、その口元が吊りあがった。

笑っている。

空の竜と呼応するかのように、彼女は心の底から愉快そうに笑っている。

ああ。

ああいう笑いを、見たことがある。

てゆうか、マジギレしてませんか、サリさん？

やがてゆっくりと。空に道があるみたいに、彼女は天に向かって歩いていく。

呼応するように、空の竜も炎を振り払い、彼女を迎え撃った。

……って、竜、ふつうに生きてるし。

(戦う気なのか……って、それじゃやっぱり行かなきゃダメじゃないか)

はあ、とため息をつく。

正直、竜相手になにかができるとも思えなかったが、それでも、これは俺が呼んだトラブルなのだ。

サリがなんと言おうと、他人に戦わせて遠くから傍観しているだけじゃ、こっちの矜持に関わる。

(自分のことを自分で面倒を見ることもできないやつは、大悪党じゃないもんな)

決心して、俺は戦場へと歩いていった。

跳躍、跳躍、跳躍。

遠隔操作したナイフを足場として空へ駆け上り、視線は常に竜を捕捉。

吐息をぎりぎりまで引きつけてかわしつつ飛び上がり、

「陣形『迦具土』、実行！」

それまで足場になっていたナイフ達が赤く光り、一斉に弧竜へと襲いかかる。

ばちばちばちばち！

それらは弧竜の鱗表面に当たって火花を散らし、竜は少しだけ痛そうなお声を上げた。

「……っ、陣形『天乃川』、復元」

すたん、と短刀に着地して、吐息。

（やはり、遠距離ではまともにダメージを与えられないか）
システム サウンドアームズ
兵装、千手観音。

常時携帯した総計28本の短刀を同時操作して戦う、わたしの専用武装だ。

細かい相手と一対多で戦うにはよい武器なのだが、こういう強大な相手には火力に難がある。

とすると、やはり『新月』による近接戦闘を仕掛けるしかないのだが

（難しい、かな）

弧竜は近接戦闘に秀でた竜だ。腹に生えた打撃腕は強靱で、その動きはすばやく、力は強い。

だがそれでも、それ以外の選択肢はあまり多くない。

（まずは逆鱗か。それとも）

竜の下腹部、逆鱗と呼ばれる場所は防御の魔力が手薄なことで知られている。

弓で狙うには絶好の箇所なのだが、いかんせん動きの速い弧竜で

は狙いが付けづらい。

だが、近接攻撃ならどうか。

「はあっ……！」

短刀を、とん、とん、とん、と乗り換えながら、一気に距離を詰める。

弧竜はわたしをたたき落とそうと、ぐるりと後ろを向いて尻尾を振り回した。

それを、下に用意した短刀まで落ちて回避。即、階段状に短刀を並べ、跳び上がった竜の下に潜り込む。

手応えもなく相手を見失ってとまどったのか、弧竜の動きが一瞬止まった。

その隙を突いて、わたしは短刀から打撃腕へ乗り移り、さらにそれを蹴って飛び上がりながら、『新月』を抜き、

「はっ！」

ざくん。

逆鱗の部分が切り裂かれ、竜の血液がわたしの服に落ちた。

ぐああああああっ！

即座、怒った竜が打撃腕をむちゃくちゃに振り回し、右の打撃腕にわたしの胴が引つかかって激しく吹き飛ばされた。

「が、はっ……！」

大丈夫。予想の範囲内。

跳ね飛ばされる途中、わたしは弧竜の翼をつかみ、身体を無理やり弧竜の背中に引きもどした。

(よし！)

狙い通り。うまく上側に回り込めた。

弧竜は未だわたしが下側にいると思っっているのか、尻尾と打撃腕をめちゃめちゃに振り回して暴れている。

これでは逆鱗に近づくのは難しい。のだが、わたしの狙いはそっちではない。

元より、逆鱗への攻撃だけで竜を倒すほどのダメージを与えられ

るとは、最初から考えていなかった。

わたしは、素早く竜の背中側を移動し、

「はあっ！」

ざくつ。

首の付近。さっきのレーヴァティンによって竜鱗の消滅した部分に、『新月』が突き刺さる。

があああああああっ!?

弧竜の咆哮。

怒ったらしい。翼と尻尾が背中をでたらめに打ちはじめた。

そのときにはもう、わたしは『新月』を手放し、竜の背を蹴って離脱している。

わたしの役目はこれで終わり。

あとは

「理気を司る神ザイタイ・マークフェンケルの御力にて、宣言する

—

タイミングは、いましかなかった。

神光を放つ、例の短剣。それは夜の闇のなかで、この上なく鮮明に見える。

射撃の的としては、申し分ない明るさだ。

「我は天に応ずる者、疑うは時の爪痕、隠したるは聖陰、行いは荒ぶる龍となりて日輪を食らう」

一撃を外せば、それは致命的だ。敵を倒す方法がなくなるし、この丘に伏兵がいることを竜に悟られてしまう。

吐息で狙い撃ちされれば、さすがに生きてはいられないだろう。だから、これは命がけだ。

神官として、こんなところで命を賭けるのは正しくないのかもしれない。

だけど。

(助けられる人たちを助けられないなんて、そんなの、ボクじゃないよ！)

「力は光のごとく、炎が再生するようには、生命は再帰する……」

弓を引き絞る手が、ぶるっ、と震える。

気が付けば、額は汗でびしょびしょに濡れていた。

落ち着かなきゃ。

落ち着けば、当てられるんだから。

ぎり、と歯を食いしばり、

吠えた。

「い……つけええええええ、回帰《temporal reincarnation》！」

放つ。

ぎひひひひひひひひっ!?

竜が叫ぶ。

戦場から離れた、丘の上。そこから放たれた、光を帯びた一本の矢が、竜の背に突き刺さったのだ。

その瞬間、世界がふたたび真紅で染まった。

そう。

一発撃つても効かなかったのなら、二発当てればいいのだ。

神官に使ってもらったあの^{メジャー・ミミックル}大秘儀があれば、ちよっと前に竜を焼

いていた炎を復活させることができる。

方向付けは、あらかじめ『新月』に呪化しておいた。

これほどの至近距離でレーヴァティンが直撃すれば さすがの
弧竜も、とうてい生き延びられないだろう。

自身の背中を焼こうとする業火に、竜は必死で抗った。

だが、それも無駄なこと。

しよせん、一介の竜と始原ミズライク・フレイムの炎では存在の格が違いすぎる。

存在したという痕跡を根こそぎ蹂躪され、侵食され、破壊される
感触に、竜が悲鳴を上げた。

轟、轟、轟、と狂ったような轟音とともに、竜の身体が削り取ら
れていく。

抜けた。

背中から腹へと炎が貫通し、余波が地上へと降り注いで爆裂する。
胸に大きな穴を開けられた竜は、そのままふらふらと地上へ落下
していった。

……ふう。

一息ついて、わたしは戦闘態勢を解いた。

いったん気が抜けると、どっと疲労が身体にのしかかってくる。

ともかく、疲れた。

馬車に行って、ゆっくりと休もう。

地面を見る。仲間の魔人たちが、こっちに向かって盛んに手を振
っている。

手を振っている……ちがう、そうじゃない。

危険を知らせようとしている。

「!?!」

直後。炎が、わたしの背中に炸裂した。

「サリ！」

(くそ、言わんこつちやないっ………！)
必死で走る。

「ライ氏、危険だ！」

こつちに気づいたらしく、シンが制止の声を上げる。
無視。

そのまま地を駆って、落ちてくるサリの真下に滑り込んだ。
どんっ。

落ちる身体を受け止める。

「サリ、おい、生きてるか!？」

「……あ」

よかった。少なくとも死んではない。

背中にかなりひどい火傷を負っているみたいだし、衝撃でいくつかの骨が折れているようだが、意識はちゃんとあるみたいだ。

と、視界の隅に、なにか不気味なものが映った。

「……げ」

竜は、まだ生きていた。

背中から腹にかけてをすっぽりと失っていたが、その欠けた部分に透明な管のようなものがいくつもできていて、そこを血が流れている。

魔力で、無理やり生命をつなぎとめている。

そいつは憎悪に満ちた目でサリをにらむと、とどめを刺すために地面をこちらへ這いずってきた。

「させるかよっ！」

サリの身体を地面に降ろし、剣を抜く。

剣の帯びる白光が、夜の草原を圧して輝いた。

警戒したのか、竜が前進を止め、こちらを威嚇するようになる。

「……だ……め」

と、サリが小さくつぶやいた。

「いまはしゃべるな。傷が悪化するかもしれない」

「……だ、め……ライ、いま戦っちゃ……あ、あ……！」

サリの赤い片目がにぶく光り、その表情が苦しげにゆがむ。

「だめ……見えるの……未来は、まだ変わっていない……！　ライ、

逃げて……殺される……」

「聞き分けのないやつだな」

はぁ、とため息。

と、弧竜が吠えた。

ぎいがあああああああつ！

「……！」

間近で聞いて、全身が総毛立つような恐怖を覚える。

……勝てない。

これはまともな生命じゃない。原初の刻から最強の代名詞であり

続けた竜族という種の、恐るべき長老格だ。

それを、肌で実感する。

「けどなっ！」

恐怖を振り捨てるように。

向かい来る竜に向かって、俺も吠えた。

「できっこないと最初から諦めるな、つてのが、クラックフィール

ド家の家訓なんだよっ！」

ぎああああああつ！

竜の吠え声。

それに合わせて、俺も駆けだした。

「うらああああああつ！」

駆け寄る俺を見て、竜は腹の打撃腕を伸ばし、こちらに向けて打ち付けてきた。

でたらめに繰り出されるそいつらを、ひとつ、またひとつと打ち払い、たたきのめし、ねじ伏せていく。

だが、相手の攻撃はそれだけではなかった。身をひねるようにして勢いをつけ、竜の身体が90度近くまでひねられる。

その尻尾が、上空から打ち下ろすようにして、俺にのしかかってきた。

この質量を受け止めるのはさすがに無理だ。横に大きく飛びのくが、着地しようとしたその軸足を、打撃腕が払った。

「な、しまっ……！」

即座に、いくつもの打撃腕が一斉に俺を襲う。

かわせない。

(う、うわっ……)

もうだめか、と覚悟したその瞬間、竜の腹部に一本の矢が突き刺さった。

ばちい！ と快音がして、竜が苦悶のうめき声を上げる。

その隙に立ち上がって、俺は矢の飛んできた方向を見た。

(この攻撃は、リッサ？)

思ったそのとき 俺は、竜が自分とおなじ方向を向いていることに気が付き、戦慄した。

吐息を吐こうとしている。

「リッサ、逃げろっ！」

叫ぶが、間に合わない。竜は口を開き、その口から赤い光がこぼれ出て、

そこに、数十もの光の束が降り注いだ。

ばちばちばちばちっ！ という、霰が降るような音とともに竜の表皮が傷つき、またも竜がぐぐもった悲鳴を上げる。

「見る！ 竜が生命維持に大量の魔力を使っているいまなら、ふつうの術でも十分に通用するぞ！」

「よし。全員、全力で竜を攻撃！ ライ氏を援護しろ！」

シンの言葉とともに、先ほどに数倍する規模の攻撃魔術が竜を乱打し、竜は絶叫して身悶えた。

いける。

この状況なら、勝てるかもしれない。

「よっしゃあ！ やってやるぜ！」

叫んで、俺はまた突撃した。

打撃腕を払って近寄り、剣を腹に向けて思い切りよくたたきつける。

ざく、と、にぶい手応えがして、剣が腹に食い込んだ。

ぎいおおおおおおおつ！

痛みに逆上したのだろう。竜が、大きく飛び跳ねた。

そのまま俺のところへ落下して、押しつぶそうとする。

「ライ、逃げてっ……！」

サリが叫ぶ。だけど 逃げられるスピードじゃない。

だったら、

「いちかばちか…… やってみっか！」

さっきグリートから教わったとおりに、力の集積をイメージする。

二回目だから、慣れたのだろう。すさまじいスピードで光が剣へと収斂していった。

「食らえ！ この、ライナー・クラックフィールドの必殺奥義っ！」

向かってくる竜に対して、吠える。

剣を上に掲げ、

「……っらあああああああああつ！」

集まった光を、襲い来る竜の身体にたたきつけた。

それは、光の奔流だった。

強烈な白光が、竜の胴体部に側面から突き刺さり、爆ぜるようにして抜けた。

衝撃で、竜の身体がふたつに分かれて吹き飛ばされる。

そして。

今度こそ、完全に竜は起き上がってこなかった。

(未来が、変わった……?)

(そんなはずはない。わたしが見る未来を変えられるのは、わたしだけのはず……)

(それ以外に、そんなことができるか……)

(あの剣の、力……なの?)

「サリッ！」

駆けつける。

サリの呼吸は浅く早く、重体であることは見た目からも明らかだった。

「ライ……よかった、生きていて……」

「だからしゃべるなつてば。ああもう、だれか手当てのできる奴は

」

「はいはい、邪魔者はどいたどいた」
センエイが割って入った。

「サリ、意識はある？」

「……ある」

「そっか、よしよし。じゃあちょっと傷の状況を見るから、痛いけど我慢するよろ」

言って、センエイは手馴れた調子でサリの身体を調べ始めた。
と、ふとこつちを振り返って、

「言っておくが、合意の上でサリに触れてらつきー、とか思っているわけじゃないぞ、私は」

「……そんなこと思っていたのか？」

「いやだから思っていないんだつてば」

聞いてもいないのに、なぜか力説する。

「どうでもいいから、早くサリを見てやれ」

「へいへい。……と言っても、もう終わりかな。肋骨数本と右腕の

骨、あと背中への火傷。意外と軽傷だね。マントに防御術かけてた？」

「かけてた」

「そうか。ま、サリの回復力なら、全快するのにそれほど時間はかからないんじゃないかな。回復するまでちゃんと安静にしているよ
うに」

言いながら、センエイはてきぱきとサリの怪我への応急処置をすすめていく。

どうやら思っていたよりは軽傷らしい。ちょっとほっとした。

と、

「ライー！」

「おわっ！？」

がばっ。

いきなりリッサが抱きついてきた。

「やった！ やったよライー！ ボクたち、竜を倒したんだよっ！」

「ちょ、ちよっと、落ち着け、落ち着けての！」

「ばっかやる、これが落ち着いてられるかって！ すげえ、本当に竜を倒しちゃったぜ！」

いつの間にか、あたりはお祭り騒ぎみたいになっていた。

「うおお、すっげー！ こいつぁお宝の山だぜ、こんちくしょう！」

「ぴっかりまるまる、ひしひし〜」

「ここら君たち、抜け駆けは許さんぞ。どうせ宝の山は逃げない

「んだから、落ち着いて待ちたまえ」

「お宝……って、なんだ？」

「弧竜の死体だよ」

シンが解説してくれた。

「竜鱗と背骨はほぼ原型をとどめたままだし、内臓もいくらか無事なまま残っている。加工して運べたいした儲けになるだろう。」

まあ、ライ氏の殺し方がうまかった、ってことかな。今回はお手柄だったね」

言って、ぽんと肩をたたく。

……なんか、釈然としない。

浮かない顔に気がついたのが、シンが首をかしげた。

「どうしたんだい、ライ氏？」

「いや……竜を呼び込んだのは俺の行動に原因があったわけで、それで誉められても、ちよつと……なあ」

普段なら大威張りで自慢するところなんだけど、さすがにサリが大怪我を負ったこの状況でそれは気が引ける。

「なに、自分で決着をつけたんだから、文句を言われる筋はないさ。ちがうかい？」

「そうそう、おわりよければすべてよし、ってねっ」

「……どっから湧いて出た、マイマイ」

「あ、マイマイ。君は明日の朝ごはん抜きね」

「えーっ、なんでえ？」

「魔人の掟は、自分で解決できない揉め事は起こさない、だよ？それを破ったんだから、罰を受けて然るべきだね」

「うーっ、そんなのひどいよーっ」

「まあまあ、いいじゃねーか。それに、俺らだってこいつの行動を監督する役を新入りに押し付けて放っておいたんだから、責任がないとはいえないだろ？」

「そうそう。ペイ、いいこと言うわねっ」

「だから、こいつの分け前ゼロくらいで許してやるっぜ」

「ちよ、えーっ!?!? なにそれ、それってどういうことお!?!?」

「ぐはは、よかつたじゃねえかよマイマイ。損しないで済んだぜ」
周囲が、どつと笑った。

気がつけば避難していた隊商ももどってきており、あたりは本格的にお祭りムードに包まれている。

俺は、さつき自分で吹き飛ばした竜を見た。

その胸は完全に両断され、もはや生きていないのは明らかだ。

(なんか、とんでもねー剣拾っちゃまった気がするなー)

……いや、まあ値段の時点でもんでもないのはわかってたけど。

ふう、とため息をついて、俺はふと足元の地面に目をやって、

「あ」

「きゅっ……」

いつのまにそこにいたのか、目を回して気絶したグリートの身体を思いきり踏みつけていた。

「ふむ」

手前の出番は、なかつたな。いや、よかつたよかつた」

三日目：悪党、岩巨人と歓談する

「で、どうして客人を棍棒で後ろから不意打ちしようとなさったんですか、キスイ様？」

問い掛ける。

相手は、ふんつと大きく鼻を鳴らした。

「きまつておるだろうジロ口。あれが敵だからだ」

「昨日は、もてなす支度をしておけ、とおっしゃられたようですけど？」

「うむ。たしかに言ったおぼえがあるぞ」

「で、なんで敵なんです？」

「おろかもめ。戦士にとって、もてなすといえれば相手を全力で返り討ちにするのにきまつておるだろうがっ」

「……知りませんよ、そんな変態的な俗語、だれも」

「なぜだ！？ 当然の常識だろうっ。おのれ、岩巨人族の戦士たちはそこまで墮落したというのかっ」

ぶんぶん手を振って力説する。

はぁ、と彼女はため息をついた。

「……なんだ、その『トホホ』とでも言いたげなため息は？」

「いえいえ、なんでもありませんよキスイ様。そんなことより、もっと大事なことがございますから」

「む？ なんだ？」

相手は、こくん、と小首をかしげる。

彼女はにこにここと笑みを絶やさず、続けて言った。

「この僻地では、村人の娯楽もずいぶんと限られております」

「むう。たしかにここはつまらぬ村よ」

「ええ。それで、昨夜のキスイ様のお言葉を聞いて、みんな大喜びだったんですよ。宴会の口実ができた、って」

「ぬう。全員が誤解したのか。まったくなさけない。この村に真の

戦士はもうおらぬのか？」

「いないかもしれませぬ。それはともかく、みんな大喜びでいまも宴のごちそうを準備しているわけです。食材を用意して、下ごしらえをして」

「ほう、そうか。それは大儀なことよ」

「ええ。狩り長のバフルさんなんて、40年も転がしていた秘蔵の酒樽を蔵から出してきて『好きなように使え』とまで言ってくれたんですよっ」

「豪勢だな」

「はい。そんな中、宴が虚報だったと知れば、さぞやみんながっかりするでしょうねえ……」

「まあ、仕方あるまいな。ところでラ・ジロ口よ、その手に持つ凶悪なハンマーはなんだ？」

にこにこ笑みを絶やさずににじり寄る彼女に、相手は冷や汗を流しつつたずねた。

「これも村のみんなとごちそうと秘蔵のお酒のため……お覚悟を、キスイ様」

「まてまてまてちよつと早まるなおちつけええっ！」

「だいじょーぶだいじょーぶ。ちつとも痛くないですよー。ちよつと悶絶してのたうち回るだけです」

「その言葉の矛盾はともかくとして、だから待てと言うにつ。きさま、よりによって自分の主君に　うわあっ」

ぐこんっ、と音がして、ハンマーが地面にめり込んだ。

「もう、キスイ様。だめですよ動いちゃ。当たらないじゃないですか」

「だ、だれかああ、助けてくれえ！」

「無駄ですよ。ここ、祭儀室に入れるのはわたくしとキスイ様だけだつて、キスイ様だつてご存知でしょう？」

「こ、この不忠者っ。そんなんだから天罰が下って、その歳でも洗濯板のごとき胸の　」

「えいつ」

「じゅっ！」

「……きゆう」

「あらあら、ちよつと力を入れすぎちゃったかしら？」

「ここにこしなから、ハンマーをそのへんにぽいと放り捨てる。

そのとき、祭儀室の扉がこんこんとノックされた。

「はい？」

「がちやり、と扉を開けると、そこに人間ふたり分近くもの大きさの巨体が立っていた。

「ガルヴォーンの君ですか。どうか致しました？」

「異音がしたので駆けつけてきたのですが……ア・キスイは、ご無事で？」

「ええ、ぜんぜん無事ですよ。ねえ？」

振り返って、問う。

と、「はい……」というか細い声が、祭儀室のなかから聞こえてきた。

「ね？」

「ふむ。そのようです。しかし」

ふと、彼は首をかしげた。

「どうかしましたか？」

「いえ。祭り役の仕事ゆえ本来は問うべからざることですが、質問をさせていただいてよろしいか？」

「どうぞ。答えるべきか否かはこちらで判断します」

では、と断って、ドッソは言った。

「あの……今日の行動は、なにかの儀式なのですか？」

「え？」

「いえ、私も最初から見ていたわけではないので、正確ではないかもしれませんが、

ア・キスイが棍棒を振り上げ、その口を押さえながらあなたが祭儀室までひきずっていく、という行為に、どのような意味があった

「のしょう」

「……………」

「いつにない行動でありましたので、その
彼女はにっこり笑って、」

「心配することはありませんよ、ガルヴォーンの君。あれは、宴が
成功するために必要な行動だったのです」

「は、そうでしたか」

「ええ。ですから、なにも心配することはありません
断言する。」

相手はそれを聞いて、深く納得したようにうなずいた。

「わかりました。それでは、これで失礼致します」

「はいはい。客人の方にも宜しく伝えておいてくださいねー」

にこにこ手を振って、そしてわたくしはばたんとドアを閉めた。

「さて、こっちはこれでよし、と」

「あの……………」

「はい、なんでしょう？ キスイ様」

言葉に、相手は頭を手で抑えながら、

「なんだか頭がいたいんですけど……………また、“あのひと”がなにか
やっただんですか？」

「……………」

ぼん、とキスイの頭に手をやって、なでなでする。

「心配しなくてもいいですよ。“彼女”があまりに暴走すれば、わ
たくしが止めてさしあげます」

「は、はい……………」

はにかんで、相手は答えた。

……………はあ、とため息。

（あちらの方も、このくらい素直で可愛いのなら扱いやすいのだけ
れど）

「あの？」

考えていると、キスイが不安そうにみじろぎをした。

安心させるためにほほえんで、話題を変える。

「そうそう。今日の夜は、客人を迎えての宴会が催されますから、楽しみにしていってくださいね」

「客人、ですか」

相手は首をかしげた。

「それは、神の陣営に属する方でしょうか」

「あら、なにかお心当たりでも？」

「いえ　ただ、ずいぶん近くにそういう気配を感じます
目を閉じて、答える。

その姿は、まさに神話の時代の預言者のように。

「？」

「？　どうかしましたか？」

「いえいえ。ただ、キスイ様も『生贄』なんだなあって思った
だけです」

言いながら思う。かつての自分も、このような神秘に満ちて
いたのだろうか。

「さあ、そろそろもどきましょう。急にこの部屋へ籠ったもの
だから、みな心配しております」

感傷を振り払って、彼女は扉を開けた。

「で、今度はどっちに向かうんだ？」

「ぐるぐる」

車輪の音がひびく馬車のなかで、俺はサリに問うた。

「北」

「.....」

だめだ。こいつとじゃ会話が成立しない。

きよろきよろあたりを見回すと、センエイと目が合った。

「なんだい君は。サリの『ざ・ぱーへくつ』な解答に不満があるとしても言うのかね？」

「べつにおまえの腐れた感性に文句言う気はねーけどよ……正気か？」

「はっはっは、素敵に失礼な男だな君は」

頭に青筋を浮かべて不気味に笑うバカはきっぱり無視し、俺はこの馬車にいるもう一人のほうに目を向けた。

相手、リツサはちよつとあわてた風で、

「ぼ、ボク？」

「そついやおまえ、なんでこんなところにいるんだ？」

いま乗っているこの馬車は、隊商に病人が出たときのために用意されているものだ。

ふだんは使用人が用いるもののだが、いまは満身創痍のサリが使っている。

……まあ、それはべつに問題ないのだが。

「神官には、賓客用の馬車があてがわれているはずだろ？ あつちのほうに居心地もいだろうに、なんたってこんなところに？」

「いや、ええと、あのね」

リツサはなんだか言いにくそうにしながら、

「さっきまではふつうに外にいたんだけど……なんか、いたたまれなくなってる」

「なんで？」

「そ、それは……」

と、ちよつどそのとき、外から騒がしい声が聞こえてきた。

「ぐはあああつ！？ おいこら貴様ら！ 高貴なる神官補にそんなことして後がどうなるか」

「コゴネル、火力2割増しな」

「あいよー」

「つて、ぎゃーっ！？ やめろやめろ熱い下ろせええええっ！」

「風情がありますねえ……」

「なにやってるんだ、あいつら？」

「なんか、サフィートさんに『竜の死体って高く売れるんですよ』って話をしたら、急に色めきたって出て行って。」

「で……あのとおりなんだけど」

「要するに、また例の調子で分け前をよこせとわめき散らしたのだらう。」

「で、それで魔人連中がブチ切れて、ああなった、と。」

「つくづく強欲だな、あの腐れ神官補」

「あの悪癖だけは、出会ったときから変わらないんだよね……」

「いっそのこと、さっさと縁を切ったほうがいいんじゃないか？」

「あいつ」

「だ、だめだよ！ そりゃあ完璧じゃないのは確かだけど、サフィートさんはすごく優秀でいいひとなんだよ？」

「……………」

「俺がじつとセンエイをにらむと、彼女は「ん？」と眉をひそめた。」

「なんだね君は。ひとのことをじろじろ見て」

「おまえ リッサに馬鹿になる病気をうつしたなっ」

「ごじゃっ！」

「どーゆー意味だよっ！」

「な、ナイスパンチ……」

「というか、世界が回ってるんですけど。いま。」

「ほう、そうかそうか。リッサ君は私と同列に扱われるのがそんなに嫌か」

「え、いや、そういうわけじゃないんだけど」

「悲しいよお〜、さみしいよお〜」

「あ、え、その、えっと、」

「サリ、この悲しみを癒してくれ〜」

がばつ。

すつ。

どんがらがっしゅーん！

「足が甘い」

「……………」

いま、俺はベッドにうつぶせに寝た状態から足払いという神業を見た。

そもそもサリ、こっちを見てすらいなかったし。

「な、なんか、レベルの違いが見えた気がするんだけど」

「気にするな。気にしたら負けだぞ」

ふたりに汗を垂らしながら、ささやき合う。

と、サリがこちらを見た。

「ん、どうした？」

「思い出した。ライ、分け前は本当にあれだけでいいの？」

「ああ。しょせんあぶく銭だしな。あれ以上は要らない」

「マイマイに気をつけているのなら、気にしなくていいのに。あれは彼女も納得していることだし」

「そんなんじゃないやねって。使い道が思い浮かばないときに大金をもらっても、せいぜい物盗りのカモにしかならないだろ。それだけのことさ」

「……………えっと、なんの話？」

「竜の死体を売った金の話だよ」

けつきよく、あの戦いに参加した全員で山分け（マイマイは除く）ということの話がまとまったのだが。

竜の身体の詳細など、相当な大都市でないと存在しない。

ここから最も近い大都市といえば『北の都』ことヴァントフォルンなので、それまで収入はお預けということになった。

それでも、金貨換算で3000枚から4000枚クラスの収入があるだろうというのだから、すごい額だ。

「ボクは、狩人として正当な報酬だと思ったから、素直に分けても

らうことにしたんだけど……ライは、どうしたの？」

「剣を買い取れる分だけで、後は辞退した」

「えー！？」

俺は肩をすくめて、

「あんまり隊商に長居したくもないからな。それくらいはもらっておきたいと思った。後は、まあ、べつに欲しくねーや」

「だ、だって、金貨200枚以上だよ？ あんまり贅沢しなければ、一生暮らしていけるくらいの」

「やだ」

「やだ、って」

「そんなつまらない人生、まっぴらごめんだ。金儲けをするのはいが金持ちになるな、ってのがクラックフィールド家の家訓なんだからな」

それに、たいして苦労しないで金ばっかもらっても、どうせすぐなくなっちまうに決まってる。

なら一切もらわなくて、べつにたいして変わらないだろう。

「それで、その……ヴァントフォルンに着いたら、ライはどうするの？」

「ん？ そうだな、どうしようか」

とりあえず剣はこの隊商から買い取るとして、後はどうするか。

護衛の賃金は、そこまでの日数分はもらえるだろうから、数日は路銀に困ることはないだろう。それで旅に出るのもいい。

隊商に残って、もうしばらく護衛を続けるのもひとつの手だ。

それとも

「まあ、とにかくそれはずいぶん後の話だな」

さしあたり、今日向かう場所も分からない状態で明後日の予定を立ててもしかたがない。

「で、最初の質問にもどっていいか？」

「え、ああ、今日どこに行くか、だっけ？」

「ああ」

「んー、たしか、岩巨人の集落へ向かうって話だったけど……」

「……取って食われたりしないよな？」

「あはは、そんなことはないと思うよ」

気楽に笑う。

(そういや、こいつはたいして心配する必要もないのか)

そもそも、神殿に巨人や小人、人間の区別があるわけでもない。

人間にとつての神殿は、巨人にとつての神殿でもあるのだ。

だから、神官であるリツサには、岩巨人を怖がる理由は特にないのだろう。

「それに、先行した魔人さんたちのひとりは大歓迎されたって話だったから、いまさら変なことをされる危険もないと思うけど？」

「だと、いいんだけどな」

俺は馬車の窓から外をながめた。

鬱蒼と茂る森の上に、さんと照る太陽が見える。

いつもの風景。

だがその光景に、なぜか俺は奇妙な胸騒ぎを覚えた。

(気のせい……だよな?)

名状しがたい不安を抱えたまま、馬車は進んでいく。

木の頂点から頂点へと、飛び移る。

下に行く馬車に並走しながら、呼吸は寸分も乱れることはなく。

そのまま、手に持っている架空の『剣』を、くつきりとイメージする。

抜いた。

しゃん、という硝子の鳴るような音がして、剣が彼の手に現れる。

(かつては抜く動作を擬してやらなければ召喚できなかったのだが

慣れたものだ)

苦笑。

そのまま、彼は大きく剣を振りかぶり、

「はあっ……！」

木から飛び降りつつ、振り下ろした。

いくつもの幹を剣が打ち、そのまま『通過』していく。

ざ、と地面に着地。

数瞬後、こつん、という音とともに一本の枝だけが地面へと落ちた。

召喚と送還を一瞬のうちに幾度もくり返し、狙った枝だけを落としたのだ。

ぱち、ぱち、ぱち……と、拍手の音。

「けっこう、けっこう。なかなか面白い芸だったぞ、弟子」

「べつに、貴様に見せるための芸でもないのだがな」

つぶやきながら、彼は振り返った。

そこに老人がいた。

しわがれて力のない、どこにでもいそうな外見だが、彼はその老人の本質を知っている。

「なぜ、このタイミングで僕の前に姿を現した？ 妖術師」

「冷たいなア、弟子よ。昔のようにお師匠様と呼んではくれぬのかね？」

挑発的な、いやらしい口調だった。

だが、彼はそれに惑わされない。

「幻像ごときがよく轉る。僕に斬りたいなら、本体が出てくるがいい」

「ク　ははは！　よくわかっているじゃないか」

愉快そうに笑って、老人は続けた。

「なあ、弟子よ。いや、シン・ツアイと呼ぶか、それとも敬意を込めて『殿下』とでも呼びますかな？」

「呼称などどうでもいい。さっさと用件を言え。それとも今すぐ斬

「られたいか」

「なに、たいしたことではないよ。弟子よ、わしの下へ再び来る気はないかね？」

「ぴくん、と眉を跳ね上げる。」

「なんだと？」

「この際、下らぬ腹の探り合いは無用。主が、あいかわらず力を欲していることは承知しておる。交換条件と行こうではないか」

「……………」

「今日、ふたつの神器がひとつの場で邂逅する。わしの求めるのは、どちらでもよい、そのうちのひとつだ」

「黙れ」

「用件を言えと言った次は、黙れ、か？ 忙しい男よのひひひ、と老人は笑う。」

「だが遅い。もう主は、わしがなにを求めているのか知ってしまったのだからな。いまは、それでよい」

「黙れっ……………」

「ざ、とひとつ踏み込む。」

「そのとたん、ぐにやりと世界が曲がった。」

「！？ く、捕縛結界だと！？」

「あわてて手に持つ剣を構え、そして、

「斬っ……………」

「直接斬るわけではなく、『斬った』というイメージを「召喚」する。」

「結界はその構成する呪詛を断ち切られ、あっさり霧散した。」

「だが、そのときにはすでに老人の姿は掻き消えている。」

「危ない、危ない。幻影すらも切り伏せるカイ・ホルサの夢幻刀儀

「危つく身体で味わうとところであったわい」

「笑いを含んだ声だけがその場にひびいて、そして一切の気配が消滅した。」

「下らない手品を……………」

ぎり、と奥歯を噛みしめる。
あたりはすでに、まるでなにごともしじなかったかのように、静
まり返っている

異形の集落。

最初に見た印象は、そんなものだった。

強烈に切り立った岩山の中腹がくり抜かれ、たくさんのほら穴が
できている。

岩山の頂点のほうには、煙を吐き出す小さな穴がいくつも並んで
いる。たぶん煙突とかだろう。

中腹のほうのほら穴は、おそらく住居なのだろう。が、入る方法
がない。

いちおう、ほら穴とほら穴の間にははしごが掛かっているのだが、
ほら穴と地面の間をつなぐはしごがないのだ。

「よ、よじ登れってか？」

「あはは。まさか」

横にいたクランに苦笑された。

「ほら、地面のそばに目立たないほら穴があるでしょう？ あそこ
から入って、中の通路を登っていくのですよ」

言われてみればたしかに、岩山の隅に小さなほら穴が作られてい
る。

「なんだってそんな不便なことを……」

「大型の魔物が入って来れないようにするための工夫ですよ。たし
かに、我々にとっても多少不便ではありますが。」

ま、百聞は一見にしかずと申しますから。ともかく入ってみまし

「よう」

クランがそう言ったとき、ちょうどそのほら穴のなかからひとりの男が出てきた。

出てきた のだが。

「……うわ」

でかい。

信じられないほど、でかい。

身長は俺の倍近い。腕の太さも尋常ではなく、丸太みたいだ。

そいつは岩巨人族の礼装に身を包み、こちらを見て丁寧に辞儀をした。

「どうやら、あれが出迎えの方のようですね」

「なあ……ほんつとーに、食われたりしないよな？」

いちおう念を押すように俺は言ったが、クランは気楽そうに笑いつつ、

「いざというときはしっかり守ってくださいね、ライ殿」

「……………」

さりげに無茶なこと言いやがる、このじいさん。

「たぶん大丈夫だと思う」

「うわわっ!？」

背後からいきなりサリにささやかれて、思わず絶叫する。

「お、おまえ、ベッドから出てきていいのかよ!？」

振り向きざまに問うと、彼女は首をこくん、と振った。

「もう治った」

「治ったって、おい」

見ると、たしかに今朝がたまであったやけどの跡などが全部消え失せている。

「って、よく考えたらおまえ、服だってポロポロじゃなかったか？」

「二着もおなじものを持ってたのか？」

「ちがう。そつちも直っただけ」

「直った……って、継ぎの跡があるようにも見えないけど？」

「再生魔法」

「……あ、そう」

便利なやつ。

などとやっているうちに、気がつけば横にいたクランが馬車から降り、出迎えの大男と話をしている。

もう一度、集落に目をやる。

いくつかのほら穴から、住人らしき人影がちらほらと見え隠れしていた。

注目されているらしい。

(なんか……どっちにしても、めんどくさいことになりそうだな) 　なぜかは知らないが、そんな気がした。

「で、なんで俺たちだけ先行してるんだ？」

洞窟のなかを進みながら、俺は横にいるリッサに小声でたずねた。リッサはちよつと小首をかしげて、

「わたしもぜんぜん事情は聞いてないんだけど……ライも知らないの？」

「ああ。なんか、説明もなしにいきなり放り込まれたぞうなずく。」

『お二人には先にお越し願います』

とかわれて、説明を求めるにもあまりの巨体にびびって気後れしているうちに、いつのまにか事態のほうが勝手に進んでいたのだ。

と、その男がぴたりと足を止め、後ろを振り返った。

「どうかいたしましたか？」

「え、えつと……」

(う……なんか苦手だ。こいつ)

べつに相手がこちらを威圧しているわけではないが、上から見下ろされるとどうにも気圧されてしまう。

「あの、ドッソさんでしたっけ？　どうして我々だけが先行してい

るのか、事情をおたずねしてよろしいでしょうか？」

まごまごしていると、代わりにリッサが言った。

男はうなずいて、

「私も祭り役から指示されただけですから、詳しくは存じませんが

『生贄』が、最初にあなた方にご挨拶したいとのことでした」

「『生贄』？」

穏やかな口調に似つかわしくない、物騒な単語だった。

俺はよくわからなかったが、リッサはどうも相手がなにを言っているか見当がついたらしい。少し顔をこわばらせた。

「『生贄』って　まさか、女王の？」

「はい。今日、現世に留まっておられる大巨人の一柱、その化身であらせられる御方でございます」

「こんなところにいらっしやっただなんて……知りませんでした。

てつきり、北の帝国に未だ留まっておられるかと思っていたのですが」

「なあ、ぜんぜんわかんないんだけど　リッサ、知り合いなのか？」

訊くと、リッサは白い目でこっちを見返してきた。

「なんだよ？」

「キミねえ……岩巨人族のこと、いくらなんでも知らなすぎ」

「そ、そうか？」

「そうだよつ。そもそも、女王クイーンの話なんてそこらへんの子供だって知ってるくらい有名なんだからっ」

びしっ、と指を突きつけながら、言う。

俺は、ううむとうなると、

「そうか。そんなに友達が多いのか、そのひと」

「違うでしょっ！」

びしっ、とつつこみ。

「なんか俺、へんなこと言ったか？」

「ねえ、ひよっとして……からかってる？」

「いや、そんな気はカケラもないので拳は引つ込めてくださいお願いします」

土下座せんばかりの勢いで言う。怖い。げんこつ怖い。

大男は、ごく平然とうなずくと、

「無理ありません。人間と我々の間には、目立った交流があるわけでもありませんから」

「そ、そーゆー問題かなあ……だって、神話のことを少しでも知ってれば、ぜったい出てくる名前なのに」

「ああ、そりゃ無理だ。俺、休息日の説教はほとんどサボってたし」「いばって言わないのっ」

こほん、とひとつ咳をして、リッサはこちらに向き直った。

「巨人のことは、さすがに知ってるよね？」

「ああ。神話の悪役だろ？」

「ごんっ。」

「あいててっ。なにするんだよっ」

「バカじゃないのあんたはっ！ この、このっ」「げしげしと蹴りをたたき込まれる。

「いて、いてて、ちよ、ちよっとタンマっ！」

「よ、よりによって巨人族の前でなんてーこと言っかなキミはっ！

? ほら、さっさと謝りなさい！ 早く！」

「あ、ああ……」

とりあえず、この騒ぎに表情も変えぬまま突っ立っている男のほうを向いて、頭を下げる。

「なんか、気に障ることを言っちゃみたみたいだな。悪い」

「いえ。もとより知識がないのであれば仕方のないことです」

穏やかに彼は言ったが、そのあと続けて、

「しかし、岩巨人の集落のなかで巨人を中傷するのが賢明でないのは事実です。以後はお控えください」

「わかった。ただ、理由だけでも教えてもらえないか？ どうも俺はそういうことには全然疎くてさ」

「構いませんが、それらのことについては、私よりもその神官様にお尋ねになられるほうがよろしいかと存じます」

ふたりの視線が、リツサのほうを向く。

注目されて一瞬リツサはたじろいたようだったが、すぐに気を取り直したみたいだった。

「まあ、たしかに今の神話知識でこいつを野放しにしておく、ろくなことになりそうもありませんからね」

言って、解説を始める。

「まず、むかーしむかし、神と巨人というふたつの種族が戦争をやっていたの。それは知ってるでしょ？」

「ああ、それくらいはな」

「で、人間や小人族は神のほうにいたから、人間社会では巨人を敵役と見なしているの。それが、キミがさっき言ったことね」

「ふむふむ」

「けど、巨人族って言われる人々は、巨人のほうにいたから、神が敵役なの。わかる？」

「……それってつまり、伝えられている神話自体がちがうってことか？」

「ううん、内容は一緒よ。解釈がちがうだけ。」

起こったことはおなじだけど、立場が逆転して語られているの。わかるでしょ？」

「んー……まあ、だいたい。」

けど、意外と生々しいんだな。神話って」

吟遊詩人の弾き語りみたいなイメージしかなかったから実感がなかったが、そういう話を聞いていると妙に現実味がある。

「そうだね。ほとんどの神と巨人は死んでしまったから、実感が沸く話じゃないかもしれないけど。」

けれど、少なくとも過去に関して神話は現実の歴史と一致しているの。人間が巨人族と仲が悪いのだから、基本的には神話が原因なんだから」

「ああ、それはわかった。けど……」

俺は、ちらつと大男のほうに目を向けた。

「さつき、なんか『生きている巨人がいる』みたいなことを言うてなかったか？」

「はい。たしかに申しました」

「……巨人つて、まだ生きていたのか？」

「ほとんどいないけどね。神力が未だに現世に残っている神や巨人人も、いくらかはいらっしやるの。」

岩巨人族の信仰を集める女王も、そのような方々の一柱に当たる

わ

「女王クイーン　つて、名前はないのかよ？」

「さあ、それはわからないけど。」

トマニオの聖典にも記述がないみたいだから、ひよっとしたら本当に無名なのかな」

小首をかしげて、リツサ。

まあ、本職が言うのだから、本当にわからないんだろう。

「で、その女王クイーンだけど、肉体はすでに滅ぼされて久しいの」

「死んだのか」

「形式的にはね。けれど女王クイーンも上級神格者だから、そのくらいでは干渉力を失ったりしなかったの。」

具体的には、岩巨人族の『生贄』と呼ばれる存在を自分の代理として、それに力を行使させることで、女王クイーンは己の存在を維持しているわけ」

なんか、難しい話になってきた。

「まあ、要するにその『生贄』つてのは神さまの代理みたいなもんなわけだな？」

「神じゃなくて巨人だけど、まあそんなものね」

「ふーん……で、その『生贄』とやらが、俺たちを先に呼びつけた、と」

首をかしげる。

「なんの用だろうな？」

「なんの用だろうね？」

「なんの用でしょうね？」

「……おっさん、あんたまで言うな」

「失敬。期待されているように見えましたが」

……意外とおちやめだな、このひと。

「ともあれ、ここで止まっても埒が開きません。そろそろ進んでよろしいか？」

「ああ。すまんね、時間を取らせて」

言つて、ふたたび歩き出す。

曲がりくねった洞窟の道を進み、やがて俺たちは大きな広場に出た。

明るい。

それまでは道に点々とかけられたランプの明かりが周囲を照らしていたのだが、この場所は外の光が差し込んできている。

向かって左手のほうに大きな穴が開いていて、外につながっているのだ。

「ここが、契約の間でございます」

「契約？」

「ええ。我ら岩巨人が女王クイーンとの契約を交わすときに用いる場

そして、祭儀を執り行う際に用いる場でもあります」

見ると、広場は森のなかではあまり見ないような草やこけで覆われている。

洞窟のなかという特殊な環境と、光の差す場所というのがうまく合わさつて、こういう状態を作っているのだろう。

その広間に、たくさん岩巨人たちが集まっていた。

大きさは、総じて人間よりはやや大きめ。

みな、このあたりでは珍しい東方風の衣装を身にまとい、にこやかにこちらを見つめている。

そして、その奥。

(……っ)

息をのんだ。

その女の子は たしかに、尋常じゃなかった。

外見は、あくまでただの少女。人間の子供と比較してもなお小さく、周囲の巨人たちと比べるとだいぶ浮いて見える。

両の腕には、鎖をあしらった風変わりなアクセサリ。たぶん、それが『生贄』のしるしなのだろう。

が、問題はそんな外見じゃなかった。

雄大な まるで山脈を見上げているような、途方もない神秘。

特に動きはなくても、ただそこにあるだけで吞まれてしまうような圧倒的な存在感。

それが少女を取り巻いていることを肌で感じる。

(あれが 『生贄』)

「どうしたの？ 顔色、悪いけど」

「え？」

リッサが、不思議そうに俺のほうをのぞき込んでいる。

気づいて、いない？

「あ、ああ。なんでもねえ」

「そう……？」

「ア・キスイ」

少女へ向けて、男が深々とおじぎした。

「ア・キスイ。お客様をお連れいたしました」

「ご苦労さまです。ガルヴォーンの君」

少女はかすかにほほえんで、言った。

「そして、ようこそ。神話に縁ある方々よ。

クイーン
女王の代理として、あなたたちを歓迎いたします」

通された部屋は、どうやら賓客用に特別に用意されたものようだった。

(はぁ……なんか、調子狂うなあ)

豪華に飾りつけられた部屋をながめながら、ため息。

あの後。

例の『生贄』とかいう女の子に気圧されてなにがなんだかわからないうちに、気がついたらひとりでこの部屋にいた。

移動した記憶がほとんどない。途中、どういふ会話をしたのかもよく覚えていない。

それだけ衝撃が大きかったということだが、しかし、

「あの気配が女王^{クイーン}だったのかな」

独りごちる。

窓の外に目をやると、どうやらこの部屋は岩山の壁面に位置しているようで、眼下に森を一望できた。

真下を見ると、もう隊商の馬車もあらかた岩山のなかへ入ってきているようだ。

(てことは、そろそろみんな来てる頃だっということかな)

出迎えに行つたほうがいいのかもしれないが、どこに行けばみんながいるのかもわからない。

というか、勝手に部屋を出ていいのかすら、よくわからない。

(まあ、いけないって言われたくらいで、おとなしくするつもりもないけどな)

苦笑する。

ここのところ、どうも自分のペースが乱れているみたいだった。

そもそも、お上品に相手のペースに乗っかっているなんて、大悪党にはふさわしくない。

「いよっしっ」

ぱんぱん！ と顔をたたいて、それから俺は颯爽と外へ歩き出し

た。

(まずは、みんなを探して歩き回ってみよう)

で、迷った。

「……………」

行けども行けども、洞窟。

まあ、当たり前だ。村自体が岩山のなかにあるのだから理の当然
なのだが。

さすがに、こつも風景が変わらないと土地勘のない人間にはきつ
い。

(むむむ……………右に行くべきか左に行くべきか、それとも中央を進む
べきか)

ちよつと迷ったが、すぐ決めた。右にしよう。

(困つたらとりあえず右にならえ、つてのがクラックフィールド家
の家訓だしな)

微妙に家訓の意味を取り違えている気もしたが、気にしない。

進んでいくと、だんだん周囲の風景が変わってきた。

意識はしていなかったのだが、それまでの洞窟では周囲全体がう
すすらと明るかった。歩くのに困らない程度の明度はあったのだ。

それが、ここにきて失われつつある。

(たいまつなしでこれ以上進むのは危険かな)

そう思うほどあたりが薄暗くなった頃、不意に通路の奥から小さ
な明かりが見えた。

自然の光……………じゃ、ない。

どこか見覚えのある、透き通るような白光。

「……………」

不思議な感覚。

それに導かれるようにして、光のほうへと向かう。

やがてたどり着いた先は、空洞だった。

(でかいな)

素直に思う。

人が掘り抜いたとはとても思えない、巨大な空間。

床には一面に奇妙な図形が描かれていて、ここが特別な場所であることが見て取れる。

その中心に、光の主はいた。

「誰ですか？」

どきん、とする。

光の主は　あの、少女だった。

「よ、よう……」

「……あ」

おたがいに、呆然としたまま見つめ合う。

……　なんか、きまづい。

「あ、ひよつとして邪魔だったか？」

「い、いえ、そんなことはありませんけど……」

もじもじしながら、言う。

その姿には、さきほどまでの威容はみじんもない。

(なんだったのかな、あれは)

ふと、気づく。

この光　彼女が胸に付けたペンダントからあふれる、白い光。

それは、俺が剣を抜いたときに現れる光と酷似していた。

「その、ペンダントか」

「はい」

あいまいな言葉だったが、正確に意図を読み取ったのだろう。少

女はうなずいた。

「女王の神器。これを継承するのが、わたしのお務めです。」

あの……えと、すいません。お名前をお聞きしてよろしいでしょ

うか？」

「ライナー・クラックフィールドだ。ライで通ってる」

「ライさま、ですか」

「ああ。あんたは？」

「キスイです」

「名字は？」

俺の言葉に、少女はちよつとだけ首をかしげた。

「えと、家柄名のことでしょうか？」

「たぶん」

「それでしたら、わたしにはありません」

「え？」

少女は胸のペンダントを指して、

「『生贄』は、女王クイーンの代理ですから。

巨人である女王クイーンに、親類がいるのはおかしいでしょう？ だから

『生贄』はふつう、家柄名を持たないんです」

「あ、そういうことか。」

あれ、でもさっきのでかい奴は「ア・キスイ」って呼んでなかつ

たか？

「はい。けれど、その「ア」は『生贄』に対する敬称ですので。

お客様である、ライさまが付ける必要はありませんよ」

「……なあ、ひとつ聞いていいか？」

「はい？」

「なんで、俺のことをそんなにもてなしてくれるんだ？ 正直、心

当たりがぜんぜんないんだが」

素直に言っ。

相手は、きよとん、とした顔でこっちを見ている。

「その……なにか、妙なことでも？」

「たとえば、最初に俺とリッサだけが挨拶された理由とかも、よく

わからないんだけど」

「あ、それは……ええと、申し訳ないです。わたしの力不足でした」

ぺこりと、頭を下げる。

「え？」

「その てつきり、あなた付きの神官殿だと思ったものだから。一緒に呼ぶべきかな、と思って……見た瞬間、信仰的につながっていないことがわかって、失敗したなあと思ったのですけど」「待て待て待て話が見えない。どういう話だ」「えっと、ですから。」

その……その剣は、ライさまの神器ですよ？ だから 「……言われて、ようやく気づく。」

例の剣は、特に武装解除を要求されることもなく、腰にぶらさがったままだ。

「この、剣が？」

「はい。そうです。」

それを所有することは、この世界における『原初なるもの』を代理する証になります。

ええっと……つまり、神の代理ってことですね。この場合「

……神の代理。」

「俺が？」

「はい」

なんで？ と聞こうとして、思いとどまる。

(この子が知ってるはずもないよなあ)

「あの……」

ふと、彼女が問いかけてきた。

「なにか？」

「ライさまは、どの神を代理されているんでしょうか？」

……えーと。

「たしか、バルメイスって言ったかな」

「そうですか。では、上級神ですね」

「……上級？」

「はい。」

神や巨人と言っても、その間にも等級があるんです。

神であれば、亜神、下級神、上級神、主神という感じです。神殿

の神格等級だと、亜神が5級以下で、主神が2級ですね」

「1級は？」

「ええと……ほとんどいないんで、対応する呼称はないみたいです」
「いちおう、大神アフラ・マズダシンメルと逆神格サタンツエル・エ八は、1級に該当するはずですけど」

「詳しいな」

「祭り役ですからー」

えへへと笑う。

そこでふと、彼女はなにかを思い出したようだった。

「あの、すみません。先に用事のほう、済ませちゃっていいですか？」

「用事？」

「はい。祭り役としてのおつとめがあるんです」

「えと、よかつたらライさまも見ていきませんか？」

「え、いいのか？」

「原則としては、祭り役だけしか関わっちゃいけないんですけど……
……まあ、そもそもこの場所自体、わたし以外の立ち入り禁止なんですよね」

「……ごめん。知らなかったから」

「あはは、いいですよ。ライさまはちょっと特別ですから」

言って、それから彼女はくるりと後ろを向いた。

「じゃあ、ついてきてください。『聖堂』へご案内します」

「この辺は、光壁でないから歩きにくいんですね」

「光壁？」

「はい。」

ほら、集落の壁はうつすら光ってたでしょう？ あれ、光壁って言うんです」

「そっか。道理であたりが暗くなったわけだ」

「わたしは岩巨人だから、多少は夜目も利きますけど、人間のライさまにはちよっと暗すぎるかもしれないね。」

足下が危なくなったら言うってください。わたしのペンダントなら、神力を込めれば多少は光るので」

「ありがとう。けど、いまのところは大丈夫っぽい」

「そうですか……あ、そろそろつきますよ」

彼女の言うとおり、明らかにそこは終着点だった。

「……………」

「壁画、か？」

「はい」

不思議な絵だった。

本棚で埋め尽くされた大きな部屋。

死体がいくつも放置された荒野。

広大な海にかかった一本の橋。

氷に覆われた大地。

蛇のようによじれた炎のかたまり。

塔の上、一本の剣が突き立った花園。

それらが左から右へ、順を追うように描かれている。

無限図書館、無の砂漠、天乃橋立、氷雪原野、炎獄回路、世界庭園。
タイムレス・レコーズ、イメンズ・サハラ、アマノハンダテ、コキユートス、ムスベルヘイム・サーキゼサ

“果て”へと続く、旅の様子を描いたものです」

“果て”？」

「ええ。世界の“果て”です。」

すべての生命は、死によってこれらを通り、炎獄回路にて輪廻の輪に入り、また、世界へともどってくるのだと言います」

言ったその、瞬間。

「あ………！」
ぞくり。

鳥肌が立った。

彼女のつけたペンダントが放つ光が、さっきとは比べものにならないほどに鋭さを増している。

それは、まるで居ながらにしてこちらを押しつぶしてしまいそうなほどに強烈な

「ライさまには、わかるんですね。『降臨』の様子が」
「降臨………？」

「そうです。神格を上げ、女王^{クイーン}へと近づいた状態

この段階で、4級。神で言えば、下級神クラスですね。

あはは………まあ、3級くらいまで上げると、ちょっとわたしにもきつついんで………いつも、このへんで勘弁してもらってます」

「それって、調節できるものなのか」
「訓練すれば、多少は。」

最初はけっこう難しかったんですけどね。6級くらいで拒絶反応
出ますし」

言いながら、彼女はす、と右手で天を指した。

「女王^{クイーン}の名において、次の一日への祝福を与える！」

「うっ。」

風が鳴った。

彼女の周囲に立ち上った圧倒的な神気が、周囲に浸透していくのを肌で感じる。

「う、うわ………！」
刹那。

視る。

蛇のような炎。

世界を成り立たせる、大きな輪。

それは運命を司る車輪のように、世界を取り巻きながら回ってい

る。

いつまでも、
いつまでも

「さま、ライさま」

呼びかけられ、ふと我に返る。

(あれ?)

妙に、視線が低い。

さっきまで見下ろしていたキスイの顔が、いまは上にある。

膝を、ついている。

じんじんと手が痛む。

剣の柄を信じられない力でにぎっていることに気がついて、俺はあわてて力をゆるめた。

「な、……なにがあつた?」

「わかりません。祝詞を終えて、振り向いたらライさまが苦しそうに膝をついていて」

言いながら、彼女は心配そうにこちらの様子を見ている。

……なんなんだろう、本当に。

「蛇みたいな炎が見えた」

「え……」

「なんだかわからないが、それが見えた。たぶん、あれはその壁画の炎のかたまりだと思う」

「炎獄回路 ムスベルヘイム・サーキットウロホロス 転生の輪を視たんですか、ライさま」

「たぶんな」

キスイは、それを聞いて深刻な表情でだまりこんだ。

「どうした?」

「いえ。」

たぶんそれは、ライさまの剣がわたしの神器に反応して、運命律の流れを読み取ったんだと思います」

「運命律?」

「そうです。神話の決定する、過去から未来へと流れる運命の流れです。」

あはは……まあ、あらかたの神や巨人が死に絶えたいまとなつては、その力もだいたい弱っちゃっているんですけどね」

「そういつのつて、見えるものなのか」

「ええ。神格持ちなら。」

圧倒的すぎるビジョンなんで、視るとしばらく帰ってこれなくなるんですけどね」

そうか。

得心する。つまり、あの体験はキスイも経験済みなのだ。

「いろいろ大変だな、『生贄』つてのも」

「そうですね。」

でも、まあ、お務めですから……部族のなかで、役割を果たすのは当然ですしね」

「そんなもんか」

「はい、そんなもんです」

にっこり笑う。

ちょうどそのとき、遠くでなにか音が聞こえたような気がした。

「夕刻の号ですね。」

そろそろもどらないと、ご飯が食べられなくなるかも」

「じゃあ、もどるか」

「そうですね」

言つて、彼女は歩き出した。

「ついてきてくださいね。このあたり、迷うと面倒ですから」

「……じつは、さっきもう迷った」

「あはは、やっぱり」

(……………)

おかしいな。神格を制御できていなければ、運命律なんて視るは

ずがないのに。

……常態的に降臨している？

まさか、そんなはずはないですね。

そんなこと、人間の器でできるはずがないし……)

「ではみなさん、食前のお祈りを……」

「いっただつきまーすっ!」

「待てコラ」

がしっ。

「んにゃ!？ な、なにやおペイ、あたしの食事を邪魔する気?」

「やかまし。マイマイ、ためーも魔女ならこういつときの社交辞令
くらいは身につける」

「グリートくん、ごー!」

「アイ、ママ!」

「ぐおっ!?!」

べちーん!

「へへーん、邪魔はさせないんだからねーっ」

「あめえな、マイマイ」

ひよいつ。

「うわわわわわっ!? こ、こらちよつと、離しなさいよバグル
ルっ」

「はいはい、わかったからちよつとおとなしくしような。ちよつと
だからな」

「ばかー! ちかーん! へんたーい! きんにくだるまー!」

「なんだとこのやろっ!」

「なー、なんでもいいからさっさと食おうぜ。腹減ったよー」

「風情がありますねえ……」

「えーと」

「あれは無視していいぞ。当然だが」

「あ、あははははは……そうしたほうがよさそうですね」

苦笑いを浮かべて、それからキスイは祈りの姿勢を取った。

「では、各自、己の魂を託す者に向けて感謝を。いただきます」

『いただきまーすっ!』

「おっしゃあああ! 酒だ! 酒飲むぞ酒!」

「ほほほ、酒も食事も、ずいぶんとまたおいしそうですね」

「ひしひしまる〜」

「あ、あははは……みんな、できればほどほどにね」

「できると思ってるのか?」

「……やっぱ、無理かな」

「わたしが殺意の完全解放をすれば、いちおうみんな止まってくれると思うけど。」

やる?」

「やるなっ」

「す、すみません……あのひとたち、悪いひとたちじゃないんだけど……」

「あははは、いえ、おかまいなく!」

むしろ、ちよっと安心したかも」

「安心?」

俺の言葉に、彼女はテーブルの向こう側を指さした。

「がははははは、酒だ、酒持ってこいやあ!」

「うはははは、酒だ酒だ! このセンエイ様がぜんぶ飲み干してやるぜー!」

「おう姉ちゃん、いい飲みっぷりだねえ! おい、その樽持ってこい樽!」

「……ナチュラルに混ぜってやがるな」

「わたしは、お酒とかちよっと苦手なんですけど。」

うちの集落のノリはだいたいあんな感じなんで、みなさんが雰囲気負けしたらどうしようかと心配してたんですよー」

「ていうか、あいつら最初からあのペースで続くのか……?」

「たぶん、これから加速度的にヒートアップしていくと思いますけど」

マジかい。

(とりあえず、静かなほうでおとなしくしていよう……)

騒ぎの少ないほうへ来ているうちに、気がついたら隊商のひとつたちのところにおじゃましていた。

(さすがに、ここのおとなしそうな連中にあのテンションはついていけないか)

思っていると、

「おやライ殿、こちらに来られたのですか」

「ああ。騒ぎに巻き込まれないように避難してきた」と言っと、クランは苦笑したようだった。

「私も、この年になってあそこまで騒がしいとどうも疲れてしまってますな。まあ、ゆっくりやりましょう。ところで……」

俺が来た方へ視線をやって、

「さっきの娘さんが、『生贄』なのでしょうかな?」

「知ってたのか」

「ははは。まあ、有名ですからな。岩巨人の信仰形態は。」

かつて『生贄』が北の帝国にいらっしやったころは、主要な巡礼先にもなっていた様子でしたし。

それも、百年前に『生贄』が出奔なさられてからは途絶えたようですが

「……え?」

ちよつと待て。それって

「なあ。ひよつとしてあの子って百歳以上?」

「ははは。まさか。」

『生贄』は、20年ごとに交代するのですよ、ライ殿」

「あ、そういうことか」

「ええ。ふつう『生贄』となる娘さんは生まれた直後に選ばれ、それ以降20年だけお務めを果たす習わしですから。

ですから、あの娘さんもおそらく外見と実年齢はおなじくらいでしょうな」

ふと。

「……どうかいたしましたかな？」

「いや、なんでも……」

なぜか、不思議な違和感を覚えた。

……なんだろう。

(ちよつと、いま、妙な感じがしたんだけど……まあ、いいか)

「んじゃ、そろそろまた適当に移動するわ」

「ええ。では」

挨拶して、俺はべつの場所に行くことにした。

てくてく歩いていたら、神官たちの席まで来ていた。

……来ていたんだ、けど。

「なんでおまえしかいないんだ？」

なぜか、席に座っていたのはリツサだけ。

「ええつと……いや、これには深いわけがあつて……」

「？」

びしつ、と、リツサが指差す。

その先では、

「いやあはっはっは。手前と致しましても、こうもうまいとつい酒が進んでしまいますなあ！」

「うへえ、すっげえなあアンタ。底なしだぜこりゃ」

「ちゅーか、樽一個丸々ひとりで開けやがったあ！？ バケモノか

おいー！」

「おーい、こつちにもつと酒だ酒！ とんでもねえのがいるぞー！」

「……外見通りというか、なんというか」

「ボクだって、そんなにお酒が弱いつてわけじゃないんだけど。」

さすがにスタージン神官とは、ちょっと、張り合えないっていうか、巻き込まれたくないっていうか。

あはは……逃げてきちゃった」

「その気持ちは、痛いほどわかる」

「うう……オトナのお付き合いって、つらいよねえ」

しみじみ言いながら、ぐびびっ、と一息でカップの酒を飲み干す。

「なあ……おまえ、じつはけっこう酔ってる？」

「んー、どうだろ。」

まだ足腰には来てないと思うけど……このお酒は口当たりがよすぎるから、気がついたら酒量を過ぎてるってことはありうるかも
言いながら、とぼとぼとぼ……と注ぐ。

(じつはこいつ、けっこう酒飲みか?)

「キミも飲む? わりとおいしいよ、このお酒」

「いや、いい。酒は前に飲み過ぎて懲りたことがあるし」

「……おいしいのに」

むー、とすねる。

「ともかく、酒はいいから」

「残念。あはは」

「おまえも、そこそこのところで酒は抑えとけよ。倒れても面倒なんか見てやらないからな」

「はぁーい」

生返事を聞きながら、俺はべつの場所へ向かうことにした。

気がついたら、もとのあたりまで戻ってきていた。

「そういえば、あんたはあの輪に参加しないのか？」

キスイのとなりでちびちび飲んでるドッソに話しかける。

「『生贄』の護衛をするのが私の勤めです」

「そうなのか。大変だな」

「いえ。集落のなかで、自分の勤めを果たすのは大切なことです
謹厳そつに言う。」

(キスイといいこいつといい、岩巨人ってのはみんなまじめだなあ)
と。

「なあ〜りおはひめふってふんれすかあ」

「うわっ!?!」

いきなり横から割り込んできた女が、意味不明な言語で男に話しかけた。

「ラ・ジロロ。なにを言っているのか聞き取れないのですが」

「らあ〜、だらしろはらひらひへへっへひふへへふはあ」

「……………いや、だから」

「えーと、『わたしの話が聞けないっていうんですかあ』って言うてるんじゃないかと思えます。たぶん」

「ひふいさまあ、かひこいれすねえ。うー、かはいいかわひい
なでなで。」

「…………ジロロ、お酒は控えるようにって言ったはずですけど」

「らっひええ、いっぱいいられますよ、いっぱい」

「一杯でもそうなるから控えるようにって言ったんですよ？ もう、
しょうがないなあ……………」

「ひふいさま、かはいいつ」

「うわあ、く、くっつかないでくださいよっ。お、お酒くさいっ」

「うにやはははははは、ごろごろごろごろ」

「…………なあ、助けなくていいのか？ あれ」

「以前にも、おなじようなことがあったのですが。」

その際、『これは祭り役の仕事の一環だから邪魔しないように』
と言われましたもので。以後、邪魔しないようにしております」

「……………」

だめじゃん。

「す、すみませんライさま。ちょっと席を外させてもらいます……………」

「きふいさま、いかないれえ〜」

「あなたを隔離しにいくんですつ。ほら、さつさと立つ、立つ！」
「ええ、しよんなあ」

(……まあ、岩巨人つたつてそんなもんだよな)
妙に達観したことを考えつつ、俺はとりあえずべつの場所へ行くことにした。

などと、てきとつに過ごしているうちに宴も終わり……

宴会の後。

「ラ〜イ〜くんっ」

「うわあっ」

がばっ、といきなりセンエイにひつつかれる。

「な、なんだよ。酒飲み過ぎて頭がいつちまつたか？」

「いやあはっはっは。あいかわらず殺したくなるほど失敬だな君は」
陽気に笑いながら額に青筋を立てる。……器用な奴。

「まあそれは置いておくとして……ずーいぶん仲よくなつたみたいじゃないかね、『生贄』の女の子と。んん？」

「あん？」

「あてがわれた部屋にいないからどこに行ったのかと思えばいっしょに帰ってくるし、夕食の席でもずいぶん話が弾んでいたようじゃないか。なあ？」

ああ、つまり。

「おまえ、サリに相手にされないからって今度はキスイを狙っているのか？」

「ばばバカを言うなっ！ 私がいつ、サリに相手にされなかったと言っただ！」

「わりといつでも」

「しくしくしく……」

あ、いじけた。

「と、ともかくだつ！ サリを狙う私にとって、最大の潜在的ライバルがライくん、君なわけだ。わかるな？」

「……なんで？」

「であるからして、その君がサリでない女の子とくつついてくれるのはまことに僥倖っ！ むしろぱへくつつ！」

「ひとの話を聞けよ……」

「そして浮気者のライくんに幻滅して傷心のサリを優しくいたわってあげるのがこの私っ！」

『ライのばか……』 『あんな男のこと、もう忘れるよ。しょせん遊びだったんだよ』 『センエイ……ありがとう。あなたって優しいのね』

ふ、ふふふ、ふはひはあははははっ！ いける、これならいけるぞっ！ 今度こそサリの心は私のものだあーっ！」

「煩い」

「ぎゅっ！」

「お、おうううっ！？ なんかみぞおちのいーところ不可解な打撃が……！」

「ライ、あつちで神官のひとが呼んでる」

「あ、そう。」

「ところでサリ、いつからそこにいた？」

「最初から」

「……」

「……あいかわらず、気配のかけらもない奴。」

「まあ、なんだ……苦勞してるな。おまえも」

「このひと月でだいぶ慣れたけど。」

「……でも、いまだにセンエイの趣味は理解できない」

「つつつつ」

「ともかく、これから魔人のみんなと部屋割り決めるから、センエイは連れて行く」

「お、覚えてるよライナー・クラックフィールド！ この借りはい

つか必ずううっ!」

ずりずりと、襟首をひきずられてセンエイ（&サリ）は去っていった。

（……ていうか、なんで俺を敵視するんだ？）

やっぱり、馬鹿は理解しがたい。

「あ、ライ!」

リツサは、さっきあてがわれたばかりの俺の部屋の前にいた。

「どうした？　なんか、用があるって聞いたが」

「うん、じつはちょっとお願いがあるんだけど」

「お願い？」

「うん。あのさ、部屋換えてくれない？」

「なんで？」

「いや、そのさ。ライの部屋って、いちおう窓から外を見渡せる場所なんでしょ？」

テント暮らしの長い高原小人族としては、やっぱり外が見える環境で寝たいなあ、って」

「あ、そゆことが」

まあ、たしかに密閉された空間は彼女にはきつそうだ。

「べつにいいけど、いちおうみんなにはそのこと言っておけよ」

「え、なんで？」

「いや、ほら、朝イチに俺の部屋からおまえが出てきたら、いくらなんでもアレだろ」

「……そ、そだね」

実際それで大きく騒ぎ立てそうなのはセンエイくらいだろうが、いちおう予防しておくに越したことはない。

「じゃあ、さっさと荷物移動しちまおうぜ」

「うん。」

ありがとう、ライ」

「この程度、感謝されることじゃねーよ」

「うん。でも、ありがと」

にっこり、ほほえんで言う。

……なぜか、微妙に照れくさい。

「ほ、ほら、さっさと荷物もってこいよ」

「あ、うん」

ぱたぱたとあわてて、リッサは自分の部屋へと駆けていった。

(……ふう)

とりあえず俺も荷物をまとめるべく、ドアを開けて部屋のなかへ入る。

(荷物って言っても、ここに来てからもらったものばかりだけだな)

なにぶん、隊商にやってきたときは完全に着の身着のままだったし。

というか、剣すらここに来てから手に入れたものなのだ。

(神の剣、か)

正直、なんで俺が、という疑問は頭から離れない。

信心の面でははつきり言ってボロボロだし、由緒ある血筋ってわけでもないし。

まあ、けど。

(どっちにしろ、なるようにしかならないよなあ)

あっさり思考を放棄して、窓の外をながめる。

すでにあたりは完全に夜と化し、眼下には得体の知れない夜の森が、うっそうと広がっている。

ふと。

ひどくいやな予感を覚えた。

()

(気の、せいかな?)

眼下の森は、まるでこちらの視線など意にも介さぬ様子で、ざわざわと風に揺れている。

「ふふふ、朝はとんだ邪魔が入ってしまったが、今度こそ逃げられんぞ、忌まわしき神の尖兵めっ」

「うそこそ、こそ。」

「うーむ……おそらく、敵は最上級の部屋に泊まっているはずだな？ ならば、ここに違いはないっ！」

ぎいい……

「むづ……暗くて足下がおぼつかん。かといって神力を開放するわけにもいかぬし……」

なんだこれは？ んん？ 弓か？

まあ、いい……ほう、月明かりのおかげでだいぶよく見えるな。むむ、ずいぶんとひどい寝相を……

ふはは、熟睡しておる。今宵がきさまの命日とも知らずに。

食らえっ

ほいっ。

「さて、さっさと退散しよう。兵は拙速を尊ぶとも言つしな」
ぎいい……ばたん。

「うわきゃや……っ!?!?」

「なんだ!?!?」

ばっ！ と飛び起きる。

女の悲鳴……というか、

(リツサ か?)

ともかく、用心のために剣をひつつかみ、急いで部屋を飛び出す。リツサの部屋の前には、すでに人だかりができていた。

「あ、ライ兄ちゃんっ」

「おう。なにがあった？」

「ムカデだよムカデ！ こーんなでつかいやっ！」

マイマイが、両手をばっと大きく広げながら言う。

……って、おい。

「いくらなんでも大きすぎねえか？ それ」

言ったのだが、コゴネルが首を振った。

「それでもねえよ。マジでそんなくらいあつたし」

「ほっほ。あれは地底ムカデですな。害はないですが、いちおう立派な魔物ですよ」

「窓から捨てたのはいいけどよ……あれだけでけえと、はい上がってこないか無性にこええよな」

えーと。

「うぐ、えぐ、……ライいい」

「り、リツサ」

「ムカデがあ、ムカデがベッドにい……ぐすっ……えぐっ」

「泣くなつて。ほら、落ち着け落ち着け。もういないからさ。な？」
床にぺたんと座り込んでいるリツサを、必死でなだめる。

「ライいい……えぐ」

「なんだ？」

「部屋、換えて……もう、この部屋ヤダあ」

「わかった。わかったから泣きやめ。な？」

「うぐ……虫は、虫はだめなのお。虫、ヤダあ」

「わかったって。ともかくさっきの部屋行け。ここは俺が使つからな？」

「……うん」

なんとかリッサをなだめ、肩を貸して部屋のほうへ連れて行く。

「……ごめんね、ライ」

「謝ることじゃねーって」

「うん。でも、みんな起こしちゃった」

「困ったときはおたがいさまだって。それよりほら、さっさと寝な
いと明日に響くぞ?」

「うん。……ごめん」

部屋に帰ってくると、リッサの荷物がそこかしこに置いてあった。

「まあ、いいか。どうせ明日に渡せば問題ないし……」

つぶやいて、俺はさっさとベッドにもぐり込んだ。

「むう、失敗してしまったか。まさか、部屋を替えていたとはな。

だが今度こそはぬかりないぞ。集まっていた連中の話を立ち聞き
して、今度こそ奴の居場所を突き止めたからな。

そう、この部屋だっ」

ぎいい……

「むう……さきほどと違い、暗くてよく見えんな。

せめて奴の神器が確認できればよいのだが……まあ、仕方がある
まい。

食らえっ」

ペちよ。

「ふはははは。地獄を見るがよいわっ」
ばたん。

「ひびびびびびびあああーっ!?!」

「今度はなんだ!?!」

女の……というか、リツサの悲鳴。

また、とりあえず剣をひつつかみ、部屋から飛び出す。

部屋には、やはりすでに人だかりができていた。

「よお 遅かったな」

「……なにが起きた?」

無言で、コゴネルは部屋のなかを指差した。

「こ、この野郎っ! ちびのレトロスライムの分際で妙にすばしっこいっ……!!」

「さんかく」

「くきゆるるるっ」

「待たんかこのーっ!」

「……えーと。」

「なに、あれ?」

となりにいたサリに聞いてみる。

「レトロスライム。ゼリーの固まりみたいな魔物。」

すごく弱いから、あまり危険のないところではしか出ない。だから

「道案内」とか呼ばれてる」

「実害はないのか?」

「ちよつとかわいい」

「……いや、そんなこと言われても」

とりあえず、害はなさそうではあるが。

「う、うわあああああーんっ……ら、ライいいい」

「り、リッサ……お、落ち着け。とりあえず落ち着け。な？」

「もう、もうやだああ……気持ち悪いのはいやああ」

「わ、わかった。わかったから、ともかく落ち着け。な？」

すがりついて泣きわめくリッサをなんとかなだめながら、吐息。

「ほ、ほら。また部屋交換してやるからさ。な？ な？」

「ひっぐ、えっぐ、うっうっ」

「ほらほら、いいから肩つかまわって。……よいしょ」

ひょいっと、リッサをおぶさって歩く。

「うっぐうっぐ……うぐ、えぐ」

「ほれ、いつまでも泣かない！」

「うぐ、……うん。」

「ごめん、ライ。……なんか、みんなに迷惑かけまくってるね、ボク」

「だから、んなことわざわざ気にするほどじゃねーだろ」

「ん。……ごめん」

「……ふう」

さて、問題はこれからだ。

(これって、あきらかに人為的　だよなあ)

いくらなんでも、連続で魔物がリッサの部屋に湧くとも思えない。

それに、さっき俺が寝ていたときにはあの部屋には魔物なんかいなかった。

(リッサに恨みを持つたれかの仕業)

いや、けどなあ。あの腐れ神官補とかだって、さすがに魔物を仕

掛けたりはしないだろうし。

うーん……)

決めた。

(ちよっと、見回りでもしてみようか)

「ぬぬ、まさかまたもや部屋を替えているとはっ！ なんとという姑息な手段を取るのだ、外道めっ。」

「ふふふ、だが今度こそ逃がしはせんぞ。貴様を、恐怖のどん底にたたき落としてやるっ」

「ぎいい……」

「がし。」

「ふいっ？」

「ずりずりずり……」

ずりずり相手をひきずって、とりあえず人気のないところまで連れて行く。

「さて、ここまで来ればとりあえず寝ているみんなにも迷惑はかからない、と」

「ほい、と相手を押さえていた手を放し、問う。

「で、いったいなんのつもりだよ。キスイ」

「ええい、気安くわらわの名を呼ぶなっ」

「きっ！ とにらみ据える。」

「……えーと」

「てい、食らえっ」

「うわわっ！」

投げつけられたヘンな生物をとりあえずしゃがんでかわす。

「く、よけるなこの卑怯者ー！」

「……なあ、なんか勘違いしてたら謝るけどさ 別人？」

「誰がだつ!?!」

「いや、なんか昼間とぜんぜん態度がちがうから、双子の姉妹かと」
「そんなはずがあるか。女王の器クイーンがふたつもみつもあつてよいわけがなかるうっ」

「まあ、そこらへんはよくわかんないからどうでもいいや」
「どうでもよくなーいっ!」

「そんなことよりおまえ、なんでリツサに嫌がらせなんかしてるんだよ」

「だれがあんな木っ端神官ごときに嫌がらせなぞするかっ。」

「貴様だ貴様! 貴様を殺すために、我が忠実なるしもべどもを遣わしたのだ!」

「……俺?」
首をかしげる。

「いや、まあ、俺がターゲットというのはいいとしても。」

「毒もなんもなく気持ち悪いだけのムカデとか、ぷにぷにしてるだけのスライムとかで、どうやって殺すんだ?」

「うっうっうるさい! ともかく殺すと言ったら殺すのだ! おとなしく殺されるー!」

「んなこと言つたつてなあ……そもそも俺、なにか悪いことでもしたっけか?」

「ふん、決まっているだろうっ。神なんて存在自体が邪悪だ!」
「いや、そんなこと言われても……」

「昼間は猫の皮をかぶっていたようだが、どうせ夜陰に乗じてだまし討ちにでもするつもりだったのであらう!」

「であるからして、先制攻撃でその機先を制するのが理の必然というか当然というか、ともかくそういうわけで」

「って、こら、帰るんじゃない! わらわの話はまだ終わってないぞ!?!」

「……まあ、あれだ。夜は迷惑だから、戦争ごっこは昼間やるうぜな?」

「こ、こらー！ この、ひとの話をっ……………！」
聞く耳持たず、さっさと帰ろうとする。
その瞬間。

「うわ……………！」

轟、とすさまじい気配が背後に生まれた。

あわてて振り返る　と、そこにすさまじい光を身にまとった、
キスイがいた。

……………降臨、している。

とてつもない量の神気が周囲に満ちあふれ、彼女の周囲を取り巻
いている。

シヤレにならない迫力に、全身からどっと冷や汗が出た。

「くく……………奇襲は失敗したが、ならばわらわ自らが貴様を葬るまで
のこと。

見よ、この絶大なるパワー！　運命律すら操作する、大いなる神
話の力を！」

「う、運命律を操作する……………だと!?!」

「そうだ！」

この力を用いれば、念ずるだけで貴様は指一本すらわらわに触れ
ることができぬ！　なぜならそれが運命だからだ！

ふはははは、どうだ、手も足も出まい！　おとなしく参ったと言
えば命だけは助けてやってもよいぞ!?!」

「……………」

ふっ

「な、なんだ。その不敵な笑いは!?!」

「ひっかかったな。おまえの後ろを見てみる！」

「な、なにいつ!?!」

あわてて、彼女が背後を振り向く。

ひょいっ。

「……………む?」

「ふむ。これが女王クイーンとやらのペンダントか」

「あ、な、ああああああつ!?」

隙をついてあっさりスリ取ったペンダントをながめて、にへら、と薄笑い。

「まあ、いくら『生贄』って言ったって、ペンダントなしじゃ力も出ないよなあ」

「こ、この、返せっ」

「へっへーん。やーなこつた」

わざわざ彼女の手の届かない高いところにペンダントを掲げてみせる。

「この、このっ!」

「まあ、あれだ。おとなしく参ったと言えば返してやってもいいぞ」

「誰が言うか、この卑怯者!」

「ふふーん。聞こえないなあ」

「うあああああ! おのれ、こ、こうなったらっ!」

がしっ、と俺の剣の柄をひつつかむ。

「代わりにこれを奪ってくれるっ!」

「わ、ちょ、ちょっと待てそれは俺以外には抜けない……!」

「うりゃっ」

「うおわああっ」

ずべちやーっ。

ふたりして勢いあまってすっころぶ。

「い、いててててて……」

だ、大丈夫か?」

「きゅう……」

あ、だめだ。目え回してる。

自業自得、ではあるのだが。

(ひよっとして、いまこの場をだれかに見られたらおもいつきり俺がいじめているだけに見えるんじゃないか?)

そうなったらどうなるか、想像してみる。

「なんてひどいことを！ 食らえー！」
「どかーんっ！」

「ふん、天罰だよっ！」

(ぶるぶるぶる、想像するだに恐ろしい……)

なんで即座にリツサが浮かんだのかは不明だが、たぶん見つかった際に最悪の奴だからだろう。

ともかく、相手から売ってきたケンカとはいえ、子供、それも神扱いの超重要人物だ。なんとかフォローしておかないと、後がまずい。

「おい、大丈夫か？」

「あ、あうっうっ……」

ふらふらしながら、それでもなんとか彼女は立ち上がり、そして

「あれ？」

不思議そうな顔で、こっちを見る。

「どうした？」

「あ、えつと……ライ、さま？ なんで私の部屋に
きよるきよるとあたりを見回して、

「あの、……ここ、どこでしょう？」

「たぶん、廊下」

「ああああああああ、またですかっ！」

「……また？」

「す、すみませんっ」

ぺこりっ、と頭を下げる。

「あの、その、あのひとがまたなにかしでかしたようで

「……あのひと？」

「はい。」

女王の力を受け継ぐ、もうひとりのわたしです

「……………」

やっぱり双子？」

「そ、そういうわけじゃないんですけど。」

ええと、ようするにわたしがふたりいるんです」

……まあ、だいたい言いたいことはわかる。」

「普段は、主人格であるわたしのほうが強いんですけど……」

「眠ったり、強いショックがあったりすると、切り替わってしまうんです」

「その間の記憶は？」

「あったり、なかったり……いちおう、すごく強く念じれば、おぼろげに思い出すことくらいはできるんですけど。」

むこうはけっこうこっこのことを覚えていてるみたいなので、うらやましいんですけどね」

「で、それがあんな性格、ってことか」

「うう……なにがあったかよくわかりませんが、申しわけないです」

「まあ、気にするな。こっこのキスイのせいじゃないし。」

はい、ペンダント」

「あ、はい」

あわてて受け取って、そこでキスイはふと首をかしげた。

「ライさま？ あの、どうしてこのペンダントをライさまが持っておられたんでしょうか」

「いや、神なんて邪悪だから死んでしまえと言って襲ってきたので、自衛のためにしかたなく取り上げたんだ」

「あ、あうう……すいません。」

でも、へんですね」

「なにが？」

「えと、その、」

「もうひとりのわたしは女王^{クイーン}本来の人格だっという話なんです。」

ですから、ペンダントがわたしから離れれば消えちゃうんじゃないかな、って思ったんですけど」

「でも、ペンダント取り上げた直後には、直らなかつたぞ」

「そうですね。さっきの様子だと、地面に転倒したショックで入れ替わったようでしたから」

言って、彼女は考え込む。

「……えーと」

「あ、すみません。」

えと、ともかくもう夜も遅いので、いったん部屋に帰りませんか？

「いいけど、また寝たら入れ替わったりするんじゃないのか？」

「そこまで頻繁には入れ替わらないと思うんで、大丈夫ですよ」

「そっか。じゃあ、おやすみ」

「はい。おやすみなさい」

四日目：悪党、洞窟に放り込まれる

深い、深い空洞。

この空洞ができた年代は、それほど新しくはない。

過去、神や大巨人たちが空からの攻撃を恐れて地下へと潜伏したというのが、その原型。

その彼らがくり抜いた地底の迷宮を再発掘し、利用し、拡張し、そこに居住するのが、岩巨人たちの伝統的な生活のスタイルだ。が、

「不思議なのは、そのような住居の形態をしている種族が決して多くないということですね」

ラ・ジロロはそう、相手に語りかけた。

相手はこくりと首をかしげ、

「それは、不思議なことなのでしょうか？」

「ええ、もちろんです」

うなづく。

「もし、神や大巨人が勢力の本拠を地下に移したのなら、その傘下にあつた多くの種族たちも、そこに移住してしかるべきだと思つたのです。」

ならば、たとえば人間族などはなぜ、岩巨人族のように地下で生活していないのか。不思議でしょう？」

ハルカという名の、森小人の魔女は優雅なほほえみを崩さず、しかし首を振った。

「あまり不自然とも思えません」

「そうでしょうか」

「はい。この縦穴から漂う獣臭を考えれば、瞭然かと」

集落の突き当たりにはやや唐突とも言える形で空いたその縦穴からは、不気味なうなり声や悲鳴がひっきりなしに響いている。

洞窟という地形は、不可避的に魔物の自然発生を生む。

居住しやすい環境とは考えられない　そう、魔女は言っているのだ。

「音響制御の秘儀ミミカルで、この一帯の反響は極力抑えてはいるのですがやはり、不気味であることには変わりませんね」

「岩巨人のあなたでも、そう感じますか」

「岩巨人族は狩人です。そして狩人は、不必要な危険は避けるものです。」

まあ、ここを這い上がってくる魔物などがいれば、即座に狩り役が討ち滅ぼしますがね」

「岩巨人族においては、魔物と触れることは禁忌ではないのですね」

「無論です。魔術を学ぶことは禁忌ですが」

「その、禁忌中の禁忌である、ディアボロス霊魂技師の私を頼るのですか」

「それが必要ならば、禁忌を犯し罰を受けるのもまた、祭り役の使命です故」

静かに、相手を見る。

この得体の知れない、しかも唾棄すべき価値干渉能力の使い手である魔女は、けれども実力と人柄の双方においては非常に信頼できる相手だった。

「運命律が、波乱を呼んでいます」

「それは、神話に律せられる災厄が？」

「でしょうね。当代の『生贄』は未熟故に、未だそれを感知してはいないようではありますが」

「先代であるあなたは察知し得た。そういうことですか」
うなづく。

「無論、私の勘違いかもしれませんが、ですがこれほどの異変、確認してからでは手遅れです」

「それほどの、大きな変事ですか」

「ええ。」

すでに狩り役には通達しています。明日が無事に過ぎれば、おそらく我々だけでも状況に対処できるだけの準備が整います。

ですが明日に異変が起これば、そうはいかない。そのときのために、あなたたちの助けが欲しいのです」

「理解しました」

魔女はうなずいて、そして笑みを消してこちらを見た。

「それで、私になにを求めますか」

「智慧と、お力を。」

考え得る敵が何者で、なにを目的としているのか。想定される攻撃はどのようなものか。専門家でない私には、判断しかねます」

「目的は『生贄』です」

「……なぜ、そう言い切れるのです？」

「現在、この集落で価値あると思えるものはふたつしかありません。ライナー・クラックフィールド少年の持つ神鳴る剣と『生贄』です。

が、前者であれば、わざわざひとの多いこの地で襲うよりも、移動した後に襲った方が得策です。」

また、前者がこの場に存在するという情報を集めることも少なからず困難です。であれば、後者が目的であると考えるのが妥当でしょう」

「ふむ……」

「目的が定まれば、敵の正体は自ずと知れようというもの。お心当たりはございませんか」

「あります」

言う。『生贄』を狙って動く脅威と言えば、思い当たるのはひとつしかない。

「北の帝国が、動いているようですね」

朝。

(けつきよく、あんまり満足には眠れなかったなあ……うう、眠い) 早寝早起きは三文の得、というのがクラックフィールド家の家訓なのだが、さすがにあれだけ断続的に寝たり起きたりしているところらしい。

と。
「あー……おはよー……」

「……いまにも死にそうな声だな」

「うー……まあね」

真っ青な顔と充血した目で、リッサ。

まあ、あれだけいろいろと騒がれれば、そうなくても仕方がないが。

「結局、あれから眠ったのか？」

「うう……あんまり眠れなかった。」

いちおうあれからちよつとは寝ただけど……なんか、ふと起きたら部屋の扉が不自然に開いててさ。

もう、部屋のなかになにかが潜んでいるんじゃないかと気になっ

てとてもとても　なんで目を反らすの？」

「やばい。ふつーにドア閉めるの忘れてた。」

「い、いや、なんでもない」

「そう……」

特にそれ以上つつこむこともなく、リッサはあくびをしながら部屋のほうへ去っていった。

……ちよつとだけ、罪悪感。

(まあ、あのときはキスイへの対処で精一杯だったしなあ)
思ったその、瞬間。

視る。

森の中。黒い軍団がやってくる。

巨大な、人間より一回り大きなものたちの軍勢。

彼らの手には、かすかな木漏れ日を受けて輝く勇壮な槍。

それらが一手に、こちらに向けて押し寄せて来る。

「!?!」

即座に、だつ、と駆け出す。

リツサの部屋のドアを開け放ち、

「え、ライ、ってちよつとつわきゃー!?!」

たまたま目の前にいた彼女をむりやり押し押しのけて、窓に駆け寄る。

「こ、こら! キミねえ、女の子の部屋に

……ライ? ねえ、どうしたの?」

ただならぬ様子に気づいたリツサが、こちらに問いかけてきた。

それは無視して、俺は眼下の森を見回した。

あの幻視が、現実のものであるならば 見えるはずだ。

と、森のなかに、きらりと光るなにかが見えた。

「……やはり」

「おう、やつぱここにいたか」

振り向くと、ペイがそこに立っていた。

「声が聞こえたからな。こっちに来てると思った。早く避難したほう

がいいぜ」

「ひ、避難? それってどういうことですか!?!」

「なんかさ、戦が起こるかもしれないねえんだと。岩巨人どもはぴりぴ

りしてる。俺たちにも、協力依頼が来た。

が、まあ神官や隊商には関係のない話さ。とつと先に進んで避

難しちまえや」

「手遅れだ」

「あん?」

俺は、眼下の森を指して言った。

「すでに兵士が潜んでいる。この場で出ようとすれば、相手に捕ま

るだけだ」

「んだつてえ!?!」

言われて、彼はあわてて森を見渡し、即座に頭を抱えた。

「つちやあ……早すぎだぜ、それはよう」
「どつする？」

「どつもこうもねえ。非戦闘員を隔離してる区画があるから、神官様と隊商の連中連れてそこ行け。戦わない奴がいると戦闘の邪魔だ」
「ぼ、ボクだつて戦えるよ！？」

「おいおい、そいつあ神殿が介入したことになつちまうぜ」

「え、あ、でも、」

「いくらなんでも、神官つてほど高位な人間が片側に負担するのはまずいだろ。相手方だつて相手方の事情はある。」

「ま、こういう荒事は俺らみたいなアウトローに任せときな。一宿一飯の恩くらいには、報いてやるつもりだからよ」

「俺は？」

「戦う気、あるか？」

「いやちつとも」

「なら最初から聞くな」

「ごもつとも。」

「まあ、じゃあさつさと避難しとくわ。死なない程度にがんばつとけよ」

「へ、言われなくたって死ぬほどのへまはしねーよ」

「おう。」

リッサ、行くぞ

「う、うん」

リッサの手を取つて、駆け出す。

避難先は、例の壁画の間だった。

（これだけ大きな空間だと、楽々みんな入るなあ）

昨夜の宴会で、だいたいこの集落の人口が100強であることは推定できている。

ここに居るのは、そのうちの半分くらい。隊商の連中を入れても、

悠々入ることが出来る面積があった。

(まあ、それはいいんだけど……)

「? どうかしたのですか、ライ殿」

俺が考え込んでいることに気がついたのか、クランが話しかけてきた。

「いやさ、ちよつと気になったんだけど、ここって袋小路だよな？」

「はあ、そうですね」

「偶然に防衛線を突破した敵が迷い込んできたとき、逃げ場がないのはまずいんじゃないのか？」

「そのときにはよろしくお願いしますよ、ライ殿」

「……………」

無責任にとんでもねーこと言いやがる、このじいさん。

(なんか、竜の一件から妙に実力を過大評価されてないか、俺?)

「ふん、そんな心配は無用だわ、たわけが」

「うわ!？」

突然湧いて出たダメ神官補にのけぞり返る。

というか、

「おまえ、魔人たちに焼き殺されたんじゃないかったのか？」

「なんでだっ!？ というか、昨夜の宴席にもいただろっが馬鹿者っ!」

「そうだったけ？」

「……もういい。貴様の記憶力に期待した私が愚かだった」

「いまさら謙遜しなくてもおまえがバカだってことは周知の事実だぞおっさん」

「うるさいわっ」

「こほん、と一息。

「ともかく、奴らが攻め込んできたときのことなど心配する必要はないのだ」

「……………なんで？」

「無論、我々がいるからに決まっておろっ」

「……………?」

言われ、まじまじと相手を見やる。

「なんだかむかつくからみんな真つ先におまえを標的にするので、その間に逃げれば大丈夫ってことか?」

「なんでそうなるっ!?!」

「いや、それしか思いつかなかったから……………」

「ええい、理を知らぬ愚か者め! いいか、ここには神官が二名、神官補が一名いるのだぞ!

どこの軍隊か知らぬが、神官に牙を向ければ神殿を敵に回すことくらいは承知しているであろう! である以上、ここで戦闘など起こるはずがない!」

「……はあ」

つまり、神殿の威光さえあれば殺されることはない、と。

まあ、たしかに常識的な場合にはそうなんだろうけど。

「敵が目撃者を皆殺しにして口をぬぐう可能性は?」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「うむ。防御はまかせたぞ、小僧」

「結局それかい!」

「ははは……………まあ、そういった場合には手前どもも参戦しますから、それほど不安がらなくて結構ですよ」

「……だと、いいんだけどな」

スタージンの言葉に、答える。

「なにか、不安要素があたりで?」

「んー……………それほど固まってるわけじゃないんだけどさ」
考える。

この集落に来る前から感じていた漠然とした不安は、未だに胸のなかでくすぶっている。

(なにか、よくないものを感じるんだよなあ)

昨日、一日の行動を思い返してみる。

なぜか特別扱いだった自分とリツサ。

にぎやかな宴席。

部屋交換とその後の騒動。

そして

視る。

空から、なにかが降ってくる。

強靱そうなシルエツト。

その人物は、腰に差した剣を抜き放ち、彼女へと向けた。

見覚えのある、光のなかの光景

「!?!」

気づく。

キスイの姿は、この部屋のどこにもない。

「キスイは!?! あいつはどうしてここにいない!」

俺の剣幕に驚いた様子ではあったが、クランは冷静だった。

「秘儀ミイクルをいくらか使えるようでしたからな。支援のために戦場におられるのでしょうか。」

まあ、あれだけの神秘に満ちたお方ですからな。そうそう怪我などをされるとも って、ライ殿!?! いったいどこへ?」

「悪い! ちよつと急ぐ!」

説明を放棄して、俺は駆けだした。

(幻想でしかないかもしれないけど、さっき見えた幻覚だって現実のものだった。

なら キスイが危ない!)

(気づいた だと?)

ふむ。やはり予想外に厄介だな。報告しておくか……)

見覚えのある十字路まで来たところで、不意に嫌な予感に襲われた。

「!? わ、たっ！」

突然振り下ろされた剣をかわしたはいいものの、バランスを崩して後方へしりもちをつく。

瞬間、その俺と敵の目の前を黒い風が駆け抜けた。

「ぐ!?!」

敵が剣を手放し、右手で左の手首を押さえた。

出血、している。

駆け抜けた誰かが手首を切り裂いたのだと、瞬時に理解する。

「な、なんだ!?!」

『それがしが助勢した』

「なんだって?」

『我が名はトウト。魔人と呼ばれる、古き奥義の継承者の一人也。』

少年、何故に戦場へ来た。此処にて散歩を愉しむには、少年の技能では不足であろう。』

姿を見せぬ影が言う。

「先に俺のほうが開きたいね。戦場とあんたは言うが、そもそもこんなところまで敵に攻められるほど防衛線が後退しているのか?」

『奇襲也』

「奇襲?」

『然り。後背より忍びて、岩巨人の姫君を狙っていると見える』

「キスイを!?! あいつはいま、どこに!?!」

『この通路を右に折れ、進んだ先に』

「助かる！」

駆け出す 俺の耳に、声が流れる。

『待て少年。我が質問に答えて頂きたい』

「なんだよ？」

『先程と同じ質問也。元来、岩巨人どもの闘争は少年と無関係である。捨て置けばよいものを、何故に戦場へ身を投じる？』

「決まってるだろ！？ 親切にしてくれたひとを無下に扱うのがクラックフィールド家の家訓なんだよ！」

言い捨てて、それ以上は顧みることせず、俺は走り出した。

岩をくり抜いた岩巨人式の住居が並ぶ通路を抜けると、そこが終着点だった。

「キスイっ！ ……っ」

止まる。

すさまじい戦闘の後だった。

十人を超える、さっきと同様のスタイルの兵士たちが、無惨に身体を引き裂かれて大地に転がっている。

その奥。

大地に空いた大穴を背に、キスイと、キスイをかばうようにして立つ森小人の魔女がいる。

その手前。抜き身の剣をふたりに突きつけている、ほぼ無傷の女戦士。

「増援か。先に我らを足止めしていた影とは別口のようだな」

「ライナー・クラックフィールド……！」

「ライさま!？」

「よう。いちおう、間に合ったな」

ふん、と女戦士は鼻で笑った。

「間に合ったかどうか。それは微妙だな」

「なに？」

「その魔女は靈魂技師と見たが。奴らの用いる召喚の外法、これは日にそう幾度も使えるものではない。

先に、我が部下を殺戮した怪物を討った。であればもうその女はただの森小人。私の敵にはならぬ。

貴様一人で、私を止められるか？ 少年よ」

挑発するように言う。

……むか。

「へ。わかってねえな」

仕返しとばかり、バカにした口調で言った。

「なんだと？」

「あんたは、俺がここに来た意味を理解してねえって言ってるのさ。おい、ハルカ」

「年上を呼び捨てにするのは感心しませんね。なんですか、ライナ

ー・クラックフィールド少年」

「簡単だ。その女が一步でも動いたら、キスイのペンダントをぶちこわせ」

「なるほど。理解しました」

「な、なにに！？」

「え、えええ？」

目に見えて動揺するふたり。

……よし、脈あり。

「ふん、やっぱりそのペンダントが狙いか。背後から攻め込んでおいてわざわざキスイをターゲットにする以上、それっきゃないとは思ったがな」

「貴様、正気か！？ よりによって我ら岩巨人族が主、女王クイーンの宝器を破壊するなどと」

「あいにく俺は岩巨人族ではないからな。そんなことは知ったことじゃない」

「くそ、卑怯だぞ！」

「卑怯で上等。こちとら知性派なんぞね」

こつこつ悪事になるとえらく頭が回る自分はちょっと人としてどうかと思うが、まあそれはそれとして。

「む、無念……」

「さて、じゃあ武装解除といこうか。わかってると思うが、動くなよ？」

にんまり笑って、俺は彼女に近づいた。

……第一の誤算。

周囲の兵士が完全に死んだかどうか、俺は確認を怠った。

「うわあ!?!」

がばあ、と死体と思っていたモノにいきなり抱きつかれ、俺は悲鳴を上げた。

「隙あり!」

「あ、うっ……!」

「ひっ!?!」

その一瞬の間隙をついて、女戦士がキスイを奪おうと動く。

「この、させるかあっ!」

組み付いてきたやつを蹴倒して、俺はあわててそちらに突進した。

……第二の誤算。

女戦士は、ハルカがなにかまだ隠し手を持っている可能性を失念していた。

「風の法よ、ここに！」

「なっ、しまっ……!」

「って、うわあああっ!?!」

「ライさま!?!」

……第三の誤算。

ハルカは、女戦士の反射神経と移動速度を誤解していた。

「た、ただ吹き飛ばされてたまるかあ！」

「きゃあああああ！？」

「あ、しまっ……！」

「う、うわああああっ……！」

……かくして、さまざまな誤算の結果。

俺たちは、いっしょくたになって吹き飛ばされた。

「……いってててて……」

な、なにがあっただんだ？」

暗い洞窟。

ひどい獣臭。

一寸先もわからぬ闇の中、うごめく気配に身震いする。

（そっか。ハルカの魔法と一緒に吹き飛ばされて……）

それでごろごろ転がった結果がこの有様らしい。

この高さから落ちて無事だったのは、ちよつと奇跡的かもしれない。

思つて上を見上げ、そして愕然とする。

（え？）

さっきまで落ちてきた穴が、ない。

たしかに転がり落ちた記憶はあるのに、そちらのほうには黒い空洞しか見えない。

そもそも、上の壁は光っていたのだから、見上げればその輝きくらは見えてもいいはずなのに、それもなし。

（と、ともかく明かりがないとなにも見えないな）

とりあえず剣を抜く。あたりを白い光が照らし出し、視界が開けた。

「……………へ？」

周囲には 大量の獣が、こちらを音もなく取り囲んでいる。狼に似た、優美さすら感じさせる体躯。

狼と違うのは 口にあたる器官がない。

正確に言えば、口はある。全身に、いくつもの

が、発声するためにノドに通じる大きな口がない。

魔物。

「ど、どえええええっ!？」

即座に走ってその場を逃げ出す。

相手は、追ってこなかった。

それでもひたすら走り、相手が見えなくなるあたりまで駆けてから、ようやく一息。

(し、心臓に悪い

でも、なんで追ってこなかったんだろ)

魔物の行動はよくわからん。

思っていると、ふと横で気配がした。

「く、くそっ……………」

剣を杖の代わりにして歩いてくる、女戦士。

「よう、あんたも生きてたか」

「身体は……………丈夫なんでね……………岩巨人の……………ぐ……………体躯には、感謝をしている。

この程度の傷なら 未だ、戦えるか」

剣を構える。

「やめとけて。この状況で戦ってもいいことなんかないぞ。肝心のキスイは見当たらないしな」

「だとしても、潜在的な敵を減らすことにはなる……………!」

「お、おい……………」

「勝負!」

「うわっ!」

ひゅんひゅんと繰り出される剣をあわててかわす。

「てい、やつ、はっ」

「わ、わわっ、わっ、と」

「くそ、この、避けるな貴様ー！」

「無茶を言うなー！」

「ていや、必殺剣、剛風の太刀ー！」

「おのうわ!?」

飛び離れてなんとか距離を取り、ぜーぜー呼吸を整える。

相手は齒ぎしりをして、

「くそ、なぜ当たらん！ 相手は素人なのに！」

「そ、そんなこと言ったって……」

たしかに、ちょっと不自然だった。

相手の剣は鋭く、強く、俺を執拗に追跡してくるのだが、なぜか

避けたほうには来ないのだ。

まるで、それが最初から予定されているような

『なぜならそれが運命だからだ』

ふと。

昨夜、キスイの言っていた言葉が思い出される。

(……………)

ま、理由なんてのはどうでもいいや(

頭を振る。

とりあえずいま必要な事実は、俺にこいつの攻撃が当たらないと

いうことだ。

「なあ」

「なんだ」

「休戦にしないか？」

俺が言つと、そいつは不愉快そうに眉をしかめた。

「する理由がないと思うが？」

「そうかい。俺は、むしろ戦う理由こそないと思うけどな」

「だから言ったはずだ。潜在的な敵を」

「この局面で、」

言葉をさえぎって、ぴっと指を立てる。

「重要なのは、俺たちのどちらが勝つかじゃない。俺たちを探すであらう連中の、どちらとより早く合流するかだ」

「……………」

「だろう？ キスイを見つけても、結局この集落の連中に先に見つかればおまえには勝ち目がない。俺も同様だ。

なら、いまここで殺し合っても意味はない。違うか？」

沈黙。

(さて、相手はどう出るか)

まあ、詭弁ではある。

現状、どうやら俺は相手の敵らしい。「念のために」俺を排除しておくことにはそれなりの意味がある。

だが、なぜか剣がぜんぜん当たらないというこの状況下では、戦うという選択肢は選びにくい。

乗ってくるか、どうか。

「よかるう」

す、と相手が剣を下ろす。

「わかつてくれたか」

「おまえの論に、完全に納得したわけではないがね。

不本意だが、ここはいったん協力すべきらしい。共通の敵がいるからな」

「え？」

女戦士が、あごで自分の背後を示す。

果たして。

そこに、さきほどの狼もどきどもが、音もなくこちらを見つめていた。

「な、なんで？ さっきは追ってこなかったのに」

「追ってこなかった、だと？」

はん、とそいつは鼻で笑った。

「馬鹿を言え。地擦狼どもが、己のテリトリーに侵入したモノを生かして逃すはずがないだろう。音無く忍び寄ってきたから、気づかなかつただけだ」

「地擦狼？」

「ああ、そうだ。」

気を付けるよ。奴らは地と同化して動く。足音に頼って気配を探ると、たやすく足をかみ砕かれるぞ」

言つて、彼女はこちらを見た。

「一気に駆けて抜ける。名は？」

「ライナー・クラックフィールドだ。ライで通ってる。そっちは？」

「個名はカシル。家柄名はヴァロックサイト。好きなほうで呼べ」
うなずいて。

そして、俺たちは駆けだした。

岩巨人は、基本的には地下に住む種族である。

その主要な生息地は『北の都』と人間たちが呼ぶヴァントフォルンからさらに北の、山脈地帯の地底に築かれた巨大な帝国だ。

この帝国は、人間たちと幾度か戦争をしたこともある。いまは休戦状態だが交流もそれほど多くなく、基本的に人間社会とは敵対している。

岩巨人族の得意とする戦法は、地底に張り巡らされたネットワークを経由してのゲリラ的な戦術だ。

地底における完璧な地図を独占できれば彼らは極めて強いのだが、人間の居住地の地下の地図は人間たちが持っている。

故に彼らは外地においてそれほど活躍できず、特に本国から離れ

た場所で活動するのは難しい。

攻めに弱く、守りに強い。これが、岩巨人の帝国が持つ戦力のおおよその特徴だ。

……まあ、ようするに。

今回、彼らがこんな場所まで外征してくることができたのは、地図を提供してくれる者がいたからこそなのだった。

「ふん。どうやら、奇襲には失敗したか」

森のなか、洞穴の出口にあたる場所に設置した司令部で、彼は毒づいた。

精鋭を以て地底から集落を強襲し、一気に『生贄』を奪還する。

その作戦は優れたものであるはずだったが、彼は最初から乗り気でなかった。

特に理由はない。あえて言えば、発案者があの女だったのが気に入らなかつただけだ。

「せっかく発案どおりにやらせてやったというのに、無能者めが。

ふん、つまらん」

自分が戦力を出し渋ったことは棚に上げて、つぶやく。

もとより、彼の機嫌が悪いのは奇襲の失敗が原因ではない。

それについては、厄介な部下を切り捨てられてせいせいしている。敵には感謝したいほどだ。

むしろ問題なのは

「まだ突破できぬのか？」

問いに、参謀は首を縦に振った。

「そのようです。予想外に堅い上に、強力な兵器を所持している様子。このままでは犠牲が増すばかりです」

「なぜだ……！ そんなものを用意するだけの準備時間などなかったはずなのに、何故にここまで耐える！？」

集落の入り口に仕掛けられたバリケードは、未だ落ちるそぶりすら見せない。それが、彼にとってはきわめて不愉快である。

「こちらには3000の兵がいるのだぞ!? たかが60名程度
の同族を相手に、なぜここまで苦戦せねばならぬ!」

「ふははは、見ましたか野蛮なる兵士ども! このわたしの発
明した新・鋼鉄攻弾<sup>ネオ
カルバリン</sup>! 真の天才とは力ではなく、
頭脳で戦うのですよ!

「こおらそのバカたれ! のーがき垂れるのはいいからためー
も発射準備手伝え! 後がつかえてるんだよ!」

言っているあいだにも、どおん! という音とともに鉄の弾丸が
地面に着弾、爆砕し、周囲の兵士たちをなぎ倒す。

すごい威力。

「あ、あれ、なんです?」

近くにいたゴゴネルに尋ねてみる。

「ん? ああ、なんだ神官のお嬢さんか。

あれつて、ペイがいま装弾してるあれか? あれは鋼鉄攻弾^{カルバリン}つ

ードクトル・テンの発明した兵器だよ。

本来は、小型の魔物どもを残らず掃討するための器具なだけ
だな。ああやつてペイと二人で運用するんだが、威力は抜群さ」

「まるまる〜」

「おおら、装填完了! 行くぜえ!」

また、ずどおん! という音がして、兵士が木の葉のように吹っ
飛ばされた。

彼らがいるのは、集落にいくつかある森側への通風口のひとつだ。
敵の兵士たちは、森のどこかに置かれた本陣から、ひとつしか
ない集落の出入り口へ向けて一斉に攻めてくる。

が、出入り口にはバリケードが置かれており、そこを守る戦士
たちもいる。

それらを倒そうと右往左往している敵兵士たちを上から狙撃する
のが、ここにいるひとたちの役目だった。

いちおうこちら（神殿側）も、相手が『生贄』の身柄を狙っているとわかった時点で、参戦することが確定している。

神格を持つ人物の保護は神殿の大切な義務のひとつであるから、まあこれは当然だ。

当然なのだ、けれど。

「このままなら、わたしたちが加勢するまでもなくあっさり切り切れるんじゃないですか？」

コゴネルに問う。

が、返答はあまり芳しくなかった。

「いや……それがな、あまりそうもいかねえんだよ。

問題は、敵がこの戦闘を「攻城戦」であるといつ気づくかだな。そうなったら、とたんに戦況は悪化するぞ」

「攻城戦、ですか？」

ああ、とコゴネルはうなずいた。

「つまりは、出入り口が城門で、ここが城壁つてわけだ。そして攻城戦というのは、城門を破るだけがセオリーじゃない。

城壁をよじ登る戦術を相手が取ってきたら、この人数差で守るのは厳しい。奥に立てこもることになるが、そうなると狭いから鋼鉄^{バル}攻弾は危なくて使えなくなる」

……たしかに、それはそうだ。

けど、

「なら、なんでいま敵はその戦法で来ないんでしょうか？」

答えたのは、バグルルのほうだった。

「相手は地下戦闘メインの岩巨人族だからな。城攻めなんて慣れてねえんだろ。

まあ、こつちとしては好都合なんでね。相手がよじのぼるって発想に気づく前に、できるかぎり数を減らしておかねえとな」

「……そういうおまえはなんで戦闘に参加しないんだよ。筋肉オバケ」

「バカ言え。筋肉なら人間の俺は岩巨人に対してはむしろ不利だ。

それに、敵は正面から攻めてくるだけとは限らねえ。

現に、いつまた下から襲ってくるとも限らないんだからな。ここに戦力を置いとかないとまずいだろ」

彼の言葉に、先程から壁によりかかって苦しそうに息をしていたハルカがこくりとうなずいた。

ひどく疲弊しているのは、無理をして魔術を連発したからだと言
う。

「攻城戦の定番、その第三の策だ。地面から穴を掘り、城の内側へと侵入する。

この場合、穴は最初っから空いてるわけだから使ってくるのは当然だろうが さすがに、これだけ速攻されると厳しいなあ」

「トウトとハルカがいなけりゃ、あれで勝敗は決していただろう。いや、それも不正確か。

解せないのは、なんであの程度の戦力しか出さなかったのだったのかってことだな。敵はバカか？」

『敵を侮ることは感心せぬぞ、コゴネル』

「いや、けど……なあ、トウト。あっちから攻めてきた戦力が5倍くらいだったなら、この集落って落ちていたと思うんだが。」

中途半端に奇襲に失敗して、結果としてこっちに奇襲の可能性を教えちまったのは、どう考えても下策だろ」

『敵には敵の事情があるう。又、敵が失敗したとも断言は出来ぬ』
「というと？」

『目的が岩巨人の姫君である以上、集落から姫君を追い出したのは十分な意義があるう』

「そのことなんですけど、彼女、いまどこにいらっしやるんですしよ
うか？ ボク、そのあたりのことぜんぜん聞いてないんですけど」

問うと、ハルカが答えた。

「今回、私が試みた術は、いわゆる転移の術です。相手を地下の魔物の巣に放り込もうと仕掛けたもので、これに彼女は巻き込まれました。」

転移の術に巻き込まれた場合、ほとんどのケースでは始点と終点を結ぶ線分上に出現することになります。

このとき、線分上の選ばれた点　結点と呼ぶのですが、結点にたまたまべつの固形な物質がある場合は、状況によって結果が二分されます。

ひとつのケースでは、転移術は結点の物質の存在力に負けて、キヤンセルされます。が、これは現実を見る限り、今回のケースには当てはまりません。

残るケースですが、術が物質の存在力に勝った場合、強制的に転移は起こるのですが、その仕方が特異になります。

まずもって、転移の術というのはあくまで転送の意味しか持たないため、物質の存在形態に作用することはできません。

ですから、結点そのものに転送することは不可能です。そこでイレギュラーケースとも言うべき転送のゆがみが生じます。

今回の場合、始点と終点を結ぶ線分のほとんどが地中を通っているため、イレギュラーが起こった可能性は高いと言えるでしょう」

「で、結局あの子はどこにいるんだよ」

「わかりません」

「なら最初からそう言えよ!？」

「はん……だがまあ、これだけでもだいたいの居場所は推測できそうだな」

バグルルが言った。

「どこだよ？」

「当然、地下の魔物の巣さ。決まってるだろ？」

さあつ、と、自分が青ざめたのを知覚する。

「た、たいへんだ……!」

「まっただくだあな。」

ま、それを知っている敵は転移した女指揮官しかいねえわけだから、敵戦力が即座にそちらへ殺到することはないと思うがね」

「不幸中の幸いだな。やれやれ」

「幸いじゃありません！ ああ、ど、どうしよう！？ よりによつて、うわあ、うわあああ」

「あー落ち着け落ち着け。いまさら慌てたってあの子は帰ってこねえぞ」

たしなめられてとりあえず口をつぐむ。が、心臓はまだばくばく言っている。
と。

「ただいま」

「たっただいまー！ バリケードの設置、終わったよー！」

「終わりやしたー！」

一仕事終えたらしいサリ、マイマイ、グリートたちが帰ってきた。

「ささささサリさん！？ どど、どうしようー！」

「？」

「『生贄』の話だ」

コゴネルが言うと、サリはああ、とうなずいた。

「心配ない」

「し、心配だよおつ。どうしよう、『生贄』になにかあったら、ただごとじゃ済まされないよお」

なにしろ大巨人の代理だ。神殿にとって、これほど大切な人物は他にいない。

が、サリはあっさり言った。

「大丈夫。ライがいるし」

「……………」

「？」

「ごめん。心配のタネが増えた……………」

そういえば、あいつもいっしょくたに飛ばされたんだった。

「どちらにしても大丈夫。下級の魔物は、神格持ちの存在力が周囲に有るだけで滅びてしまうから。」

それに、あのふたりが行った」

「ふたり？ つて、誰が？」

「それは」

「まったく、面倒な話だな。ハルカのヤツがドジ踏んだせいだし」

「文句言わない。ほら、ちゃんと仕事するよ」

「たつてさー……どうせ地下にや、あのライくんがいるんだろ？
あいつ、戦闘技術はゴミだが、いつちよまえに神器なんぞ持つてるんだ。うちらがなにもしなくたって勝手になんとかしてくるだろうに」

「いま、なんて？」

「あん？ なんだ、気づいてなかったのか、シン。あいつの剣、立派に神器の一種だよ。バルメイスの神剣ってヤツだな」

「……そうか。ふたつの神器とはそういう意味か」

「なんだって？」

「こちらの話だよ。気にしないでくれ」

「ふん、まあいいけどな。」

しかし、エンチャンター魔技手工のサリならともかく、私やハルカとおなじディア靈魂技師のあんたがこいつを見逃すとは意外だな」

「僕は現代的な術系に疎いからね」

「ああ、そうだったな。神にして魔法使いであった異端、カイ・ホルサの靈統はなぜか現代の魔法に触れたがらない。

私には理解できないね。力を求めているのなら、現代的な術のほう効率がいいんじゃないのかい？」

「べつに。彼女に通じないのであれば、どんな方式でもおなじだから。」

始祖が使えた形式の魔法は、僕たちにも学ぶ必要なく使える。それ以上を魔法には求めないよ」

「レーヴァテインは？ 現状、あれを防御できる生き物なんかいないだろう。いるとすれば逆神格サタンくらいか」

「……あれは、彷徨ワンダリング・デビルえる魔王の剣だ。人間の手には余る」

「贅沢なやつだね。」

まあ、しかし力を求めていること自体は変わってないんだな。見えざる神殿は」

「ああ、そうさ。2000年前から変わってないよ、それは」
「でかい話だな。」

見えざる神殿で思い出したことがある。あのクランとかいううさんくさいじじい、あんたの知り合いか？」

「面識はなかったよ、少なくとも。」

「彼が、なにか？」

「べつに。ただ、ちと気になってな。このタイミングで我々の同行者が神器を持っていたつーのは、いくらなんでもできすぎていると思っただのさ。」

あいつ、北の妖術師と組んでるんじゃないのかね。我々の動きを監視しつつ、やつの望むものを届けるためにさ」

「うーん。可能性がないわけじゃないが……低いと思うなあ」

「へえ？ なんで？」

「あの剣、抜かなければ神力を發揮できないだろ。そしてあれが抜けるライ氏との出会いは、どう見ても偶然としか思えない」

「そりゃそうか。あの神官たちまでグルとは思えないしな」

「そういうこと。」

まあ、見えざる神殿だつてメサイのすべてを知っているわけじゃないから、彼が外見通りの善人かどうかは僕にはわからないけどね」
「賢人会議の意向ってわけじゃなさそうだね。そのぶんだと。」

あーもう、なんで私がこんな面倒な仕事を……」

「愚痴らない愚痴らない。」

じゃあさ、僕はライ氏を捜すから、君は『生贄』を探してくるといい」

「あん？ まあいいけどさ、それで私にどんなメリットがあるの？」
「いや、男の子よりは女の子のほうが、君も燃えるんじゃないかと思っ
てね」

「バカ。おまえもへんな誤解してるぞ。私はこれでも」
「はいはい、文句はいいからそろそろ仕事にはいるよ」
「……まったく」

「はあ、はあ」
走る。

周囲にまとわりつく影のような魔物たちが、降臨した女王クイーンの神力に
圧されて蒸発していく。

それでも、わたし キスイは走るのをやめない。やめられない。
あいつが、追ってきている。

「はっ、はあ、はあっ……」
走りながら、後ろを振り返る。

雲霞のごとき そう呼んでいいほどの、怪物たちの大軍勢。
それが、いつせいにわたしを指して駆けてくる。

その向こうに、最も恐ろしいあいつの姿を認めて、わたしは身震
いした。

「はあ、 あっ……！？」
足がもつれて倒れそうになり、慌てて前を向く。
が。

「！」
止まる。

正面に迫った岩の塊が、行く手をさえぎっていた。
あたりはもう袋小路。逃げ場のない場所に追い込まれ、背を岩に

付けて振り返る。

すでに、周囲は多くの魔物たちに取り囲まれている。

『おるううう……いえええええ……』

「消え去れ！」

ペンダントをにぎり締めて叫ぶ。即座に、魔物たちが一斉に溶けて消えた。

それを確認して、空いた魔物たちの間隙を縫って逃げようとするが、その先にもすぐに、魔物の一部が回り込んできた。

(まずい……追いつめられたら、保たない)

降臨の能力は継続して長時間使えない。そんなことをすれば魂が女王に浸食され、打ち砕かれてしまうからだ。

それに。

「……っ」

『ほおう……こんなところにいたか』

のそりと。

そいつは、まるで影が忍び寄るように、魔物たちの合間から現れた。

人間をはるかに超える雄大な体躯は、まるで古代の巨人たちの醜悪なパロディのようだ。

周囲の魔物たちの態度を見ても、こいつがリーダーであることは一目でわかる。

消し去るには、十分な距離。

「消えろっ！」

叫び、そして……愕然とする。

魔物たちはこちらを恐ろしそうに取り囲んでいるが 消えない。中心にいるそいつに、存在力による圧迫が効かないことはわかっていた。

だが周りの魔物たちまで消えないというのは、明らかにへんだ。

『神格を瞬間的に4級まで跳ね上げ、運命律による圧力で魔物を排除する技術か。たしかに効率的だが』

異界の口ウに従う我が領域では、神話の力もたかがしれたもの。
効かぬ』

「うそ。神格持ちの魔物　　!?!」
端的に理解する。

この生物は、神話と異なるメカニズムによる「神格」を持つ、外
世界の邪神だ。

故に神話の法則は異界の法則と相殺され、強い力を発揮しえない。
「でも、そんなものが実在するなんて……」

『それは無知というものだ、神話の主。
考えてみればよい。召喚を司る魔物使いどもの力を貴様らが何故
禁忌と為すか。それは、我ら神話の敵を使役することができるから
であろう。』

故に貴様らは我らを魔王と呼び、忌み嫌う。貴様らを殺し得る、
唯一無二の存在としてな』

「魔王……!」
ぎり、と歯がみ。
が、そこで。

「こらこら君、純真な子供に嘘を教えるんじゃないよ」
声が聞こえた。
闇のなか。

敵意に満ちた魔物の視線を泰然と無視しつつ、ぼやくように彼女
はそう言っていた。

『嘘とは心外だな』

「じゃあ無知だ。だいたい禁忌の説明なんて笑うしかないよ。そん
なことが言えるなら、幻影使いイリュージョニストだって禁忌じゃないか。

霊魂技師ディアボロスの技術が真に禁忌なのはね、世界の外を扱うからじゃな
い。世界の内と外を区別しないからだよ。

まあ、それは脱線としても。

君が魔王だったのは、もっと嘘だろ？」

『嘘ではない。我らは　　』

「そりや原理的には魔物とは言い難いがね。魔王と呼ぶには神話を脅かす力に欠けるだろ、君は。」

昔から、そういうやつを偽物って言うのさ。世界にとって不愉快だがどうでもいい存在、まがい物の魔王とね」

『……それは侮辱か、魔女』

「まさか。ただの愚痴だよ」

あつさり言つて、そして魔女は怪物のとなりをすり抜けてこちらへやってきた。

「怪我はないかな、キスイくん？」

「あ、はい。なんとか……あなたは？」

「センエイ・ヴォルテツカ。君のようなかわいい子を守る、正義の味方さ。覚えていてくれたまえ」

「せ、せいぎのみかた……ですか」

「む、なぜそこで疑問を抱く。そもそもこの登場の仕方はヒーローの黄金パターンと昔から相場が」

『それで掌中に収めたつもりか、魔女』

怪物がうなるような声を出した。

センエイは、まだいたのかおまえという表情で相手をにらみつけた。

「邪魔なやつだな。もうヒーローは来たんだから帰っていいぞ怪人」

『無様だな。無駄な美学など出さず、後背から奇襲を仕掛ければ我に勝つこともできようものを』

「君が言つと真実味がなさすぎて笑えるな。いや、偽物に真実味があっても困りものだがね」

『ほざけ。この量の魔獣、どうやって捌ききるつもりか』

言葉と同時に、大量の魔物たちがいつせいに、わっと彼女に襲いかかる。

が。

「量が問題なのか。ならこっちも量で対抗しようかな。」

返れ。弾け」

とてもシンプルな、二語の命令。

直後、彼女の手から解き放たれた光の矢が、先頭の魔獣の頭部を打ち砕いた。

『愚かな。それでは焼け石に水』
言葉が中断する。

周囲の壁からにじみ出るように現れた幾条もの光の矢が、いつせいに魔物たちの頭に降り注いだのだ。

ざああ、とまるで嵐の雨音のような轟音が響いた。

後に残ったのは 魔物たちの骸の山。

びくびく動いている一体の頭をばきんと踏み砕いて、彼女は鼻で笑った。

「コダマの法理。反響した音がすべて呪言となって効果を発揮するってわけだ。あっけないね」

『……ありえん。これはいつたいなんの魔術だ。精霊とは術者の身体によって扱うものだろう、魔女！』

「それはこの世界の法則。法則から外れた君が言うのは、むしろ滑稽だよ」

『く……たしかに魔術とは外法。だが納得できぬ。精霊の使役は殊更に禁忌ではないはずだ。そう簡単に原則から外れるとは』

「だから言っただろう。霊魂技師ディアボロスの技は世界の内と外を区別しないと。君の主である妖術師は、どうもそのへんの理解が足りないに見える」

『気づいていたか』

「なにをいまさら。このタイミングで我々が足止めを食うのに、あいつが関わっていないわけがないだろ。ハルカだってわかるさ、そんなこと。」

……ま、それはともかく。まだ戦う気はあるかい？」

『無論。貴様の術は我には届かなかった。ならば我が出るまでのこと』

ずい、と彼が一步前に出た。

『我は魔王。神格を持つ相手を魔術に依らず倒すのが困難であること、貴様も承知していよう。』

だが貴様は魔力を使いすぎた。手駒を失ったのは痛い、その状況でどうやって我がイエルムンガルド外殻を打ち破るつもりだ、魔女』

「そりゃあ困った。たしかに撲殺つてのは骨が折れるな」

『呆けるな。雑魚を倒すのに躍起になって、真の目的を忘れた愚を悔やむがいい!』

ふう、と吐息して、彼女はぼやいた。

「わかってないね。……そのザコを失ったのが君の命取りだということ、なんたる愚劣だ」

『なんだと?』

魔女は、あくまで憮然とした表情のまま、口の端だけをくい、と笑みの形に曲げた。

「さて、いいかげん悪役にはご退場願おうか!」

ずい、と一歩踏み出す。

『ぬん!』

呼応して、怪物の影から黒い矢が飛び出し、センエイに向けて走る。

それは彼女の直前まであったという間に到達すると、急に戸惑ったように停止し、次いであたりの壁にぶち当たって四散。

『なに!?!』

「そら、行くぞ!」

センエイが走る。

あわてて怪物は影の矢を連発するが、それはことごとく彼女を外れて壁に当たって消える。

『馬鹿な!?!』

「そうら! 手刀!」

『ぐあ!?!』

センエイの手が怪物にぶち当たり、激しい火花を散らして怪物を

後退させる。

「そらそら、次々行くぞ！」

『ば、馬鹿な！　なんだこれは！？』

「蹴り！」

『ぐふう！』

ばあん、とすごい音がして、怪物がはじき飛ばされた。

『こ、この……舐めるなあ！』

怪物の胴部分に、暗黒のよくわからないエネルギーが溜まっていく。

それを見てセンエイは足を止め、ポケットからコインを取り出した。

『死ねえ！』

どんつ、と、にぶい音と共にエネルギーが射出される。

それに合わせて、

「指弾！」

センエイの指が弾いたコインが相手に向けて放たれる。

それは、暗黒のエネルギー弾をわけもなく粉碎し、さらにその奥にいる怪物の胴に着弾、貫通した。

『ぐおおおおおおおあつ！？』

「戻れ！」

センエイの声。

即座に、貫通したコインがターンして跳ね返り、怪物の背中に着弾して爆砕。

胴を粉碎された怪物は、ばらばらになって吹っ飛ばされた。

『な、なぜ、だ』

肩から上だけになった怪物の頭が、息も絶え絶えにつぶやく。

もどつてきたコインをぱしっと受け止め、ふん、とセンエイは笑った。

「バカだね。神格持ちを倒すのに、直接の魔術行使なんて不要なんだよ。こつちにも神格があればいいんだから」

『馬鹿な。それでは、貴様は聖者ということか　！？』

「違うよ。私も偽物さ」

つぶやいて、彼女は怪物の頭を踏みつぶした。

ぎ、という声を残して、敵が息絶える。

「バカなやつ。おとなしくしておけば、同族のよしみで逃がしてやったというのに」

儼然とした表情のまま、言う。

『ありえぬ。貴様が同族だと？　貴様は人間であろう。人間が外存在たる魔王になど、なり得ぬはずだ』

声に、ぴくりと魔女が眉を跳ね上げた。

怪物の死体の周囲。そこに舞い上がったもやのような白い影が声を発している。

「しつこいな、君は。」

いちおう言うておくが、その残滓では私どころか、その子にも手をだせやしないよ。無様に滅ぶだけなのだから、さっさと消えてしまえ」

『元より承知。我が知りたいのは貴様の真実。それを冥府へ持って行けるのであれば、これ以上は望まぬ』

「冥途の土産ってやつか。はん、そんな言葉でだまされる奴がどこにいる。」

君が情報を持って行きたいのは、冥府ではなくべつのところだろう？？」

『いいさ。教えてやる。どうせ君の雇い主だって、調べればすぐに気づくことだ。』

いいかね、ようするにだ。神格ってのは世界に対する『すり込み』なんだよ」

『なんだと……？』

「そうだろう？　世界にとって大切なもの、基盤を為すもの、正当

なもの。その認識を得たものを我々は存在すると言い、そのための力を存在力と呼ぶ。

つまり存在力を得るためには、世界さえだましちまえばいいのさ。それだけで、聖者なんかでなくとも神格を得ることができる」

少し悲しみの混じった口調で、彼女は言う。

「だけどそれは偽物だ。偽物は看破されればそこで消える。世界自体は看破なんて行わないから、問題はその他の観測者の数になる。

な、ザコを失ったのは命取りだっただろう？ これはね、秘されたクラヤミのなかでしか成しえない、秘術なんだよ」

『……むづ』

「だからこそ、私は観測者に注意を払う。

哀れな偽物の意識はもうとつくに散った。ならば貴様、さきほどから覗き見ている貴様は誰だ」

『！？』

ぐうん。

世界が揺れた。

白いもやが唐突に霧散し、代わりに地面から、なにか得体の知れないものがぐぐぐとせり上がってくる。

はじめて 魔女が嗤った。

「ヒドウナ・カラミテの夢幻刀儀だ。存分に味わっておけ そら！」

ざくん！ と、にぶい音を立ててそのなにかが両断されて。

そして、ごう、とそこから蒸気のような悪意が吹き付けた。

だがそれは魔女には届かない。

烈風のような殺気を傲然と無視し、センエイはあざけるように言った。

「……甘い！ このクラヤミのなかで、その程度の攻撃が私に届くと思っただか、妖術師！」

『ぬふふ。たしかに、貴様はそれでは傷つけ得ぬなあ。

だが、後ろの娘はどうかな？』

「なに!？」

「あつ……!？」

悪意は、魔女を無視して一直線にこちらに吹き付けてくる。そのおぞましい感触に、思わず全身を怖気が走る。

「い、いやあああああつ……!」

「神格だ! そいつを6級 いや、5級まで上げる!」

『隙あり……!』

「ち!？」

ぶうん! という虫の羽音のような音とともに、魔女が大きいわけぞる。

同時に、地面に現れていたなにかが、嘘のようにきっぱりと消え去った。

のけぞった魔女は、そのまま2、3歩よろけて、壁に背をつける。

はあ、と大きく吐息。

「逃がしたか……うまくひっかけたつもりだったが、詰めが甘かったなあ」

「す、すみません」

「謝ることじゃないよ。この場の目的は君の安全確保。アレの退治は二の次だ。とりあえず、無事でよかった」

言いながら近寄ってきたセンエイは、両手を広げてひしとわたしを え?

「あ……あの?」

「んー、怖かったなあ。よしよし」

「あ、ええと、そのう……せ、センエイ、さん?」

「んーなにかな。よしよしよし」

「さ、さきほどから……なんで、わたしのおしりをなで回してるんでしょう?」

「んー困った顔もかわいいねえ。よしよしよしよし」

「……………」

どどどどど。

「あ、あのう
ぐんつ。」

すさまじい音がして、彼女の身体が横に数メートルほど吹っ飛んだ。

「キスイさまあつ」

「う、うわっ!？」

がばあ、と抱きすくめられ、思わず声を出す。

「大丈夫ですか? 大丈夫でしたね? ああもう、間一髪のテースの危機でしたよお」

「ちよ、ま、ええと、あのう」

「あらあら、こんなに煤で汚れちゃって……さぞかし心細かったでしょう。もう安心してくださってけっこうですよ?」

「えと、そうじゃなくてジロ口、いまセンエイさんの頭にハンマーが危険な勢いで」

「いやですねえ、そんなことどうでもよろしいじゃございせんか。それよりキスイ様、お身体のほうになにかお怪我など」

「どうでもよくないだろっ!」

ばっ、とセンエイが起きあがる。

「ち。まだ生きてたのですね」

「当たり前だ! ていうか、殺す気だったんかい!」

「当然です。キスイ様のお身体をなで回すなどという不埒な行動、それ自体が死に値する冒瀆だと思いませんか?」

「美少女は全人類の共有財産だ! なで回してなにが悪い!？」

「ふふ……わかっていませんね。花は独占されてこそ価値があるのですよ」

「あ、あのう……なんか、それは論点が違うんじゃない」

「はん、上出来だ! 貴様は私のポリシーから見た絶対悪だ! この場で肅正してくれる!」

「青臭い……見ているだけで吐き気がしますね。黙って叩かれていれば楽に死ねたものを、後悔させて差し上げますよ」

だめだ。ふたりとも聞いちゃいない。

「ふん、威勢がいいのは結構だがね。さっきの一撃だって、私のイエルムンガルド外殻を打ち破ることはできなかったんだ。どうやって破る気だい？」

「技の正体がわかっていれば自ずと対策もできるといふもの。べらべら正体を明かしたこと、悔やみなさいな？」

「じじじじじじと地鳴りまで聞こえてきそうな雰囲気で、両者にらみ合う。」

「……まずいまずい。」

（と、ともかくなんとかして止めないとっ）

「あ、あの」

じろり、とふたりともからにらまれて、思わずすくみ上がる。

「ごくりとつばを飲み込んで、それでもなんとか声をしぼり出した。」

「ふたりとも……やめてください。わたしのことを思ってくれるひとたちが、わたしのために殺し合いするなんて、まちがってます。」

緊張して、手にじっとり汗がにじむ。

ふたりの様子は変わらず、じーっとこちらをにらみつけている。

にらみつけている、というか、どちらかというところ

「か、かわいい……」

「ああ……天使のようです」

「え、えっと、そういうことじゃなくて」

「くう。主義には反するが、この困り顔の前で殺し合いをする度胸は私にはないな。ちっ」

「あなたの意見に賛成するのは気に入りませんが 同意します」

「停戦か。……ふふふ、まあいい。またいくらでも機会はあるさ」

「その言葉はそっくりお返しします。覚悟なさい？」

『ふっふっふっふっふ……』

なんとなく、思う。

（このふたり……じつはすっごく気が合ったりするんじゃないか……？）

「つ、疲れた……」

「ぜーぜーと息を吐きながら、俺は床に座り込んだ。

カシルの言うとおり、狼どもはやたら戦いにくい相手だった。

それをなんとか振り切って、ようやく彼らのテリトリーから脱出したとたん、力が抜けて座り込んでしまったというわけである。

「バテたか。まあ、無理もないな」

「そ、そういうあんたは……なんで平気なんだ……？」

「まあ、慣れてるからな」

「さらりと言って、笑う。」

「なにぶん7つのころから戦場にいたのでね。生き延びて戦果を上げる最大のコツは、相手が疲れるまで疲れないことさ。

「ついでのテクニクとしてだがな、共闘相手がいる場合は、さりげなく相手に厄介なのを押しつけるという技術もある」

「……なんだか妙に俺のほうに敵が近寄ってきたのはそのせいか」

「悪いね。まあ、今回はまたそれとはべつに、こつこつ予定もあつたからさ」

「言いながら、彼女はす、と剣を俺に突きつけてきた。

「……そのネタはシャレにならないと思うんだが」

「当然だ。本気だからな」

「そう言う彼女の目は笑っていない。

「えーと。」

「大ぴんち？」

「ああ、そうだな」

「ままままあ待て。ちよつと待て」

「なんだ。こつちは急いでるんだから命乞いなら手短に済ませ」

「いや手短に済ましたらさっさと殺されそうなんですけど」

「当然だ。急いでいるからな」

「あはははははははは」

「斬っていいか」

「いや待って待って待って」

時間をかせぎながら、なんとかかしていいいわけを考える。

「覚悟の据わらない奴だな。じたばた足掻いても結局斬られるのだから、いいことはないぞ」

「だから斬るの前提で語るのはやめろっつーの。ほら、俺を斬らないメリットだつてあるかもしれないだろ？」

「たとえば？」

「えーと……」

「10数える前に言えよ。ひとつ」

「うわ待てそのプレッシャーのかけ方はやめろっ」

「要望は却下な。ふたーっ」

……聞く耳もたねえ。

「ええつと……ほら、魔物たちに襲われたとき、盾にできるかもしれないぞ」

「べつに盾がなくても負ける気はしないがね」

「あー、それじゃあ……俺の仲間が襲ってきたとき、人質にできるかもしれないぞ」

「おまえじゃあるまいし、そんな卑怯な戦法を取るわけがないだろっつー」

「っつっつっつ、じゃ、じゃあいまの状況は卑怯じゃないって言うのかよう！」

「」

「？」

テキストに言ったその一言に、相手は考え込んだ。

「む。言われてみればそんな気もするな」

「だろ？ だろ？」

「だが抵抗できない奴に正論を吐かれるとなんとなく目障りだ。や

「ぱり斬るか」

「ちよ、ちよっと待てー！」

がし、と相手の剣を持つ腕をつかむ。

「うわ!? こ、こら、離せー！」

「ふがー! ふがー!」

「こ、このっ……てえいつ」

げしっ! と蹴り転がされる。

「負けるかー!」

即座に立ち上がって剣を構える。

「そのスタミナでまだ戦う気か。ガッツは認めてやるが」

「うるせー! 俺は世紀の大悪党になる予定なんだ。こんなところでくたばってたまるかー!」

「悪党には向いてないと思うがね、その性格は。……まあ、いい」

言つて、カシルはこちらに向けた剣を返し あっさりと、鞘に収めた。

「……………?」

「雑談でほどよく体力も回復しただろう。そろそろ行くぞ」

「……………なあ、ぶち切れていいか?」

「ぶち切れて、私を殺すか? おまえは回避力はたいしたものだが攻撃能力に欠ける。私と戦うには多少の無理があるな」

冷静に批評して、吐息。

「実を言えばな、まだ少々迷っている。おまえをここで殺すべきか、否か」

「物騒な奴め。そんなんだと男にモテないぞ」

「あ、いまちよっと殺すほうに気持ち傾いたな」

「おおおお落ち着けて」

「ははは。……まあ、やめておこつ。やはり、こつという決着の着けかたは性に合わん」

颯爽と言つ。

……………まあ、いいけどぞ。

「で、これからどうするんだ？　なんだか俺たち、魔法でずいぶん遠くまで飛ばされちまったみたいだが」

「決まってるだろう。『生贄』を探すのさ」

「この広大な空洞のなかを、単に歩き回って？」

「それしかあるまい。なにか代案が？」

「んー……じつは、ないこともない」

「なんだとー！？」

お、驚いてる。

「本当か、それは？」

「ああ。たぶん、なんとかなると思う」

言って、俺は剣を高く掲げ、念じた。

「」

「」

「あれ」

「」

「ごめん、やっぱりわかんないや」

「がくん、と彼女がつんのめる。」

「期待させておいて、それが！」

「あ、あははは。……いや、ごめん。前にへんな予知とかできたか

ら、今回もできたりするかなーと期待してたんだけど、だめだった

みたいだ」

「ったく、しょうのないやつだな。自分の能力くらい使いこなせな

くてどうする」

「まあしかし、そうすると本気で足を使うしかなさそうだな。難儀

なことだ」

「地図とかあれば楽だけど、こんなところの地図なんてないだろう

しなあ」

「地図？　あるぞ」

「は？」

「いまは使えないがね。うちの軍団の本部に行けばあるはずだ。行

くか？」

「え、遠慮しとく……」

「だろうな。」

本来なら私も引き上げたいところだが、それだとおまえたちに非常に多くの時間を与えてしまうのでね。気に入らないが、留まらざるを得ん。

まあ、とりあえず『生贄』が転移術に巻き込まれたのならば、我々のいた場所と飛ばされた場所の中間くらいの場所にいるだろう。そちらを当たるか」

「ああ」

ぐおおおおおおお……

遠くで、そんな吠え声があった。

「？ いまの、なんだ？」

立ち止まる。

カシルは、ひどく真剣な顔で聞き耳を立てていたが、

「……反響のせいでわかりにくいけど、どうやら進行方向側から聞こえてきたようだな」

「えらく物騒な吠え声だったが、なにかいるのか？」

「断言できるほど、多くの情報はないんだがね　地面を見る」

「……？」

べつに、なんの変哲もない岩肌に見えるけど……まあ、集落で見た岩と違ってちょっと赤い感じがするが。

「こいつはね、酸で焼かれた跡だよ」

「酸？」

「そうさ。魔物のなかには、酸を用いるやつもいるんだ。

腐食した金属を食べる種族が、それとも攻撃に用いるのか　ともかく、少数ながらそういうのが存在する。たいていは無害だがね。しかし、ここまで広い面積が焼かれているとなると、最悪の可能性

性を考えないといけないな」

「最悪の可能性？」

グリーン・ドラゴン
「洞窟緑竜だ」

げ。

「また、竜かよ……」

「ああ。」

困ったね。地図を見た限りでは緑竜の巢は書き込まれていなかったから、だいぶ遠くに飛ばされたらしい。あの術師、そうとう高位の外法使いだったんだな」

ぼりぼり頬をかきながら、カシル。

「やつかいだぞ、洞窟緑竜は。エメラルドの硬皮はどんな剣をもはじき返し、口からはき出す酸の吐息は岩をも溶かす。」

倒せば竜殺しの名声付きだがね。まあ魔術でも使えない限りは避けたほうが無難だな」

「それはよく知ってる」

「へえ？ おまえ、竜を見たことがあるのか。珍しいな、ふつう竜を見たやつのはほとんどはその餌食だったのに」

「……まあ、いろいろあつてね」

ふつん、とカシルはそれほど気にしたふうでもなかったが、ふと思いついたように言った。

「そういえば、人間の行商人から奇妙な風説を聞いたことがあったな」

「どんな？」

「武術大会に出場した岩巨人が、主催者のペットであった竜を素手で打ち倒して優勝したという話だ」

「……岩巨人って、すげえんだな」

「あははは、信じるなよ。どう考えたってそんなことができるわけないだろ。」

まあ、下手に図体がでかいとそんな伝説もできてしまうってことだ。難儀な話だがね」

「ハアイ？ 元気してる？」

「そちらの首尾はどうだ」

かすれた声が聞こえてきて、彼女は眉をひそめた。

「あれね。元気ないね。どうしたのカナ？」

「ちと油断してな。狼を一匹失ってしまった」

「ふうん。その様子だと、遡及打撃でそっちまで怪我したみたいね。だいじよぶ？」

「ふん。たいした怪我はしとりやせんわ。それよりそっちはどうなっている。本来なら、このタイミングで『生贄』を追いつめるのはおまえたちの仕事だろう」

「それがさあ。なんかヘンなのが追ってきてるのよね。気配からしてただ者じゃなさそうなんだけど」

「貴様がそこまで言うほどの者か？ ふむ……ちと、心当たりがあるな」

「えー！？ なによ、前はそんなこと言ってなかったじゃない」

「本来なら、もうちつと早く排除できた敵のはずじゃったからな。

まあ、貴様がうまくあしらえばいいだけのことじゃろうて」

「へえ……てことは、こっちもそろそろ本格的に始動？」

「ああ。」

頼むぞフレイア・ティミアス。この際、貴様の戦闘能力が頼りだ」
「らじやった！ んじゃ、養生して待っててねー」

五日目：決戦！ 洞窟の暴竜

ばったり。

遭遇は、まさに唐突だった。

「……………」
「……………」
「……………」
「……………」
むじ。

目の前にいるキスイっぱいのの頬をつまんでみる。

ぐにぐにぐに。

「いひゃい、いひゃいれふ〜」

「ほっぺたは実在する。てことは、幻像の線はナシか…………」

殺気。

とっさにその場を飛び離れる。直後、ずがんっ！ という音がして、俺とキスイの間の地面にハンマーが突き刺さった。

「キスイさま、ご無事ですか！？ ああ、おいたわしいっ」

「殺す気が、てめえはっ！」

直撃していたらとりあえず無事でない打撃に冷や汗が出る。

女はハンマーを大きく掲げ、びしいっ、とこちらを指差した。

「だまらっしやい！ この裏切り者っ」

「裏切り…………者？」

「そうです。その女と結託してキスイさまのだいじなほっぺに破廉
恥ないたずらを」

「待てこら、誰が破廉恥だっ！」

「ていうか、なんで私がほっぺにいたずらするために奴と結託しなければならんだ？」

「まあ正論ではあるが…………とりあえず、そういうことにしておけば
勝手に敵がひとり減るわけだし、黙って見ていたらどうかね」

「賢いが、なぜ貴様がそれをそそのかす？ 魔女」

「ライバルを減らすいい機会だからな。ライくんには可哀想だが、ここはひとつあきらめて散ってもらう方向で」

「勝手に散らすなっつーかこいつを止めるバカたれー！」

「あ、あのう……とりあえず、みんな落ち着きましようよ」

「ああ、おいたわしやキスイさま　こんな、ちんぴらごろつきどもに包囲されてしまうなんてっ。私だけはいつでもあなたの味方ですからねっ」

「いいからとりあえずどいてください、ジロロ」

こめかみを押さえながらキスイは女を押しつけ、カシルの前に立った。

「あなたは、先ほどの戦士の方ですね」

「左様。名はカシル、家柄名はヴァロツクサイトであります、《生贄》」

ひざまずいて、カシル。

「ヴァロツクサイトの君よ。なぜわたしを狙ったのか、お答え願えませんか？」

「我が雇い主の命令です」

「雇い主　？」

「カミルヘイムの君です。彼は《生贄》を帝国へ取り戻したいとのことですよ」

「それでいきなり戦争を仕掛けたのですか。女王の意思を無視した振る舞いは感心しませんね」

「返す言葉もありません」

が、我が雇い主にはまたべつの言い分があるやもしれません。それに私は、雇い主に反対する権限がありません」

「……そうですか」

目を閉じて、キスイ。

「どちらにしても、わたしは現状であなたたちを信頼できません。いったん里へ帰ります」

「致し方ありません」

「そして、あなたも来てください。ヴァロックサイトの君よ」

「捕虜、というわけですか」

「いいえ」

ほほえんで首を振る。

「あなたには交渉の仲介役になってももらいます。あなたの雇い主と、わたしたちとの」

「それは」

「岩巨人族が無駄に争い合うのは女王の意クイーンに沿いません。

協力していただけますね？」

「……承知しました。《生贄》」

驚いたことに、あっさり話がついてしまった。

「なんだよ。さっきと違ってずいぶん聞き分けがいいんだな」

「おまえと《生贄》だけであればこうは行かなかっただろうがね。

三人が相手では勝ち目がない」

「ほうほう。話の通じる相手に助かるね」

「……話っつーか、武力だけどな。どっちかと言うと」

まあ、とりあえず危機は脱したようなので、それについては文句の付けようもないが。

「さて、それじゃあさっさと帰るか。

集落までどれくらいかかる？」

「一日くらいだな」

待て。

「そ、そんなに遠いのかよ？」

「行きは集落にあった《門》が使えたんだがなあ。ああいう設置式転移装置はたいてい一方通行だから。

そっちは？ おまえも《門》を使ってきたようだが、帰る方法とかはないのか？」

「無理です。残念ですが」

「そうかい。」

外だつたらオオワシでも呼んで乗っていくこともできるんだが、洞窟じゃあなあ。ハルカめ、飛ばしすぎだつての」

頭を掻きながら、センエイ。

「ともかく、今日は歩けるだけ歩きましょう。それで、疲れてきたら野営するということだ」

「あいよー」

「ああ、キスイさまが野宿なんて……よよよ、おかわいそうに」

「……まあ、べつにいいけどさ」

「む。なんですかそのあきれ顔は。誠意がありませんね？」

「いやおまえ恐いからとりあえずハンマーしまえつての！」

「すきありっ」

「ひゃやややや？？ あ、あの、センエイさんちょっとそのっ」

「あー！ なにやってますかこのヘンタイ女っ」

「……にぎやかな道中になりそうだな」

「というか、俺はもう疲れてきた……」

ため息をひとつ。

揺すられて、目が覚める。

「交代」

「ああ わかった」

あくびしながら起きる。

センエイは、その場でごろりと寝転がって、そして寝息を立てはじめた。

……早いよ。

(まあ、疲れていたのはわかるけどさ)

見張りのローテーションはジロロ センエイ 俺だから、この後

は休みなしだ。

まわりを見回すと、キスイを抱きかかえるようにして眠るジロロが見える。

(……あれ?)

カシルの姿は ない。

困った。

「逃げた……か？」

「まさか」

「どわっ!？」

「静かにしろ。《生贄》が目を覚ます」

後ろにいたカシルが、肩をすくめて言った。

「びっくりした……なんだよ。起きてたのか」

「ああ。」

じつは逃げようかだいぶ迷ったんだがな。さっきまで当直をしていた魔女が恐くて、逃げるに逃げられなかった」

「……怖い？」

まあ、魔女だから強いのはたしかだし、どっかキレてるのは事実だが。

(あのバカが怖い……うーん)

首をひねっていると、カシルは軽く笑った。

「まあ、理解できなければいいさ」

「なあ。ひとつ聞いていいか」

「なんだ？」

「あんた、なんのために戦ってるんだ？」

「給料」

「……即答かよ」

「切実な問題だね。貴族の家長は大変なのさ。一族郎党の面倒を見なきゃならん」

「あんた、貴族だったのか」

「そりゃそつだ。」

補足するとね、岩巨人で家柄名を持つているのはほとんどが貴族だよ。

もともと、我々には人間みたいに長い名前を持つ風習がないんだ」「へえ……」

「それにしても、貴族つてのは義務が大きくてね。私の家のように没落していたりすると、金策に困ることもしばしばだ。

だから、こうして傭兵のまねごとをしていたりする。雇い主が多少気にいらなくても文句は言えんよ」

「《生贄》の意にはそぐわなくても、か」「そういうことだ。

まあ、べつに問題はないだろう。なににも殺すわけじゃない」

「悪役のせりふだぞ、それ」

「そうだな」

……あつさり肯定されてしまった。

「ま、俺も大悪党を目指す身だし、えらそうなことは言えないけどな……」

「なぜそんなものを目指すのか、私には理解しがたいがね」

「うるせえな。小悪党目指すよりはいいだろう」

「だからなぜ悪党にこだわる？」

「善人の大物なんてろくなもんじゃない、ってというのがクラックフイールド家の家訓だからな。大物目指すなら悪党だろ」

「家訓ねえ……家に縛られて自分の方向性を制約するのもくだらないと思うが」

「あんたが言うなよ」

「違うない。　　はは、一本取られたか」

苦笑。

「しかし……キスイも苦労してるな。ちびっこなのに」

「《生贄》だからな。重要人物というのはいつでも苦労するものだ。とはいえ、少々驚かされたが」

「なにが？」

「お年に似合わず、言説がすっかりしていらつしやる。私の妹などとはだいぶ違うな」

「周囲にろくでもない大人がいるとけっこうしっかりするもんだよ、子供ってのは」

「またハンマーで狙われるぞ、そういうことを言っていると」
くくく、と小さく笑って、

「とはいえ、それより先にひとつやっかいなことがありそうだな」
「ああ。……やっかいなこつた」

遠くから、ぼう、と近づいてくる鬼火を見ながら俺はうなずき、そして剣を抜いた。

カシルも剣を抜き放ちつつ、大声で言った。

「全員、起きろ！ お客さんだ」

「……ぐー」

「起きろ、魔女！」

「……すぴー」

「蹴り起こしたほうが早いんじゃないか？」

「そんなことしたらコロスよ？」

「つーか起きてんじゃねえかテメエ！」

「わはは、当たり前だ。ていうかこんな殺気受けて寝てられるかつての」

「……む、むかつく。」

「お客さんですか……」

「あ、あの。敵なんですか？」

残りのふたりも、起きあがってきたらしい。

「正体不明です。魔物の類かもしれませんが」

「いやあ、それはちよつとないんじゃないかなあ」

カシルの声に伝えて、女が言った。

「ほら、人の姿してるっしょ？」

「……化けているかもしれん」

「むう、疑り深いね。そんなんだと男の子に嫌われちゃつぞ？」

「ならば名を名乗りたまえ。化けているのでなければ、それくらいはあるだろう?」

センエイの言葉に、女はちょっと困った顔になった。

「んー、どーしよっかなー。教えてあげたほうがいいのかなあ」

「いいえ、けっこう。撃退すればよいだけのことですから、貴女の名など知る必要はありません」

「わ、すごい自信。そこまで言われるとかえって教えたくなくなっちゃったな」

ジロロの言葉にやりと笑って、女は髪をかき上げた。

「魔女、フレイア・テイミアス。『テイミアスの花嫁』って言えば、

まあそれなりに有名かな?」

「は!」

センエイが鼻で笑う。

「運がいいのか、悪いのか。サリ・ペステイの次はフレイア・テイミアスか。最近、そういうネタがどうにも多いね」

「あれ、ひよっとして信じてなかったりする?」

「いいや、信じるさ。カタリと思い込むには、おまえの殺気はリアル過ぎる」

「有名なのか?」

「割とな」

「にはは。そんなこと言われると照れちゃうね」

「で、その有名人がなんの用だ」

センエイの言葉に、フレイアはふと首をかしげた。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………なんだっけ?」

「おまえ、バカだろ絶対!？」

「わー、いやいやいや、バカじゃないよ。バカじゃ。うん」

あわてて首を振って、それからまた考え出す。

「んー、『貴様の戦闘能力が頼りだー』って言われたのは覚えてるんだけど……なにやってくればいいのか聞いた気がしないんだよね
え」

「頭痛くなってきた……なんだこいつ」

「言説による精神攻撃とは……なかなか強者ですね」

「いや、あれはなんにも考えてないだけだと思っが」

「うー、なんかバカにされてる気がするよー」

困った顔をしつつ、フレイア。

それから、ぼん、と手をたたいた。

「まあ、とりあえず皆殺しにしてから考えればいいよね。決めた決めた」

「なあ……やる気がどんどん削げていくんだが」

「油断するな。来るぞ!」

「はーい。いきまーすっ」

そして。

デタラメな戦闘が始まった。

洞窟の奥にて。

「あうー、このどーくつじめじめして嫌いー」

「我慢しろ。仕事だろうが」

「つたつてさー。なんでこんなヤバい仕事やんなきゃいけないわけ
ー?」

あのじーさんさ、ぜったいヤバいつて。いまのうちに逃げといた

ほうがいいよ、ミスファイト」

「我慢しろ、プチラ。」

……というか、既に受けた依頼だ。キャンセルは利かんぞ」

「ううー。最初から強く反対しとけばよかったー」

「金払いはいい相手だったからな。その分、多くを要求されるのは仕方のないことだ」

「あー、それはそうだねー。前金見たときには思わずあたしもニヨニヨしちゃったのよ。」

「って、そのせいでこのザマだけだね。世の中、おいしい話には裏があるんだよねえ」

「少し黙れ。プチラ」

「およ？ なになにに、敵？」

「……どうやらそのようだ。」

出てこい。隠れているのはわかっている」

声を掛けられ、吐息。

「心外ね。」

わたしは隠れたつもりはない。あなたたちが鈍くて気づかなかつただけでしょう。ミスファイト」

「げ、この声は……」

「サリ・ペステイか。」

奇遇だな、と言いたいところだが 実際は、どうも予知されていたようだな」

つぶやいて、ミスファイト 蒼の獣人は半身に構えた。

蜃気楼のミスファイト。

幻影使いであり、その視覚効果を用いた格闘戦を得意とする、異

端の魔人だ。

「うげげー。ホントにサリじゃん。」

やだなー。こういうめんどい相手とは戦いたくないんだよー。見逃してくれないかな」

「馬鹿を言っていないで戦闘準備をしろ、プチラ。」

この相手は遊べる人間ではない。それはわかっているだろう」
「へーへー。でもさー、いくらサリでも一人で来るのは不注意だと思っなあ。

ほら、なんとというかさあ。これ、2対1じゃん？ みたいな」
にへらーと笑いながら、モノフィラメント・ブレイド単分子剣を抜き放つ虹小人の少女 プチラ。

ダイヤモンド・ブレイカー金剛殺しとも言われるその硬剣を用いた容赦のない殺戮に定評のある、強大な魔法剣士だ。

わたしはそんなふたりを見て　こくん、と、首をかしげた。

「2対1……？」

同時に。

「わ……！？」

「な、に！？」

わたしの命を受けた短刀総計28本が、周囲の床から一斉に浮き上がった。

「2対29、の間違いでしょう、プチラ。

たったふたりで、わたし　サウザンドアームズ千手観音に勝てるつもりかしら？」

「うげげげ。本気と書いてマジだ。どーしよミスフィット」

「無駄口を叩くな。

……いかにサリ・ペステイと言っても、28本を同時に操りつついつもの技能は発揮できまい。勝負のしどころはある」

静かに言っつて、じり、とミスフィットは半歩だけ間合いを詰める。

「そう。退く気はない、か。

なら、こちらも本気で行かせてもらおう」

「プチラ、来るぞ！」

「うえーん、だから嫌だつて言ったのにー！」

暗闇の中。

人知れず、死闘が始まった。

「えーい、超スーパーロイヤルゴージャスデリシャスハイパーウルトラ……ちよつぷー！」

「うわ!?!」

「くっ!」

叫びながら放たれた蹴り から放たれた、なんだかよくわからない光線が、ぎりぎりかわした俺とジロロの横をすり抜け、天井にぶち当たって大爆発。

うわあ。当たってたらコナゴナだよ、アレ。

「気を抜くな！ 来るぞ！」

「ていやー、超必殺ゴッドファイヤーデリシャスるんハンマーぱーんち！」

「ぐわ!?!」

ばーん、と常識外れな爆音がして、鎧をべこつとへこまされたカシルが身体ふたつ分くらい吹っ飛ばされる。

「く、くそっ！ こいつ、本当に人間か!?!」

が、即座に立ち上がる。タフだ。

相手は余裕の笑顔で、

「あれあれ、もうバテたのカナ？ 体力ないなあ」

「くそ バケモノめが！」

「そのせりふはよく聞くけどねー。そう言うてから、長く生き延びたひとはあんまり多くないよ？」

「魔女！ どうして戦わないのです!?! あなたの魔力の使いどころでしょう!?!」

「」

ジロロの叫びに、しかしセンエイは無言。

「無茶言わないでよねー。彼女も、ちゃんと働いてるよ?。」

「なんだと?。」

フレイアは、のんきな笑みを浮かべて言った。

「彼女は知っているんだよ。わたしが使える、最強の術をね。で、それを封じるために待ちかまえているわけ」

「そこまで知って、なぜこっちを狙い撃ちにしない？ 私を殺せば貴様の目的は達成されるだろう」

「まあねー。けど、それなりに強いんだよこの子たち。順番に行こうと思ったんだけど、つい手間取っちゃった」

「けらけら笑って、フレイア。」

「てーことでさ。もうそろそろ、決着つけてもいいころだとは思ってたんだけど。」

意外と早かったね。ねえ？ ストーカーくん」

「まあ……いちおう、ね。なんとか追いつけた」

答える声は、後ろから聞こえた。

「シン……か？」

「遅いぞシン！ おまえ、どこほつつき歩いていやがった!？」

センエイが怒鳴る。

「そのこの彼女の気配を見つけたのでね。追いつめようとしたんだけど、かえって手間を食った」

「そうそう。けっこうしつこかったんだよお。わたし困っちゃったてへへ、と舌を出してフレイアは言い、そして軽く笑った。

「それにしても ただものじゃないとは思っていたけど、まさかキミとはね。ホルサの剣士」

「……気付いたか」

「そりゃ気付くよお。キミの先代、何人も殺してるもん。わたしけらけら笑う。」

「でも、いいのカナ？ キミ、真儀解放しないとわたしの相手はできないでしょ？ スノウ・ホワイそれは白雪を呼び込むと思うけど」

「構わない。どうせ彼女の来訪は何日も先だ。そのときまでには全部終わっている」

「ぱちん、と鞘から剣を外す音がした。」

同時に、烈風のような神気がシンから放たれ、一直線にフレイアのほうへ向かう。

(うっ　　わっ……)

横を通られただけで怖気が走るほどの凶気。

それを悠然と受けて、フレイアは笑った。

「恐いなあ。ホントにやる気だよ、この子」

「覚悟しろフレイア・テイミアス。おまえの術はセンエイが封じている。勝ち目は無い」

「おや、言っね。じゃあわたしも本気出しちゃおっかな」

「本気だと……！？」

「そつだよ。キミみたいに2000年前から進歩してないひとは知らないかもしれないけどさ。

分割召喚セパレーションって知ってる？」

「分割？」

「そう。失敗召喚のときにみんながやっていることだよ。対象の一部だけを召喚する技。召喚相手はけっこう痛いみたいなんだけどさ

ー

「あ、あ、あ　！」

悲鳴じみた声をセンエイが出した。

「わかるよね？　その子は召喚予約を利用してわたしの召喚を邪魔しているけど、そこでリザーブされるのはせいぜい四分の一。

残る四分の一はその子の召喚を邪魔するために取っておくとして、残り二分の一が　」

「ライ氏、ア・キスイを連れて逃げる！」

「な、あ、え？」

「早く、手遅れにならないうちに逃げるんだ！　形勢はいま、まさに逆転しつつある　！」

「わ、わかった！」

「え、ライさま　きゃっ！？」

みると、カシルが彼女を抱きかかえ、肩の上に乗せていた。

「このほうが速い。文句はないな？」

「いいでしょう。なにかあればこのジロロが対処します」

「ともかく走れ！」

言葉に、全員がいつせいに駆けだす。

「さあて、仕事だよ旦那！ 冥府の底から出ておいで！」

ずしん、とした鬼気に背中を押されるようにして。

無我夢中で走った。

「で、迷ったと」

「言うな……頼むから」

「方向を確かめずに走ったのは致命的ですね。せめて、前に来た方向に行けばよかったです」

まあ、予想された結果ではある。

「あのバケモノの気配にびびっちゃまって、なんにも考えられなかったからなあ……なんだあれ」

「おそらく、ヴォルド・テイミアスだろう」

カシルが言う。

「なんですか、それは？」

「死霊の大王だ。」

強大過ぎて過去にひとりしか完全召喚に成功した者はなく、故にその成功した魔女は『花嫁』と呼ばれるようになったとか

「それがあのフレリアとかいう魔女ですか……」

「まあな。」

名を聞いた時点で気づくべきだったな。 齢1500の大魔女とはとても見えなかったが、あの強さは本物だろう」

「そっか。老人ポケ起こしてたからあんなにバカだったのか」

「いや、老人ポケかどうかは知らんが……まあ、恐るべきバカだった。あの魔人たち、きちんと逃げ延びられたらどうかな」

「しぶとい連中だから大丈夫だろ。たぶんな」

「だと、いいんですけど……」

言って、ジロロは首をかしげた。

「とりあえず、いまは我々の心配をしたほうがよいでしょう。どうします?」

「どうします…… たったなあ。とりあえず、いま走ってきたほうへもどるか?」

「追ってきたフレイアさんとはち合わせという楽しい結果が待っていないそうですね」

「とすると、多少迂回していくしかないが……」

ぐおおおおおおお……

ずしん、ずしーん、ずしーん……

「……」

「いまの声…… 近くなかったか?」

「すっかり忘れていたな…… そういえば、このあたりに巣があったんだっただか、洞窟緑竜」

「なんだかわかりませんが、だいぶ差し迫った危機のようですね」

「え、え? え?」

「しかもこの音。単体じゃないな。複数で包囲している感じだ」

「シヤレになつてないな、それは……」

ふう、とジロロがため息。

「やむを得ません。一体だけなら私でも時間を稼げますから、その間にみなさんは包囲網を抜けてください」

「死ぬ気か!??」

「まさか。」

「だいじょうぶ。これでもけっこう強いんですよ、私」

自信ありげに笑う。

ちょうど、遠くに不気味な緑色の陰が姿を現したところだった。

「任せたっ! カシル、キスイを頼む!」

「了解した!」

「わ、わわ、ジロロ!」

「頼みます、皆さん……!」
かくして。

またも不毛なマラソン大会が始まった。

そして、その後も。

ずしーん、ずしーん、ずしーん……

ぐああああああおおおお!

「な、なんつーか、いったい何体いるんだよこいつら!」

「知らんよ……というか、洞窟緑竜って群れて巣を作るんだな。初めて知った」

「他人事みたいに言うな!」

「と、ともかく逃げまじょうっ」

ずっしん、ずししん、ずしん……ずしーん!

がらがらがらがらっ!

ずどーん!

「きゃあああああっ!?! なに、なんですかいまの!?!」

「ど、洞窟崩す気があいつ!?! 正気かオイ!」

「ちよつと興奮し過ぎだな。あの大きさの岩塊がぶち当たったら竜だつてやばいだろうに、たいした度胸だ」

「お、俺たちがなにをしたつてんだよお!?! なにが不満でこっち

くるんだあいつらは！」

「ははは、野暮なことを聞くな。単にごちそうだとしか思われてなに決まってるじゃないか」

「だから他人事みたいに言うなー！」

ずしんずしんずしん……ぎゃおおおおっ！

ずしーん！ ずしーん！

「み、右からも左からも来るぞ！？ どうする！？」

「直進しかないだろ。ていうか何匹いるんだろうな、緑竜ども。さすがに多すぎないか？」

「とってもいままさらな発言ですけどね」

「だああああ！ キスイまで他人事みたいに言うなー！」

「ははは。あきらめが悪いな少年。これは単に気力が尽きつつあるだけだよ」

「冷静に分析するなー！」

「天国のおとーさんとおかーさん……もうすぐ会えますね……うふふふ」

どすんずしんがきんばこん！

しぎゃああああっ！

がつんっ！

「うおおっ」

べしゃっ、とひっくりける。

「おい、大丈夫か？」

「いつつつつ……膝すりむいた」

「ふう。……まあ、どちらにしろもうそろそろ止まるべきだな。どうやら休める場所まで来たようだし」

「あん？」

「あの……ここ、どこですか？」

キスイが心細げに言う。

言われてみれば、いま自分たちがいる広い空洞はそれまでの洞窟とは雰囲気違っていた。

どこかしら静謐で、まるで聖堂のなかにいるような　　そういう
空気。

「こいつは……竜母が住んでいたのか、この洞窟。

なるほどな。緑竜どもが集まるわけだ」

「竜母？」

「古竜エルター・ドラゴンと呼んでもいいがね。竜祖に近い、極めて強大な竜さ」

「つまり、このへんの主さんですね」

「そういうことです、《生贄》」

「で、どうしてそれがいるってわかったんだ？」

「決まってるだろう。この場所に来てから緑竜どもがぴたりと追っ
てこなくなったからさ。」

竜の気配自体は消えていない。しかし追ってはこなくなった。ということは、より強大なものの住処に迷い込んだということだ。そしてそんなもの、上位の竜くらいしか思いつかん。

それに、若い竜は老いた竜の近くに生息しようとする傾向があると聞いたことがある。古い竜がこのあたりにいると考えれば、あの竜たちの馬鹿げた頭数も説明できる」

「つまり、ここはその竜母とやらのテリトリーっていうことで……そこに入ったから、竜たちは怖がって引き返した、と？」

「そうなるな。こちらに気付いていないのか興味がないのか、竜母が見当たらないのは気になるが」

よっこいしょとキスイを降ろしながら、カシル。

「いいのかね。こんなところで休んだりして……」

「構わんさ。また竜が近寄ってくれば逃げるだけの話だ。

それに、だいぶおまえもバテているようだしな」

「っーか、子供ひとり抱えてあれだけ走ってびんびんしているおまえが心底信じられん」

「情けないやつだな。まあ、私としては好都合だがね。頃合いを見て《生贄》を連れたまま逃げればおまえも追ってこれないだろうし」

「そ、それは困ります」

「ていうか、まだそんなこと考えてたのかよ……」

「当然だ。戦士は最後まで勝負を捨てない。一度はあきらめかけたが、バカのおかげで振り出しにもどったんでね。この機会を捨てるわけにはいかんよ」

「それが、理のない勝負であつても？」

「理など後で考えればいいことです、《生贄》」

「勝てば官軍、ということですか」

「然り。勝った後に官軍として振る舞えばよろしい。途中の正義など問題とするに足りません」

「目的が手段を正当化する。そう言いたいのですか」

「然り」

「でもあなたは、その目的すら把握していないではありませんか」
キスイの語気があまりにも鋭かったからか、カシルは息を呑んで沈黙した。

「目的が正当でなければ手段が正当化されることはない。あなたの主の目的がなにか、あなたは本当に把握しているのですか」

「それは」

「《生贄》を帝国にもどす？ それであれば、なぜ最初にそれを請うべくわたしの下へ使者をよこさないのですか」

「それは、しかし」

「あなたの主が真に《生贄》であるわたしを帝国へ返したいのであれば、理由はどうあれわたしの説得から始めるべきでしょう。ちが

いますか」

言葉をなくしたカシルを見て、キスイはちいさくため息をついた。「あなたの主は嘘をついている。残念ですが、彼の狙いはわたしとはべつのところにあると考えたほうがいい」

「べつのところ……とは？」

「決まっているでしょう。女王^{クイーン}です」

「ですからそれは！」

「誤解しないように。彼にとって女王^{クイーン}の代理は誰でもよいのです。伝統に沿った年齢の女子で、神器を持っていればそれで十分でしょう。」

だから、彼はわたしの生死なんて問わないと思いますよ？ むしろ思い通りになりそうもないわたしは邪魔でしょうね」

「しかしそれは憶測で」

「憶測であるなら、なぜ力づくでわたしをさらおうとしたのですか」

「あなたは昨日、彼にはべつの言い分があるかもしれないと言った。」

つまり、あなたの言い分では筋が通らないことを認めただけです」

「……はい」

「では問います。あなたが予測する限りで、彼が主張し得るその「言い分」とやらを思いつくのですか？ わたしには思いつきません」

「………」

「ですから、わたしは彼の目的が《生贄》ではないと断言します。少なくともそれでは彼の行動を説明できませんから」

がっくりうなだれたカシルに向けて、キスイは手を差し出した。

「剣をお出しなさい、カシル・ヴァロックサイト」

「あ、あ……っ」

「お出しなさい」

それまでとは違ってかわって弱々しく、カシルが剣を差し出す。受け取って、キスイは剣を抜き放った。

そして刃の先を持ち、柄のほうをカシルへと向ける。

「受け取りなさい」

「はい」

剣が、カシルの手にもどる。

「もう一度言います。あなたの雇い主の目的は、この神器であつてわたしではありません。むしろわたしは邪魔です。」

ですから、あなたがわたしを斬り殺してこれを持ち帰れば、あなたは目的を達成できます。」

その覚悟が　その目的を正義と信じて果たそうとする覚悟が、あなたにありますか？　カシル・ヴァロックサイト」

「わ、私は　」

「あるのなら、その剣でいますぐわたしを斬り殺しなさい。それがあなたの正義でしょう」

「お、おい!？」

「ライさまは黙っていてください。これは岩巨人族の問題です」
きっぱり拒絶して、キスイは口をつぐんだ。

カシルは、　目に見えて青ざめていた。

(……早まるな、頼むから早まらないでくれ)

「わ、私は……」

「あなたは？」

「私にはできかねます。《生贄》」

「ならば降伏なさい。あなたの目的は正当ではない」

「いいえ」

カシルは、震える声でも食い下がった。

「私は……正直に言つて、愚か者です。私は、あなたや私が思いつかない理由を私の雇い主が持っている可能性を否定できません。」

ですから……あきらめるわけにはいきません。あなたを帝国へ戻そうとすることには意義がある、そう考えておりますから」

「あなたに誘拐された結果、わたしが殺される可能性があるとしても、ですか」

「その場合は、身命を尽くしてお守り致します」
キスイはあきれ顔で、

「……いくらなんでも、軍隊からあなたひとりでこの身を守りきれ
るとは考えられませんけど。」

まあ、いいでしょう。それがあなたの正義と思えるならば、貫き
なさい」

「……………」

(い、意外と容赦ないな……キスイ)
毒舌ではないが辛辣で容赦がない。

「あ、その、ええと」

ぼーっと見ている俺に気がついて、キスイは急にもじもじしだ
した。

「えと、すいません。ライさま。なんだかのけ者にしてしまっ
たみたいで……………」

「いや。まあいつもとちがうキスイが見られたから楽しかったしな」
「うっ……偉そうですね。ときどきひとに言われるんです
けど、直らないんです」

ぼりぼりと頬をかきながら、キスイ。

かしゃん、と剣を鞘に収める音。

「そろそろ行きましよう。竜母がなにをしているか知らないが、こ
れ以上邪魔をするのも……………」

「？ おい、ちょっと待て」

……………なんか。ヘンなものが見えた。

「？ なんだ、いきなり。ゲテモノでも口に含んだような顔をして」
「……………」

忍び足、開始。

場所を気取られないように注意しながら、ゆっくりと。そこを踏
まないようにして、後ろに回り込む。

「あの、ライさま。なに」

「……………」と合図して、しゃがんで地面に顔を近づける。

そして。

「わっ！」

「ひゃあおおああおえええええ！？」

「わわわわわ！？」

「擬態だと！？ くそ、気づかなかった……！」

「まま待って待つて剣向けないで恐いから！」

おびえきった様子で、地面に擬態していたそいつはわめく。

……ていうか、なんだこれ。

形状こそ人間の形だが、全身は岩のような鱗に覆われている。

トカゲ人間。そんなかんじ。

「砂小人だと……？ なんでこんなところに？」

「しし失敬な！ わたしはそんなじゃないですよ！」

「ならばなんだと言うのだ。まさか魔物の一種ではあるまいな？」

「あ、あのう……」

「ああっ、そこにいるのは名のある巨人さまですねっ？ そうで

すよね？ うわーん、助けてくださいよおっ」

「え、え？」

「あーこらこらとりあえず落ち着け」

「うひゃあ！？ ぼぼ暴力反対反対っ。剣を抜くのはNGなんで

すからねっ」

「……聞く気がねえな、こいつ」

「いつそ、斬るか？」

「ひいひい！？ やめてやめてえ！」

「み、みなさんちょっと落ち着いてっ………！」

落ち着いた。

「いやぁ………そうですか。てつきり恐いひとたちかと思ってたんですけど、迷い込んだただだったんですね。安心しましたぁ」

あははは、とほがらかに笑う爬虫人。

「で、あなた、何者だよ」

「え？ ですからこの家の主です。フルネームはナーガラジャ・ランガラクザン・ホルテリコウ・モトイ・ナクラス・パリアシテラ・コルマラグプタと」

「……覚えられねーよ」

「では短縮してナーガラジャ・モトイ・ナクラス・パリアシテラ・コルマラグプタでどうでしょう？」

「んー、まだ長い」

「うっ、お客さん買い物上手ですねえ。よし、まけにまけてナーガラジャ・モトイ・コルマラグプタでどうですかっ!？」

「むむ、もう一声っ」

「ひ、ひどい！ これ以上やったら私首くらなければなりませんよ!？ ええい、こうなったら……」

「貴様ら、楽しいか？」

「……けっこうぐさっと来ますね、その一言」

「気にするな。ていうか、あれはノリという概念を知らない哀れな生き物だからあきらめとけ」

「やかましいぞ、ライ。」

で、ナーガ。あなたがこの洞穴に住まう竜母ということによろしいか」

「超短縮されたー!？」

「どうなんだ、ナーガ？」

「しくしくしく……ええ、そうですよ。私は竜母ですよ。ふん」

こつん、と石を蹴飛ばしていじけるナーガ。

「あの、ナーガ様。じつはわたしたち、これからあっち側の道を通って岩巨人の集落に帰ろうと思っているんですけど」

「え？ ああ、べつに通り返けOKですよもちろん。奥のねぐらまで踏み込まれるのはちょっと嫌ですけどこのあたりなら問題なしです」

「い、いえ、そうではなくて、いやそれはそれで重要ですけど」

「？」

「要するに、あの周囲の竜どもをなんとかできる方法はないかということだ。このままでは食われかねん」

とたん、ナーガが困った顔になった。

「うう……あの子たちですか」

「ん、なにか問題でもあるのか？」

「いや、だって……あの子たち。怖いじゃないですか」

「待てやコラ」

「だだだ、だって！ 身長とか体重とか私の何倍もあるんですよ！ 踏みつぶされたら超痛そうじゃないですか！」

「なあ。こいつ、本当に竜の偉いやつなのか？」

「……私も自信がなくなってきたな」

「ええと、あの竜たちはあなたとどういう関係なんでしょう、ナーガ様」

「どういう関係もなにも他人ですよ。だいたい、あの子たちってなんでこのあたりに群れているんでしょう？」

「いや、こつちに聞かれても」

「言葉も通じないし図体だけは一人前でよく食べるしうるさいし粗暴だし。ついでに私を見ると慌てて逃げていくのは誠意のなさの表れですよね？」

ぶつぶつ言う。とりあえず役には立たなさそうだ。

「わかった。なら近道とか教えてくれよ。この近くの道には詳しいんだろ？」

「そうですねえ。最寄りの岩巨人の集落なら……あつちの出口から出て、ふたつめの十字路を左に曲がって、吊り橋を渡ってすぐに右に行けば早いかな」

「よし、それさえ聞ければさっさと行くぞ、ふたりとも」

「行くのはいいが、今度はおまえがア・キスイを背負えよ？」

「げ。マジ？」

「マジ。ていうか疲れた。たまにはおまえも働け」

「あ、あはは。よろしくお願ひします、ライさま……」
と、そのとき。

「あ、ちよつと待った」

「？」

ナーガに呼び止められた。

「ええとですね、そのひとですけど」

「俺か？」

「はい。見たところタチの悪い呪いにかかっているみたいですから、さつさとお被い受けたほうがいいですよ？」

「……マジ？」

「はい。そのままだと狂い死ぬんじゃないかっていうか、よくまだ平気だなーと思いますけど」

うわ、超ブラックなお告げ。

「つつても、しばらくはそんな余裕ないぞ……街も遠いし」

「帰ったら、わたしがお被いしましょうか？」

「あ、ホント？」

「はい。簡易なものなら、わたしの秘儀ミラクルでもできるはずですし。なにもしないよりはいいんじゃないかって」

「助かる。」

……つて、こりやますますキスイは無事で帰さなきゃいけないな
つちまつたな

「あはは。それについては、頼りにしてます」

ずびびびびびび……どーん！

「こつちだ！ こつちに抜け道がある！」

「あいかわらず無茶するもんだな、竜つてのは……ここまで行くともはや種族的特性か？」

「カシル、もつと近寄ってください！ わたしの神格があれば落下する岩くらいは避けられます！」

「了解！」

ぐああああ、ぐああ、ぐああああああ！

「やばいやばいもう近すぎ！」

「ライさま、前に谷と吊り橋です！」

「好都合だ！ さすがに吊り橋は追って来れないだろうから、一気に突っ切るぞ！」

「らじゃーっ！」

しぎゃああああっ！ きゃおおおおっ！

「くそ、こつちにまでいやがるっ！」

「つべこべ言わず走れ走れ！ あんなミドリガメの親戚、全速力で走ればどうってことないさ！」

「あ、あのう……それはたとえがひどいんじゃない」

「うおりゃああああっ！」

がああああああっ！

「っ……疲れた……」

「バカ、ここで倒れたらまずいつ！ まだ竜は追ってきているんだ

ぞ！」

「ライさま、わたしも走ります！ 下ろしてください！」

「……っ。ちくしょう、この際はやむを得ないか……」

俺はキスイを地面に降ろし、剣を構えた。

「なにを!？」

「しゃあねえ。時間稼ぎするからキスイ連れて逃げる」

「……あきらめるのか？ 勝負を」

「べつに。俺にとっちゃそんなペンダントがどこへ行こうがどうでもいい。友達のキスイが生きてりゃ、とりあえずそれで十分だ。

カシル。さっきの約束、守れるんだろうな？」

「それは」

「守れると誓え。それで十分だ。俺はおまえを信じる」

だいぶヤケになったような言い分だが、いちおう俺にも勝算がなくもない。

瀕死の竜で、多くの援護つきだったとはいえ、一度は竜を倒したことがあるのだ。

あきらめなければ、きっと勝てる。……たぶん。

(住んでた街飛び出したときからずっと、あきらめなければなんとかなってたんだ。今回も大丈夫さ)

悲観的な考察はきっぱり無視し、俺は視線をカシルに向ける。

「私は……」

足音が聞こえた。

竜が遠くから近づいてくるのではない、もっと小さくて、特定のリズムを持った足音。

「まさか」

たいまつのみかりが遠くに見える。

その先にいた人物は、俺の見覚えのある人間だった。

というか、忘れようもない。

このでかい体躯を忘れることができるのは、たぶん相当先だろう。「ア・キスイ、ご無事のようにです」

「ガルヴォーンの君……！」

「敵の攻勢が途絶えまして。おそらくア・キスイの所在が地下であることを敵が突き止めたものと考え、防備は皆に任せて駆けつけた次第」

大男、ドツソは地響きのする方向を見やった。

「洞窟緑竜ですか。向かってくるのは一体のようですが」

「大半は振り切ったんだがな。ここで追いつかれてしまいそうだった。逃げ道はあるか？」

「残念ながら。ここの先は袋小路です」

「ふん。てことは、こいつを見捨てて逃げてもおなじだったわけだからこよく決めたのに、どうもついてないな」

「どうする？ このあたり、狭すぎてちよいと逃げ道がないぜ。上を飛び越えるにしても足場がないし」

「是非もない。倒せばよいだけのこと」

……いや、そんなかるーく言われても。

「正気か？ 竜を正面から倒せると？」

「戦士殿。あなたは、どうやら竜についての基礎知識が不足しているようだ」

「なんだと？」

「ア・キスイ。失礼致します」

「あ、はい」

ドツソは、ひょいっとキスイを拾い上げ、自分の肩に乗せた。

「これでよし。ア・キスイ、相手が酸の吐息を吐いたときと、土砂が落下してきたときのみ神力で対処願います。後は自分が引き受けますので」

「正気か貴様！？ 《生贄》を盾にする気か！」

「無傷で勝てばよいだけの話です」

「！」

「竜の最強攻撃は質量による圧迫ですが、これは洞窟では使いにく

い。吐息さえ封じれば、あんなものは単に凶体のでかい亀に過ぎません」

奇しくもさっきの彼女のたとえを用いて、ドッソは言った。

……まあ、理屈は通っている。

ため息をついて、俺は剣を構え直した。

「なにを？」

「手伝う。この剣があればキスイとおなじくらいのことではできるだけだからな。攻撃もできて一石二鳥だ」

「助かります」

「無茶しやがって……ええい、仕方がないっ！ 私も戦おうじゃないか！」

「あなたは参加なさらないほうがいい。盾がないと酸の吐息にやられます」

「ふん。舐めるな。要はおまえのでかい凶体を盾にすればいいだけの話だろう。へまはしないさ」

「……どうぞ自由に」

ドッソは背中に持っていた冗談のような大きさの斧を取って、もはや目前まで迫った竜に向けて構えた。

「では、参りましょう」

「必殺、金剛一撃斬ー！ てりゃー！」

飛び上がったプチラの斬撃を軽くサイドステップでかわして蹴り。

「うきや！？」同時に短剣を払い、「ぐっ！？」透明状態のミスフィトが避けたのを感じ取って近接。

「はっ！」

薙ぐ。空振り。

「甘いぞ、サリ……！」

「そつちが甘い」

「ぐあつ！？」

背後から忍び寄ったミスフィット本体を、マントに忍ばせていた短刀を放つて牽制、即座に距離を詰めて

エクスプロード
「爆砕」

「ぎー！」

ぼぐう、と奇矯な音とともに爆風がミスフィットを吹き飛ばす。同時に身体を回転させて回し蹴り。

「あいたあ！？」

また近寄ってきたプチラの手に命中。からーん、と、はね飛ばされた単分子剣が地面に落ちる。

「あ、やば、」

フォーム 「陣形『迦具土』、ゴ実行！」

「うきやー！？」

轟音と共に、短刀の群れがプチラを巻き込み、吹っ飛ばし、地面にたたきつけた。

「きゆう……」

フォーム 「陣形『針鼠』、レディ準備」

陣形を防御用に変え、一息。

「こんなところかしら。」

悪いことは言わない。ふたりとも、これ以上はこの件に関わるのはやめなさい。次に会うときには、容赦は

びたり。

言葉を止める。

「誰？」

「おや、気づかれてしまいましたよ」

おどけた言葉で。

そして確たる殺気を隠すこともせず、その男は闇から現れた。

「やあどうも、美しいひと。はじめまして。」

僕の名は　　そうそう、確かレイクルと言ったかな
「そう。」

それでレイクル。わたしになにか用があるのかしら
「もちろんですよ。ええ、もちろん。」

端的に言つとですね。あなた、僕のものになってくれませんか？」

「……断る。気持ち悪い」

「おお！」

芝居がかった仕草で、レイクル。

「なんたること！　気持ち悪い！　気持ち悪いですって！

素晴らしいじゃないか！　キモイ、ではなくて気持ち悪い！　正

調な言葉に秘められた棘のなんと深く甘美なことか！　僕は　　」

「煩い。陣形『フォームカクツチ』、実行」

「あれ？」

間抜けな声を残し。

ざくざくざく、と短刀がレイクルの身体に刺さり、突き抜け、吹
つ飛ばしてばらばらに四散させた。

ふう、と吐息。

「誰の人形か知らないけど　　気持ち悪かった」

つぶやく。

と。

『いやあ、看破されてたか。これは一本取られたな、はっはっは』
声は、吹っ飛んだはずの頭部から聞こえてきた。

「まだ、発声機能が残っていたのね。……不愉快。潰そう」

『おおっと、待ってくれよ。せつかくこれから本番なんだから』

「本番？」

不愉快に眉をひそめる。

「なにか、まだしようというの？」

『ふふふ。まあ、ちよっとね。』

ときに美しいひと。君の身体は、ちよっと面白いことになってい
るようだね？』

「面白くはない。この程度はありふれている」

『そうかな？ うーん、言われてみればそうかなあ。まあ、どうでもいいけどね』

「それで、なに。結論を急がないと潰すわよ」

『怖い怖い。いや、なに。たいしたことじゃないよ。』

ただ まあ、ね。君のその体質は、精神に起因するものみたいだから。

人形遣いにとっては、わりと相性がいいんだよね

「!?!」

ずぐん、と、身体の奥から衝動。

「が、あつ」

『知っているだろう？ 人形というのは、物質に精神を込めてできる魔導器具だ。』

その人形を扱う魔^{エンチャンター}技手工は、精神操作の術についてのエキスパートでもある』

「あくつ、うあ」

身体が、言うことをきかない。

ものすごい勢いで、体内の魔獣が支配力を広げだす。

『いったん暴走させてからのほうが僕にとっては扱いやすそうなん
でね。』

さあ、君はどんな醜態をさらけ出してくれるか ん?』

ぞん、という音がして 声が止む。

(殺った。けど……!)

「あ、ああああああああつ……!!」

ずずんつ。

意外に軽い音がして、緑竜の体躯が大地に落ちた。

「意外と苦戦しましたが、こんなものでしょう。……私も年齢のせいか、ずいぶん鈍ったものですね」

「……いや、十分だから」

「つか、めちやくちや強いんですけど。このひと。」

カシルは、呆然と竜の死骸を眺めている。

「信じられん光景だ……竜が、たったこれだけの人数に倒されるなど」

「岩巨人族の狩人であれば竜くらい一人で狩れるでしょう。当然のことです」

「嘘だ！ ぜつたい嘘だ！」

(……ひそかに同意)

まあ、外見からしてデタラメだったからなんとなく予想はついたけど。

ドツソが、キスイの身体を降ろし、斧を軽々抱えて背中にもどそうとする。

が、そこで彼の動きがぴたりと止まった。

「……どうした？」

ドツソは答えず、ただ不思議そうな目で正面を眺めている。

つられて目で追っていくと、そこにカシルの姿がある。

まだ剣を収めてはいない。構えたまま、まるで戦闘態勢のようだ。

……ていうか、戦闘態勢じゃん。

「なにやってんだよ、おい」

「ここが勝負の付けどころだと思ってね」

意味不明なことを言う、カシル。

……えーと。

「デカブツ。あなたに御前決闘を申し込む」

「……理由は？」

「このままだと、そっちの集落に《生贄》を連れ帰られてしまうんでね。あんたを排除すれば五分に戻せる」

「おい、本気か？　つーかそもそも、俺を含めてこっちはふたりだぞ？」

「おや、おまえにとつては《生贄》が生きていればどうでもいいんじゃないかったのか？」

「あ、あれはそりゃ、その場の方便で」

「男に二言は見苦しいぞ。いさぎよくあきらめて観戦でもしておけ……むちゃくちゃ言いやがるな、おい。」

「あなたの技量で私と戦うのは無理かと思いますが」

「ふん。たしかにあんたは強いがね、しょせんは同族だ。倒す方法はいくらでもある」

「だとしても、勝ち目は万に一つでしょう」

「だからどうした。万に一つでも勝ち目がある限り、私は退かぬ。それが私の道だ」

「その道が正しい道とは、私には思えませんが」
「ふう、とため息をついて。」

「戦士の決断だ。認めましょう。」

「ア・キスイ、観覧をお願い申し上げます」

「……………わかりました」

「感謝する。」

できれば、名を」

ドツソは斧を目前に構え、静かに名乗った。

「名はドツソ。家柄名はガルヴォーン」

「名はカシル。家柄名はヴァロックサイト」

「いざ、両者の誇りにかけて　参る！」

言つて、ふたりはそれぞれの得物を掲げ

「ふん！」

「ごがんつ。」

一瞬で、ドツソの拳がカシルの腹に突き刺さっていた。

……………拳？

（斧は、どこへ？）

一呼吸遅れて、だいぶ遠くへと飛んだ斧が地面にがすと突き刺さった。

……ほ、放り捨てた、のか？

(ぜんぜん見えなかった……)

「……あつ」

「こちらのスピードを見誤りましたか」

斧を捨てれば速度は上がる。得物の大きさに幻惑されたが故の敗北と知りなさい」

「む、無念っ……だっ……」

どせ。

……勝負、ついちゃった。

「本当に大丈夫ですか？ ずいぶん辛そうですが」

「ほ、ほっとけっ……気のせいだっ」

「いや、脂汗流しながら言われても……」

あきらめてデカブツの肩にでも乗せてもらえばまだ楽だろうに、意地でも歩くつもりらしい。

……まあ、意地なんだろうけどさ。

「骨は折れてないのか？」

「確認しました。折れてはいないはずですよ。ひびくらは入っているかもしれないが」

「それにしてもずいぶん辛そうだな。肩、貸そうか？」

俺が言うと、カシルはちょっとだけ躊躇したが、結局腕を伸ばして俺の肩につかまった。

「済まん」

「無茶するからだ。ったく、体格差見た時点で勝てないことに気づけての」

「無茶は承知の上だったんだが……さすがに勝てなかったか」

「あの」

ふと、キスイが声を上げる。

「なんだよ？」

「ええと。決闘の件についてはもういいと思うんですけど。」

それよりも、我々がいまだどちらへ向かっているのか、聞かせていただけられないでしょうか。ガルヴォーンの君」

「無論、我らが集落にです。ア・キスイ」

丁寧に彼が答えた。

「集落は……現在、安全なのでしょうが」

「私が出てきたときまでは安全でした」

「そうですね……」

「なにか、お考えでも？」

「今後のことです。皆は、今後どのようにしてあの襲撃に対処するつもりなのでしょうが」

「外部と連絡が取れれば、神殿に援護を頼んで助けていただくことも可能でしょうが……だとしても、神殿がいつ重い腰を上げるかは不透明です」

「では籠城して時間を稼ぐしかありませんか。」

それは可能ですか？」

「食料と水の確保の当てはありません。一ヶ月程度の籠城は十分に可能であるかと」

「その先は？」

「場所を移るしかないかと思われれます。ア・キスイ」

「どこに」

「鋼の宮が現状では最適かと」

「……遠いですね」

キスイはひとつ吐息。

「あるいは、さっさと神器を渡してしまったほうが皆にとっては幸福なのでしょうかね」

「ア・キスイ、それは」

「手段のひとつです。」

受け入れなさい、ドツソ・ガルヴォーン。我々は追いつめられています。解決策を放り捨てる贅沢はできません」

「……いずれにせよ、それは合流してから考えるべき問題でしょう」「そうですね。いま、どのあたりですか？」

「環の広場の付近です。そこで、探索にご協力いただいている方々と待ち合わせしております」

「わかりました」

言って、キスイは目を閉じた。

……だいぶややこしい話になってきた。

ていうか、

「一ヶ月の籠城って……俺たちも？」

「うーん、それはどうでしょう。」

いちおう、安全な経路を確保して逃げられるように手配はするつもりですが……場合によっては、やはり付き合ってもらっしかなくなると思います」

「困った話だな……」

「事前に襲撃の予測ができたなら、なんとかなっただけですけど。」

今回の事件は突発的な嵐みたいなものでしたから。付き合わせてしまっって申しわけないです」

「……まあ、キスイのせいじゃないとは思ってるけどさ」と。カシルが歩を止めた。

「なんだよ？」

「不審なざわめきがある」

「は？」

「たしかに妙ですね。」

失礼、先に行かせてもらいます」

「あ、ちよつと!？」

止める間もなく、ドツソの巨軀はあっという間に岩の向こうへ消えた。

「わたしたちも行きましょう」

「いいのか？」

「立ち止まっただけでも仕方ありませんから。この先、環の広場はもうすぐのはずです」

「わかった。……走れるか、カシル？」

「捕まりながらなら、なんとか」

「うなずいて、俺たちは走りだした。」

「で、これがオチかよ」

「い、いっぱい集まっていますね……」

「ライ、無事だったんだ！」

「よお。ちゃんと守りきったみてえだなあ？」

「ふん。ま、怪我もなさそうだなによりだな」

「まるまる」

リッサ。バグルル。コゴネル。ミーチャ。旧知の仲のみんなが、いつせいに声をかけてくる。

それはまあ、いい。

いいんだが……

「ふん、ようやく《生贄》の到着か」

「カミルヘイムの君！」

「遅かったな、カシル・ヴァロックサイト。無事に《生贄》を手に入れたようだなによりだ」

……いっしょにいる、この大量の重武装した岩巨人はなんでしょう。

「あははは……はち合わせしちゃってさ。さっきからならみ合いなんだよね」

「つたく、最悪のタイミングで帰ってきてやがったな。てめえら」

「あ、あはははは……」

「さて。そろそろ終わりにしよう。」

カシル。《生贄》を連れてくるがよい」

「あ、し、しかしっ……」

カシルはうろたえながら、男とキスイのほうを交互に見やる。

「なにをうろたえる。さっさとせんか」

「っ」

「その必要はありません」

きっぱり。

キスイが言つて、そして彼女はすいと歩み出た。

「お、おい!？」

「侵入者。名を名乗りなさい」

「なんだと？」

「あなたも岩巨人でしょう。女王クイーンの前で、名も明かさぬつもりですか」

「ふん……」

男は小馬鹿にしたように笑つた。

「貴様のような小娘クイーンが女王を語るか。不遜なことだ」

「それは《生贄》に対する侮辱ですか」

「侮辱だと？ ちがうな。私は貴様のような田舎娘など《生贄》と

認めておらぬ。それだけのこと」

男はあっさりと言つた。

「伝統に則り、儀式を経て正当に《生贄》となつた者を認めないと？」

「ふん。そのような儀式、私の目の前でされていないのに行つたことなど信じられるか。嘘をつくな」

「……おいおい」

目の前で見ていないから嘘だなんて、いくらなんでも決めつけだと思つが。

と、男の目がこちらを向いた。

「貴様クイーンが女王の意思に則つていないことなど、その小僧を見ればわかることではないか」

「なんですって？」

「聞けばその小僧は神の代理という。神と同席して、大巨人たる女王が平静にして居るわけがなかるう。なぜ貴様は戦いを挑まない」
「……こらまで。」

「おっさん、そんな話誰から聞いたんだよ？」

「我々には協力者がいてね。情報提供には困らなかった。それだけのことだ」

「グラールネル・ミルツアイリンボ……か？」

バグルルの言葉に、男の眉がぴくりと上がった。

「なぜその名前を知る？」

「あっちゃあ……どんぴしゃだぜ、こんちくしょう」

「なんか、俺たちがいるときに襲ってきたことから予測はしていたけどな……やっぱあの爺が裏で糸引いてやがったのか」

「さんかく」

騒ぎ出したこつちを見て、男は小さく舌打ちをした。

「しゃべり過ぎたか。」

まあいい。どのみち皆殺しにすればよいことだ」

「うわぁ……さっきの女とおなじ思考回路だよこいつ」

「待ちなさい。わたしの話はまだ終わっていません」

「聞く耳持たぬ。全軍、戦闘を」

「カシル・ヴァロックサイト！」

大声に、全員の動きがぴたりと止まる。

「答えなさい！ わたしを《生贄》と認めるか否か！ 一日を共にしたあなたが答えなさい！」

「……………」

す、とカシルが顔を上げた。

「彼女は……間違いなく《生贄》であります。カミルヘイムの君」
広間にどよめきが走った。

「静まれ！ 静まるのだ！」

カシル・ヴァロックサイト！ 貴様、この期に及んででたらめを吹聴するか！」

「でたらめではありません！ 彼女が起こした奇跡、私は何度も目にしました！」

「……っ！ ええい、この役立たずが！」

地団駄を踏んで、男。

「軍を引きなさい、侵入者。それ以上の狼藉は女王クイーンにも、《生贄》たるわたしにも不敬です」

「バカを言うな！ ここまで来て引き下がることができないわけがなからう！」

せつかく《生贄》を手に入れるチャンスなのだぞ！ 手に入れさえすれば、次の大会議でカミルヘイム家は他家を出し抜いて皇帝となれるのだ！

くそ……… だいたい！ カシル、なぜ貴様、一日行動を共にしながら宝器を奪って殺してしまわなかったのだ！ そうすれば後はどうとでもなつたものを！」

「あ……… あなたは、それを本気で言っているのですか！？」

「当然だ、当然だともさ！ だいたい《生贄》などお飾りに過ぎん！ そのくそ生意気な娘が《生贄》だろうと、殺して他の赤子に継承させればそれで済む話ではないか！

そうだ！ いまからでも遅くない。カシル、その小娘を殺して宝器を持つてこい！ もはや《生贄》だろうとそうでなからうとそんなことは些細な問題だ！」

「……… 断る」

「なんだと！？ くそ、貴様あ、雇い主を裏切る気か！？」

「あいにくだがヴァロックサイトの家系は代々、金よりも名譽を重んじる愚か者でね。あまりに重んじるんで没落して一文無しになるくらいだ。」

《生贄》に対する不敬、余りある。チリギリ・カミルヘイム、たつた今よりあなたは私の敵だ！」

びしっ、と指を突きつけて、カシル。

……… 本当は剣を突きつけたかったんだろうが、それはドッソに武

装解除されたままだ。仕方がない。

チリギリと呼ばれた男は、うろたえながらも背後に向けて指示した。

「え、ええい！ この裏切り者を処分しろ！」

……しーん。

「なにをしている！ 戦え！ 皆殺しにしろ！」

……しーん。

「部下にも見放されましたか。……無様ですね」

「……っ！ ならば、直接殺して奪ってくれようぞ！」

じゃきつ、と剣を抜き、

「覚悟おっ！」

ちいんっ！

「させるかよっ！」

「貴様、邪魔するかあっ！」

「って、う、うわあっ！」

「きゃあっ!?!」

どんっ。

後ろにいたキスイもろとも吹き飛ばされる。

「いつつ……ずっと走っていたせいで踏ん張りが効かない……」

「ライ、大丈夫!?!」

「俺は大丈夫だけど、キスイは あれ？」

駆け寄ってきたリツサに答えようとして、ふと押し黙る。

彼女は、俺の横でうつぶせになって倒れている。

……倒れて、いるんだけれど。

「……あのう……キスイ、さん？」

「ふ、ふふ、ふふふふふふ……」

あ、まずい。

「くそう！ 貴様、邪魔だてするか！」

「女王クイーンの化身たる《生贄》をお守りするのは岩巨人族の使命であるが故に」

「どけえええええ！」

「いや、あのさ。逃げたほうがいいよ、おっさんたち
なんとなく、あきらめを込めて言う。

と。キスイが、ゆうらりと立ち上がった。

うわあ。なんだこの神力。

(ただ漏れみたいになっている……その漏れた分だけで、思わず圧
倒されてしまうほどの)

「ドッソ・ガルヴォーン。そこを退け」

「は。しかし」

「命令だ」

「……仰せのままに」

「は！ とうとうあきらめたか!?!」

事情をぜんぜんわかっていないチリギリが吠える。

……南無。

「いいかげんにしろ無法者。さきほどからの狼藉の数々、目にあま
る」

「ふん、知ったことか。無法だの狼藉だの、そんなものは目撃者を
皆殺しにしてしまえば済むこと。勝てば官軍という言葉を知らん
か、小娘」

「は！ わらわを前に「勝つ」だと!?!」

瞬間。

どおん！ という音とともに、彼女の身体中からまばゆい神光が
あふれ出した。

「う、うひゃあああああつ!?!」

「愚か者が！ 神話の頂点を前に、たかだか岩巨人ごときが「勝つ」
などとは思い上がりもはなはだしいわ！」

「な、なんだとお!?!」

「くくく……これで三級。ここまで行くと神力というものが物理的
な意味を持つ。武器として使用も可能だ。

我がイエルムンガルド外殻は鉄鋼にも勝る鎧となり、光の狼牙は

刃向かうすべてを打ち砕く。

勝つ、だと！？ 巨人を相手にして勝てるでも思ったか！
身の程を知れ！」

「あ、あ、あああああつ……………！」

やけっぱちで振ったチリギリの剣が、彼女の手前でなんの前触れもなく腐って溶けた。

「ば、バケモノ……………！」

「不敬なことを言うな、このっ」

「どしゃあああああつ！ というすごい音とともに、チリギリの手前の地面が肘から手首までくらの深さでえぐり取られた。

「む、狙いが逸れたな。次は当ててくれよう」

「ひ、ひいいいいいっ!?!」

「あ、こら、待てこいつっ。逃げたら当たらないではないかっ」

「どしゃあああつ！ どごおおおっ！」

「すごい音を立てて地面が陥没していく。

「このっ、このっ」

「た、助けてくれえっ！ だれか助けてっ!」

「……………なあ。これでいいのか？」

「すべては女王クイーンの思し召すままに」

「……………」

「だめだこいつ。」

そうこつするうちに、チリギリがとうとう壁際まで追いつめられた。

「ひ、あ、お、おお、お助け……………」

「……………ふふふふふ」

「あああああ、も、もう殺すとか言いませんっ。皇帝とかぜんぶ諦めますからっ……………」

「……………ふふふふふふふ」

「や、やめてええええええっ……………」

キスイはにやにや笑ったまま、チリギリのほうを見下ろしている。

そして、見下ろしたままあお向けに倒れた。
ばったり。

「き、キスイっ!?!」

あわてて駆け寄る。

「きゆう……」

「あ、だめだ。完全にのびてる」

「あーやっぱりな。たぶん、神力を使いすぎて疲れ果てたんだろ」
後ろから見ていたコゴネルが言った。

と、チリギリが立ち上がった。

「ふははははっ! やはり天は私を見放さなかった! 今度こそ我が勝利だ!」

「……さっきまでえらく情けなかった分際でなにを言うかな、このおっさんは」

「黙れ黙れ! さあ部下ども、今度こそ小娘を捕らえて宝器を」

「ごんっ!

リツサの拳によって、彼は沈黙した。

「そろそろしつこいと思ったから黙らせとくけど……いいよね?」

「いや、俺に言われても」

「いいだろべつに。もう誰もこれ以上伸ばしたいなんて思っていないわ」

あたりを見回しながら、カシルが言う。

まあ、なんとか一件落着……か?

自分の肉の焼ける音で、なんとか我に返る。

(危なかった)

足に突き立てた『新月』を抜き、ほっと一息。

全身、かなり深いやけどに覆われている。

焼いても焼いても相手が退いてくれなかったので、最後の手段として剣を自分に突き立てたのだ。

（もう少して、完全に支配されてしまうところだった）
みんなの前でなくてよかった。そう思う。
と。

「苦しんでいますね、サリ」

「ハルカ？」

「命に別状は？」

「ないと思う」

「身に背負った魔物が、身体を乗っ取るうと動いているのですね。

それは、あなたが魔女になってからずっとですか」

「うん」

うなずく。

「隠れた敵のいる場所を探るために時間稼ぎに付き合っていたら、精神操作を受けてしまった。

そのせいでこの通り。無様をさらしてしまった」

「生きているのがなによりです。

むしろ、そういうときこそ我々を頼ってもらいたいものです。敵

の場所を察知したとて、一人で行くことはいけません」

「一人のほうで戦い慣れたるから」

吐息。

「それにしてもひどい発作だった。

術を受けたとはいえ、こんな発作になることはそうそうなかったのだけだ。どうしたのかしらね」

「感情のせいでしょう」

「感情？」

ハルカは、ええ、とうなずいた。

「魔物がつけいるのは感情です。あなたはそれが乏しい。いえ、正確には乏しいふりをして、魔物をごまかしている。」

でも、ここ数日はそうではなかったはず。あの少年が来て、ずいぶんあなたは変わってしまった」

「そう。……ライが来たから、こうなったのね」

「後悔していますか？」

首を振る。

「今は、まだ」

「そうですか。ならばそれは、たぶん幸福なことです」

「うん」

吐息。

それからわたしは、この珍しくも饒舌な魔女を見返した。

「今日は、よくしゃべる」

「そうですね」

「なにかあった？」

「さあ。……真夏の西風のようなものでしょう」

よく分からない。

けれど、それでいいような気がした。

「聞いてくれて、ありがとう」

「どういたしまして。そろそろ立てますか？」

「たぶん。……臆は切っていないから、再生し切らなくても歩ける

とは思う」

「ならばそろそろ行きましょう。少年に心配をかけたくはないでし

ょう」

「余計なお世話」

「知っています」

「……そう」

六日目：悪党、魔物たちに襲われる

今回、兵士を率いて襲ってきたチリギリとかいうおっさんは、岩巨人の貴族のなかでも中の上くらいに位置する名門の出身らしい。

中の上であるから暮らし向きには不自由しない。適度に尊敬されるし、権力もそれなりに大きい。

しかしいちばん上である皇帝を目指すには、中の上ではだめなのだ。よほどのブレイクスルーをしない限り、ではあるが。

「で、《生贄》に目を付けたというわけだ」

「……えらく短くまとめたな、おい」

俺の言葉に、カシルは肩をすくめた。

「複雑な理由があるわけじゃないんでね。これ以上長くしようがない」

「しかし、疑問があります」

言ったのは、ドツソだった。

「なにか？」

「なぜ、この程度の兵力で攻めたのでしょうか。」

私の知識では、帝国の総軍は今回の戦いで動員された兵数の比ではなかったはずですが」

「ああ、それは簡単。今回攻めて来たのは、カミルヘイム家の私兵と彼が募った傭兵だけだからさ。」

彼はぜんぶ自分だけでやろうとしたんだ。他の貴族に戦果を横取りされたくなかったんだろうね」

「ですが《生贄》の場所と、その周辺の地図を手に入れただけでも十分な功績でしょう。」

それを大会議に提出するだけでも、家名は十分に上がるのでは？」

「それじゃだめだ」

「なぜ？」

「単純な理由さ。それをやって無事に《生贄》が帰ってきたとすれば、次期皇帝の決定権は大会議から《生贄》にもどることになる。で、ア・キスイや、あるいは帝国が新たに擁立した《生贄》が、彼を皇帝にしてくれると思うかね」

「なるほど。つまり、自分の思い通りになる《生贄》を擁立する必要があったわけですか」

「私も、それらを正確に理解したのはア・キスイに指摘されてからだがね。」

「たぶん彼は最初から《生贄》を殺してすぐ替える気だったんだ」

「てことはあんた、途中までは戦争の目的もまとも知らされていなかったのか？」

「俺の指摘に、カシルはぼりぼりと頬を掻いた。」

「《生贄》だとは聞いていたさ。彼の私兵だけで戦うのも、単に手柄を独り占めしたいからだと思っていたが。」

「何度か諫めたりもしたんだが、聞き入れてもらえなくてな。なにしろ私はだいぶ彼に嫌われていたから」

「なんで？」

「知らん。」

「……まあ、たぶん貴族だからだろう。手柄を横取りすれば私が大会議で皇帝になるチャンスもあるわけだし、警戒したんだろ」

「殺伐としてるな」

「まあな」

「ドツソは少し考え込むようにしていたが、やがため息をついた。『いずれにせよ、帝国に集落の位置を暴かれたのは深刻な問題です。今回は神殿の仲介もあって停戦となりましたが、次にいつなにか来るかわからない。近いうちに場所を移らねばなりません』」

「おや、それなら帝国にもどってくればいいじゃないか。なにを悩む必要がある？」

「……おそらく、無理でしょう。我々とあなたがたの確執はずいぶん深い」

「確執ねえ。ア・キスイがわざわざ、この田舎くさい岩山の集落で一生を過ごすに値するほどの確執とも思えんが」

「おい、そいつは言い過ぎじゃ……」

「いいや。こいつは本心だよ。」

《生贄》は光輝なる都サーラファイジョに在るべきだ。このような辺鄙な地に在るべきではない」

言つて、それからカシルはくちびるをへの字に曲げた。

「ふん。いいさ。あんたたちがそれを聞き入れないことも理解してる。」

だが、《生贄》の帰還を待ちわびる岩巨人も多い。覚えておけ」

「肝に止めておきましょう」

「まあ、そっちはそのへんでいいだろう。うまくまとまったようだし。が」

横からコゴネルが口をはさむ。

「それとはべつに、こつちも聞きたいことがある。グラールネルっていうじーさんのことなんだが」

「ああ。あの薄気味悪い妖術師か。彼がどうした？」

「ぶっ殺しに行こうと思ってるんで情報をくれ」

「……えらく直線的な表現だな」

「わかりやすくいいだろ」

カシルはなんだか慄然とした表情で、

「知らん。直接会ったのも一度きりだし、情報の提供者としか聞いていないからな。」

あとはチリギリに聞けばどうだ」

「だってあのおっさん、人の話聞かねーんだもんよ。どうにもならん」

「拷問でもしたらどうだ？　しょせんは貴族のおぼっちゃんだ。すぐペラペラしゃべるようになるさ」

「……元上司だろ？　いいのか、そんなこと言って」

「見放したからな。」

というか、今回の話が神殿経由で帝国に入ればカミルヘイム家は破滅だろ、さすがに」

ちら、と窓の外、森のなかに陣を張る彼らを見て、

「私のような雇い兵士はともかく、私兵たちは哀れだな。帰っても保護者を失い路頭に迷う」

「代わりにあんたが保護すればいいだろ。貴族じゃねーのか？」

「金がない。貴族だからって無一文じゃろくな保護は与えられんよ」

「あー、じゃあそのアニキがバラした竜の死体でも売り払えば？」

「戦った人数で山分けにしたらせいぜい金貨1000枚だろ。足りんな」

……マジすか。

「当たり前だろう。大会議に没収されて競りにかけられる資産を買いもどさなけりゃならんだ。維持費も含めて、もう一桁ないと話にならん。」

ま、とはいえ一時収入としては十分すぎる額だ。だからすでに手を回して、クランとかいう例の商人に委託して売りさばいてもらう予定だよ」

「……とりあえず、すげー世界だったことはなんとなくわかったよ」

「まあな」

カシルは言っつて、それからとんとんと人差し指でひたいをたたいた。

「あの妖術師については、私が覚えている限りのことは教えるよ。アジトにも一度行ったことはあるし」

「どこだ？」

「ここから遠くない。たぶん、陸路で数日といったところじゃないかな。北だが」

ロスト・ヴァルハラ
「無地の燎原　　！？」

言葉に、カシルは重々しくうなずいた。

広場のほうへ行くと、そこにはごくいつものような光景が広がっていた。

「ふふふふふふふふ……」

「せ、センエイさん？ あ、ちよつと落ち着いて……」

「キスイくん……この服、ちよつと着てみない？ ふふふふ」

不気味な笑みを浮かべて、フリフリの服を持ってキスイにじり寄るセンエイ。

と、

「はああつ！」

「わつ！ と！？」

ぐごおんつ！ とすごい音を立てて、ジロロのハンマーが一瞬前までセンエイがいた場所を打ち据えた。

「ち。外しましたか」

「殺す気がおまえはっ！？」

「無論です。」

ふふ、この衆人環視のもとではあなたの外殻など紙も同然。キスイ様への不埒な行動、いまこそ成敗してくれましょう！

「隙あり！」

「ええっ！？」

「キスイ様！？」

がばあつ、とセンエイがキスイを抱きかかえた。

「ひひひ、この状態でハンマーを振ればキスイくんにも当たっちゃうぞー。どうしたどうした、うりうり」

「く、な、なんて卑怯なっ」

「さあキスイくん、おとなしく観念してこの服を着ようねー。ほれほれ」

「あああ、だ、だめです！ そんな奇天烈な服をキスイ様が着ることなど、天が許してもこの私が許しませんっ」

「うはは、泣き叫んでも貴様に止めることはもうできまい。せいぜいそこで悔し涙を流すがいいっ」

「あ、あのう……わたしの意志っていうのは、無視なんでしょうが

……」
「風情がありますねえ……」

「さんかく」

「なあ。あれ、なにやってんだ？」

「とりあえず、サリに聞いてみる。」

「センエイが、お気に入りの服をむりやり着せようとして相手を困らせている。」

「ちなみに、前にわたしもおなじことをされた」

「……着たのか？」

「秘密」

「……」
「気になる。むちゃくちゃ気になる。」

「というかあの服、そもそもなんなんだ？」

「センエイの、妹さんの形見」

「……」
「もしくは恋人の形見」

「……」
「どっちだよ？」

「さあ。時と場合によって違うみたい」
「だめじゃん。」

「無事に帰ってきたと安心してみれば、これが……」

「ま、いいんでねえの？ 修羅場から帰ってきたんだし、少し遊ば

せてやれ」

「なんでおまえが仕切るんだよ、バグルル」

「そりやおめえ、仕切り屋のシン先生がいつまで経っても帰ってこねえんだ。代わりに誰かが仕切るしかないだろがよ、コゴネルちゃんよ」

「だからなんでおまえが　　って、それはともかく。シン、まだ帰ってないのか？」

「おうよ。いま帰って来てるのはセンエイだけだ。なんでも、ジロ口とかいうあの女の知り合いに助けてもらったんだと」

「知り合い？ 岩巨人か？」

「さあな」

「……知り合い、ねえ。」

あの状況をなんとかできる知り合いを想像しようとしたが、どうもぴんとこない。

「まあ、竜をあっさりぶっ倒しちまう奴がいるような集落だし、いまさらなにがいてもおかしくないか……」

「よくねえよっ」

「おわあっ」

いきなり上がったペイの叫びにのけぞり返る。

「なんなんだよ今回の事件！ つかフレリア・テイミアスが敵つてどーすんだよ俺たち！ ええ！？」

「おおお落ち着け落ち着け。俺に言われてもなんにも状況は解決しないっての」

「ほほほ、そうですよペイ。いまさらキャンセルもできないのですから、腹をくくりなさい」

「とはいえ、看過できない問題であることは事実よ。」

現況、『花嫁』フレリア・テイミアスを確実に撃退できる戦力がない以上、我々にできる最上手は、彼女の召喚魔力が回復しないうちの速攻になる」

サリの言葉に、魔人たちは顔を見合わせた。

「まあな。敵の狙いはまだ不明だが、どのみちさっさと首取らんとやばいかもな」

「そうでしょうね。召喚に慣れた私やセンエイにとっても、かの『花嫁』殿は脅威ですから。」

それで、その敵の位置は？ ここにもどってきたということはないか情報が手に入ったということでしょう、コゴネル」

「確実な情報じゃねーけどな。」

奴は、おそらく無地の燎原ロスト・ヴァルハラにいる」

コゴネルが言うと、あたりからどつとため息が漏れた。

「きつついなあ……この、シンが行方不明ってタイミングでかよ」

「バグルルとマイマイが頼りだな、そうすると。頼りにしてるぜ？」

「うー、やだなあ。あそこ、目を開けているだけで疲れてくるのよね」

「……？ なんだそりゃ」

俺が問うと、

「無地の燎原ロスト・ヴァルハラというのはですね、幻覚で構成された大地なのですよ。

過去、彷徨える魔王ファンタリング・デビルと逆神格サタンが決戦を行った余波でそうなったと

か。無数の幻覚が入り乱れ、長い間直視していると発狂してしまう
そうです。

ですから、幻影使用イリュージョニストであるマイマイと、おなじく幻術をかじった
ことのあるバグルルが頼りなのですよ」

テンが解説してくれた。

「なんか、くらくらしそうな場所だな。できれば行きたくない感じ
だが」

「行かなければいい」

「いや、そうもいかんだろ」

「？ なんで」

「なんでって、おまえ……」

「ライは部外者だもの。隊商といっしょに出発すればいい。ここか
ら先は、わたしたちの問題よ」

「……そっか。そういえばそうだ」

「わりいなあ、なんか気を使わせちゃまって。まあ、あとは俺たちに
任せとけてことさ」

「そうそう、まかせとけてことさっ」

「ひしひし」

忘れていた。

俺は隊商の連中といっしょに働いている身で。

こいつらは、それとぜんぜん関係なく単に同行しているだけだっ
てこと。

同行する状況じゃなくなったら、別れる。

そんな単純なことを、すっかり見落としていた。

「なんだよ、湿っぽいな。」

どうせ、竜の死体を売り払った金をまだ受け取ってねえんだ。そ
のうちまた会えるって」

「……ああ。そうだな」

コゴネルの言葉に、うなずく。

と、すつ、とサリが立ち上がった。

「どうした？」

「作業に入る。戦闘で使用、損耗した武器を再精製しないと。半日
以上かかると思うけど。」

それが終わったら仮眠を取って、それからここを出ていく。一日
後の夜に出発。異議のあるひとは？」

「異議なし。」

剣の魔力、竜との戦いで使い切ったからな。頼むわ、サリ」

「鋼鉄^{カルバリン}攻撃の弾薬も補充したいですからね。異議、ありません」

「俺の精霊^{アストラル}ロープも補修、頼む。トラップ用に昨日使ったから、ち
よつと消耗してる」

「作業がない連中は休養だな。」

こらマイマイ、休養だからな。遊び回って休まないでいたら承知
しねえからな」

「わ、わかってるわよつ。もう、信用ないわね、ペイ」

「あ、あのお……そうすると、おいらはどうすればよろしいんでし
ょうか？」

「……そういやおまえ、いたんだっけ。グリート」

「私の解剖実験に付き合うかい？」

「いやあああああっ!？」

「ど、どっから湧いて出たセンエイ!？」

「わはは。そんなに驚かれるとこっちとしてもうれしくなっちゃうじゃないか」

「た、助かった……」

よく見ると、キスイは遠くでほっと胸をなで下ろしているところだった。

「……諦めたの？ センエイにしては、めずらしい」

「なんなら着るかい、サリ？」

「ヤだ」

「っーかてめえ、ほんっとーに見境ないのな……」

「ふふふ、言うだけ言っておきたまえライくん。どうせ君の負けは確定している」

「負け？」

「そうとも！ ここでリタイヤする君とちがつて、私はこの仕事が終わるまでサリと同行する権利を持っている！

ふはは、勝てる、勝てるぞお！ こんどこそサリは私のものだあ

「！」

「煩い」

「ごきゅっ！

「ぐあああああああっ!？」

「なんていうか……このパターンももう、見飽きたなあ」

「というか、美少女は全人類の共有財産で独占しちゃいけないとか言っていたのは誰だったんでしょうね？」

「う、うるせえぞ岩巨人の女……！ キスイくんは美少女だけど、サリはサリだから関係ないんだっ」

「無茶苦茶言ってるぞ、おまえ」

「とりあえず、これはあっちに連れていっておくから」

「お、覚えてるライナー・クラックフィールド、次こそは必ずうつうつうつ!?!?」

「ずりずりずりずり……」

「まあ、やかましいのが減ってよかつたな」

「あ、危なく解剖されるところだった……」

「で、グリート。おまえはどうするんだ？ マイマイについていくか、俺と一緒にいくか」

「で、できれば安全なほうが……」

「なら、ライ兄ちゃんと一緒にいったほうがいいよ。これからわたしたちが行くのは戦場だから」

「……そうだな」

戦場なのだ。彼らが行くところは。

「隊商の連中は、いつごろ出るんだろっな？」

「明日の朝じゃないかなあ、たぶん」

「てことは、おまえたちよりは前に出るんだな」

「見送りに行くよ、ぜったいつ」

はしゃぐマイマイを見ながら、俺はぼんやりと考えた。

……なんで、こんなに気分が悪いんだろう？

「ただいまーっ」

元気な声がして、ふと顔を上げる。

果たして、そこにいたのは自分の雇った小娘であった。

小娘 とは、外見のみを捉えた言葉である。実際、このフレイア・テイミアスという名の少女は齡1500にも及ぶ大魔女だ。

「成果は？」

「ダメだった。あはは、やっぱりホルサの剣士は強いね。」

そっちは？ なんか小細工してたみたいけど」

言葉に、肩をすくめる。

「失敗じゃな。奇襲作戦と軍勢、どちらも倒された。」

奇襲のほうは手ひどくやられてな。雇った魔人どものうち二人は手傷を負って逃走。残る一人は――

「心臓をぶち破られて終わり。って感じかな？ ふふ、ふがないねえ」

声は、後ろから聞こえた。

「ほう。もう生き返ったかの？」

「まあね。というか死んでないし。」

こんなこともあるうかと予備の心臓を作っておいてよかったよ。

あの子、容赦なく本体を殺してきたからなあ」

あはははは、と脳天気な、人形遣いは笑う。

それを見て、フレリアは顔をしかめた。

「わー。ヘンタイだ。ヘンタイがいるー。きもーい」

「おやおや。嫌われたもんだね。初対面なのに」

「初対面全身紫クインでそんな格好していたら誰だつて引くと思うけどー。

ていうか、その身体って人形じゃない。いまだきそんなマニアな武装使ってるのなんて久々に見たよ」

しぶい顔で、フレリア。どうやら本気で引いているらしい。

「ほほ。意外にも可愛らしい弱点を持っておるようじゃの。フレリア・テイミアス」

「弱いくせに搦め手使うやつは嫌いな。勝つても達成感ないし、そのくせ面倒だし。」

そんなヘンタイの話よりさー。残りの二人は？ そこに転がってる黒こげのとちみっちいのがそれ？」

言葉に、黒こげのとちみっちいのが反応した。

「……ミスフィットだ。焦げてるがよろしくな」

「プチラですー。鬱ですー。働きたくないでござるー」

「よろしくー」

うんうん。若い魔人は初々しくていいねえ。殺していい？」

「やめとくれよ。そいつらまで死んだらこちらの手駒が激減してしまっわい」

「はい。わかったー。」

でもさ、彼らが倒されたのはなんとなくわかるんだけど、軍隊のほうも失敗したの？ ふがいないねー、あれだけ人数差あったのに」「まあな。」

わざわざ地図も用意し、戦闘中には《生贄》の現在位置まで教えてやったのに、なにひとつ行っ前に退場してしまった。困ったものじゃて」

「そりゃ人選が悪いよお。じーさん、自分で制御できなくなるの恐れて必要以上に愚かなヤツに声かけたでしょ？」

「反論できんの。癪ではあるがな」

「かつかつか、と笑う。」

「ま、それはしょうがないとして……で、気付いてるのカナ？」

「無論。ここは我が結界であるぞ。気付かぬはずがなろう」

「言って、ふたりはそれぞれ部屋の入り口あたりを見た。」

「やはり、ここにいたか」

「わざわざ追ってきたの？ ホルサの剣士」

「いや。君は見失ったよ。ただ、それとはべつにこの場所には見当

がついていたんでね」

「……ふん。」

それでなにをしに来た、弟子よ。まさか、この人数にひとりで対抗できると思ってはおるまい？」

「グラーネル。あの生物はなんだ」

「にやり。と、笑う。」

「聞かねばならぬことかな、弟子よ」

「確認だ。」

魔狼か。破滅の申し子、魔王の出来損ない。だが異質なのは、それが人の統制下にあるということだ。

召喚ではなからう。あれを顕現するためには、世界そのものを召喚するのと同等の力量が必要になる。フィーエン・ガステイードにもできなかったことだ」

「フイーエン・ガステイドにできなかったことがわしにできぬと考える根拠もないと思うがな。魔狼を呼ぶだけなら簡単じゃよ」
「ああ。呼ぶだけなら簡単だろうさ。先例もあるし、センエイあたりならたぶん可能だろう。」

だが、そこで現れる魔狼は通常、単体だ。今回のように集団で呼ぶには、べつの方法が必要になる」

「つまり？」

「貴様、奥義の断片を手に入れたな？」

「正解、正解。まずはさすが、といったところじゃの。弟子よ」

「寄越したまえ、グラール・ミルツアインボ。あれを我々が探していることは貴様も知っていよう」

「断る、と言ったら？」

「まだるっこしい。さっさと条件を言え。貴様が断らないことは先刻承知だ」

「ふん。交渉の妙を知らん若造め。」

ま、よかる。これから言うもの、そのうちのいずれかを拾って行くがよい」

言つて、彼はいくつかのものを列挙する。とたん、シンが顔をしかめた。

「……理解できん。何故「拾う」と？　そもそも、それらは落ちているようなものではないはずだが」

「すぐに落ちるわい。すぐにな」

「なにを企んでいる？」

「まあ聞け。わしは事前に、岩巨人どもと交渉する際に偽のアジトを用いた。いま、やつらはそれを聞いて、偽のアジトの位置をつかまされているはずじゃ」

「その偽のアジトは、どこに？」

「ロスト・ヴァルハラ
無地の燎原」

「……そういうことか、妖術師」

「そういうことじゃよ。簡単であるつ？」

「是非もない。報酬を用意して待っておけ」
言つて、即座にシンの姿は消えた。

「うええ、なんかよくわからないけど人が消えたよミスフィット。すごくない？」

「よそ見とは余裕だな、プチラ。俺はいま治療中なんで黙っている」
「ふむ。無地の燎原ロスト・ヴァルハラかあ。あそこはさすがに僕の人形たちでも行動するにはきついなあ」

「てことは、今回あたしたちはお休みなのカナ？」

「そうだな。休養しておくがよかる。どうせ、すぐにおまえたちの出番は来るじやろうからな」

「はあーい。わかったよー」

結局。

サリは、見送りに来なかった。

「まあ、仮眠を取ってる途中だったんだからしょうがないけどさ…」

「…」
「やっぱ、さびしい？」

「ちよつとな」

リッサの言葉に答えながら、ぼーっと空を見上げる。
がらがらと馬車が進む音が、やけに大きく感じた。

いろいろ面倒見てもらったし、礼くらい言っておきたかったんだが。

ため息をついて空を眺めていたら、ふと横でへんな顔をしているリッサに気がついた。

「なんだよ？」

「ライもそんな顔するんだなあ……つて。ちよつと意外」

「……へんな顔、してた？」

「そういうわけじゃないけどさ。」

ただね。そんなに気になるなら、ちよつとぐらい出発を遅らせればよかつたのに、つて思つたの」

「無茶言つなつて。ただでさえ、街道から外れて予定が遅れてるんだ。これ以上俺だけの都合で待たせられるかよ」

「そりゃ隊商はそうだけど。キミひとりならできるでしょ？」

どうせこつちは集団だから足遅いんだし。あつちの出発まで待つて、それから追いかけてくればいいじゃない」

「それじゃダメだ」

「なんで？」

「俺の仕事は護衛だろ。護衛が私事で本隊離れてどうするよ」

じつのところ、リツサがいま言つた程度のことは当然俺だつて考えた。

クランなんかも、気を利かせて「べつに構いませんよ」と言ってくれたりしたのだ。

けど、

(そんなことしたら、護衛の心得とかを教えてくれたサリに申しわけが立たないしな)

リツサはそんな俺をじろじろ見ていたが、ふつ、と笑つた。

「ライ、ちよつと変わったね」

「そうか？」

「うん。最初に会つたときより、大人っぽくなつた」

「……自覚はないんだけどな」

まあ、やらなきゃいけないことができた分だけ、落ち着いて考えるようになつたのかもしれない。

「少なくとも、しばらくは生き延びなきゃな。サリと、シンに再会するまでは」

つぶやいて、俺は立ち上がった。

「どこ行くの？」

「ちよつとその辺を見回つて来る。護衛がだらだら馬車のなかで休んでばかりいるわけにもいかないからな」

「あ、うん。がんばってね」

「ああ」

言つて、俺は馬車の外に飛び出した。

『くらやみ森』もそろそろ北端に近いこのあたりは、ヴァントフオルンが近場にあることもあつて、街道の風化度合いもそれほどひどくない。

が、それも《紫の街道》を直進していればの話。

魔物が出るといふことで迂回した以上、狭い間道を通つて行かなければならない。

馬車が通れないほどではないとはいえ、右も左も森が迫つたこのあたりはだいぶ暗い。

(いきなり狼が大群で飛び出てきたりしたら、ちよつと対処しづらいなあ)

先の集落で聞いた話ではそういう事例はあまりないということだったが、油断はできない。

「急に負担が重くなつたな。やれやれ」

「なんなら、手前がお手伝いいたしましょうか？」

「……どつから湧いて出た。なんちゃって神官」

「いやあ。散歩していたら偶然見かけまして。はっはっは」

陽気に笑うスタージン。……いや、それはべつにいいんだけど、サリ並の隠密で背後に回るのはやめて欲しい。心臓に悪い。

「手伝つて言われてもなあ。神官つていちおう偉いんだろ？ 護

衛の手伝いなんてさせたらまずいだろ」

「おや、奇妙なことを。それを言うなら、あなただつて隊商の護衛などという身分ではないでしょうに」

「……この、剣のことか？」

「左様にございます。神の代理」

スタージンはそう言って、うやうやしく一礼。

「偶然拾っただけなんだけどな、この剣」

「偶然は運命の別名でございます。あなたが剣を偶然拾われたのならば、それは運命だったのでしょう」

「んなこと言われても……だいたい、俺はキスイとちがってバルメイスの魂とか呼び出せねーぞ？」

「呼び出したら大変ですから」

「あん？」

「狂神たるバルメイス神の人格など呼び出してしまったら、この森がペンペン草一本生えない荒野に変わってしまいます。呼び出せなくて僥倖ですね」

「いや、そんな淡々とすごいことを……ていうか、バルメイスってじつはヤバイ神様なのか？」

「いやあ、それはもう。神殿がいなかったことにしたい神・巨人トップ10に入るくらいです」

「そのトップ10、ぜひともぜんぶ聞いてみたいんだが……」

「それはご勘弁を。だれかに聞かれたら手前の首が飛びます」

「……なら最初から言っなよ。」

ま、要するにこの剣にはあんまり深入りするべきじゃないってことだな

「左様ですな。さわらぬ神にたたりなしということで」

「ひょっとして、それを忠告するためにわざわざ来てくれたのか？」

「はて、なんのことでしょう？」

あっさりとぼけられる。

「ま、どっちでもいいけどな。忠告はありがたくもらっておく」

「左様で。」

時に、気がつかれましたか？」

「え？」

「風の音に注意を。なにかが近づいております」
「言われるままに耳をすます。」

いまのところ、あまり気になる音はないが　いや。
近づいてきている。

「これ　木の上か？」

「た、大変ですうっ」

「おうあっ」

いきなりでかい声を上げられてのけぞり返る。

「ど、どうしたグリート。あの腐れ神官補がまたなにかやらかしたか」

「そんなどころの話じゃありませんよおっ。先頭の馬車がへんなのに取り囲まれてるんですっ」

「んだってえ！？」

ちっ、と舌打ちをして、スタージンのほうを向く。

「見えている敵だけじゃない。たぶん横からも来る。狭い場所だから、隊商全体がターンする時間はない」

「どうします？」

「悪いが手伝ってくれ。俺が先頭を守っているうちに、最後尾までぜんぶの馬車にその場で後ろを向くように伝えてほしい。」

それが完了したら、最後尾が先頭になって岩巨人の集落まで逃げる。あそこにはまだ魔人たちがいるはずだから、安全なはずだ」

「承知」

うなずきあつて、俺たちはそれぞれ駆けだした。

先頭車両に行くと、隊商の男たちが武器を持って応戦しているところだった。

「敵は　魔物か！？」

前脚の異様に長い犬みたいな奴が、群れを成して大挙して襲いかかってくる。

木を前脚でつかんで空中から。あるいは後ろ足で器用に二足歩行しながら。

(やばい。数がかなり多い)

「しぎゃーっ」

「うわ!？」

いきなり上から降ってきた魔物を避けながら、剣で切り飛ばす。

ざしゅっ。と魔物は両断され、あっさり絶命した。

「……………」

あれ?」

とまどっている、

「ぎゃぎゃーっ」

「うひゃ!？」

横からタツクルをかましてきた相手を、バックステップでかわしながら剣でざっくり。返す刀で一步踏み込んでもう一匹ばっさり。

「…………えーと」

(強くなってる、のか? 俺は)

なんかすげー自然に身体が動いてる。

と、

「迅雷《lightning bolt》! いつけえ!」

ばちばちばちと紫電を奔らせながら矢が飛び、軌道の周囲にいた犬たちを根こそぎ吹き飛ばし、打ち倒した。

「ライ、大丈夫!？」

「リッサか! 助かる!」

「ここはボクに任せて! 真ん中あたりが危険だから、助けに行つて!」

「わかった!」

駆け出す。

リッサの言ったとおり。中央部は、すごいことになっていた。

「ど、どんだけいるんだこいつら!？」

むちゃくちゃな量の魔物に辟易しながら、剣を振り回して走る。

「うりゃああああーっ! どけどけー!」

体当たりで魔物をひるませ、剣で薙ぎ、払い、突き、ぶっ飛ばす。あつという間に魔物たちが倒れ、消えていった。

なんか戦えてる。すげえ。

と、ふと横を見たら、腐れ神官補が馬車の陰から顔をのぞかせていた。

「こら小僧、遅いぞ! 神官補を危地に陥らせるとは何事か!」

「やかましい! てめーの上司どもも戦ってるんだ、さつさとてめーも手伝え!」

「馬鹿者、神殿に身を置く者が魔物と関わっていいはずがなかるう! いいからなんとか守り切れ小僧っ!」

「だああああ、んなこと言ってる場合かっ! 負傷者の手当でだけでもいいから働けバカ野郎っ!」

「ち。仕方がない。その程度は助けてやるから感謝しろよ小僧!」
「なんで無駄に偉そうなんだよアンタは……!」

まあ、バカの相手をしているひまはないので、この程度にしておくが。

周りを見ると、魔物たちはこっちには敵わないと見たのか、隊商の後部へ移動していったようだった。

「急いで追わないと!」

最後尾。

「だああああ、しつこいんだよてめえらーっ」

ぜーぜー息をしながら、残った最後の魔物に剣をたたきつける。

悲鳴を上げて魔物が消滅したのを見て、ようやく一息。

「は、はー、はー……くそ。さすがに体力が尽きてきた」

ずっと走り回りながら剣を振ってたら当然だが、まだ休んでいる

暇はない。

事実、森からはさらに魔物たちが集まってくる気配がしている。
(きりがいな……やっぱ、逃げるしかないか)

と、遠くからスタージンが駆けてくるのが見えた。

「どうした!？」

「全馬車とも、通達し終わりました! 号令すればいつでも逃げられます」

「了解! んじゃ、その号令かけてくれ」

「あなたは?」

「もうひとつ走りして前の馬車のほうまで行く。最後尾がいちばん攻撃が集中するからな、なんとかしないと!」

「承知。では、こちらはお任せあれ!」

スタージンの声を背に、駆け出す。

先頭まで行ったら、リツサが前線で格闘していた。

「がああああーっ」

「甘いつ!」

襲ってきた黒い狼みたいなのをかわして、至近距離から矢をたたき込む。

相手は悲鳴を上げたが、まだ倒れない。リツサのほうに飛びかかって、

「でいやー!」

ざくん、と俺の剣に両断され、絶命する。

「大丈夫か、リツサ!？」

「ライ! 助かったよ! この連中、術がまともに効かないの!」

「わかった! 俺が前衛張るから援護頼む!」

「りょーかい!」

剣を構えた俺を、3匹の狼たちが取り囲む。

「この野郎、なめんなーっ!」

叫んで剣を振り回し、一匹目をすぐに切り伏せる。

二匹目はそれを見て飛びかかってくるのを躊躇し、そこをリツサの矢が直撃。悲鳴を上げて逃げ出した。

それを見て、三匹目はおおーん、と叫ぶ。 やば、仲間呼んでる！？

と、後ろで馬車が走り出す音。

「ライ、馬車に乗って！ 逃げるよっ」

「ちょ、ちょっと待て！ 走り過ぎて足が保たない」

「バカ、なにやってるんだよっ！ 置いて行かれたら確実に魔物のエジキだよ！？」

「く、くそーっ！」

走るが、間に合わない。

「ともかく先に行ってる！ 俺は後でテキトーに合流するから！」

「 っつ」

「……あ？」

「できるわけないって言うてるの！ ああもう、このバカっ
言いながら。」

リツサは、ざん、と馬車を飛び降りた。

って、おい。

「なにやってんだテメー！ 死ぬ気か！？」

「死なないわよっ！ 後で合流するって言ったのはキミでしょ！？」

「そ、そりゃそうだけど……」

がらがらながら……と、馬車の音が次第に遠ざかっていく。

うまく逃げていけたようだった。

それはいい。 問題は、こっちだ。

周りにはすでに、かなりの量の魔物たちがひしめいている。

「取り残されたな」

「わりと冷静だね、ライ」

「最近こういうピンチが多いからな。いいかげん慣れた」

「だからって、今回も切り抜けられるって保証はないんだけどね…

「……」
魔物が俺たちを取り囲む。

なにが目的だか知らないが、敵対的な意図であることは間違いない。

「参ったな。ぜんぶ切つてたら体力が保たない」

「逃げるしかないよね？」

「そうだな。森のなかに入るのは、自殺行為だよな？」

「そうだね」

「なら、隊商を追うのがいちばんだな。体力、残っているか？」

「ボクは大丈夫。……だけど、矢の本数がちよつと不安かも」

「ふたりつてのがきついな。せめてもうひとりくらいいいんだけど」

「手伝おうか？」

「うどわあえっ!？」

「ひゃあうんっ!？」

いきなりのサリの声に、ふたりして奇声を上げる。

「どつから湧いて出たテメエ!？」

「森」

「……いや、そんなこと言われても」

「助けにきてくれたの？」

問いかけにサリは答えず、ただぼーっと敵の魔物たちを見つめるのみ。

「……ていうか、おい。」

「おまえ、じつは寝てないか？」

「……寝てはいない」

「なんだそのレスポンスの遅さは？」

「ぐー」

だめだこいつ。

「起きろ! ともかく走って逃げるぞ!」

「おっけー!」

「……眠い」
俺たちは、それぞれ得物を持って駆けだした。

岩巨人の集落の入り口。

「というわけで、もどってきた」

「おう。災難だったな」

「まるまる」

出迎えてくれるいつもの面々。

……が。

「なんか、いつもより少なくなーか？」

コゴネル、ハルカ、テン、ミーチャ。

残りはどこへ行ったんだろう、と思っていたら、

「半分くらい休憩中だな。」

残ったこの面子で、ちよつとあたりの地形を見回ってみようと思
っていたんだがな。魔物が異常に多いんで、こいつあやばいって逃
げ帰ってきたところさ」

と、コゴネルが教えてくれた。

「いやはや、困りました。移動しようにも今回のように襲われては、
怖くて仕方ありません」

「クラン、隊商の被害は？」

「おかげさまで。怪我人は多数出ましたが、ライさんやポエニデッ
タ神官の活躍もあつて、死人もなく積み荷も無事でした」

……まあ、それは一安心。
とはいえ、

「これって、異常事態だよな」

「だろうな。少なくとも自然に出てくる量じゃねえぜ、あれは」

コゴネルが同意する。

「そのことだけど」

口を開いたのは、サリだった。

「なんだよ？」

「敵に、魔狼がいた」

「魔狼？ なんだそれ」

「ほう。コゴネルは魔狼を知らないのですか。意外ですね」

テンが意外そうに言う。

「……そんなに有名な用語か？ それって」

「センエイなら『偽物』と称するでしょうがね。ええ、とても有名ですよ」

「神格持ちの召喚原理のことです、コゴネル」

ハル力が補足説明すると、コゴネルは目を丸くした。

「そんなやつ、実在するの？ だいたい、そんなの単体で召喚したって神格がついてこないだろう。世界ごと召喚したのなら話はべつだが」

「前例があるのです。」

方法は知られていませんが。少なくとも、過去に実現したことがある現象です」

「とはいえ、今回は数が多すぎる」

サリが言った。

「それぞれの魔狼を単体の召喚原理として呼び出すのでは、まず術者の魔力が保たない。なにかべつの方法を使っている可能性が高いわね」

「まあ、どっちだっていいさ。要するにあの魔物どもはジジイの差し金なわけだろ。ジジイ倒せば解決ってわけだ」

「……………」

「ん、どうしたんだサリ？ なんか言いたいこともあるのか？」

「ぐー」

寝てるよ、おい。

「さっきからずっとこの調子なんだが、よほど昨日の作業は疲れたのか？」

「……………みたいだな。」

まあ、サリは基本的によく寝るタイプではあるから、睡眠時間が削れるのはつらいんだろ」

「そうなのか」

「だからって立って寝ることはないだろうに。」

「で、今後の予定だが」

「どーせジジイがくたばりやこの異常事態も収まるんだ。それまで集落でのんびりしていけや」

「集落は安全なのか？」

「そりやそうだろ。三千人からなる軍隊が駐留してるんだぜ」

「そついやあいつら、出かける前まで外で野営していたじゃねえか。どこ行っただ？」

野営の跡はそこらへんに残っているのだが、だれもない。

「ああ、地下に潜ったみたいだな」

「地下？」

「森よりは住みやすいんだと。岩巨人つてのはそんなもんらしいな。いちおう、集落との出入り口は地下のほうで確保しているそうだから、なにかあったらすぐに駆けつけられると言っていたが」

「……地下のほうがぜったい住みにくいと思うんだが」

「慣れの問題なんだろ」

「そついうもんか？」

まあ、それはいい。

「要は、おまえらの敵がいなくなれば隊商も安全に動けるようになるんだな？」

「ああ、まあそつだと思いが」

「ならさ」

言った。

「どつせなら、俺もそいつを手伝おうか　？」

結局、魔人たちの出発はさらに半日ほど後回しになった。

「まあ、サリとかあのままで出撃しても使い物にはならないだろうからな……」

「あはは、そうですね。」

「でも、すごかったんですよ、サリさん」

「ん？ なにが？」

キスイに尋ねる。

「こうですね、いきなりばっ、と起きあがって、ライがピンチだ、って言って、びゅーんっ、と……」

「……擬音が多くてわかりづらい」

「あつっ……」

ぽかりっ。

「いつてーな！ なにすんだよハンマー馬鹿！」

「ふん。キスイさまのぱーへくつな説明に暴言を吐くからですっ」

「おまえ、ほんつとーにセンエイと似たもの同士なのな……」

ふんっ、と鼻息荒くそっぽを向くジロ口を見て、げんなり思う。
(まあ、けどサリには後でちゃんと礼を言っておかないとな。無理して出てきてもらったわけだし)

思いながら、あたりを見回してみる。

ここは、最初にキスイと会った広間だ。

多少は時間がのびたとはいえ、決戦前ということもあって魔人たちはほとんど姿を見ない。

かわりに、隊商の連中があちこちひまそうにうろついている。

出立が遅れてみんなそれなりに焦ってはいるようだが、かといってひまをもてあましていう事実はどうしようもない。

せめて役に立てることはないかとクランが岩巨人たちに申し出たのだが、

「女王クイーンの客人たるあなたがたが働いたりしたら、わたしたちが困ってしまいます」

と、あっさり断られたらしい。

「手が空いているんだから、雑用にでも使ってやればいいのに……」

「そういうわけにもいかないでしょ。特にこのひとたちはキミとちがって信心深そうだし」

「……いきなり湧いて出たな、リツサ」

「そういえば、こいつは帰ってきてからすぐに姿を消して、いままで見かけなかったのだった。」

「ていうかおまえ、どこ行ってたんだ？」

「えへへ……隠れてた」

「隠れてたって……だれから？」

「サフィートさん」

「……………」

「ほら、さつき魔物のなかに飛び込んで思いつきり戦っちゃったでしょ？ だからさ」

「あー、そういやあのおっさん、たしかにそんなこと言ってたっけ」

「つーか、襲ってくる魔物に応戦してもいけないとは窮屈な話だ。」

「で、出てきたってことは見つかったのか」

「あ、やっぱりわかっちゃった？」

「てへへ、と笑う。」

「いやー、すごかったよサフィートさん。おっかなくてさ」

「……えらくあっけらかんと言っただな」

「まーねー。ボク、もう覚悟決めちゃったし」

「覚悟？」

「そ。たとえだれがなんて言おうと、自分の流儀を貫くっていう覚悟。」

無理してがんばって、結果として自分を見失ったりしたら本末転倒だもん。だから、怒られても気にしないことにしたの」

「ずいぶんさっぱりした顔で、リツサ。」

「そのうち、神官クビになったりしてな」

「べつにいいよ。そしたら故郷に帰って狩人にもどるから」

「……なるほど、たしかにずいぶん肝が据わったな」

「まーね」

ちようど、そのとき広場の入り口にスタージンの顔を出した。

「あ、そろそろもどらなきゃいけないから、もう行くね」

「ああ。テキトーにがんばってこい」

「ライも。行くんでしょ？ 魔人のひとたちと一緒に」

「ああ」

「ならしゃっきりしないと。今度は決戦なんだから。テキトーとか言ってるって死ぬよ？」

「わかってるって」

「心配だなあ……ついてっちゃおうかな」

「バカたれ。無駄に怒られるネタを増やすなっつての」

「はぁーい。じゃ、健闘を祈るよ、ライ」

「おう、まかせとけ」

手を振って、リツサは去っていった。

「事情はよくわかりませんが、いい顔してましたね。あのひと
「そうだな」

「昔からのお知り合いなんですか？」

「？ いや、つい数日前に知り合ったばかりだけど」

「そうなんですか。でも、ずいぶん仲良しさんなんですね」

「そうか？」

「はい」

うなづくキスイの横で、うふふふと不気味にジロロが笑った。

「数日であれだけ仲良くなるなんて、たいした女たらしですよー」

「……おまえ、なんか俺に言いたいことでもあるのか？」

「キスイさまに手を出したらどうなるか……ふふふのふ」

「ええい、だからその物騒なハンマーを持ち上げるなっつーの！」

「あ、あつう……」

まあ、なにはともあれ。

これから俺が行く場所は戦場だったりするわけで。

にもかかわらず、じつはたいしてあわててもいない自分がいたり

する。

(……………)

「肝が据わったのは、俺のほうなのかもな」
なんとなく、そんなことを考えて。

その「俺のほう」という響きが、あることを連想させた。

「あ、そうだった」

「え？」

「ぜんぜん忘れていた。キスイ、たしかお被いしてくれるって話じやなかったっけ」

「うわ、そうでしたっ」

「えー、お被いい？」

「……………なぜそんな声を出す」

「キスイさまとふたりつきりになれる環境……………ぶつぶつぶつ」

「不安ならおまえも同席すればいいじゃないか」

「むう。それでも私、けっこう忙しいんですが。キスイさまのためとなれば仕方がないですねっ」

「ダメです。ていうか、サボリの口実にわたしを使わないでくださ

い、ジロロ」

「バレたっ!? なぜ!」

「……………まあ、俺はどっちでもいいけど」

ともかく。

無駄かもしれないが、いちおうお被いくらいは受けておこう。

夜。

少し寝付きが悪くて部屋から外に出ると、そこにサリがいた。

「よう。寝なくていいのか」

「これから寝る」

「そっか。じゃあおやすみ」

「うん」

「……………」

「……………」

「寝ないのか？」

「寝る」

「おやすみ」

「うん」

「……………」

「……………」

だめだ。これはらちがあかない。

「なんか、言いたいこともあるのか？」

「わからない」

「ん？」

「なぜ、ライはわたしたちについてくることにしたの？」

「そりゃ、おまえらと利害が一致して」

「利害なんてライにはなにもない。もともと、隊商の護衛は成り行きでやることになった仕事でしょう」

「……………そうだけど」

「どうして？」

「んー……………さあ」

「真剣に答えて」

さて、困った。

(べつに、明確な理由があって決めたことじゃないからなあ)

「むむ……………なら『友達を助けてやろうと思った』じゃだめか？」

「いま考えたの？」

「ああ」

……………なんだかやるせないため息をつかれてしまった。

「ライって、不思議」

「なんだよ、急に」

「合理的に見えて、へんに頑固。だから、いつも危険な目にあう」

「そいつはちがうよ、サリ」

「？」

「合理的なんてのは、目標の定め方次第で変わる基準なんだ。そして俺は、俺の目標に向かっていつでも合理的なつもりだぞ」

「ライの目標は」

「もちろん、世紀の大悪党。」

「かつこいいだろ？ 男はなによりもかつこよさを大事にしろ、つてのが……」

「家訓？」

「いいや。近所のじーさんの遺言だ」

「まあ、そのじーさんはまだ生きていると思うが。」

「心配かけてたら悪いけどさ。俺は俺でそれなりにうまく立ち回れると思うから、あんまり気にしなくてもいいんだぜ」

「言ったのだが、サリはまだ納得できない様子だった。」

「じつのところ、自分でも迷っている」

「なにが？」

「ライをここに止めておきたいなら簡単。いまずぐ襲いかかってす巻きにして人目につかないところに放っておけばいい」

「……過激だな、おい」

「サリはうつむいて、いつになく深刻な顔で考え込んでいる。」

「胸騒ぎがするの。」

「自分でもよくわからないのだけれど、なにかがよくない方向に進んでいる。このままではいけない」

「それは、これから行く場所のことか？」

「わからない。けど、そう恐れている。」

「ライ、わたしの目を見たことがあるでしょう？」

「一度だけだけど……」

「これは、魔物の目。そして、わたしの目でもある。」

「魔物と戦い続けているこの目は、時折未来の破滅を幻視する。運命律を読んでいる、らしいのだけど」

「運命律って……神話が決めた未来ってやつか？」

「そう。」

今回は、特段に幻視したわけじゃないけれど　嫌な予感だけではどうしても消えない。

もしわたしの胸騒ぎが正しくて、運命律がわたしたちを破滅させようとしているのだとしたら、対抗するための手段はそう多くない
「対抗するための手段？」

「魔術と、おなじく神話の力よ。」

ライ、わたしの腕をさわってみて

「？　いいけど」

言われたとおりにさわる。

とたん、じゅっ、という音とともにサリの腕から煙が上がった。

「うわっ!？」

「これが、ライの力。イエルムンガルド外殻。」

わたしは身体的には魔物とおなじだから、強い神力と直接に当たれば焼けてしまう。いまのように

「そ、そういうことは先に言えよ!？」

「だからこそ　運命律に対して、ライの持つ神話の力はひよっとしたら切り札になるかもしれない」

「ひとの話を聞けよ……」

「魔術の力は強いけれど融通が利かない。洞窟や屋内でレーヴァテインのような大魔術を使うことには無理があるから。」

だからひよっとしたら、ライに助けてもらっこともあるかもしれない
「ない」

「……まあ、ようするに。」

「安全のためにはついて来るなど言いたいけれど、使えるかもしれないから来てほしいので悩んでいる。そういうことか？」

「うん」

「だったら、サリがそれ以上気にすることはないと思うがな。」

要は、サリ自体はどっちがいいかわからないんだろ？　なら、俺が決めてしまえばいいじゃないか」

「そして、ライはわたしたちについて来ようとしている」

「そゆこと。だから、なにがあってもそれは決めた俺の責任だ。サ
リが気にすることじゃねえよ」

「……………」

そう割り切れれば、簡単なだけけれど」

言って、サリは背中を向けた。

「どうした？」

「もう寝る」

「そうか。じゃ、おやすみ」

「明日、よろしく」

言って、彼女は去っていった。

……………はあ。

（まあ、俺が死ななきゃいいだけの話なんだけどな）

心配してくれるのはありがたいが、結局はそれだけのことだ。

自然とあくびが出る。

（寝るか）

頭を軽く振って、そして俺は部屋へともどった。

七日目：悪夢！ 燎原の魔王

そして、翌日。

センエイの呼んだでかい鳥に運ばれ、俺たちがやってきたのは、

「……………」。

「なんだ、これ」

「ロスト・ヴァルハラ 無地の燎原。古戦場よ」

「いや、それは事前に聞いていたけど。」

「この四角くて色とりどりの地面はなんだ？」

「ほほ。気をつけてくださいね。その四角は、ひとつひとつが強烈な効果を持つ幻術ですから」

テンが説明してくれた。

「なんだか、でっけえすごろくのタイルみたいな地面だな」

「そいつは言い得て妙だが　すごろくとちがってこれは一歩ずつしか進めねーぞ？」

「そうなのか」

「コゴネルの言葉になんとか答えていたのだが、

「あと、すごろくはふつう、盤を壊したってすぐに新しい盤になって再生したりはしねーだろうな」

「？　なんの話だ？」

よくわからなくて聞き返す。

答えたのは、センエイだった。

「この空間はね、タイルも幻術なら枠も幻術、そしてその上の空間や空に至るまでぜんぶ幻術なのさ。すべて幻覚でできている。

で、幻覚つてのは破術すればふつう消えるんだがね。ここはおかしな呪いがかかっていて、幻覚を解くとその上に新しい幻覚が再生するのさ」

「へんな場所だな」

「そりゃあそうだと。二千年もの間、魔人たちが解きたくても解

けなかつた神秘の迷宮だ。

で、これほどの神秘となると、それを利用してようつてやつが山ほど出てくる。

みづかりにくい環境を利用してアジトを作る悪人どもも少なくないつてわけさ。そのためのノウハウも知られている。

それを逆用してやれば、アジトの位置をうまく探知できたりするんだが……で、コゴネル、どうよ？」

「なぜ俺に聞く？ センエイ」

「情報拾ってきたのは君だろう。ほらさつさと洗いざらい吐けコラ……なんで俺が尋問されてるんだ？」

ああ、確かに聞き出したぜ。あの岩巨人のおっさんとねーちゃん、ふたりの独立した証言で、ちゃんと符合している。

座標から割り出したところ、ここから直進で10マス目。かろうじて目視できるあのタイルに、やつのアジトへの入り口がある」

「ずいぶん遠いな。やはり老グラネルの実力はたいしたものだ。」

で、『見徹』は届くか、マイマイ？」

「ムチャ言わないでよお。……うう、視界が気持ち悪い」

「あー、マイマイ。悪いことは言わんからしばらく目えつぶって休めや。この空間で幻験に頼りすぎるとしまいにや発狂するぞ」

バグルルがふらふらになったマイマイに言う。

「マイマイ、どの程度近くならいけそう？」

「な、7マスう……それ以上はムリだよお、サリ姉ちゃん」

ふらふらしながら、マイマイ。

コゴネルは渋面で、

「つまり3マス……最後のマスはまあ仕方ないとしても、2マス分を自力で進まなきゃならないわけだ。きついな、おい。」

バグルル、おまえはどうた？」

「あん？ 俺、見徹なんて技術持ってねーぞ」

「とことん使えねーなおまえ」

「なんだとこのやろう!」

「さんかく」

「あーふたりとも、とりあえずじゃれるのは後にしたまえ。」

2マス。2マスね。微妙な距離だな」

センエイがつぶやくように言う。

コゴネルも渋面になって、

「実際問題、どうやって通っていく？」

ひとつのマスは、入ってみればかなり容積がでかい異空間になっている。抜けていくのは容易じゃねえぞ」

「んー、まあ、考えがないわけじゃないが……あれ、そういえばトウトは？」

『ここに』

「……たまには顔出せよ。いつもいつも声だけだとユーレーみたいで不気味だし」

『外法の使い手に謂わる筋ではないぞ、センエイ』

「左様で。」

で、あなたの意見はどうよ」

『是非もなし。兵は拙速を尊ぶとはいえ、この大迷宮に真っ向から挑むのは無謀に過ぎる』

「センエイ、考えというのは？」

「しゃーない。タネを明かすとね、私も使えるんだ。見徹」

「ほう……意外ですな」

「なにがだ？ ドクトル・テン」

「偽物を標榜するあなたが偽物を看破する術を持つことができますよ、センエイ」

「ふん。真贋を判定できないやつに詐欺はできないんだよ。見識が浅いな」

「これは失礼をば。」

必要な距離は2マス。届きますか？」

テンの言葉に、センエイは吐息してから、

「たぶんな。まあ、遠いと無理がありそうなんで先にやらせてもらうが。」

私が見徹を使って、幻が再構成しないうちにマイマイが術をかけ、さらに全員が走って10マス目に飛び込む。だいぶシビアなタイミングだが、なんとかなるだろうと思う」

シビアと言いながら、センエイの顔に浮かんだ笑みはあくまで不敵だ。

と、コゴネルが手を挙げた。

「なあ。脱出のときはどうするんだ？」

「ああ、そりゃ簡単だ。周囲の空間全体に「消える」って念じればいい。」

幻が破壊されて再構成される間は通常空間にもどるから、そこでダッシュで逃げ帰れば無事に帰れるだろうさ。幻に平衡感覚を乱される可能性があるから、地上の方向を見失わないことだけは気をつけるようにしてな。

まあ、アジトの中にまで入ってしまうとこの手は使えないがね。

帰ってくるときは、アジトを出てからその手を使うといい」

センエイは自信たっぷりに言う。

そこで、ハルカが手を挙げた。

「最後のマスには見徹を使えないのですか。それができるなら、もう一段階楽になると思いますが」

「そりゃダメだ。なにしろ、幻のなかにアジトへの入り口があるんだから。」

この際、虎穴に入らずんば虎兇を得ずってわけさ。苦勞のしどころだ、覚悟してやるしかない」

『問題は、そのアジトの入り口が容易に見つかるか否かであろうが』
「たぶん簡単にわかる」

言ったのは、サリだった。

『何故だ？ サリ・ペステイ』

「まわりはすべて幻覚だけど、アジト自体は幻覚じゃないもの。」

「ずれが生じて、だいぶ目立っているはずよ」
『見ればわかる。そういうことか』
「そう。」

代案がなければこの作戦で行くけど、どうする？」
サリの宣言に、みんな顔を見合わせる。

「……賛成というか、対抗案がないな」

「素直じゃねえやつだなあ、コゴネル。賛成だけ言えばいいだが」
「うるせえだまれバグルル」

「残りのひとたちも？」

特にそれ以上異論も出なかつたので、サリはうなずいた。

「じゃあ最後に注意事項。」

気をつけるように。マスの中は幻覚のるつぼよ。アジトに駆け込めば多少は安全だろうけど、それでも油断しないほうがいい。

すべて現実でない可能性を疑うこと。幻覚であると認識しているかぎり、「消える」と強く念じれば消すことができる。

あと、センエイとマイマイは見徹の後はろくに魔力が残っていないだろうから、突入しないでここで待機してもらうことになるけど

「
いったん言葉を切って、サリはちよつと考え込む。

ふと、目が合った。

(……………?)

いま、なんだか

「そうね。ペイがいいわ。ふたりの護衛をしてみらいたい」

「べつにかまわねえけどよ……………こいつじゃいけねーのかい？」

言って、ペイがぼんと俺の肩をたたく。

「……………？　なんで俺なんだ？」

「だっておまえは部外者だろ。危険な仕事は本業に任せておいたほうがよくないか」

「まあ、そりゃそうかもしれないけどよ……………」

「だめ。ライは前線に出てもらおう」

きつぱり、サリは言った。

「なにか、考えでもあるのか？」

「……あの剣の力をどれくらいと見積もればいいのか、わたしにも評価しづらいけれど。」

たぶん、あれをきちんと使いこなせば、ライは切り札として十分機能できる」

ほう、と周りのみんなが改めてライを見た。

「あの、サリ・ペステイにそこまで言わせるほどか」

「ええ」

「……そうかなあ。なんかサリ、会ったところから俺のことを過大評価している気がするんだけど」

「わたしは嘘をついていない」

ちよつとむつとした風に、サリ。

ぱん、とセンエイが手をたたいた。

「ま、じゃあさっさと始めようじゃないかね。マイマイ、準備は？」

「いつでもできるよ」

「じゃあやろっ。」

全員、見徹と同時に走れ。もたもたしていると再生する幻影に取り込まれるぞ」

「始めるよー！ いっせいのぉ……せっ！」

「りゃあああああー！」

瞬間。

ばきばきばきとすさまじい音を立てて、地面のタイルがぶち壊れていく。

「ライ、走って」

「お、おうー!？」

「てめーら、ちゃんと無事で帰ってこいよおー！」

「うおりゃああああああー！」

「重労働です」

「さんかく」

壊れていないマスに乗った瞬間、立ちくらみのような感覚が走った。

「と、とっ……」

不思議な空間だった。

空は暗雲がたれ込めて薄暗く、大地は乾燥してひび割れているのだが、やたら蒸し暑い。

平原 だった。

その平原のなかに、ぽつんとひとつだけ異彩を放つ、黒い洞窟が見える。

「あれが、アジト……?」

「バカ、止まってねーで走れ!」

「え、ええ?」

「後ろから来ます」

「さんかくさんかく」

どどどど……と、地鳴り。

あわてて走り出し、やつらに続く。

「な、なんだなんだあ!?!」

「知らん! なんか牛みたいな河馬が群れを成して押し寄せてきてる!」

コゴネルが答えた。

「そ、それも幻覚なのか!?!」

「だろうな! だが、いちいち消している間に巻き込まれて押しつぶされる! とつとと逃げ込まなきゃ死ぬぞ!」

「どーでもいいがおまえら足遅いなあ。鍛えてねーとこつとこつとこつとバカ見るんだぜ?」

「うるせーぞ筋肉馬鹿! だまって足動かせ!」

「へーい。じゃ、先行くぜー」

「ライ、急いで」

「うがあああ!」

手前の地面がもこもこと盛り上がり、へんな怪物が頭を出す。

「この、邪魔する　うおお!？」

「どごお!　という音とともに爆発がバケモノを吹っ飛ばした。

「見ましたかみなさん!　これが私の発明の威力!　発明は火力う

!　うひゃひゃひゃひゃひゃはひゃは!」

「バカたれ!　こつちまで吹き飛ばされそうになったじゃねえか!」

「文句言うひまがあつたら走れ、ライ。押しつぶされるぞ?」

「わかつてる!」

「風精ブーストお!　じゃ、先行つてるぜバグルル!」

「あ、ためコゴネル、待てコラあ!」

「さんかくー!」

「重労働です」

「幻覚である以上、あの群れは洞窟のなかには入れないはず。いったん洞窟のなかに避難するわよ」

「わかつた!」

必死で走る。

そして

洞窟に滑り込んだ瞬間、それまで感じていた地鳴りがすべて止んだ。

「……あれ?」

「幻覚が消えたな。」

とつとつ、敵さんのアジトにご招待つてわけだ」

「そうなのか」

コゴネルの言葉に、答える。

洞窟のなかは暗く、明かりがないとまともに視界も効かない。と。

「ライ!」

「ん、どうしたサリ」

「早くその場から離れて!　畏が　」

言葉をさえぎるように、いきなり地面に光の魔法陣が発生した。

「なっ!?!? しまっ……………」

「さんかくく!?!?」

「うおおおおっ?」

「なんだってえ?!」

「……………っ!」

ばつん! と、眉間のあたりにへんな感触があつて。

そして、光が消えた。

「……………」

あれ?」

べつにどうってことはない、それまでとおなじ洞窟のなか。

だが、サリがない。

サリだけじゃない。ハルカと、テンがいなくなっている。

「なにがあつた……………?」

「転移の罠だ」

舌打ちしそうな勢いで、コゴネルが言った。

「転移?」

「べつの場所に動かされたってことだよ。

後ろを見る。出口がなくなってるだろ」

「え、うわ!?!?」

見れば、さっきまで出口のあつた場所はすっかり岩でふさがっている。

閉ざされているのに妙に明るいのは、そこかしこに生えているコケの類が発光しているからだ。さっきのように外からの光があるわけじゃない。

「やられたな。駆け込んでくるだろうことを予測して、ちょうど入口付近に分断の罠を仕掛けてくるか。やり口が陰湿だぜ」

「しかく〜」

「……………」

「で、これからどうするんだ?」

コゴネルの言葉に、バグルが自信満々に答えた。

「知れたことよ。このまま探索を続行するのさ」

「だからなんでおめーが仕切るんだよ？」

「細かいこと言うなって。それ以外の選択肢はねーだろがよ」

「……まあ、な。」

なんでわざわざ転移の罠なんて致命的でない罠を作ったのかは理解に苦しむが

「は。そんなこともわかんねえのかい、コゴネルちゃんよ？」

「……むかつくが聞いてやろう。てめーの筋肉でできた脳みその紡ぎ出したお粗末な結果でも、聞かないよりはマシだろうしな」

「がっはっは。そんなに褒めるなって。照れちゃうだろうがよ」

「……おまえら、仲いいなー」

「どこがだ!？」

「ぐはは。まあなー」

キレ気味に言うコゴネルと、陽気に笑うバゲルル。

コゴネルは渋面になって、こほん、と咳払い。

「……で、さっさと聞かせろよ。さっきの話」

「おうよ。つまりな、たとえば単純な攻撃系の罠なら、あるとき発動しちやいなかったらって話だ」

「? なんてだよ」

「そのちびすけの剣さ。それがあ限り、致命的な罠はぜったい発動しねえ。」

イエルムンガルド外殻っていうのはそういう防御法だからな。周囲の因果をねじ曲げて、害物の存在を消しちまうのさ。

今回の場合、敵の攻撃は魔術だったから外殻の効きはイマイチだが、それでも、直接殺そうとしたならば防御効果は現れるだろう。だからあえて敵は、罠自体には害になる要素がないように組んだわけだ。ほら、完璧な推理だろ？」

「聞いて損した。出直してこい」

「な、なんだとこのやろう!」

「ったく、たまに頭を使ってるかと思えばそれか。本気で脳筋だな。」

いいかバグルル、おめーの説には致命的な問題がある」

「な、なんだよ」

「簡単な話だ。妖術師がもしおめーの言うように考えて罫を組んだんなら、奴は最初っからライを標的にするつもりだったってことじやねえか」

「なにがおかしいんだ？」

「バカたれ。ライは最初、俺たちと一緒にここに来る予定じゃなかっただろーが！　なんで相手がライに合わせてるんだよ!？」

「あ、あーっと、その……今日あわてて作り直したとか、そういうのじゃねえか？」

「設置系の魔術の複雑さを舐めるな。あのレベルの魔術を置くには、少なくとも数日の準備が必要だ」

「むむむ……そうかあ。いい線いってると思ったんだけどなあ」

「がつくりうなだれるバグルル。」

「……ま、ここでぐだぐだ仮定の話をしてもしようがねえだろ。先さっさと進もうぜ」

「あいよー」

「まるまる〜」

「おう」

……ふと、疑問に思う。

バグルルの指摘は、あれはあれで合っていたんじゃないだろうか。(……………)

俺が来ることを、最初から予想していた？

まさかね……………)

走る。

急がなければならぬ。

急がないと

「！」

通路の向こうから、オオカミみたいな獣がやってくる。

「陣形『フォームカグツチ 迦具土』、実行！」

待たずに先制。短刀の群れに襲われた魔狼は、構える間もなく吹き飛んだ。

これで何匹倒したかわからない。

背後からも、どんどん集まってくる気配がする。

『任せよ、サリ・ペステイ。背後は守る』

「頼む！」

併走してきていたトウトの気配が、ふっ……と消える。

（これでわたしひとり。

間に合えばいいけれど）

無様だ。

二度も立て続けに、妖術師の罠を察知し得なかった。結果としてわたしたちは三つに分断されてしまった。

それに重大なミスがあった。こんなこと、ずいぶん昔に考えておかなければならないことだったのに。

（油断していた。敵が、まさか組んだはずの相手すらあざむいて罠を仕掛けるなど）

そう。

このアジトは偽物、罠だ。

おそらく敵は、最初からわたしたちをひっかけるつもりで、岩巨人たちにこのアジトの位置を教えておいたにちがいない。

「あ？」

気がつくのと、目の前にそいつがいた。

「……まさか。

いえ、そうね。その可能性も考えていなかった。うかつだったわ。シン・ツアイ。わたしたちを裏切ったのね」

シンは……特にリアクションを返さなかった。
ただ、少しだけほえんで、こう告げた。

「あいにくだがこれは幻影だよ、サリ」

「幻影？」

「そう。だってここは無地ロスト・ヴァルハラの燎原だからね。幻影のひとつくらい出るわ」

「本体は裏切ってはいない、自分は幻影。そんな文言が通るとでも？」

「そこまでは言わないさ」

「なにをしに来た。言いなさい」

焦れて言う。

シンはうなずいた。

「本当は出るつもりはなかったんだけどね。忠告のつもりで来た」

「忠告？」

「そうさ。サリ・ペステイ、君に対する忠告だ。」

もっとも、君は自分でもう理解しているのかもしれないがね」

「……魔物の、こと」

「そうだ。」

わかっているはずだ。君のなかの魔物が、制御を超えて暴れようとしている。

そちらに意識を取られて、どんどん思考力が失われている。こんな低レベルの罠すらにも注意できないほどに」

「否定はしない」

「それは肯定とちがわないよ、サリ」

「ならばシン、あなたは我々を裏切ったことになる。否定しなければ肯定でしょう」

「まあ、理屈ではあるね」

「……」

言おうとして、思いとどまる。

これ以上の会話は時間の無駄だ。わたしは時間が惜しい。

「どきなさい、シン」

「ああ、いいよ」

あっさり相手は道を空けた。

「なんのつもりで現れたか知らないけど、わたしは気にしないから」

「そうかい」

「じゃあね」

つぶやいて、わたしは走り出した。

急がなきゃいけない。

「なるべくなら、君の死体をついで帰るのは避けたいのだけどね」
「ささやかれた言葉は、だれにも届かず闇の中に消えた。」

「とまあ、これでとりあえずここが敵のアジトであることは確定つてわけだな」

「あのオオカミが出てきたからな」

「さんかく」

襲ってきた敵の死骸を見ながら、俺たちはそんなことを話していた。

しかし、バグルルの様子が少し、普段と違う。

ずっと黙っているの、仕方なく俺とコゴネル（とミーチャ）で話しているわけだが。

「おい、どうかしたのか？」

さすがに気になったのか、コゴネルが聞いた。

「んー、俺さ、こっに見えてじつはあんまり頭よくなってな」

「安心しろ。それはみんなわかってる」

「なーんかさ。納得できねえんだよ。これが」

「なにがだよ？」

「ここ、あの妖術師のアジトなんだよな？」

「ああ。そう言ったじゃねえか」

「なんだって奴は、こんなただっ広い上に罨満載のアジトなんざ作つたんだ？」

「……いや、そんなこと言われても」

「ちよつと待ってくれ」

ふと。

自分の心のなかで、腑に落ちないものがあつた。

「たしかに気になる。まるで、俺たちが来るのに対応するため作つたみたいだ」

「そりゃ、裏で操っていた岩巨人どもが失敗して、こりゃヤバイと思つてあわてて罨を置いただけじゃねえのか？」

「だったら雲隠れすりゃいいだけの話だろ。それに、準備に時間がかかると言つたのはおまえだぞ、コゴネル」

俺が言つと、バグルルがうなずいた。

「だよなあ。」

さつきそれを言われて、ふと考えたんだ。妖術師は最初から、俺たちを待ち伏せする気だつたんじゃねえかってよ」

「なんでそんな考えをさつさと言わねーんだてめえは！？」

「いやあ。みんなとつくに気づいてると思つただけだなあ」

……つまり。

「ここはその妖術師とやらが作った罨ハウスで、それに俺たちはあつさり引つかかってしまいましたと。そういうことか？」

「だろ？ たぶん」

「……頭痛い話だが、それだとつじつまが合うな」

「まるまる〜」

ちよつとそのとき、ごうん、とでかい地鳴りがした。

「崩れるか!？」

「いや、ちがう。ここまで堅牢に作られたアジトを崩すのはそう簡単じゃない。それより」

「こつちだ! こつちから音がした!」

「あ、こら勝手に走るな!？」

「さんかく」

コゴネルの制止も聞かずに、俺は飛び出した。

通路を抜けた先。ホールのような広い場所に、そいつはいた。

「……っ、ハルカ! テン!」

倒れている連中の名前を呼びつつ、俺は剣を抜いて正面の敵に向けた。

石でできた巨大な体躯。

頭には、神聖文字らしき文字でなにごとかの言葉が掘られ、光っている。

「ゴレム ! まずい、ライ! ここはいったん退くぞ!」

「バカ言え! 退いたらハルカとテンは確実に殺されちまう!」

「そうだけ、コゴネル。覚悟決めな。どうせこれでやられるようだったら俺たちだって助かりやしねえさ」

バグルルが言って、にやりと笑う。

コゴネルはまだうるたえながら、

「だ、だけどサリがないんだぜ? せめて合流すれば勝ち目は」

「ええいうるせえ。いつ来るかわかんねー援軍なんぞに期待するな」

「!」

「来るぞ!」

「……っ! ああもう、なんとでもなれ!」

「さんかくー!」

戦闘開始。まずはバグルルが前に出る。

「よっしゃあ、行くぜ！」

がががが、がぁん！

拳と剣が激突し、火花を散らす。

……すげえ。正面から戦えてる。

と思ったら、

「こら、バグルルあんまり動くな！ 危なくて攻撃魔術撃てないだろっが！」

「無茶言うんじゃない！ 俺だって必死だ、そんな余力あるかっつーの！」

余裕いっさいなしの顔で、バグルル。

と、その足が岩にひっかかってつんのめった。

態勢を立て直した直後、ゴレムの拳がその中央に突き刺さり、それをバグルルは剣で受け止めた。

がぁあぁん！ と、すごい音がして、いったん拳が止まる。

「ぬがががががが……」

っあぁあぁあぁ！」

ばっん、と音がして、バグルルの身体がすごいスピードで飛び、

壁にたたきつけられた。

「バグルル！？」

「よそ見してんな！ 来るぞ！」

「！？ っおおおおお、フィールドっ！」

ざずんっ、というすごい音がして、コゴネルの手前で石の拳の軌道が強引に曲がり、コゴネルのすぐ横を打ち貫く。

その隙をついて、コゴネルが敵のふところに入った。

「石よ、腐れえええっ！」

その手が強く緑色に光り、相手の腹に炸裂する。

ぎいいいいいっ！？

悲鳴ともなんともつかない、金属的な音がした。

が、相手の動きは衰えない。

「っ、あっ……っ！」

「さんかく」

がつん、とすさまじい音がして、コゴネルの身体が吹っ飛んだ。同時に、ミーチャがへなへたと床に崩れ落ちる。

「大丈夫か!？」

「な、なんとか……ごほつ。ミーチャの防御魔術がなきゃ……上半身と下半身がちぎれてたな……っ」

「……わかった。そこで休んでろ」

俺は剣を構え、静かに相手を見た。

残るは俺一人。敵は腹がちよつとえぐれているが、動きはまったく衰えていない。

大ピンチ。だが、

「へん、たしかに打撃だけはすげー威力みたいだがな
当たらなければ、そんなもんなんの意味もねえ！」
大見得きつて前に出る。

ゴレムがそれに反応してこちらを向き、拳を構えた。

遅い。

「おらあああああ!」

足でステップを踏み、空振りを誘ってふところへ。
剣を振ると、かつっーん、と手応え。

……固っ。

「馬鹿、そいつに普通の剣なんか効くか!」

「う、うわわわわ!？」

コゴネルの言葉に反論するひまもなく、荒れ狂う豪腕から逃げ惑う。

が、やっぱり相手が遅い。

「うがー! 盗賊の敏捷さをなめるなー!」

ぴょんぴょんぴょん、と飛びはねながら相手の攻撃をかわし、距離を少し取る。

剣を構えて、

「ライナー・クラックフィールドの名において　くらえええええ

ええっ！」

剣から伸びたまばゆい光が、石の巨人の腹をなぎ払う。

元からゴゴネルの攻撃で壊れかけていたそこは斬撃にさすがに耐えきれず、まつぶたつに割れて吹き飛んだ。

「…………ふう。」

なんとか、終わったか」

「ばかつ……………！ 油断すんじゃないっ」

「あん？」

背筋を上るものすごい悪寒に、身体が勝手に飛び退いていた。

「ぞっ！」

「っ！？ うげっ！？」

かすった。

たったそれだけなのに、左腕が異様な感触とともに動かなくなっ
た。

肩の関節が、外れている。

「こ、このっ……………」

「頭だ！ 頭の神聖文字リッソを壊さなきゃそいつは止まらねえ！」

「わ、わかった！」

答えた、その瞬間。

（あ…………）

敵の拳動が視界に入る。

腕を足代わりにして立ち上がった奴は、その足代わりの腕を伸ばしてたたきつけようとしたらしい。

それは俺をかすっただけで不発に終わったが、その拳動の結果、やつの体軀は俺の真上まで移動してきている。

そのまま、前のめりに倒して押しつぶす気が。

詰んだ。そう思った、そのとき。

『ふん。ま、この辺が潮時か』

頭の中で、なんか声がして。

瞬間、剣が光った。

「ああああああアアアアアアアアアア！」

まるで炎の中にいるような、異様な感覚。

そのなかで、俺は自分が自分の拳動を制御していないことを自覚した。

あ。やばいかも。

石の巨人の腕を俺の背中から伸びた光の腕がつかみ、投げ飛ばす。どおん、という音がして、洞窟の天井に巨人がたたきつけられた。天井に、細かいひびが無数に入る。もう一度やったら壊れるだろう。

それでも、止まらない。

背中から伸びたもうひとつの手が、巨人の頭をつかみ、勢いよく引っこ抜いた。

名状しがたい、とても石から響く音とは思えないような音がして、首から先がもげる。

その残った頭に、べつの光の腕がたたき込まれた。爆音がして、巨人の頭が粉微塵になった。

それでも、まだ止まらない。

荒ぶる光の手は、まるで暴風のように荒れ狂い、地面や天井を乱打する。

洞窟の崩壊は、もう時間の問題だ。

「ライ！ おい、止まれ！ 止まれよ！」

「バーサーク……！ まずいですね」

「に、逃げましようみなさん。ここは危険です！」

テンが慌てて言ったのだが、バグルルは首を振った。

「わりいなあ。足怪我しちまってるんだ。ちょっと逃げられねえわ」

「俺が背負う、バグルル！」

「無茶言つなや。おめーの貧弱な体躯でどうやって俺を運ぶ気だ、コゴネル」

「……っ、だけど、だけどよお！」

「危険です、コゴネル！」

「あっ………！」

「さんかくー！」

光の腕が、コゴネルに向かって振り下ろされようとする。
かきいいん！

その腕が、なにか固いものにぶつかって、止まった。

「　　お待ちせ」

「「「「サリ・ペステイ！」「」「」

「………まる？」

魔女が、そこにいた。

そうやっていいタイミングに出てきたわたしだったが、実のところ、これでもギリギリだった。

「陣形『針千本』、準備……っ！」

いつものように状況を構築する。荒れ狂う光の手に対応するべく防御の陣形を敷き、丁寧にとつとつ対応し、たたきつぶし、ひねりつぶし、壊していく。

システム サウザンドアームズ
機構、千手観音。

楽団とも軍隊とも呼ばれる、28本の短剣を同時操作して戦う、わたしの専用武装だ。

だが今回、その操作が甘い。

理由はわかっている。

「剣です、サリ！」

あれが呪いの元です！ あれを除去すれば

「わかつてる……！」

足が重い。

疲労がたまっているだけではない。わたしのなかで押さえつけられているソレが、頭をもたげはじめている。

ソレを押さえるために、自然と精神が麻痺していく。それが足を重くしている。

普段ならたやすく踏み込める距離が、遠い。

まずい……

押され始めている。

いまの体調じゃ、短時間しか戦えない。それはわかっていることなのに、足がうまく動かない。

みんなの声が遠くなる。

視界がだんだん、薄暗くなっていく。

あいつが、出てこようとしている。

ダメだ。

出てくるな。

戦いに集中しなければ。

集中しなければ……

倒すべき相手に、集中しなければ

倒すべき相手？

それは、なんだっただろう？

ライの顔が見えた。

「……あ」

一瞬、立ちすくんで。

「……あ」

荒ぶる拳が、わたしを打ち抜こうとする。
だがそれより速く。

それより急激に。

ソレが現れた。

「あああああああああああ……！」

獣のような声を上げて、サリが飛びかかってくる。

すさまじい斬撃、そしてすさまじい殺気に押されて、俺が二、三歩退いた。

サリは 地面と一体化しているような異様な歩法で間を詰める
と、一気に斬りかかってきた。

それを剣で受け流しつつ、光の腕がサリをなぎ払おうとする。
だが、それはサリに届く前に弾き飛ばされ、消えていった。

イエルムンガルド外殻。

思ったときには、すさまじい斬撃が来た。

怖れが走った。

これは、まずい。この女は、危険だ。

認識を受けて、俺ではない俺が、全力を以てそいつを殺すことを
決意 っ、

（ちょっと待て！ おい！）
あわてて身体を止めようとする。がくんと、身体がつんのめつ
た。

が、それも一瞬のこと。すぐに俺（の身体）はサリのほうを向き、
それを滅ぼそうと身構える。

(だから待てつての！ くそ、身体が言うことを聞かねえ……！)
光の腕の乱打。それをかいくぐってサリが近接する。そこから身体を逃がしつつ、光の腕を楯にして接近を阻む。サリは跳躍。斬撃を剣で受ける。激しい衝撃。

めまぐるしく動く戦いのなかで、俺は必死になって打開策を考えた。

(落ち着け、落ち着くんだけライナー・クラックフィールド。

さっき、つんのめったってことは、俺がまっただけにもできないわけじゃないってことだ。

である以上、あきらめるにはまだ早い！)

攻撃をかわしながら飛び跳ねるサリをめがけて、俺の身体が追撃に動く。

させねえ。

その意思が、がくん、と身体をつんのめらせる。

一瞬にできたその隙にサリは態勢を立て直す。俺の頭上から、ちっ、という舌打ちが聞こえてきた。

『ごさかしい邪魔をするな、人間が！』

「るせえバカ！ てめーが俺を操ろうとしなきゃ済む話だろうが！
サリをのぞく全員が、ぎよつとしたような顔でこちらを見た。

「少年、声が出せるのですか！？」

「な、なんとか！ さっきまでは無理だったけど、いまならある程度動かせる！」

『ちー！』

焦ったような声が聞こえて、そして急に 身体が自由を取りもどす。

「……え？」

「があああああああああつ！」

「うわあああつ！？」

がきいん、と剣と剣が火花を散らす。

「こらてめー、なに急にサボってやがる！？」

『ふん。知らんな。意のままにならぬなら、いつそ殺されてしまっ
がよい』

「お、おまえ、こ、うわ、わわわ、わあっ!？」

サリ的高速斬撃を必死でかわす。

やばい。剣の力がまるで使えない。

「てててててめえ! ここで俺が死んだらおまえも一蓮托生だぞ!
? いじけてねーで手伝え!」

『なに、問題はない。適度に死んでくれれば抵抗もなくなるだろう。
あの敵を滅ぼすのはそれからでも遅くない』

「な、なんだって!？」

『神をあなどるなよ、人間。脆弱な貴様らとは違う。頭のひとつや
ふたつが吹き飛ぶ程度、後でどうとでも治せるわ。』

さあ、さっさと壊れてしまえ、人間　!』

「……っ、そういうことかよっ」

どん! とサリの身体から放たれた神気が俺の身体にたたきつけ
られる。

抗いきれず、ほとんど吹き飛ばされるような形で俺は4、5歩後
退した。

強い。

身体能力は向こうのほうが段違いだし、なぜか向こうは神力まで
持っているみたいだ。

あげくの果てに、こっちはさっきゴレムに叩かれた左腕が痛くて
仕方がない。

……勝てないな、こりゃ。

自覚する。まともに戦っても、こいつには勝てない。
なら。

「

ぼい。

俺は、剣を捨てた。

『な　!??』

「死ぬ気か!? ライ!」

「んなわけあるか。使えねー剣を捨てただけだ!」

「バカなことを! それでは貴様ら、あの女に皆殺しにされるだけだぞ!?!」

「うるせ。どうせためー、剣持って戦ってたら俺が負けるように細工するつもりだったんだろーが! そんな邪魔な剣、ないほうがマシだ!」

「な、なんと……!」

さて、これからどうするか。

サリは、正気に返るそぶりすらなく、ひたすらこちらに殺意をぶつけてくる。

説得でどうにかなりそうにはなかった。

味方は ない。戦えるような奴は、俺ひとりしかない。なら。

(まずは、そこをどーにかするっきゃない!)

「うおりゃあああ!」

雄叫びを上げて。

そして俺は、くるっと回れ右して逃げ出した。

「わあああああっ!?!」

(よし、追ってきてる!)

小さくガツポーズ。ここで留まられては、かえって都合が悪い。が。

「うわ、速いつ……!」

「おおおおおおおっ!」

あっという間に追いつかれ、後ろから放たれた斬撃を転がってかわす。

やばい。そういえばこいつ、とんでもなく足が早かったんだっけ。

「だああっ! わっ! とっ!」

「ぶっ! はっ! ああああっ!」

ジリ貧になつて、洞窟の壁に追い詰められる。
そのとき。

サリの足から、鮮血が吹き出した。

「ぐっ……!!?」

『助太刀致す　!』

「トウトか!　助かる!」

叫んで、また俺は走り出す。

サリは追つてきているが、さっきよりはるかに速度が遅くなつた。これなら、なんとか

「つて、うわあっ!?!」

ざくん!　と目の前の壁に突き立った投げナイフにのけぞり返る。その隙に一気に間合いを詰めてきたサリが、剣を振るつた。
がきいん!

いきなり目の前に現れた黒装束の小人が、その剣を止める。

「少年。打開策は?」

「とりあえず、このアジトさえ抜けられれば」

「承知。」

援護を仕る。無心に走り給え」

「おう!」

駆け出す。

背後で、ざん、ぎん、ぢいんっ!　という激しい金属音。

(今度こそ行ける、か　?)

前方、立ちふさがるようにオオカミたちが現れる。

「ち、この忙しいときに　!」

拳をぶんぶん振って追い払いつつ、ともかく走る。

すぐに、後ろから悲鳴が聞こえてきた。サリとトウトの戦いに巻き込まれたのだろう。

「トウト、あんまり無茶すんなよ!　外におびき出せばとりあえずはそれでいいんだ!」

「心得ている　が、全力で当たらねばアレは止められぬ」

「わかってる！ でも無理なら退け！ 俺がある程度なんとかする！」

と言いつつも、それほど成算はない。

だからともかく、なるべく早く走りきろうとしているのだが。

「ぜーっ、ぜーっ……！」

いいかげん、体力が尽きてきた。

(どこまで走れば、入口にたどり着けるんだよ……！)

思った瞬間、それが見えた。

洞窟の先、開けた場所に広がる、明らかに異質な光。

「出口だっ！」

「……出たのはいいが。」

「どっだ、どこ？」

森のなか。

見渡す限り、うつそうと茂ったなんだかわからない木、木、木……

……それらが、俺をぐるりと取り囲んでいる。

(幻覚、なのか……しかし、まあ)

とりあえず、サリが俺を追って来るのを待つしかない。
と。

黒い風が、こちらを取り巻くように吹き抜けた。

忍者、トウト。

『状況は？』

「ああ。いま、サリを待ってたんだが……来たみたいだな」
後ろを向けば、そこにあいつが立っていた。

まるで死の化身のように、身体に鬼気をみなぎらせ、こちらを見つめている。

サリ。

「さて、この後どうするか、だが……」

『策がある。そう言ったな、少年よ』

「ああ。とりあえず、センエイたちと合流すりゃなんとかなるかと思っつてな」

『……成る程。それが策か』

「そついうこと。」

「ここなら、念じれば世界自体を壊せる。それに乗じて一気に駆け抜ければ、簡単にやつらと合流できる」

『了解。……行くぞ』

「幻影よ、消えろおおおおおっ！」
瞬間。

ばきばきばきばき……というにぶい音とともに、世界が唐突に崩れ出した。

「！」

あたりを見回す。

空が割れ、森にひびが入り、大地が崩れ去っていくそのなかで、次第に視界に通常空間の光景がもどってくる。

……こつちか！

「だああああああっ！」
全力で走る。

いったん崩れた幻影が、足下でどんどん再構成されていくのがわかる。

(間に合え　！)

ただそれだけを願いながら、無心に駆け抜ける。

そして

だんつ！と、固い地面に足が着く。

「あ、おかえりー……」

「それどころじゃねえ！　後ろを見る後ろ！」

「へ？」

後ろを見たマイマイが硬直する。

ペイがどなった。

「こおらライ！ てめーなに引きずってきやがった!？」

「サリだサリ！ なんかすげー暴れてるんだって!」

「な……なんだってえ!？」

「ち　！ やっかいなことになったな」

センエイが立ち上がった、直後。　ずどおん！　と、俺が壊し、再構築された幻影がふたたびぶつ壊れた。

「う、うわ、なに、これえ……!」

「……っ。ちよつと待て。なんだこれは?」

「だからサリだつての」

「そんなことは知っている。だが、だがこれは

ははは。そういうことか。……我々は、とんでもないものの目覚めに居合わせてしまったようだな、ライくん」

「あん?」

幻影のなかから、ゆらゆらとたゆたいつつ浮かび上がってくるシルエットを見て、センエイは笑った。

そして、なぜか誇らしげに、

「見たまえ諸君。あれが本物の『魔王』というものだ」と言った。

「ま、魔王……!？」

「そうさ。」

魔物のようで、それでいて神格持ち。最悪だな。おまけにサリのポテンシャルをきつちり引き継いでやがる」

「冷静に批評するのはいいけどな。勝算はあるのか?」

「勝算?　あるわけないだろ」

ペイの言葉に、あっさりセンエイは答えた。

「っーか、勝てるわけないじゃん。私が前にサリと戦ってこてんぱんに負けたの、見てなかったわけじゃないだろ?」

「他人事みたいに言うやつだな、おい」

『では、どうする？ 観念して虐殺されるに任せるか』

「それはどうも性に合わないなあ」

「……じゃあ、なんか手はあるのかよ？ 正直、これでダメだったら万策尽きたって感じたぞ」

「そうだなー」。

まあ、時間を稼いでみるか。時間が経てば正気に返る可能性はゼロじゃない」

センエイが言った直後、殺気が膨れあがった。

「ら、ライ兄ちゃん、来るよおっ！」

「よし、行くぞみんな。私の力を使うにはちょいとギャラリーが多いが、まあなんとかなるだろ」

「でえええええい！」

『ふん！』

「がああああああ！」

がきがきがきがきぎん！

俺とトウトが、前衛でなんとかサリの行動を止める。

……剣がないから、俺はもっぱら陽動役だけど。トウトのサポートのおかげで、なんとかやりすごせていた。

「奔れ！」

神力による爆風がセンエイの手から放たれ、たたらを踏んでサリの行動が一瞬止まる。

その隙に、俺とトウトが離れ、

「深遠なる燎原の輝石 カララ・マイアスター！」

「闇に轟け、淵より来たる超越よ！」

マイマイとセンエイ。ふたりの呼び声に応えて燎原の幻影から現れた、輝く竜となんだかよくわからない黒いモノが、いつせいにサリに襲いかかる。

サリは ちよっと身をひねって輝く竜をかわしつつ、そのあご

を腕でむんずとつかみ、黒いモノに向かってたたきつけた。

「がごお！ という音がしてあっさり竜と黒いモノが消える。

……なんつーバカ力だ。

「ぜ、ぜんぜん効かないよっ、センエイっ」

「ち。これだけの大魔術を連打してもまったく効果なしか。きつっ
いなあ」

ふうむ、とセンエイはうなる。

「実際、これ、どういう状態なんだよ？ どうやったら人間がこんなふうになるんだ？」

「……たぶん、サリの中の魔物が操ってるんだろっな」

「あん？」

よくわからないことを言われた。

「知らなかったのか？ あいつ、身体の中に魔物を飼ってるんだよ。今回はたぶん、それがなんかのはずみで暴走しちまったんだろっさ」

「……ちよつと、待て」

それが、もし、本当ならば。

『さつき、つんのめったってことは、俺がまったくにもできないわけじゃないってことだ。』

である以上、あきらめるにはまだ　　！』

思い出す。さつき、俺ではないなにかに俺が操られていたとき。

（あのととき、最初は俺も、操ろうとした相手に意識を吞まれてなにもできなかった。

けれど、しばらくしてそうじゃなくなった。それはなぜだ？）

これは、まずい。この女は、危険だ。

認識を受けて、俺ではない俺が、全力を以てそいつを殺すことを
決意

(……ならば)

「ライ兄ちゃん、危ないよっ」

「って、どわああっ!?!」

あわてて身を引いた俺に、ほとんどぴったり吸い付くようにサリが迫り、足払い。

「うわっ……!」

どき、と倒れ、あわてて転がって相手の攻撃をかわそうとする。が、その転がった目と鼻の先に、ざん、と短剣が突き刺さる。

「ぐっ!」

見上げる。

サリが、見下ろしている。

眼帯の取れた左目が赤く光り、まるで悪鬼のような表情でこちらを見下ろしている。

だけど。

(こいつ、いま……)

「らああああっ!」

どごお! という音とともにペイの発射した鋼鉄の弾丸が突き刺さり、サリが10歩ぶんほど吹っ飛んだ。

「ぼーっとしてんな! 死ぬぞ!?!」

「悪い!」

あわてて立ち上がる。サリは、すかさず近接したトゥウトと乱闘中だ。

と、センエイが寄ってきた。

「なんか、面白いことでも思いついたかね?」

「わからんが、サリの意識自体は消えてなさそうだ」

「へえ?」

「操ってるやつが、操るどころじゃないくらい追い詰められれば、サリの意識が介入する余地が出てくる。そうすれば」

……支配から逃れることだって、できるかもしれない。さっきの俺みたいに。

「具体的に、サリがなにをするって?」

「そいつは、思い浮かばない」

「頼りない推論だね。……ま、けど。なにも手がかりがないよりやましか」

「本気でやってくれ、センエイ。さっきからあんた、時間引き延ばすのを狙って出し惜しんでただろ」

センエイは肩をすくめた。

「君はなかなか目がいいね。その通りさ。……まあ、そろそろ勝負賭けないとやばい頃合いだし、いいよ。その提案に乗ってやる」

そして彼女は、俺に一本の剣を投げてよこした。

「受け取れ。君の神剣にやまったく及ばないが、ただの剣ってわけでもない。いちおう使えるだろ」

「助かる」

「本気で召喚魔法をぶつ放す。時間を稼げ」

「わかった!」

叫んで、飛び出す。

一瞬浮上しかけた意識が、また闇の淵に沈む。

闇のなかで、わたしは戦いを茫洋と見ていた。

じやれついていたライトとトウトが、わたしの剣の一振りで一気に吹っ飛ばされる。

だが、とどめを刺すには至らない。ふたりとも俊敏に起きあがり、構える。

わたしでないわたしが、いらだちを込めてそれを見た。

鋼鉄の弾が飛来する、それを片手で爆砕する。

「う、嘘だろ　!?!」

うるさい奴。わたしは標的をペイに変える。

走ろうとしたわたしの足に、だがしかし奇妙なものが巻き付いてきた。

虹色に光る、ツタのようななにか。

邪魔。

「ああああっ！」

ありつたけの殺意を放出する。

強烈な意思に押し負けて、幻覚でできたそのツタはあえなく四散した。

「う、うわわわっ………！」

さらにいらだつたわたしは、投擲用の短刀を懐から取り出した。

が、それをさえぎるように、黒い風がわたしの周囲を取り囲む。

『させぬ！』

「あああああ！」

……邪魔を、するな。

「りゃあああ！」

がきいん！ と音を立てて、わたしの剣が止められる。

本当に……

邪魔。

時間を稼いでもなににもならないのに、と、わたしでないわたしが嘲笑する。

だが。

「登れ！そこを、登れ！」

ずん、と、尋常でない鬼気がその場を支配する。

「橋立の下を流るる記憶の大河の、果てに息づく竜稜の主よ！いま稜を登りてその本性を現せ！」

来い ノボリゴイいいいい！」

彼女の声に合わせて、空中に鬼気の主が姿を現した。

……巨大な、空飛ぶ魚のようななにか。

だが、それがとてつもなく異質な存在であることを、見たモノはだれでもすぐに気づくだろう。

魚でありながら竜王。雷雲を従え空を自在に舞う、登竜門の主。

こざかしい。

わたしでないわたしが、凶悪に笑った。

きいいいい、と吠えながら迫るそいつに、風を切ってわたしは近接、一気に飛び乗った。

……この位置ならば、雷鳴は撃てない。自分まで巻き添えになるからだ。

「こ、こいつ サリの知識まで自在に使えるのか!?!」

ざくん。

短刀が、そいつの背に突き刺さる。きいいいい!?! と異質な悲鳴が響いた。

そして。

わたしは、「斬撃」という現象を意味に還元し、拡大し、ふたたび現象にもどす。

ぞんつ。

すさまじい音とともに、そいつがまつぶたつに割れた。

身体を半分にされたそいつは、泣きながら元の世界に帰還して、消えた。

「……つ。マジかよ」

「お、おい。おまえなんであんな弱いと呼んでんだよ!?!」

「弱くないわい! 相手がバケモノ過ぎるんだよ!」

「ち、しゃーねえ! こうなったらイチかバチか」

「あ、バカ待て!」

ぎいん!

「つとお!」

剣と剣が火花を散らす。

あれ。

おかしい……な。

なにか、身体の動きがうまくいかない。

高速で斬撃を繰り出す。が、当たらない。

……いらいらする。

「があああつ！」

「おわつ、たつ、たあ！」

イエルムンガルド外殻を爆発的に膨張させて吹き飛ばす。が、倒れずらしい。

……へんだ。

すべるように近づいて、ありったけのパワーで拳をたたきつける。「当たるかつ！」

が、かわされる。拳は空を切り、衝撃で数歩先の地面がえぐれて飛んだ。

……ありえない。

身体能力はこちらのほうがはるかに上なのに。

運命律をゆがめて、未来の結果を引き寄せているはずなのに。なぜ、勝てない？

この程度の相手が、なぜ、壊せない？

まさか。

これは

ぞつ、と怖気が全身を駆ける。

これは、敵だ。

滅びていなければならぬ、でなければ自分が滅びる、そんなものだ。

殺さなければ。

殺される。

「あ……あああああ！」

目が覚めたように、意識が鮮明になる。

ヤメロ。ネムッテロ。

あわてたように、わたしでないわたしがわたしを闇に沈めようとする。

勝て……ない。

あらがえない。相手が強すぎる。どうにもならない。

脳裏に浮かんだのは、ひとつの終焉。

圧倒的な暴威になにもできなかつた、果ての光景。

……それでも。

あのときも、わたしが残った。

ああ、そうだ。

理解する。これが終わりなのだ。

もう取り戻す手段など、なにひとつ残されていないのだとしても、まだ、なにかができるのならば。最後の最後まで、あらがうことをやめない。

そうした果てに。

なにかが残せるならば、それでいい。

あとは、残った者達に任せるだけのこと

がくん。

わたしの身体が、止まって。

「サリ！ おい、サリ！」

「と、止まった……か？」

声が、聞こえたよな気がして。

そして暗転する。

暗闇のなか。もう意識だけしかない。

……ただ、最後に。
懐かしい姿を見たような、そんな気がした。

そして。

サリ・ペステイと呼ばれたものは、静かに死を迎えた。

洞窟が鳴動し、幻へ還元していく。

多少は予想していたものの、これだけ派手なことが起こるのは予定外だった。

この偽のアジトとやらも、せつかく広い空間を確保したのにすぐ消滅するのだからもったいないことだ。グラールネルも並大抵の努力ではここまで作れなかっただろう。

「おまけにゴレムまで用意するとはね。……どこで手に入れたのやら」

まあ、そのあたりはどうでもいい。
むしろ、際限なき幻影のるつぼ、ロスト・ヴァルハラ無地の燎原の本来の姿のほうが、こちらにとっては有利だ。

さきほどまでライナー・クラックフィールドとサリ・ペステイが暴れ回っていた空間に、その剣が落ちてている。

「拾ってこいと言っていたが、こうやって落ちることまで予測済みだったのかな　まあ、いい。」

いずれにせよ、ただで拾わせてはくれなさそうだしね
「剣が、薄く光っている。」

呪いに従い、持ち主の元へもどろうとしているのだろう。
だが、させない。

「呪いというものは実体がないものではあるのだがね。実体がない

ものだからといって、斬れないわけでもない。

出てこい。カイ・ホルサが命ずる」

轟、と嵐のような音がして、まばゆい光があたりを満ちる。それらは剣のほうに収束して、光でできた人影を形成した。

『我に命ずるとは傲慢な人間め。神罰をくれてやるうか』

「バルメイス。狂った戦神の未練か。未だに復活を目指すとはたいした性根だ」

『我を止めるつもりか。カイ・ホルサの魂を継ぐものよ』

「止める？　ちがうね。僕は君などに興味はない。

ただ　持ち主のもとに帰ってもらっちゃ持ち帰れないんでね。

呪いは消させてもらおうよ」

『笑止である。この闘神バルメイスに戦いを挑むとな!?!』

轟、と光が一段と強くなる。

世界のすべてが自分に敵対しているかのような　そういう威圧感。それが自分を圧迫し、屈服させようと襲いかかってくる。

だが。

「悪いね。この領域では僕は特別なんだ。ここならば、『秘剣』カイ・ホルサは無敵になれる。

その剣を持ち帰るため、君には滅びてもらおうよ。　真儀、解放」

ばちん、と音がして。

そして、戦いが始まった。

八日目：悪党、人助けを試みる

「結論から言えば、ダメだなこりゃ。どーにもならんよ」

サリの身体を見ていたセンエイが、渋面で言った。

「えー、そんなー……サリ姉ちゃん、もうダメなの？」

「ダメだ、では誰も納得できません。もう少し詳細に説明してください、センエイ」

「あんたが言うか、ハルカ。いまの状況がわからないわけでもあるまい」

「承知しています。状況を場の全員に明確にするための質問と捉えてください」

「まだるっこしいね。まあ、いい」

ふう、とセンエイはため息をついた。

「サリの身体には魔物が封じられている。そいつはまあ、みんな知つてのことだ。」

長い間、あれはサリのことを乗っ取ろうとしてきた。だがサリが強靱な精神でそれを押しとどめていた。

時にドクトル・テン、身体を乗っ取ろうとする相手に対して、有効な手段はなんだ？」

「そうですねあ……まあ、最上なのは心を強く持ち、何事にも動じないようにすることですな。」

絶壁を上ろうとする行為を思い浮かべればよろしい。岩が硬く、起伏に乏しいならば、そう容易に登れなくなりましょう」

「万が一、登られてしまったら？」

「その場合は緊急避難として、べつの対策を考えねばなりませんまい。」

あまり思い浮かびませんが」

「пей、おまえは？」

唐突にセンエイに振られて、пейはちよつとろたえた。

「う……まあ、考えつくことは考えつくが」

「言ってみろ」

「乗っ取る身体のほうを破壊する」

「正解。」

つまり乗っ取り先の身体を魔物が嫌う神光の剣で傷つける。魔物はたまらず、一時的に身体の奥へ避難するというわけだ」

「ですが、今回はその余裕がなかった」

ハルカが言う。センエイもうなずいた。

「剣の呪いによって狂戦士と化したライクんとこの戦いのなかでは、そのようなことをしている余裕もない。結果として、サリは魔物に乗っ取られてしまった」

「それが、あのすげえサリの正体か」

「ああ、そうさ。」

かろうじて、最後には意識を取りもどしたみたいだがね。あれがなきや、我々はいまごろ仲良く死体になってたな」

センエイは淡々と言った。

テンは、あごひげをさすりながら、

「しかし、にわかには信じられませんか。操られていた存在が、意識を取りもどして挽回するなど」

「そりゃほとんどありえないだろうがね。じっさい、サリも完全に回復するのは無理だったみたいだからな。」

結果としてサリは最後の手段を使わざるを得なくなった。それがいまの状態だ」

「最後の手段……とは？」

「全停止。身体を動かすための機能をすべて放棄し、使えなくする呪いを自分にかけた。」

心臓みたいに意思なしでも勝手に動く器官は動いているがね。呼吸すら放棄している。たいした度胸だ」

言って、センエイは肩をすくめた。

「ほら、お手上げた。こうなりや私たちにはどうしようもない。」

サリを治すなら、とりあえずいま言った呪いを削除しなきゃなら

ない。だが削除すればたちまち、サリは魔物に乗っ取られてしまうだろう。

だからといって魔物を先に倒すのも無理がある。そんなことをすれば乗っ取られかけて融合しているサリのほうも危ないから」

「……………このままだったら、サリはどれくらい保つ？」

「わからん。このままでも死にはしないだろうが、魔物がどう出るか……………」

まあ、二日だな。それ以上は保証しない」

言つて、センエイは口をつぐんだ。

俺は拳をにぎりしめて、

「ちくしょう。なんとかできる手段はないのかよ……………」

「俺には、それより気になっていることがあるんだが」

「ん？ なんだよ」

いきなり言い出したコゴネルに、尋ねる。

相手は、なぜか俺の方を心配そうな目で見て、こう言った。

「ライ。おまえ、大丈夫なのか？」

……………えーっと。

「なにが？」

「また暴れ出しそうだとか、そういう感覚はないのか？ 正直、今

度あの調子で暴れられたら俺たちが全滅の危機だ」

「剣捨てちまつたからな。特に感じないぜ？」

「そうかい。」

……………考えてみれば、おまえもだいぶ奇妙なケースだよな」

「え、なにが？」

「まずなによりも、神器に選ばれた代理人でありながら、選ばれた理由がまつたくわからない」

「……………まあ、そりゃあな」

「次に、それまで音沙汰すらなかった狂戦士化の呪いがいきなり発動した理由、これもわからない。

最後に、あれだけ暴れ回ったのにちゃんと意識がありやがる。普

通、あれだけの神力を放出すれば無事じゃないだろ」

「ほう？ そう考える根拠はなんだい、コゴネル」

「センエイの茶化すような問いに、コゴネルはじろりと一睨みして、類推だよ。あのキスイって子もそうだったし、ファトキアの法皇もおなじだった」

「ああ、なるほど。あんたはファトキア出身だったっけ」

「あー、ごほん」

わざとらしい咳に、みんながバグルルのほうを見た。

「……ほれ。そんなことよりライの話にもどろろせ」

「わざとらしい奴だな。だれもおまえら親子の話なんざ詮索しようとはしないってーの」

「……そ、そうかい」

「ファトキアの法皇の降神儀、派手だけどあつという間に終わっちゃうからな。なんでだろうと思つて調べてみたことがあるんだよ。

そしたら、要はそれ以上やると術者側の体力が保たないんだと。

強い神力を行使するのはとても負担がかかるんだそうだ。

だが、ライにはそれが無い。あんなに派手なことをやらかしたくせに、まだびんぴんしてやがる」

コゴネルが言った。

俺は言われたので、身体の状態を少しチェックして、

「まあ、確かに疲れとかは特にないな」

「それについてなら、もうちょっと深刻な問題がある」

「なんだよ？ センエイ」

「ライくんがまとう神力、これが出会ってからいままでずっと強くなりっぱなしだっていうこと」

「というと？」

「コゴネルの言ったように神力を使うのに疲労が伴われるのだとすれば、ライくんはずいぶん前にぶっ倒れているってことさ」

「……つまり、最初から異質だったと？」

「それだけじゃないがね。もう一度繰り返し返すが、『出会ってから』

『いままで』強くなりっぱなしだと言ったんだぞ?」

「つまり、いまも彼は強大な神力をまとっている。そういうことで
す」

ハルカが補足する。

「……つて、え?」

「俺が?」

「そうさ。」

さて、これをどう解釈したものかね。剣は捨てたというものの、
また暴れ出す可能性はゼロじゃない」

「お、おいおいちょっと待てよ……俺にはそんな自覚はねーぞ?」

「自覚の問題じゃないんだよ、ライくん。さつき暴れ出す前に自覚
はあったかね」

「い、いや。そりやなかつたけど」

「なら次もそうだろう。この際、自覚というものについての過信は
捨てたまえ」

「……………」

「しかし つくづく、サリがないのが惜しいな。いれば、剣と
ライくんとの現在の関係を鑑定してもらえるんだが。」

ディアボロス
「靈魂技師の私には、神力の流れは見えてもそれ以外のものが見え
ない。ハルカもだ。ドクトル・テン、あんたは?」

「あいにくですが、エンチャンター魔技手工とはいえ私やペイは作る側ですから。
サリのような鑑定はとてとても」

「ち、使えないな。」

「……ともかく、現段階ではライくんも爆弾を抱えていると思った
ほうがいい」

「で、結局のところこれからどうするんだよ」

「コゴネルに言われて、センエイは渋面になった。」

「とりあえず、あの岩巨人の集落にサリを運ぼう。かの『生贄』な
らばなにか策が浮かぶかもしれん」

「運んだ後でサリが暴走したらどうするんだよ。連中を巻き添えに

することになるぜ？」

「どのみちおなじだ。暴れ出したら周辺一帯に被害が及ぶだろうさ。ならば、うまくいく確率が低いとはいえ賭けるしかない。

それにあの地には神官や神官補がいる。暴れ出す前に神殿に一報してもらえれば、暴れ出してから被害も少なくなるだろう。

それとライくん、君も来るんだ」

「俺が？」

「君のほうも対処を考えなきゃなるまい。『生贄』にはむしろ、そちら側の知識を期待している」

……なるほど。

「で、どうやって行く？」

「行きとおなじ手段を取りたいところだが、あいにく私の魔力はもう限界だ。テン、あんたの発明を貸してくれるか？」

「構いませんが、アレはふたつしかありませんよ」

「十分だ。ライくんに履いてもらって、説明役兼サリを運ぶために私が行く。残りの連中は悪いが、徒歩で後を追ってくれ」

「ほらよ。これだ」

言ってペイが出したのは、一見してえらく大きな靴だった。

「これを履くのか？」

「そうだ。サイズは気にするな。足を入れれば自動的に調節される」
「ちよつとために……うおー！」

いきなり靴が小さくなる。

「び、びっくりした……でも、たしかにぴったりだな」

「ライくん……」

「ん、なんだ？」

「ちびだちびだと前から思ってたはいたが、足も小さいんだな」
ぐさぐさぐささつ。

「う、うるせー！んなこと言ってる場合じゃねーだろが！」

「……子供の足みたいだね、ライ兄ちゃん」

ずん。()とどめ

「こ、子供にバカにされた……」

「ほら、サリ背負え」

「ああ。よっと。」

意外と重量あるな。装備品が多いせいか」

「靴には荷重制限はありませんから、大丈夫ですよ」

「そうかい」

言っただけに足を入れるセンエイ。

……ああ、普通に俺よりでかい。見た目でわかるほどでかい。

ふと、目が合った。

「言っておくけど、どさくさにまぎれてサリと触れ合えてらっきー、
とか思っていないぞ。私は」

「……そんなこと考えてたのかテメエ」

「いやだから思っていないっつーの」
なら最初から言っなよ。

「で、どうやってこの靴使うんだ？」

「走るだけです。靴の裏に張った符が、自動的に加速してくれま
すから」

「準備はいいかね、ライくん」

「あ？ ああ、いいぞ」

「よし。じゃあ私についてこい。障害物が多いから、まちがっても
目をつぶるなよ」

「？ なんて目をつぶるんだ？」

「よし出発う！」

「あ、こら待てひとの話を うわああ！？」
どんっ！

走り出したとたん、すさまじい加速に息が詰まる。

顔を圧迫する風に目をつぶりそうになって、あわてて思いとど
まった。

(そ、そういうことか……)

とんでもねースピードだった。足を止めたら止まれるのか、ちょ

つと不安になる。

風に負けないように前方を見ると、センエイはサリの身体を持たまま、悠々と前を疾走していた。

（こういう基礎体力は、やっぱり魔人には勝てねーな）
つくづく実感する。

と、センエイが少しスピードを落として、こちらの横に来た。

「妙だな」

「なにが？」

「静かすぎる。前は、もう少し禍々しい気が周囲に満ちていたんだが」

「どういうことだ？」

「あの偽物ども、引き上げたのかもしれない。単に諦めたのか、それとも目的を達成したのかは知らんがね」

「……………」

「この後下り坂が来て、それから森に入る。障害物が多いから激突に気をつける」

「わかった」

それきり、俺たちはしゃべるのをやめた。

「無理……ですね。これはさすがに、手の施しようがない」

ジロロの言葉に、俺たちはそろってため息をついた。

「やっぱり、無理なのか」

「ええ。」

というよりも、こんな状況はちょっと私も見たことがあります。正直、どうしていいの見当がつかないと言ったほうがいいですね」

「あの……それより、ライさまのほうですけど」

キスイが口をはさんだ。

「大丈夫ですか？ その、すごい神力ですけど……」

「そ、そうなのか？」

「はい。」

「……たぶん、わたしがそのレベルの神力を出した場合、数字を100数える前に倒れちゃうと思います」

「等級で言っと？」

「4か、3です」

「うわあ、そりやすげえ。完全に神の領域じゃないか」

「……なんでおまえが驚くんだよ、センエイ」

「こんなに強い神力を見たのは初めてだからな。亜神クラスだと思つてたんだが甘く見てた。」

「で、なんとか直せない？ この状況」

「神器を制御して、うまく神格を抑えればいいんですけど……」
困惑した顔で、キスイ。

「神器なしではどうにもなりません。そもそも、この神格って本当に神器に由来するものなのでしょうか」

「というと？」

「だって、ライさまは剣を捨てたのでしょ？ 剣が近くにあるわけでもないのに神格はまತ್ತたままなんて、ヘンですよ。」

わたしだって、女王の神器クイーンを捨てたらただの岩巨人にもどってしまいます。でも、ライさまはそうではないんでしょう？」

「だとすると、こいつの神格はバルメイスの剣となんの関係もない可能性もあるわけか」

「具体的に、なにが考えられるんだ？」

「んー、そうだな。ライくん、じつは神だったりしないか？」

「……は？」

突拍子もない発言に、眉をひそめる。

「そうだとするとわりとじつまが合うんだがな。あの神器を使えたのも、神だったからというので説明がつく」

「……神って、人間と人間から生まれるのか？」

「知らん。そういうのは神話に詳しいやつに聞いてくれ」

センエイは投げっぱなしに言った。

と、こんこん、と扉をたたく音がした。

「どなたでしょう」

「すみません。神官のポエニデッタとスタージンですけど」

「ああ。……どうぞ。お入りください」

「噂をすれば、というやつだな」

「そういうときは、神話だか運命律を持ち出すとエセ神様っぽくて
雰囲気が出るんだぞ」

「ええい、いらん茶々を入れるなっ」

「わはは、ムキになるな少年。おまえみたいなちびっこがなにやる
うとたいした雰囲気なんざ出るわけもないだろ」

「おまえ、しまいにや泣かすぞ!？」

「あーこら落ち着きなさい! 非常事態でしょ!？」

「いやあ、ずいぶんにぎやかですな。はっはっは」

「あ、あつう……」

いつの間にか、部屋のなかはずいぶんな人口密度になっている。

「で、なにしに来たんだよ。リッサ、スタージン」

「あ、わたしが呼んだんです。あるいは神殿の方々になら、なにか
よいお知恵も浮かばれるのではないかと思いましたが」

キスイが言う。

「ふむ。……そういえばあなた、回帰《temporal rei
ncarnation》が使えるんだっけか。それでサリを治せな
いかな?」

言って、センエイはひととおり状況を説明した。

が、リッサは首を振った。

「時間が経ちすぎて、ちよっと……その場にいればなんとかなった
のかもしれないんですけど。」

回帰《temporal reincarnation》はその
当該物をちよっと前の状態にもどす術ですから、ここまで時間が経
つとたぶん意味がないんです」

「……そっか。惜しいな」

「あのう」

スタージンが手を挙げた。

「じつは手前、このサリ様の置かれている状況によく似たものを、見た覚えがあるのですが」

「マジか!？」

相手はうなずいた。

「あまり、本来は語るべきことではないのかもしれませんが。聖者と呼ばれる方々をご存じですか？」

「聖者？」

「神殿の看板だな。人間でありながら、厳しい修行によって神格を得た者。」

ま、しよせん9級や8級のへボ神格だがね」

「口の悪い奴だな……」

「いやいや。事実でありますから。」

それで、その修行の内容なのですが」

「おい、いいのか？ それは神殿のトップシークレットだろう。民間にうかつに流せばあんたがさらし首になるぞ」

センエイが、珍しく真摯な声で尋ねた。

対するスタージンはうなずいて、

「構いません。今回お教えするのは多くの修行のなかでもたったひとつ、それも禁止されているものですから。」

つまり、自分の身体に魔物を取り憑かせる、という修行ですが」

「それは、大変危険なではありませんか？」

ジロコの言葉に、スタージンはうなずいた。

「ええ、危険だから禁止されているのです。まあ、その分効果はあるのですが。」

取り憑かせた魔物と格闘する中で、自然と神格が身に付いていくのですが……一歩まちがうと、神格のついた身体を魔物に明け渡すことになりかねません」

「それが、サリのいまの状態ってわけか。道理ではあるが　むっ」
センエイが、うなつて首をひねる。

俺はそっちは放っておいて、たずねた。

「で、どうすりゃ治るんだ？」

「暴れ出したらどうしようもありません。その場合、神殿の聖戦士が極秘で暗殺します」

げげっ。

「そもそも、この修行自体もそう長く行えるものではありません。ふつうは一日が限界で、そのときに魔物を追い出します」

「追い出す方法は？」

「あらかじめ取り憑く前に仕掛けておいた術で。　今回は無理でしょうな」

……結局、だめじゃん。

「知識は増えたが、解決策は見当たらなかったな……」

「まあ、それでも一歩前進ではあるがね。少なくとも、今回の事象が古今に現存したことの無い怪奇現象ではないことがわかったわけだし」

「ちがうよ！」

「のわっ」

いきなり大声を出されてのけぞり返る。

リツサは勢い込んで、

「解決策、あるよ！　ようするに、サリさんにまわりつく悪い魔物をとつちめればいいんでしょ？」

「い、いや、そりゃそうだけどその方法が　」

「　　ずいぶん危険です、ポエニデッタ神官」

スタージンが口をはさんだ。

……危険？

「覚悟の上です。スタージン神官」

「あなたの覚悟はけっこう。ですが協力者が必要でしょう。その方も一蓮托生になりますか？」

「それは、ライにやらせます」

「おい……なんか俺の知らないところで話が動いてないか？」

「覚悟決めなさい、ライ。もともとサリさんがこうなったのだから、おおまかに言えばキミのせいでしょう？」

「そ、そりゃそうかもしれないけど……」

「危険なのは確かだけど。でも成功すればサリさんはまちがいに救えるんだよ？」

「……で、その危険ってのはどんなのなんだよ」

「だいぶ危険です。あなたが魔物と直接殴り合いをするわけですから」

「は？」

「だから」

リッサが言った。

「ボクの術で、キミがサリさんの精神に入り込むの。それでキミが魔物を退治すれば大成功」

「退治できなかつたら？」

「キミとボクが死ぬ」

「それは責任重大だな……」

「大丈夫だよ。たぶんなんとかなるなる」

「いや、なるなるっておまえ……」

……ま、いつか。

どちらにしろ、せつかく出たサリ救出のチャンスを棒に振るつもりはない。

「で、やるならさっさと始めたほうがいいと思うが」

「そうだね。……それで、ア・キスイ。折り入ってお願いがあるのですが」

「はい、なんでしょう？」

「この地にある、聖別された場所をお借りしたいんです。できれば、貸し切りで」

「うわー……ずいぶん見晴らしのいい場所だなあ」

岩壁の上に位置するその場所からは、はるか森の果てまで見渡すことができた。

「見とれてないで。行くよ」

「ああ」

「こちらです。ついてきてください」

ジロロに手招きされて、歩き出す。

……だれもしゃべらない。

スタージンも、センエイも、およそこの場にいる全員が口を閉ざしている。

これから行く先は岩巨人の聖地だ。さすがにみんな、緊張しているんだろう。

と、センエイが口を開いた。

「うわ、だりー……こんな遠くにわざわざ聖地なんか作るなよ」

……前言撤回。

「時間との戦いになるかもね」

と。いきなりリツサが言った。

「なにが？」

「ボクの術。どうしても時間がかかるから。サリさんが先に耐えられなくなったら、救出は不可能。」

で、その場合にはこの場に居合わせるボクやキミは一卷の終わりだから。覚悟しといてね」

「……あいよ」

どんどん悲観的な要素がつのっていく気もするが、気にしない気にしない。気のせいだ。うん。

「施術中の世話は、私がお手伝いします」

「助かります、ラ・ジロロ。本来なら、手前が行うべきなのでしょうが」

「事情がありなのでしょう？ スタージン神官。」

結構です。こちらとしても、聖地に足を運ぶ人間はなるべく少ないほうがよいので」

言ってから、ジロロはジト目でセンエイを見て、

「……本来なら、その汚らわしい魔女などを入れたくはないのですが。なぜついて来るんでしょうね、彼女は」

「わはは、そんなの決まってるじゃないか。見物だよ見物。聖地觀光つてやつ」

「……帰りなさい。神罰落ちますよ?」

「おや、そりゃ危険。じゃあ私は帰ってキスイさんとイケナイ遊びを」

「殺シマスヨ?」

「うお、こええ。聞いたかねライくん。この女、聖地で暴力沙汰に及ぶつもりだぞ?」

「……なんでもいいがセンエイ、テメエはサリを助けたいのか助けたくないのかどっちなんだ?」

「そんなの助けたいに決まってるじゃないか。」

大丈夫だよ。嫌がらせするのはライくんじゃなくてあの女にだから」

軽々とサリをかつぎながら、センエイ。

俺とかがサリに触れるのは危険なので、代わりに持ってきてくれるのは助かるが……それにしても、ずいぶん馬鹿力だ。

ふと。

サリが、小さく動いたような気がした。

「……?」

「気づいたかね」

「ああ」

「さつきからときどき動いている。内部での魔物との戦いが、呪いによって中断していないという証だ。」

歯がゆいね。こういうとき、なににもできないってのは辛いもんだ。せめて少しでもできることがあればいいんだが」

ふー、とため息をついて、それからセンエイはにっこり笑った。

「いま、ちよつとかっこよかったる？ な？ な？」

「なあ、センエイ」

「ん？」

「おまえ、俺の代わりにサリ助けに行くか？」

センエイは口をへの字に曲げた。

「なんで」

「おまえ、いちおう戦闘屋だろ。勝率が俺より高そうだ」

「そりやどうか知らんがね。あの神官は君を指名しただろ。私が勝手に割り込むわけにはいかんよ」

「あ、えつと……その、べつに特に他意があつたわけじゃなくて」

「いいわけは不要さ。命を預ける相手を自分で選ぶのは正しい心がけだ」

「……………はい」

「つーことで、私はこの件でライクんに譲つてはもらえないのさ。残念ながらね。あきらめて覚悟決めとけ」

「ああ。わかった」

……………余計な気づかひだつたかな。

俺の視線に気づいたのか、センエイは笑った。

「ま、今回はライクんに任せきるさ。おとなしくキスイくと遊んでるよ」

「却下です」

「ふん。いくら却下とわめても貴様はこつちの用で忙しいだろ。」

私をどういう手で止めるつもりだ」

「そう思って、ガルヴォーンの君にあらかじめ指示を与えておきましたから」

「うげ!？」

「ふふ。さすがのあなたも彼を出し抜くのは容易ではありませんよ?」

「知ってるわい。……………つーか、あいつは二対一でも勝てる気がせん。」

本当に岩巨人か？」

「断言はしかねますね。」

さ、着きましたよ」

言って、ジロロが足を止めた。

そこにあつたのは、洞窟だった。

「洞窟の上に出たと思ったら、そこにも洞窟があるとはね……」

「あいにくですが洞窟と言うほど広くはありません。ほら穴と呼ぶべきでしょうね。」

とはいえ、いちおう我々の住居の一部ではありませんから。ちゃんと壁は光るよう加工してますので、中は明るいですよ」

「この中にサリ置けばいいのかい？」

「はい。お願いします。」

たぶん、一日以上はかかると思います。ボクとライのぶんの食料と水を、適宜運んでください」

「了解しました」

「俺は？」

「なるべく近くに。ボクが指示するまでは休んでいていいから、体力を温存しとくこと」

「ん」

……かくして。

長丁場の戦いが始まった。

びいん……

びいん……

びいん……

弦の音が響く。

リッサの持つ、弓の音。

『弓の形をしているだけで、弓としては使えないんだけどね』

弦が強く張られ過ぎていて、まともには引けないのだという。弓というよりは、楽器だ。

それをサリのほうに向け、楽器のように弦に爪に引っかけて弾く。

弾く。

弾く。

弾く。

ずっと、その繰り返し。

リッサの額には、ずいぶん大量の汗が浮かんでいる。

「汗、拭こうか？」

「いい。気が散る」

よく見ると、額だけじゃなくて全身に汗をかいているみたいだ。

びいん……

びいん……

びいん……

「はーっ、はーっ……」

「おい。そろそろ休まないか？」

「まだ。まだつかめてないの」

振り切って、彼女は前をにらみつける。

気がつくのと、彼女の足下には小さな水たまりができていた。

びいん……

びいん……

びいん……

「

「休憩、取るか？」

「……そうだね」

ふーっ……と長い息をついて、リッサ。

「水、いるか？」

「うん。お願い。……それと清潔なタオルが欲しい」

「わかった。ジロロに言ってくる」

「……わかっていると思うけど、身体拭くときはここ出て行ってよね？」

「わかってるよ」

もどつてくると、リッサは壁に背をもたれて眠っていた。

「お世話はおきますんで、いったん外に出ておいてください」

「わかった。」

……時間感覚がないんだが、どれくらい経った？

「もうすぐ、日が暮れます」

思ったより時間が経っている。

(それほど長い間、集中して作業に没頭していたのか……)

消耗するわけだ。

外に出ると、センエイがいた。

「はかどってるかい？」

「正直、さっぱりわからん」

「そうかい」

「……まあ、難しい術らしいってのはわかったがな」

「そりゃそうだろう。精神を扱う術は、魔術だろうと秘儀だろうとすべからくデリケートだ。」

精神ね。そういうえば、私達の中には精神操作の能力を有する

魔人がいないんだな。めずらしいことだ」

「そうなのか？」

「人形使役系には必須の技能なんで、ふつつ魔^{エンチャンター}技手工が兼業するん

だがね。

だがうちの連中は人形なんて作らんからな。ドクトル・テンは嫌いだって話だし、ペイは未熟すぎて話にならん。サリは作るよりは使う側だ。

……まあ、サリは天才だからできてもおかしくはないが。少なくとも、私の目の前で使ったことはなかったよ」

「そういうもんか」

「そうさ」

ふと。気になった。

「センエイ、おまえとサリが知り合ってどのくらいだ？」

「君よりや前さ」

……んなこた、聞かないでもわかる。

「まあ、いいや。そろそろ俺はもどるぞ」

「あいよー」

しばらくして目が覚めたリッサと食事をして、それからふたたび作業に入る。

「時間は？」

「もう、日が暮れてだいぶ経つ」

「そう。 やっぱり、ままならないね」

「これからも長いのか」

「うまくいけば一発でできるんだけどね。相手が慣れていたり、同意があれば簡単なんだけど、そうじゃないと「捉える」のがなかなか難しいんだ」

「その「捉える」のがうまくいったらいいのか？」

「うん。 そしたら、次はキミの出番」

言って、リッサはサリの方を向いて、また弦を弾きはじめた。

びいん……

びいん……

びいいん……

……………？

いま、なんか……

「！ リッサ！」

「アアアアアアアアアアアア！」

「うわ！？」

がつん！

俺の目の前にできた光の壁が、リッサにとびかかったサリの身体をはじき飛ばす。

倒れたサリは、しばらく奇声を上げながらじたばた暴れていたが、やがて動かなくなった。

「……………」

収まったか」

「タイムリミット……ってわけじゃ、なさそうだね」

言うリッサの顔色は青い。

……………あれ？

「おまえ、頬切れてるぞ？」

「え？ ……あ、ほんとだ。」

あー、これか。弦が切れて、それが頬に当たったみたい」

見ると、ぴんと張っていた弓の弦が途中で切れている。

「いまの騒動で切れちゃったみたい。……目に当たったら危険だったかもね。」

ライ、ステージンさん呼んでくれる？

彼に治癒してもらおう。ついでに代わりの弦を取ってきてもらおう。ボクも治療できるけど、施術中にべつの秘儀ミラクルを使うのはちょっとまずいから」

「ああ、わかつ」

「うむ。どうやら手前の出番のようだな」

「……いつからいたテメエ」

「いやあ、いまもどつてきたところです。ようやくサフィート神官補が寝付いてくださりましたので」

「……？」

「やっぱり、荒れてました？」

「ずいぶんと。やはり彼は人がよいですなあ」

「……おい。なんの話だ？」

「いえね、また魔物と自分から関わるようなことをしてとたいそうお怒りですって」

「ああ、そういえばそんな話もあったっけ」

「あいつも変わらず人のよいことです。彼も」

「………」

「……？ 人の、よい？ あいつが？」

「なにかの聞きまちがいかと思ったが、スタージンは首を縦に振った。」

「当然でしょう。戒律違反とは言ってもしよせんは他人のこと。他人のことにいちいち口を出すのは善人のすることでしょう」

「迷惑な善人だな」

「善人なんて迷惑なものですよ」

「……その発言は、聖職者としてはわりと限界ぎりぎりなんじゃないかと思うんだが」

「はっはっは。これは手厳しい」

「……まあ、いいけどさ。」

その後、スタージンは手早くリッサの治療を終え、弦を置いて去っていった。

「さて、とりあえず弓を直しちゃわないとね」

「ときばきと作業に取りかかるリッサを見て、思う。」

「(こいつにも、だいぶ迷惑かけちまつてるな。今回)」

「リッサ」

「ん、なに？」

「ありがとな。助かる」

リツサはちよつと無然としたような感じだった。

「そういうのは、ぜんぶ成功した後言うもんだよ」

「失敗したら言えないじゃんか」

「ばか、失敗したときのことなんか考えないのっ」

「……はいよ」

「ぜったい成功させるんだから。キミもそのつもりで気張りなさい、ライっ」

ヤケ気味に言って、そしてリツサはまた弓の修復に取りかかった。

そっか。

(こいつも、恐いんだな。俺とおなじで……)

びいん……

びいん……

びいいん……

作業は夜通し続いて、そして朝を迎えた。

俺もリツサもほんの少ししか睡眠を取っていない。サリがまた暴れ出したりしないのが、せめてもの幸いだ。

びいん……

びいん……

びいいん……

「ほんとはね」

「ん？」

「神官補になって、この術を最初に覚えたときね。ぜったい使わな
いだろうなって思ったの」

「なんで？」

「だってさ。精神操作に同意する人間なんて多くないし。無理やりやるとこれだけ手間がかかるし、その上たいした利益があるわけでもないしね。」

「だから まあ、今回のこれには感動したよ。こういう使い道もあるのなら、秘儀ミラクルっていうのも悪くないのかなって思った」

「……おまえ、たしか術を継承するために神官になったんだっけか」「そうだよ。この術の継承者になるためにね。」

「だからね。今回、サリさんを助けられなければ、この術なんて継承するほどの価値もないと思うんだよ。極論だけども」「疲れているはずなのに、リッサは妙に饒舌だった。」

「それより、作業を続けようぜ」

「わかってるよ。っと」

「びいん……びん。」

「弓の音が止まる。」

「来た」

「成功か？」

「急いでサリさんを注視しなさい！あとはボクがなんとかするから！」

「お、おうー！」

あわててサリを見る。

サリは、あいかかわらず暴れるのをやめたときそのまま、そこに寝そべっている。

その姿が、ぐにやりと歪んだ。

「お、おお？」

「行くよー！」

「わ、わかった　！」

言葉を放った瞬間、急激に視界が白く塗りつぶされていき、そして

九日目：決戦！ 魔都の死海王

「　　と」

気がつくのと、俺は街のなかにいた。

「……………」

どこだ、ここ」

見たこともない街。

たぶん、サリと縁のある場所なのだろうが、どこにも人がいないのが不気味だ。

「とりあえず、適当に歩き回ってみるか……………」

この後なにをすればいいのか聞いていないが、とりあえず出会った魔物を倒せばいいのだろう。

…………… それにしても。

（なんだか、生気のない街だなあ）

そこそこ大きな往来だつてのに、人っ子ひとりやしなないと。

「あれ？」

いま、向こうの路地から人が見えたような……………」

あ、出てきた。

子供だ。たぶん俺より5つくらい下。

それが、明らかに焦った様子で俺のほうに走って　　って、

「なにやっつてんだよ！　早く！」

「え、えあ？」

「えあ、じゃねえだろ！　ヘータイに捕まったらどうする気だ!？」

「うわ、わわわ、ひ、ひっぱるなって！」

あわてて、そいつを追って路地に駆け込む。

「ふう、ビックリした…………… なんなんだよ」

「あん？」

子供は、なに考えてんだおまえという表情でこちらを見た。

「なんなんだよ、つてのはこっちのセリフだろ。」

配給の時間でもねえのに大通りを堂々と歩きやがって、ヘータイに捕まったら殺されるぜ」

「は？ なんだよそれ」

「……にーちゃん、その年でポケたか？」

「んなわけねーだろ！ お、俺はたまたま今日この街に来たばかりで」

「……決まりだな。そっか、ポケて使い物にならなくなったんで家をおっぽり出されたのか。可哀想だな、あんた」

ぼん、ぼんと肩をたたかれる。

……すげーむかつく。が、このままじゃちが明かないのも確かだ。

「じゃあポケたつてことでいいから、状況を説明してくれよ。なんで道歩いてるだけで殺されるんだよ？」

「なんでもなにもねえよ。この街じゃ一ヶ月前から外出禁止令が出てるんだ。牢屋だつてもういっぱいだし捕まったら殺されて埋められるぞ」

「げ」

つーかなんですかその末期症状。

「どうしてそんなことになったんだよ？」

「仕方ねーだろ。暴動と逃亡と疫病をぜんぶ防ごうとしてるんだ。それだけやつても足りないくらいさ」

「暴動？ 逃亡？」

「……あんた、ほんつとーに抜けてるのな。ひよつとして街が死界に浸食されたのも忘れてねーか？」

「うん、知らねえ」

「凶星かよ……」

なんかがつくり来ているガキ。

微妙にムカツクが、ここは情報収集を優先するべきだ。

「で、死界つてなんだよ」

「生き物を疫病で皆殺しにする、命食いの領域だよ。偉い神様が作つたらしいけど」

「はた迷惑なヤツだな」

「まっただよ。目の前に出てきたらぶん殴ってやりてえ」
「うなずき合う」

「じゃあ、逃げないとやばいのか？ この街」

「最初はみんなそう思ったみたいだけどな。ほとんど殺されたぜ」
「げ。なんで？」

「だってさ。逃げてくる大勢の人間って、要するに暴徒だろ？ だから周辺の街はみんな受け入れ拒否。

ついでに死界の疫病持ち込まれちゃかなわないってんで皆殺しにして火い付けて終わりさ。金持ちの中には船でバスファモイまで逃げた連中もいるって話だけど」

「うわあ……」

「で、それに気づいた領主が街を出入り禁止にしちまってな。これが気に入らないってんで暴動が起きて、その暴動を領主が武力鎮圧してと大騒ぎさ」

「それで、外出禁止？」

「そうだよ。いまは領主が死界を追い払うために毎日若いねーちゃんを生贄に捧げてがんばってる。効果なさそうだけど」

「最悪だった。」

「うええ……とんでもねえ街に来ちまったなあ」

「なんだよ。まだボケてるのか？ 城門は開かないんだし、いまのこの街に外から人が来れるわけねえだろ？」

「いや、まあ、いいけど……」

説明しても無駄そうだし。

「でだ、にーちゃん」

「なんだよ」

「どうせ行く場所もねえんだろ。うちに来ないか？」

「は？」

「うちだようち。親父もお袋も死んで部屋が広くてしょうがねえんだ。」

どうせ食い物は配給制だから困りはしないし、雑用やってくれるなら屋根くらい貸してやるぜ」

「……まあ、べつにいいけど」

ぶらつくわけにも行かないし、この申し出はチャンスだ。

「よし、じゃあ決まりだな。俺はマキノ・オリヒヤーナってんだ。にーちゃんの名前は？」

「俺か。俺の名前は」

「サリ」

「あ？」

唐突に聞こえてきた声に、振り向いて。

そして、俺は絶句した。

マキノよりちよつと年下の女の子。質素でやせっぽちの身なりから、栄養的に彼女が恵まれていないことが見て取れる。

しかし、そんなことより。

「……っ」

思わず威圧されてしまうほど。その子を取り巻く雰囲気は清浄だった。

「サリ。サリ、ペステイ」

「ちよ、ま、な」

で、抱きついてきた。

「えへへ。サリ」

「……驚いた。エフがオトナになついたところなんて初めて見た」「そうなのか？」

「うん。でも、そっか。にーちゃんちびだもんな」

「待てやコラ」

その納得の仕方はすげー不本意なんですけど。

「サリ。サリ。アグナ、マルクテ」

「……なあ、こいつなに言ってるんだ？」

「知らね。なんかこの近くの地方の言語じゃないって話だけど。通訳してくれてたひとは死んじゃったし、もうなんだかわからねえよ。なあエフ。俺たちの言葉でしゃべってくれないか？」

言われて、エフはこくと首をかしげた後、

「オキヤクサン、モウカリマツカ……？」

「ぜったい誤訳だろそれ」

「サリい！」

「うわわっ、こら、体重かけるなっ」

「あー、とりあえずいいから家に入ろっぜ。騒いでるとしよっぴかれるぞ」

で。

「なあ……マキノ」

「なんだよ」

「このエフっての、なんで俺にひっついて離れないんだ？」

「当人に聞けよ」

「なんで俺にひっついて離れないんだ？」

「サリ、サリ。えへへ」

「……………」

「らちが明かない。」

「むむ……二年近く一緒に暮らしたマキノにーちゃんとしては、この状況はなんつーか、娘を嫁にやる父親の心境というか」

「その感想は大いに間違っていると思うが」

「なにを言う。これでも手塩にかけて育ててるんだぞ。ときどき俺の飯も一部食わせてすこやかに育つようにだな」

「んなことしておまえが育たないぞ？」

「う……なんか、にーちゃんが言う実感ももってるな」

「うるせえ」

さて、これからどうしよう。

魔物を捜そう　にも、夜でもなければ外には出られそうにない。
しかも、ついさっき気づいたのだが。

（俺、どうやって戦うんだ？）
剣ないし。

まあ、武器くらいはこの家を漁ればあるだろう。包丁とか。

（行動は夜に起こすとして、そうするとやはり睡眠を取っておくのが
）

「おい、にーちゃん」

「ん？」

その、ずいと差し出されたほつきとちりとりはなんですか？

「さっき言っただろ。雑用するなら屋根貸してやるって。家の中掃除
しといてくれ」

「……はい」

さっそく、計画頓挫。

「はあ……この調子でうまく行くのかなあ」

「ドグレグっ、サリ」

「……」

ため息。

掃除があらかた終わったころ、マキノが呼びにきた。

「配給の時間だ。皿ひとつ持ってきてくれ」

「おう。……って、なんでおまえは皿をふたつ持ってるんだ？」

「エフのぶんさ」

「……？」

「ああ、言っただけでなかったか。エフは足が悪いってことにしてるんだ。
だから俺が取りに行くことにしてる」

「なんで？」

「わけありだよ。ま、そのへんは深く聞くな」

話を打ち切るように言う。……まあ、特に興味もないけど。

「うわあ……エグいなあ」

「いろいろあつてな。ちよつと騒いだりするとああなる。

あんたも気をつける。兵士ににらまれたら終わりだぞ」

「あいよー。まあ、善処するさ」

やる気なく答える。

……むむ。なんだか呆れられた感じがする。

「なんだよ？」

「いや にーちゃん、すっげー肝据わってるな。ああいうの見たらふつうへこむと思うんだが」

「街の状況がサイアクつてのはわかったよ。それだけだろ？」

「そっか。そもそもあんた、頭ボケてるんだっけ」

「……そろそろ殴っていいか？」

「騒ぐと兵士に怒られるぞ」

「ち。運のいいやつめ」

「そこ！ なにを無駄話をしている！」

ぴた、と会話をやめる俺たち。

……まあ、ここはおとなしくしておくか。

不敵な態度はそつと隠し、俺は死人のふりを決め込むことにした。

「どうだーエフ、うまいだろ？ な？ な？」

「パルナー！」

「そうかうまいかー。よしよし。にーちゃんのも後でちよつと分けてやるからな」

「……親バカめ」

「ふふん、言ってる」

「サリ、パルナー！」

「わかった。わかったから慌ててこぼすなよ」

しかしまあ、こういう少人数で落ち着いて食べる飯も久しぶりだ。
(ここんどこ、大部屋でみんなでかくくらか、野営かのどっちか

だったからなあ)

しみじみしていると、マキノがこっちを見て笑った。

「なんだよ?」

「いや、まあこういう大人数で食べるのは久しぶりだなんて。しみじみしてたとこ」

「……三人だろ?」

「大人数じゃん。あれ、それともーちゃんって家族はそれなりに多いクチか?」

「そういうわけじゃないけど……」

まあ、昔からマリアの店の常連だったし。

どうしても金が調達できなかったとき以外は、だいたいみんなで食っていたと思う。

「なんだ。じゃあおまえら、ずっとふたりだったのか」

「まあな。だからにーちゃんには感謝してるぜ。俺以外に他人を知らないままオトナになるのは、エフにとっていいことじゃないし」

「って結局エフか。いけないとは言わねーけど、おまえ、自分のこともちゃんと考えるよ」

「俺はいいんだよ。エフが立派になってくれれば、後はどうでもいい」

「……なんだよ、それ」

「だってそうだろ? 結局、なにかもダメでも残すものがあればそれでいい。エフさえ生き残っていてくれれば、一切が倒れても、それで」

うわ、なんだそりゃ。

「この街だってそうさ。状況はサイアクだけど、ひとりでも守り切れれば無駄じゃない。無駄じゃなかったって思えるだろ。だから、」

「それは違う」

「あん?」

「そいつは、借金を押しつけてるだけだろ。残すなんて詭弁だ」

……沈黙が落ちる。

「借金つて……なんだよ、それ」

「だから、『生きる価値』つて名前の借金だよ。

おまえの生き方はそれをエフに背負い込ませて、自分だけ夜逃げする生き方だ。かっこわるいし、つまんねーよ」

「……」

正直、俺はけっこう怒っていたりする。

要するに、こいつ、死人になろうとしてやがる。

「続くヤツにだけ価値を期待するなんてムシがいい話だ。生きてるなら、生きてる時間をバカにするんじゃないやねえよ。価値なんてそこにはか出てこないだろ」

「よく……わかんねえ」

「なら考えとけ。考えなきゃなんにも理解できないってのがクラックフィールド家の家訓だしな」

突き放すように言つて、飯を食つ。

結局。

それから食事が終わるまで、ずっとマキノは元気がないままだった。

夜。

割り当てられた部屋から星を眺めつつ、俺は今後のことを考えている。

(結局、エフがサリなのかな)

造形は似ていなくもないが、どこかちょっとひっかかる。

そもそもここはサリの心の中の世界。だとすれば、世界のなかで異質なマキノとエフはサリとして異質だ。

それに、サリの心の中にサリがいるとも限らない。ある意味全員がサリの代理人で、サリ自身と言つていい存在はないのかもしれない。

だが、まあ。

(サリの心のなかにこういう場所があるのなら 守りたいな、とは思っけどさ)

だから、こいつらと一緒に過ごすのは間違いじゃないだろう。と思う。

まあ、ともかく

(いまは、情報収集だな)

窓からひよい、と飛び出し、屋根の上に登る。

……こういう技術を使うのも、ずいぶん久しぶりだなあ。

思いつつ、俺は走り出す。音を立てないように屋根から屋根へ移動し、壁に飛びつき、さらに高い屋根へ。

やがて、城壁っぱいところへとたどり着く。

(上のほうには見張りがいるな。当然だけど、これだとちょっと登るのは危ないな。

んー、街の中は……やつぱ夜だと視界が悪いなあ。巡回している兵士も見当たらないし、もうちょっと歩くか?)

壁のでっぱりに手足をひっかけながら、周囲を観察する。

……お。窓発見。

中をのぞくと、どうも部屋というよりは廊下のような。たぶん、戦争のときにはここから弓でも撃つつもりなんだろう。

(つつたって、なにもこんなに大きく穴開けなくてもいいだろうに。兵士に侵入されるぞ、これ。

どれ、中は……ん。誰もいないし、隠れる場所はいっぱいあるなよじ)

ひよい、と中に入る。

予想通り、中には人っ子ひとりいなかった。兵士の詰め所くらいはあるかと思っただが、それもない。

(まあ、角のところにある塔まで行けばあるんだろうけどさ)

……さて、これからどうしよう。

目的もなくこんなところまで入り込んでしまったが、元々の目的は魔物退治だったりするのである。

一応、高いところから街を眺めればなにかわかるかも思っ
てはいたが

(屋内に入っちゃ、それもイマイチ意味がない。……いつそ戻るか
?)

「あれ、お帰りですか？」

「おうあひー？」

慌てて振り返ると、そこに。

「んん？ どうしたんですかー？」

「……誰？」

「あ、フリーって言いますー。どーもー」

女……フリー？ は、そう言っぺこっとお辞儀をした。

見れば見るほど、うさんくさい女だった。

身なりは、どっか金持ちの家の使用人……風。

でもどっか違和感があるというか

(……なんでこんなのがここにいるんだ？)

兵士ならともかく。

「まあ、俺も人のこと言えた義理じゃねーけどさ……」

「？ どうしたんですか？」

「いや、こつちの話。っーかこの辺、なんで人っ子ひとりいない
だ？」

微妙に話をはぐらかす。

相手は、こくんっ、と首をかしげ、

「わたし。あなた」

「……いや。言っちゃなんだけど、このふたりはいるほうがおかし
いだろ」

「そうですねー」

ダメだ。会話にならねー。

「んー。でも、ここのところだいたいこの辺はそんな感じですよ？」

「ここのところ、って？」

「えーと。とりあえずわたしが知ってる限りいつも」

……それはこのところ、とは言わないんじゃないか。

「兵士がない城壁なんて初めて見たぜ。大丈夫なのか？」

「えー、でもここ、城壁じゃなくて牆壁って言うんですよ？」

「牆壁？」

「そうです。街と街の間に作られたぶち城壁ですね。外部と通じてないんで重要度は低いです」

「……ひょっとしてこの街、実はすげー大きいのか？」

「昔は都だったんだそーですよー」

「うわー。大都会だ。」

（道理で、城壁に囲まれた区画が小さいと思ったんだ……ただの一条街区でこの大きさは相当だわ、こりゃ）

「まあ、兵士さんもだいぶ減ってますからねー。こういところまで埋める余裕がないんでしょーね」

「上は一応見張りがあるみたいだったぞ」

「そこまで減らしちゃ領主の威厳に関わりますから」

「あー、つまり領民を脅すための見せ物か」

「ですねー」

ほのぼのの歓談する。

……いや。ちよつと待て。冷静に考えてこれってけっこつまずい状況なのは。

（盗賊と思われて、通報されたら実は俺びんち？）

「？」

「……」

しかも、ばつちり顔覚えられたっばい。

「あー、なあ」

「にしても。タイミングばつちりですねー」

「ん？」

「ほら。街のほう、見てくださいよー」

「え……あ、あああ！？」

街は、明るくなっていた。

朝、とかそういう現象じゃない。地上から出た光だ。明かり。などという生やさしい現象ですらなく

「火事!？」

「しー。静かに」

「え？」

「……出現位置が近いです。へたに動くと、取り込まれますよー」
「なにに」

「死界の魔ですー。死界王って言われてるみたいですけど」

「やばいのか、そいつ」

「ある意味最悪に。疫病とタメを張れるくらいですー」

「げ」

そいつはやばい。

が、

「そんじゃ、ますますここでじっとしているわけにはいかねーな」

「ほへ？ えーと、でもー」

「なにが起こってるのか知らないが、ちょっと守りたい奴がいてな。じっとしてるわけにはいかない」

あの、たぶんサリにとって大切な場所を。

なくしてしまうのは、ちょっと、惜しいと思うのだ。

(それにまあ、たぶんその魔物って元凶だし)

だから、とりあえず様子ぐらいは見てみたい。

どんな相手かわからなければ、対策だつて立てようがないのだ。

「……犬死にですよー。たぶん、お兄さんがどーにかできる相手じゃないです」

「ん、まあそうだったら仕方ないから逃げる」

言つと、フリーは小さく笑った。

(……あれ?)

いま、なんか

「じゃ、止めませんから行ってきてください」

「んー、おっけー。死なない程度に行ってくる」

「それとー。これ、持っていったらどうでしょー」
言って。フリーは一本の短剣を差し出してきた。

「……こんなもの、なんで持つてるんだ？」

「あはは、やだなー。そんなの暗殺用に決まってるじゃないですかー」

「そ、そうかい……」

こえー。一瞬笑顔がひきつりましたよマジで。

「じゃ、ありがたく使わせてもらっせ」

「はいー。お元気でー」

気の抜けた声を尻目に。

俺は、窓から飛び出した。

城壁を降りていきながら、ふと、俺は思った。

さつき、微妙にはぐらかされてしまったけど。

あの、一瞬だけ見せた笑顔。

(背筋がぞくつとするほど邪悪で、そのくせどこか見覚えがあるよ
うな)

……まあ、見間違いだろう。

異様な世界だった。

燃える街。聞こえる叫び声。

そこら中の建物に火が燃え移り、絶望に満ちた絶叫がこだまする。

問題は、それでも。

(……なんで誰も出てこないんだろう)

火で照らされていながら、人っ子ひとりいない街を眺めて、思う。

まあ、その分走りやすくはある。おかげで、邪魔されずに帰ってくることはできた。

うまいことに、火の手はまだマキノたちの住む家のほうには届いていなかった。

これなら、いまのうちに避難させればどうにかなるかも知れない。
そう、思った瞬間。

「うわ!?!」

脇の民家からいきなり火の手が上がった。

(な 放火、なのか!?)

一瞬考えて、すぐ否定。

そういうレベルじゃない。むしろ、これは……

「うっおーっ!」

「なうわけっ!?!」

あわてて短剣を振り回す。

ざしゅ。魔獣が倒れた。

……

「……え。終わり?」

やたらあつさり倒れた気がするんだが、こんなものでいいんだろ
うか?

「お、おおおお……」

魔獣が出てきた建物の入り口には、放心したように男がひとり、
うめいている。

「なにぼーっとしてんだ! 早く逃げねーと炎……に……?」

「ぎゃあああああ!?!」

「な、……?」

さっきの魔獣から黒い煙が溢れて、男にからみつく。

そうして 男の身体が、変形、していく。

魔物の、姿に。

(やばい 増殖するタイプか!?)

「ぐうううう……」

すっかり魔物に変貌した男は、かろうじて面影を残す顔を、にた
り、と歪ませた。

そして、

「ぐおおおおおおーっ!」

「ち、キリがねえ！」

逃げる。逃げるけど相手のほうが早い！

「にーちゃん、こつちだ！早く！」

声の聞こえるほうに無我夢中で飛び込む。

ばたんっ！

がつんっ！ ばん、ばきっ！

魔物が入ってこれない。

扉と、マキノが容易しておいた、机による簡易バリケードのせいだ。

「バカだな。火事だからって安易に夜に外へ出ると食われるぜ。ここは死界なんだ」

「はー、はー……？」

音が、止んだ。

「お、いつちまったか？」

「バカ、よけろっ」

「え？」

ぐい、とマキノを引っ張る。

瞬間、さっきまでマキノがいた場所に、ぶしゃあ、と煙みたいな黒いものがわいて出た。

「う、うわあああ！なんだこれ！？」

「くそ……！！」

黒い煙がいつせいにマキノに襲いかかる。

「ひっ……！！」

「だあああ、うっとおしいんだよめー！」

叫んで、振り払うべく剣を持つ手を振った

瞬間。

俺の手に、光の。

「あれ？」

「ごうんっ！

黒い煙が、煙の形のまま吹っ飛んで。

それは壁を打ち壊して、急速に実体を整えながらごろごろと転が

っていった。

「うわ……」

「な、なんだあ!?!」

手を見る。

そこには、どこかで見たことがあるような 光でできた、剣があった。

(……………)

剣が、変化した?)

こくん、と首をかしげる。

(……………)

ま、いいや。この際、使える武器ができたのは嬉しいし)
考えるのは後にして、俺は剣を構えて敵と向き直る。

「なんだか知らないけどよ とりあえず、この場は守らせてもら
うぜ!?!」

「ぐがああああ!」

襲いかかってくる魔獣を迎え撃つ。

ステップワークで突進をかわし、剣を振り抜いた。

ざくん。魔獣が倒れた。

(……………さっきと同じだ。弱い)

「す、すっげー! 超強いじゃん、にーちゃん!」

「……………」

俺は、手でマキノを制した。

「え? なんだよ。どうしたんだ」

「近づかないで待ってる。ヘタするとおまえも魔獣になるぞ」
「え?」

魔獣は明らかかな致命傷を負い、もはや反応することもなく し
ゆっしゅつと煙を上げながら 倒れている。

しゅっしゅつと煙を上げながら その煙に取り込まれたものを、
魔物にする いや。

(違うな。こいつは増殖してるわけじゃない)

さつきまで考えていたことを訂正する。

増殖するなら、俺も魔獣になっていなければおかしい。たぶんそ
うではなくて、これは……

(煙が、本体……?)

「つて、やばい！」

「うわあああ!?!」

「ち!?!」

いきなり意志を持ったかのように動き始めた煙が、マキノに襲い
かかる。

慌てて取って返すが 間に合わないっ……

どんっ! と、そのマキノの身体が突き飛ばされて。

「うわ……っ」

「エフ!?!」

小さな身体を、黒いものが包み込んで。
そして。

「な」

「ぎゃあああああ!」

黒い煙が飛び退く。

そのカタチがどんどん崩壊していつて……消えて、しまった。

「……んー?」

「え、エフ……無事かあっ!?!」

「???」

こくん、と首をかしげるエフ。

どういう状況かわからないが、しかし。

「まあ、無事だったのはよかったな」

「がしゃんがしゃんがしゃんっ!

完全武装の兵士たちが俺たちを取り囲む。

「貴様ら、なにしている!?!」

「……」

どっちら。

まだ、俺たちはよかったと言える状況じゃないらしい。

で。

「……………はあ」

「……………」

「……………ふう」

「……………」

「……………ほう」

「……………」

「……………ひい」

「ええい、いい加減うつとおしい！」

ため息をつきまくるマキノをどなりつける。

マキノはどよんとにごった目でこちらを見て、

「だってさー……………エフがいないしさー」

「しよーがねーだろうが。兵士ども、有無を言わずこつちを捕まえやがったんだから」

「だよなー……………あー、エフは大丈夫なのかなー。泣いてないかなー、ちゃんとご飯食べてっかなー」

「まったく……………親バカなのもたいがいにしとけての。おまえがグチったからってエフは戻ってこねーぞ」

「でもさー、なんで俺らってエフと違う牢屋に入れられてるわけ？」

「知らん。さっきの兵士は性別ごとだって言ってたけどな」

「それで牢屋をふたつも使うのか？ ただでさえ、牢屋が足りないからって犯罪者を片っ端から殺して回ってるこの時期に？」

「だから知らんっての。だいたいそんなことは」

「貴様ら、いい加減に黙れ！ やかましいぞ！」

「ほら、その見回りのガラの悪い兵士のにーちゃんに聞けよ」
「やだよ。あんな下っ端が知つてるとも思えねーし、態度わりーし」
「ダメもとだよダメもと。気持ちわかるが諦めたらそこで人生終わりだつてというのがクラックフィールド家の家訓でだな、つてうわ！？」

ざしゅっ！ と、鉄格子のすきまから出てきた兵士の槍を間一髪で避ける。

「うーわ危ねー。つーかいまのはあんまりじゃねえ？」

「うるさい、いますぐ殺してやるからそこで待ってる！」

「う、うわ、お、俺は無関係だぜ！？」

鍵束を取り出してガチャガチャやり始める兵士。

……いや、まったく。

(ここまで相手がアホだと、笑えもしねえ。なつてねえな)
がちやり、と扉が開く。

「さあ、お待ちかねだ。遺言はあるか、ガキども？」

「うぜえ。退場」

「は？」

がつん！

「……………」

ばたーん。兵士は倒れた。

「ふ……貴様の過ちはふたつ。ひとつはこの世紀の大悪党の腕っ節をナメたこと。もうひとつは、俺をガキと言ったことさ」

「……………いや、ガキじゃん。体格とか」

「うるせえ。ていうかぼーっとしてんじゃねえ。さっさと行くぞ」

「へ、行くつてどこへ？」

「決まってるだろ？」

にやりと笑って、言う。

「エフを探して、とつとオサラバするんだよ。ほら、急げ！」

人気のない廊下から階段へ、屋根へと進み、俺たちは建物を一望できる塔の下まで来た。

(頂上まで登れば状況が一目でわかるんだが……さすがに厳しいなあ)

(なんでだよ?)

(だってここ明らかに見張り塔だろ。見張り塔の上に見張りがないわけないし)

(あ、そっか。……じゃあ、なんでこつち来たんだよ?)

(べつに頂上まで行かなくても、外壁よじ登って回れば状況は確認できそうだからな)

(お、俺は無理だぞそんなの)

(わかってるさ。そいつは、俺がやる。へへ、こついうときこ

そ大悪党の面目躍如ってね)

言って、俺はするすると城壁を登り始めた。

……思ったより登りやすい。いい加減な築城してるなー、こつ。

(さてと、下の様子は……)

うわ、あからさまに怪しい場所発見。

中庭だったのに、大量の兵士たちがいてたき火みたいなのを囲んでいる。

まるで原始人の集会というか

『毎日若いねーちゃんを生贄に捧げて』

つつー、と、冷や汗がほおを伝う。

(ていうか、これって超やばいんじゃない……?)

慌てて塔から降りる。落ちないように最大限のスピードを。

(おつ、どうだった?)

(確認したいものがあつた。ちよつとついでこい)

(あ、ああ……)

ピンゴ。

やっぱり、その中央にいたのは、エフだった。

(え、エフっ！)

(お、落ち着け！ あの量の兵士に囲まれたらどうやったって勝てないぞ！？)

(だけど、だけどさあ！)

(いいから落ち着けて。俺に手だてがある)

(え？)

(いいか。 いまから言う作戦、成否はおまえにかかっている。

まずはこれを受け取れ)

懐に隠してあったナイフを取り出して、マキノに渡す。

(これを？)

(人には決して使うな。見たところエフは縄で縛られてるから、それに対処するのに使え)

(そ、それはいいけど どうやってそこまで行くのさ？)

(まあ、見てろって。……すぐに、あいつらを中庭から追い出してやるからさ)

「こちらです！」

「うむ。」苦勞

ぞろぞろと兵士を連れて、領主……だと思つ、偉そうなやつが通り過ぎよつとする。

瞬間。

「てえい！」

「うわ！？」

がきいん！ と音がして、兵士の持つ槍がはじき飛ばされる。

天井から飛び降りた俺が、相手の槍を剣ではじき飛ばしたのだ。

ちなみに剣はさっきの兵士から奪ったもの。たぶん念じれば光の剣になるが、それは切り札なのでまだ使わない。

「む、なにやつ!?!」

領主の声と同時に、残った兵士どもが一斉に槍をこちらに構える。

「よくぞ聞いてくれました」

ポーズを取って、

「か弱き女の子を守るため、まだ見ぬお宝を探すため、夜風に紛れてやってくる。

天知る地知る人ぞ知る! 夜を駆ける世紀の大悪党、ライナー・クラックフィールド様とはこの俺のことよ!」

びしっ! と剣を構えて見得を切る。

……反応が薄い。

「滑った!? そんなバカな!」

「不審者が。なにをしている! さっさと捕らえんか!」

「ていうか冷静すぎ!?! ちょ、ちょっと待ってええええええええ!?!」

一目散に逃げ出す。目的はもちろん目立つこと。そして逃げるのと。

「逃がすな、追え!」

『了解!』

「うひゃー、わかった、わかったから命ばかりはおーたーすーけーをー!」

こうして、命がけの追走劇が始まったのだった。

「弓隊、構えー!」

『構えー!』

「てー!」

『てー!』

「はははは、当たらねえ当たらねえ当たらねえ! そんな豆鉄砲が

大悪党さまに効くかー！」

叫びながら廊下を駆け抜けて柱を登って屋根を伝って飛び降りて庭へ。

縦横無尽に動きながら相手をどんどん引きつける。目的はもちろん時間稼ぎ。俺が捕まる前にエフがこの建物から出れば御の字だ。

その俺の、目の前に。

「ん!？」

黒い騎士が、立っていた。

(……やべえ。こいつ、別格だ)

即座に認める。ザコ兵士なんて相手にならない。こいつは、

「やってくれる。こうかき回されると、こちらとしてもさすがに不愉快だ」

「なら、どうする?」

「言葉にする必要があるか?」

剣を抜く。闇に沈んだ黒の剣。

それは心を威圧するような暗黒で、俺の身体というよりは精神を打ち砕こうとしているかのようだった。

じわり、と悪意のプレッシャーが身体にのしかかる。

「へ、たいそうなもの持つてみたいけどよ

意地張るって決めたら絶対負けるなつてのがクラックフィールド家の家訓なんだよ! つーか気味悪い剣程度に負けるかー!」

「!??」

ばしゅっ! と、剣が光り輝くものに変異する。

「精神力で剣を召喚したか。だが……その程度で、どうにかできるか?」

「うるせ、つべこべ言っつてんじゃねえ! 行くぜー!」

「ふん!」

「らあああつ!」

がきんがきんがきん、と相手の剣を弾いて対処。

一撃一撃の重さはかなりのものだが、潜り込めば楽勝

と言い

たいのだが、攻撃が重すぎるせいでなかなか潜り込めない。

「っ……っとおしいな、ったく！」

「ふん、それはこちらの台詞」

騎士が剣を引く。

……？

気がつくのと、兵士たちが大勢で、俺たちを取り囲んでいる。

その、一角に。

「あっちゃあ……」

「にーちゃん、ごめんよ。捕まえられちゃった」

「……ふん。どつりで不自然と思ったわ。あいにくだが、この程度
ですてやられるほど我らは迂闊ではない。

逆らえば小僧の命はない。わかっているな？」

「仕方ねーな……」

剣を放り出して、兵士たちに捕らえられる。

「引つ立てて、魔術を封じた上で我が部屋に連れてこい」
指示する領主に、俺は目を向けることもせず。

ただ。

目の前の、異様な黒騎士だけを見つめていた。
その口が、小さく動く。

「よけいなことを。とっくに諦めているくせに干渉だけは一人
前だ」

(……………)

……な、に？)

そう、なのか？

処置を受けている間じゅう、俺は考えていた。

マキノがなにか言っていたみたいだが、無視。

兵士たちが注意してきたが、それも無視。

ただ、ひたすら。

この、えらく手の凝ったカラクリについて、考え続けていた。

そして。俺たちは、謁見の間にやってきた。

座して迎えるのは領主。その傍らに控える黒騎士。

そして兵士。

すごい量の兵士たちが、今度は逃がさないとはかりにこちらをにらみつけてくる。

その中で。

俺とマキノは、手足を縛られたまま領主の前に引っ立てられてきた。

「理由を聞かせてもらおうか」

領主が言った。

俺は 特にリアクションを返さず、無言。

かわりにマキノが、おずおずと切り出した。

「あ、あの……」

今日、生贄に捧げようとしていた女の子なんですけど 勘弁し

てくれませんか？」

「……………」

「お、俺、あの子を育てるためだけにいままで生きてきたんです。

あの子がいなくなったら、俺はどうやって生きていきゃいいのかわからないんです。だから」

「ならぬ」

「なんで!？」

「聞けばその娘、触れただけで死界の魔物を退けたという。それほどの聖性があれば、今度こそあの忌々しい領域を壊せるかもしれん」

「だ、だけどさっ」

「これは街の皆を救うための手段だ。ひとりの人間を救うことを優先はできぬ」

「できてねーじゃん」

「なに？」

「だから、できてねーじゃん！ 何人生贄に捧げたって結局あんたはだれも救えてねーじゃんか！ ムダなんだろうがよ！」

「それは違う」

「なにが違う！」

「無駄ではない。打つ手が、それしかないだけだ」

「！」

苛々しながら、領主は言葉を紡ぐ。

「そうとも。たしかに効果は挙がっていない。死界の影響はますます色濃くなり、街は死臭に満ち、魔物どもは夜に跋扈して人を食らう。」

「だからこそ。諦めるわけにはいかん。ひとつでも、ひとりでも救う手だてがあるのなら、それを実行しつづけなければならんだ。」

恨むなら恨むがいい。結論は変わらない」

言って、領主は座から立ち上がり、退出しようと歩き出した。

その、背中に。

「バカ言ってるじゃねえ。そんなもん、効果があるわけねえだろ」

領主の足が止まる。

「なぜ、そう断言できる。少年」

「あん？ だつておまえらもう死んでるじゃん」

「な……なに？」

「死んでるヤツなんか誰も救えないよ。詭弁を弄するな。テメエは結局、なにかも切り捨てられずに借金に苦しんでいるだけだろう」
「ばしゅつ、と。」

「なにもない場所から呼び出した光の剣で縄を切り払い、俺は立ち上がった。」

……あー、ガラじゃねえのに。」

「なにを……っ」

「いやさ、なんかおかしいと思ってたんだよ。捕まったら殺されるとか言いつつべつに殺されないし、なんか妙にみんな寛容だし。

みんなおまえだってことはわかってたけど、これで合点がいった。要するに、ここはおまえの未練だ。切り捨てても切り捨てられないモノだ。

まったく……妙なところで不器用なんだな。死人に囲まれて育ったからって、自分まで死人になることはないだろう」

「なにを言っている！ 貴様！」

「わからないか？ おまえに言ってるんだよ、サリ・ペステイ！」

世界が凍って、モノクロに変わる。

「そうだろう。自分はもうだめだと諦めて、生贄にして周囲を救おうとした。周りの奴らだってみんな、自分のことを考えてない連中ばっかりだ。

ぜんぶ、おまえの暗喩だろう。もうダメだからとどめを刺せてか？ 冗談じゃねえよ、借金押しつけられる身になってみるってんだ、ばか」

空間は沈黙している。

……届いて、いるよな？

「よく聞け、サリ。俺はおまえの代わりに生きるつもりはないし、重荷をしょってやるつもりもない。ここでおまえが死ぬ気なら、それでさよならだ。

だってそうだろう。おまえだってわかっているはずだ。死人なんて誰も救えない。誰かが借金を返したところで、死人が救われるわけじゃないんだよ」

この、たぶん彼女の体験した過去であろう場所で。

死んでいったそのただひとりでさえ、誰が救えるというのか。

「勘違いするなよ。人死にはいつまで立っても人死にだ。そこに救いも希望もない。そういうのは 生きている中で、見つけるもんだろ。」

俺はそうやって生きてる。貧乏だったから人死になんていくらでも見てきたけどさ、そんな奴らの人生を背負い込むなんて絶対しない。

それが俺の、悪党の生き方だ！ 屍の山に舌あ出して自分を貫くのが俺の流儀だ！

生き延びなければ俺の手を取れ。死人にならない限り、俺は

必ずおまえを助けてやる！ だから……」

ひゅん、と風がわめいた。

ぎいんっ！

「 やっぱりてめえが悪玉か！」

「 如何にも。……ここまで速く深層に食い込むとはな。どうやら少し悔っていたようだ。」

絶望させて楽しんでやろうかとも思っていたが、気が変わった。

おまえは目障りに過ぎる。この場で始末してくれよう！」

「 ……ふん。そんな悠長なこと言ってられるのかよ？」

「 なに！？ 」

ざあっ！

世界が色を取り戻す。

「 槍、構え！」

「 構え！」

広間中の兵士たちが、一斉に黒騎士に向けて槍を向けた。

「 バカな！？ この連中はすでに支配下に置いたはず！ 私を敵と認識できるわけが 」

「 おまえねえ……詰めが甘いというか、バカじゃねえ？」

「 なんだと？」

「 だってそうだろ？ さっきまでの腑抜けならともかく 活いてやった後のサリが、おまえなんか好き勝手させるわけねーじゃんよ？」

「 な 貴様、さっきの長演説はまさか……！」

言葉を最後まで聞かず、俺はマキノの腕をがしつとつかんだ。

「逃げるぞ！」

「わ！？ え、ちよつと、な、なにが起きたんだっ！？」

「いいから走れ！」

戦場と化した謁見の間を飛び出す。

「ちよ、ちよつと待ってくれよにーちゃん！」

「なんだよ、いま忙しいんだからろくでもないことだったら後にしろ」

「ろくでもなくねーよ！ エフを助けないと！」

びた。足が止まる。

「つちゃー……それを忘れてた」

「忘れるなよ！ ばか！」

「いや悪い悪い。しかし困ったな。いまあいつがどこにいるかの情報」

「こつちです！」

「あん？」

「早く！ 兵士たちに見つからないうちに……！」

謎の声はそう言って、沈黙した。

マキノと顔を見合わせる。

「……いいか。どうせ最初からイチかバチかだ」

「よし、行こうぜっ」

「ああ！」

声の聞こえたほうに走る。

「次、右です。それからすぐ左！」

「わかった！」

複雑で迷路みたいな館をぐにやぐにやと曲がりながら走っていく。やがて、俺たちを招くように開かれた扉に突き当たる。

「この部屋です、早く！」

「おう！」

飛び込む。

そこには、

「……グノー！ サリ！」

「エフー！ 無事かつ」

「うわ、ホントにいたっ」

エフと、

「ああ、よかったー。なんとかうまく隠れられそうですよー」

……おい。フリーかよ。

予想外の人間がいたことに、俺の顔がひきつる。

マキノは眉をひそめて、

「つて、誰だよあんた」

「？ この館の使用者ですけど」

「……使用人ー？」

「ええ。あ、名前はフリーって言うんですよー」

にこにこしながら言う。

……あいかわらず、うさんくさい。

「で、なんで俺たちを助けてくれるんだ？」

「え？」

言われて、フリーはしばし考え込んだ後。

「んー、なんとなくー」

「……わかった。もう聞かん」

フーか問答以前に会話が成り立たないという事実を忘れていた。

「まあいいや。ともかく俺たちはこれから脱出するから、恩に着る

ぜ」

「えー、でもそれは無理だと思いますよ？」

「え、なんでさ？」

「出入り口の警備はけっこう厳重ですしー、それに、ほらー」

「？」

言われて、窓のほうを見て。

「げ」

気がつく。

空は、もうとっくのうちに明るくなっていた。

「さて。問題はこれからどうするか、だな」

机にひじを立てて、俺はひとりつぶやいた。

時刻はもう昼過ぎだろう。俺も一寝入りして夜に備えることにしたのだが、起きたら誰もいなかった。

（ま、フリーがいればおかしなことにはならないだろ。たぶん）

信用ならない女だが、魔物とグルではなさそうだし。

この世界はすべてサリなのだから、俺が信用する・しないの基準はそれだけ考えればいいのだった。魔物でなければ、敵じゃない。

で、その彼女が、

『この周辺はー、奥様とか女官の区域なんでー、そう簡単には兵士たちも入ってこれないんですよー』

とか言っていたわけで、見回りの時刻をのぞけばちよつとくらい外に出ても大丈夫だという話だった。

（昨日 いや、今朝か。ともかくあのとき使った手は、今後使えないな）

いくらなんでも裏技すぎる。サリだってそう毎回毎回俺を助ける余力もないだろう。

とすると、やっぱりエフを守り通すしかないわけだが。

（元の住居に戻れば……いやいや。場所も顔も割れてる。地下に潜るのも難しそうだし、この場合は）

……やっぱり、街を抜け出すしかないか。

確証はない。だが、予想通りここがサリの過去で、魔物が死界の住人ならば、死界から脱出すれば相手になんらかの打撃を与えられるかもしれない。

とすると、まずはこの街を抜け出さなきゃいけないってわけなのだが

「夜を待つしかないか。……その前に、できれば脱出経路についてアタリをつけておきたいところだが」

「脱出ですかー？」

「……どっから湧いて出たデメエ」

「床下からですー」

フリーはそう言っ下を指さす。……うわ、ホントに仕掛け床のフタが開いてやがる。

「後のふたりは？」

「秘密の通路ですー。景色がいいから、もう少し見てくるって」

「緊張感ねえな」

「いいんですよー。それで。ヘンに緊張なんかしたらアレに取り込まれますよ？」

「え？」

「アレ……？」

「ですから昨日の魔物です。……あれ、ひょっとして出会いませんでした？」

「いやばつちり出会ったけど。あんた、アレがどんな魔物かわかってるのか？」

「ええ、そりゃもー。ここしばらくああいっ場所にいたのも魔物を観察するためなんですから」

えっへんと胸を張る。

「なら、教えてくれよ。アレはなんなんだ？」

「えー、教えるんですかー？」

「……なんだよ。教えちゃまずいことか？」

「いいえ。ちつともまずくないですー。むしろお兄さんが知ってる対策取りやすくてグッドですなー」

「そうかい。なら」

「というわけで、土下座して教えてくださいフリーさまと言えば教えなくもないですー」

「………心底どす黒いなアンタ」

「あはは、冗談ですー」

「笑えない冗談をありがとう。で、あの魔物だが。」

「ずばり。なんで人間が魔物になるんだ？」

「あははは、そんなわけないじゃないですかー。アレはー、人を食べてるだけですよー」

「……た、食べてる？」

「そーです。正確には、絶望して力が抜けた人間を自分の血肉に取り込んでるんですけどー、それって普通食べてるって言いますよね？」

「……それは、つまり。」

あの黒い煙は魔物の口みたいなもの。

取り付いて魔物化させたと思っていた人間は、実は魔物に食われている？

「じゃあ次に。なんでエフは食われなかったんだ？」

「絶望してなかったんじゃないですか？」

「……それだけ？」

「その場で見えないから推測ですけどー。頼りになるお兄さんたちがいて、取り込まれそうになっても絶望しないで済んだんじゃないですか」

「じゃあ、要するに」

「はい。エフちゃん自身が害されるか、そのまわりのひとが死ななければ、たぶん彼女は取り込めないでしょーね」

朗報だ。

その特性は、たぶんこれからの戦いのなかで、とんでもなく価値を持つ。

「と、このくらいしかわたしの知ってることってないですけどー。お役に立ちました？」

「ナイスだ。超役に立った」

「じゃあー、わたしからも質問なんですけどー」

「ん、なんだ？」

「城から脱出するとしてー。どこか行くアテはあるんでしょーか？」

「ん。とりあえず、死界から逃げようかと」

「え、じゃあ街から出るんですかー？」

「そのつもりだけど。なんかまずいか？」

「フリーは、んー、と考えて。」

「いえ。悪くはないんですけどー……」

「がちゃ、と扉が開いて、俺は反射的に身構えた。」

「が、すぐ警戒を解く。」

「なんだ。おまえらかよ」

「よ、帰ったぜ」

「サリー！」

「うおお、わかったから叫ぶな、抱きつくな、大声出すなっ」

「体当たりでひつついてくるエフをはがしながら言う。」

「ていうか、どこ行ってたんだよおまえら。朝起きたらだれもいなくてけっこう慌てたぞ？」

「食料調達だよ。ほら」

「マキノはそう言って、どん、と持ってきた袋を置いた。」

「中身は 軍隊用の携行食糧だ。干し肉とか、チーズとか。」

「これで三日間は籠城できるだろ」

「……いいけど。べつに三日もないぞ。今夜にはここを出るし」

「は？」

「???？」

「いや、だから。あんまり長居もできないだろ。不自然に糧食が減っていることがばれればここに潜伏していることはわかつちまうし」

「でもさ、どこいくんだよ。帰るったって家は割れてるし……」

「ああ。だから、街を出る」

「は!？」

「だってそれしかないだろ。だいじょうぶ、近場の街に逃げ込めなかつたって、もつと遠くに逃げればいいんだし」

「いや、そりゃそうだけだよ」

「死界から脱出すれば無事生き延びられる可能性は格段に上がるん

だ。悪い話じゃないだろ？」

「……………」

「????？」

むむ、予想外に渋ってる。

「なあ、にーちゃん」

「なんだよ」

「一回だけ、俺の家に寄ってっっていいか？」

「……………」

それは。

「難しいと思うがな……危険の度合いは跳ね上がるし」

「いや、悪い。どうしても取りにもどりたいものがあってさ」

「ん……………」

「あー、それだったら私が協力しましょーか？」

「え？」

「あん？」

フリーは得意そうに、

「この街が、区画ごとに牆壁で分けられてるってというのは知ってま

すよね？」

「ああ、聞いたけど」

「それでー、兵隊さんの本部はここにあるわけです。それもわかり

ますよね？」

「わかるけど……まさか」

「そうですねー。伝っていけるんです。見張りもいるけど、お兄さ

んも見ての通り内側のほうは兵士不足でボロボロですから。ほとん

ど支障なしですー」

「そっか。その手があったか！」

あそこまでがらんどうなら、ちびふたりを連れて行動しても問題

はない。

「よし、行動計画は決まりだな。じゃ、とりあえず飯でも食って夜

を待とうぜ」

「サリ、コロっ」

「……だから抱きついてくるのはよせつての」

「むむむ、やっぱりこれはアレだ。手塩にかけて育ててきた娘を嫁にやる父親の心境というやつでだな」

「なんか前もおなじことを言わなかったか？」

「だってさびしいんだよー、悲しいんだよー、るるるー」

「ええい、うっとおしいから歌うなっ」

「??？」

「みなさん仲がよろしいですねー」

……こんな感じで。

結局。俺は夜まで休ませてもらえなかったりするのだった。

通路に出ると、窓から満天の夜空が見えた。

「こうして見ていると、死界の中なんて信じられないなあ」

「ホントですねー。お星様がきれいですー」

「ああ。できればのんびり眺めたいところだが、いまはそれどころじゃ……」

……待て。

「? どうしたんですかー? いきなり足を止めたりして」

「いや、あんたはどうしてついて来ているんだ?」

「だってー。子供たちの家のある街区、どこだかわかるんですか?」

お兄さん

「……」

「……」

「??？」

しまった。それ確認するの忘れてた。

「ね、わたしが必要でしょー?」

「……ま、いいか。確かに助かるしな」

「いいのかにーちゃん。ていうか正直このひとうさんくさいと思う」

「んだけど」

「はい。うさんくさいですよー」

「自覚してるんだからいいんじゃない？」

「そ、そういう問題か？」

「そういう問題だ」

断言する。

……まあ、補足するなら。誰にとってもうさんくさいとはつきりわかるあたりが、俺がこの女を根本的に信頼する原因なのだ。

カードゲームで言えば、カードは伏せてはいるが袖の下に隠してはいない。そういう状況だ。

（それにまあ、深く考えてもどうしようもないことってあるしな）
この際とことん頼り切ってしまうおう。

頼っている自覚があるうちは、それで問題ないはずだ。

夜は静寂に満ち、俺たちの痕跡をかき消してくれている。

……つて、あれ？

「なんか、声が聞こえないか？」

「はい？」

「ん？」

「？」

耳を澄ます。

だいぶ遠くだったが、お祭りみたいな声や音が聞こえてくる。
でもお祭りというには不規則で、どちらかと言つと……

「！なんだと！？」

「わ、にーちゃん！？」

走り出す。

街区と街区を結ぶ牆壁。その端に立つ塔へ急ぐ。

見張りとか考えている状況じゃない。上に出て状況を確認しないと、まずい。

この音。俺の予想が当たっていれば

「戦争……！ 嘘だろ！？」

予想は、当たっていなかった。

むしろ、状況はさらに想定外。

「なんだよこれ……なにが起こってるんだ!？」

「……!　ヘータイが、街を襲ってる……!!」

兵士たちが、街区を蹂躪している。

動くモノは片端から切り捨て、建物と見れば火をかける。

それは　もうこれ以上ないくらいの、終わりの光景。

「なんでだ!　なんでこんなことを!？」

「たぶん……疫病、ですねー」

「疫病?」

「はい。疫病患者がいっぱい出て收拾がつかなくなったとき、火をつけてそこを焼き払うんです。これ以上広まらないように」

「にーちゃん!　隣の街区も!」

「な……なんだって!？」

「そこだけじゃねえ!　いっぱい……俺たちの街区も火がついてる!」

「ちくしょう!　いくらなんでもこれは異常だろ!　疫病ってのは

そんなにいきなり流行るモンなのか!？」

「そ、そんな噂は聞いてません!　これは明らかにヘンですっ」

「サリ、ウィーノ!」

「なんだ!？」

指された先を見て、絶句。

兵士から逃げようとする住民たちが　暴徒となって、壁へと押し寄せてくる。

「あ、あいつらなにを」

「壁をよじ登る気か!？」

「いけません!　早く逃げないと巻き込まれてしまう!」

「に、逃げるったってどこに……!!」

言う暇もなく。よじ登ってきた住民が俺たちのほうに押し寄せ
くる。

「うわ　　！」

「やばっ……！」

「！？」

「……？」

衝撃　　は、こなかった。

「あれ？」

恐る恐る、目を開けると。

「……………あ」

ぼかーん、とした。

空。

空の上に、四人の身体が。

シャボン玉みたいなのに包まれて、ふわふわ浮かんでいる。

「な、なんだあああ！？」

「これは……奇跡、でしょうか？」

「わ……………」

ふわふわ、ふわふわと漂いながら。

俺たちは、だんだんと市街の外れのほうに向かっていく。

地上の火に照らし出されて、それはとても不思議な光景だった。

（このまま行けば、街を出て行くこともできる　　）

下を見れば、兵士たちも特段に妨害しようとする様子を見せず。

ただ、呆然とこちらを見送っている。

……やがてそれも遠くなり、城壁の上を遙か越えて。

そして俺たちは、ゆっくりと地面へ降下していった。

着地して、しばらくはみんな無言だった。

「……なんだっただろうな、いまの」

「俺に聞かれてもなあ……」

「でも面白かったですー」

「」

まあ、ともあれ、いろいろと予定外の事故には遭ったが、なんとか当初の目的は達成できた。

「ともかく、さっさと行こうぜ。どっちに行けば死界から遠ざかれるんだ？」

「うーん、この方角ならたぶん、街から遠ざかればそれでいいはず

……あれ？」

「どうしたんです？」

「街が……街は、どこだ？」

「え？」

「街だよ！ さっきまでいた街が、どこにも見当たらない！」

「！？」

マキノに言われ、あわてて振り返ってみる。

あたり一面、荒野。

さっきまで感じていた人間の気配が、ここにはみじんも感じられない。

「な、まさか なにかの罠か！？」

『その、まさかだよ！』

「う、うわ！？」

「マキノ！？」

声をかける間すらなく。

マキノの足下から吹き出た黒い煙が、みるみるうちに彼を飲み込んでいった。

「ひ、うぐあーっ！」

悲鳴を上げて、マキノが人間でないものに変貌していく。

否。食われていく。

「嘘だろ……街から出たのに！？」

「馬鹿め。まだわからんか。おまえたちは街を出たのではない、追

い出されたのだということにな!」

例の黒騎士と同じ声が、魔物から響く。

「な、どうということだ?!」

「愚か者。街とは人間の領域の象徴。そこから出るといふ自殺行為をわざわざ選ぶ人間がいるとはな! なんと愚かなことだよ、ははは!」

「……………つ、おびき寄せられたのか!」

「ふふふ、実に危なかったよ。その娘に一度でも家に帰られると世界をリセットされてしまうのでね。私にとってもそれはいささか面倒だ。」

だから使える駒を総動員して、時系列まで歪めて都市の滅びを一時的に具現して追い出しにかかった。狙いどおりというわけだ!」
「へん、だがエフはてめえにゃ手出しできねえんだろ。どうするんだよ!?!」

「そうでもない。それはその世界のコアでね。この世界に人間が残っている限り私には手出しできないルールではあったが。」

世界から『街』の消えたこの場で、残るは一人。……………ふはは、そら、もらったぞ!」

「てめつ……………!」

「わ、わわ!?!」

黒い霧が吹き出し、みるみるうちにフリーを包み込む。

あつという間に 溶けるように、彼女の姿が消えた。

「ははははは! これ以て終わりだ、これで終わりだ! こんなに簡単に済むとは嬉しいぞ! わははははは!」

「ち、ちくしょう! でもエフは渡さねえぞ!」

「馬鹿め、この空間で貴様ごときになにができる!?! コアを食らったら、今度は現実にもどって貴様らを打ち滅ぼしてくれよう!

さあ、

……………

?

魔獣の動きが、止まった。

「こ、これは……!」

「あらー、どうしたんですか?」

「!?!」

地面に溶けていこうとした魔獣の身体に、フリーの手が添えられている。

それだけで。

魔獣はびくともできず、その動きを止めていた。

「ば、か、な　?!　貴様は、たしかにいま食らったはず」

「あはは、そんなはず不是吗!。彼女の一部分ならともかく、私が食べられるはずがないでしょう?」

「貴様、何者だ!?!」

「そうですねー、ナニモノと言われればよく呼ばれるのは『偽物』……ですかね?」

楽しそうにしゃべるフリー。どうも衣服の一部が溶かされたらしく、いつもの使用人の衣装じゃなくてもっと軽装の服を着ている。

ついでに言うと、笑い方もいつものじゃなくて、それはもうすっかり見慣れた邪悪さの

「.....センエイ?」

.....

「ぴん・ぽーん」

「ばばばば、バカな!?!」

うるたえる魔獣。あと俺。

「お、おまえ、なんでここに!?!」

「わはは。そんなの決まってるじゃないか。リツサくんの秘儀をちよつとパクっただけだろ?」

「パクったって」

ほんつとデタラメだなこいつ。

「ぐ、魔女めがあああつ……!!　この私を、謀ったとは……っ」

「やー楽しかったがね。ちよつと単純に引っかかりすぎ。ライくん

に気を取られすぎて使用人になりすましただけの私にも気づかないなんてな」

「くそ、ならばここはいったん退いて」

「あ、無理無理。退路は断ったよ」

「なにいい!？」

「おおかた、また支配済みの表層へ逃げ込もうとしてるんだろうけどね。この空間にいる限り、それはできないルールにさせてもらった」

「バカな！ 精神操作は貴様のスキルに存在しないはずだ。いったいなにを……」

「精神操作じゃないさ。こいつは混沌懐胎ミスアイデンティフィケーションと言ってね 2200

年も前に編み出された、最も太古の魔術の一だよ」

「ウバニヤット百八の奥義！」

魔獣が悲鳴のような声を出した。

「あり得ない！ あれは彷徨える魔王ワンドリング・デビルにのみ許された禁呪のはずだ！ 貴様、貴様ごとき人間が」

「そりゃ私だつて外じゃこんな術使えないさ。だがここは特別でね。本来私がこの世界の住人でないという立場がこの際は重要だ。

ま、そういう解説はいいや。もういい加減飽きてきたし、悪役にはご退場願おう」

「!」

「倒すならいまのうちだ。ライくん、とつとつこいつをたたきのめしちまおう!」

「お、おう!」
「くそ、人間があ、なめるなああ!」

ばん、と音がして、センエイの身体がちょっとだけはね飛ばされた。た。

すぐに、おつと、とか言ってセンエイは姿勢を立て直す のだが、その隙に魔物がこっちに襲いかかってくる。

だが、俺は不敵に笑った。

こいつに負ける気はしない。いままでだって、直接対決じゃ負け知らずなのだ。

「ま、そんじゃいままでの借りを返してやりますか　ね！」

「うぐ!?!」

ばしゅ、と飛び出した光の剣が魔物の肉を断ち、骨を焼く。

たまらず飛び退いた魔物に、

「そら！」

「ぎゃあああ！」

背後からセンエイの放つ神力が突き刺さり、魔物がじゅっじゅつと溶け出した。

「ぎ、ぎざまら……!!」

「ライくん、いまだ！」

「おうっ」

近寄り、

「ライナー・クラックフィールドの名において　くらえー！」

ばしゅっうっう、と白い光が魔物を薙ぐ。

「ぐ、ぎゃああああああああああああああ……!!」

「かくして悪神を装った死界の王は、哀れにも魔王の物まねに破れたのでありました　ちゃんちゃん」

「ぐ、はあ……っ」

今度こそ。

消えることもなく、魔獣は地に倒れ、息絶えた。

終わった。

なにもかも、これで終わったんだ。

センエイは得意げに胸を張り、

「さて、これでひとまずサリの救出という目的は完了したわけだ、
が
「

「が？」

「……なあ、ライくん」

「なんだよ」

「いったい我々は、どうやって現実世界に帰ればいいものなんだろうか」

「どうやってって……」

「……あれ？」

「聞いてないし、知らね」

「……君たち。実は案外チームワークが悪いな」

「い、いや、だって魔物を倒したら術は終わるもんだとばかり」

「バカたれ、んなわけがあるかつ。常態でも効く術なんだから終了条件は別にあるに決まってるだろっ」

「んなこと言われても気づかなかったんだからしよーがねーだろ！？」

「????？」

「……ああ、エフに不思議そうな目で見られてるし。」

「ていうか、いい年こいたオトナ二人が口げんかというのも実にかっこわるい。」

「はあ……やめた。バカとケンカしても疲れるだけだし」

「ああ、そうだな。ガキとケンカしてもムカつくだけだし」

「言ってる。で、どうするんだよこれから」

「そうだな。いろいろやるべきことはあるが、とりあえず街にもどるか？」

「もどるって どうやって」

「歩いてさ。ほら、あっち見る」

「あん？ うええ!？」

いきなり目の前に現れたでっかい城壁を見てのけぞり返る。

「魔物がいなくなったことで、街が復活したんだろ。時刻も昼に移動したみたいだし、城門も開いている。もどるにやもってこいの時間だ。」

さ、帰ろうか。 とりあえずは、仮初めの我が家へ」

センエイは、そう言って笑った。

「うわ、人通りも多い」

街はきれいに元通りになり、火事のあった家も痕跡すらなく直っている。

通りは活気にあふれ、あの死人たちの街が嘘みたいだ。

見とれていると、センエイがじろりとこちらを見た。

「ん、なんだよ？」

「ぼーっと観察するのはいいがね。なにか感じないのか？」

「なにかって……いや、特別にはなにも」

「そうか……」

「なにかあったって？」

「べつに。ただ、正規のルートで入ってきた君が、「入り口」だった場所にもどってくればなにか起こるだろうと思っただけだ」

「あ、そういう狙いか。」

んー、でもなにも感じないしなにも起こらねえな。これが脱出の手順ってわけじゃなさそうだ」

「あー、いらいらするな。なにか足りないんだろう……」
ぶつぶつ言う。

まあ、それはともかく。

「いいから、まずはエフを家まで送っていきこうぜ」

「お、そりゃナイスアイデアだ。ふふふ美少女ゲットだぜー」

「???」

「ええい、いかがわしい手つきでエフにさわるなばかっ」

「む。なんだよ急に保護者ぶりやがって。ちょっとくらいいいだろ」

「よくない。というか教育にいろいろ悪いからやめてくださいこの変態め」

「はいエフくん、じゃあおねーちゃんと一緒にうちへ帰ろうねー」

……聞いちゃいねえ。

「後でサリにぶん殴られても知らないぞ……」
「ん、なんか言ったか？」
「なんでもない。さっさと行こうぜ」
まあ、痛いのは俺じゃないし。

「さて、とりあえずはただいまってことで」

「サリ、グノー！」

「ふむ、これがエフくんの家か……。……」

「なんだよ？」

「美少女の家なのに、なんか殺風景だな。いかん」

「……おまえ、なにをたくらんでる？」

「んーまずはアレだな。フリルとレース。この部屋はレース分が足りない。心底足りない。うんとりあえずカーテンからだな」

「聞いちゃいねえってか待てコラ。おまえ勝手に人の家の装飾を」

「さーて次に取り出したるはこの小さなカバン。なんと容積拡張によつて大量の布と裁縫道具がしまい込まれてゴザイマスー。ほれ、エフくん拍手拍手ー」

「わ……」

ぱちぱちぱち。もうついていけません。

「はぁ……勝手にやっててくれ。俺は奥の部屋にいるからな」

「ほおう。ふふふ二人きりかあーよしよし」

「エフ、へんなことをされたらすぐ大声で俺を呼べよ」

「……（こくこく）」

「がーんっ！」

オーバーリアクションでショックを受けるセンエイは放っておいて、俺は自分にあてがわれた部屋へと向かった。

ばたん。

「……ふう」

息をついて、ベッドに座り込む。

どたばたした二日間だったが、わりと楽しかった。街なんて久しぶりだったし、ちゃんと目的を果たすことはできたし。

後は 帰るだけなんだけど。

「んー、どうやって帰ることができるのかなー」

口に出してみる。

すると。

「なんだよ。そんなことでうろうろしてたのか、おまえ」

背後から、声。

「おいおい、そんなことはないだろう。こっちは死活問題だぜ」

「ったってさ。にーちゃん、自分の意志でこっちに飛び込んで来たんだろ？」

「ああ、そうだけど」

「ならさあ。自分で『もう帰ろう』って思えば帰れるだろ。違うか？」

「んー……そうなんだけど」

「帰れないなら、未練があるってことだろ。要するにさ」

「そうだなあ……とりあえず、いくつか聞いてみたいことがあって、でも誰に聞けばいいのかわからなくてさ。正直困ってた」

振り返る。

そこに、マキノがいた。

「なんだい、そんなのその辺の通行人にでも聞けばいいじゃないか。どうせ全部おなじ人間なんだし」

「それはそれでなんか嫌な絵面だなあ……」

「なんだよ。わざわざ死人を呼び戻すよりはスマートだろ。まったくくしょうがないにーちゃんだな」

「死人ねえ。そういえば、おまえは結局死人なのか？」

「ん？ いや、まあ生きてはいるぜ。でも死んだってことにしても

いいかもなー。人生変わっちゃったしな」

「なんだか達観したようなことを言う。」

「ふうん。じゃあさ、おまえはこの世界のなかではなんなんだ？」

「なんかさ、最初からおまえは相手とか世界のことを全部知っていたみたいな気がして」

「そりゃちがうさ。大本の知識を参照する権利は相手がにぎってた。俺はただ、エフを守るための最善手を打つように仕組みただけだ。」

「あー、でもにーちゃんが謁見の間で喝破してからはちょっとだけ力がもどつてな。エフを連れて家にもどればいいっていうのはわかつたよ」

「それは……なぜ？」

「だってこれは現実のコピーだから。現実には、城に行った後はエフが家にもどることは一度もなかったんだし、そうなら時間が巻き戻るしかないだろ」

「……そういえば、あの魔物もそんなことを言っていた。」

「なのに、魔物のやつすげー無茶しやがってさ。対抗してにーちゃんが空飛んで逃げたもんだからぜんぶおじゃんになっちゃった。あれは参ったぜ」

「あれは……俺の力、なのか？」

「そうだよ。理屈は知らないけど、あんたにはそれをできる力がある。たぶん、現実に戻ってもちよっと訓練すれば使えるだろうさ」

断言する。

「……マキノが断言したってことは、サリが断言したってことだ。」

「そっか……なら、試してみようかな」

「頼むぜー。特にこれ以降、しばらくあいつは情緒不安定になるだろうからな。過保護にならない程度に守ってやってくれ」

「って結局ひとことみたいに言うのな。おまえ、ホントになんなんだよ？」

「俺は保護者さ。見りゃわかるだろ？ いつだって俺は保護する立場だったし、これからもそうだ。」

……つたく、俺も物好きだよなあ。死んだ後まで呼び出されるなんて思いもよらなかったぜ」

ぼやく。

あたりの光景が、急速にぼやけて白み始めた。

「終わりか。じゃあな。この二日、実際の俺は体験したことないくらいにぎやかで楽しかったぜ」

「そうだなー。……まだ聞きたいこと、あったんだけどさ」

「なんだよ。じゃあいまのうちに聞け。ここまで来たならもう引き返せねえぞ」

「いや、やめとくよ。あんまり聞くとサリが起きた後でなに言われるかわからんし」

「ふーん。……そっか。結局、あんたにとってあいつはサリなんだな」

「なんだよ。不満なのか？」

「いや、まさか。……俺にとってもそうだから、さ」
屈託なく、マキノは笑う。

「お別れだな。……ばいばいだ、にーちゃん」

「ああ。またな」

俺の言葉に、マキノはなにか言いたそうに口を開いたが
そこで、ぷつつりと世界が途切れた。

十日目：秘拳！ パンダ暗殺拳の巻

「ふん。で、これがその剣　　というわけか、シンよ」

「ああ。確認してくれ」

「確認するまでもないわ。剣に染みついた拭いがたい神鳴る呪塊、これこそ我が求めるものに相違ない」

愛おしそうに、老人　　グラーネルは剣にほおずりをした。

「……そうか。貴様が求めるのはそれだったな」

剣が本物か否かなど関係ない。

この老人が求めるのは、ただただ強力な「力」のみ。そこに加わる意味、名前、経歴など、彼にはなんの価値もない。

だが解せない。

「しかし貴様、これをどう使うつもりだ？」

「うん？　ああ、説明しておらんかったな」

機嫌よく老人は答える。

「この空間に張られた結界には気づいているな？　弟子よ」

「異様な対神力を感じはするが。……そうか、ならばこれは」

「左様。これが魔王の　　そして、我が奥義の正体よ。魔力は馬鹿食いするが、空間そのものを異界と化せる能力は純粹に貴重よな。

だがこれは所詮移動がかなわぬ設置物に過ぎん。そこで、もうひとつ世界を作り上げる必要があるわけだ。弟子よ」

「それは……魔王に、魔王を寄生させるつもりなのか」

「ふむ、物わかりがよいな。まあそういうことよ。次なる魔王を呼ぶためにはこの程度の呪が必要でな。

その満願も叶い　　こうして、いよいよ進撃の準備が整ったというわけよ」

「……進撃、だと？」

眉を跳ね上げる。

「なんだ？」

「初耳だ。貴様の目的は魔王を顕すことではなくなったのか、老グラーネル」

言われ、老人は不機嫌そうな顔をした。

「奇妙なことを言うな。確かに魔王という実在は貴重だが、これだけではなにもできん。こんなものは単体の神と一緒だ。

一体のみの化け物で世界を覆せるとは儂には思えんよ。だから神や大巨人は滅びたのであろう?」

「……その通りだが」

単体の強い生物は、単純な「数」によって打ち倒せるモノへと変わる。

たとえば。凡百の魔術師たちは悪竜に打ち勝つほどの力を持っていない。だがそんなモノでも1000人集まれば、ほとんどの竜は太刀打ちできないだろう。

そこに勝ち目はない。多くの人に害を成す存在は、同時に多くの人を敵に回すのだ。

例外があるとすれば。それは退治する価値のない無害なモノか、ただの神など比肩できないほど強力な存在かのどちらかしかない。

グラーネルの野心がどれほどのものかは知らないが、おそらく多くの人々にとって有害なものだろう。

である以上、この程度の戦力では足りない。それはわかるが……
「それで。結局、貴様のもくろみはなんだ」

「無論 始源の巨人」

「……………」

「合理的だろう? 要は支配できないなら一度滅ぼせばよい。その上で新たな世界を作り、今度は創世の神として君臨しよう。

幸い、道はかの愚かなフイーエン・ガステイトが切り開いてくれておる。守護者のおらん道など、こいつさえ居れば、」

「……………老いたな、師よ」

「? いま、なんと言った?」

「独り言だ。……そうか。想定外ではあったが、ならば特に止める理由もないな」

言つと、老人は意外そうに目を細めた。

「ふむ。……ま、敵対しないというならありがたいがな。」

正直、主がそれほどあっさり身を引くというのは予想しておらんかったのう」

「悠長な感想はよいが 交換条件のほうはどうなったのだ？ 今

更出せないと言つならこちらも引くわけにはいかなくなるぞ」

「そう殺気立つな。ほれ、主の求めていたのはこれじゃろう」

言葉と共に、青い宝石のような石が放られてくる。

それを手にとって、観察する。

「 真物だ。」

驚いたな、こんなものをどこで手に入れた」

「そいつは言えんよ。いや、悪意があるわけではなくてな。言えば

呪いのかかる契約になっておる故、言いたくても言えんだ」

「古くさい盟約だね。」

……まあいい。それでだいたいの出処はわかった」

言っただけ言つて、立ち去ろうと歩き出す。

「おい。本当にそのまま去る気か？ 儂の目的を捨て置く理由が理解できぬのだが」

「べつに。貴様が成功して世界を滅ぼすならばカイ・ホルサはそれを容認しよう。それだけのことだろう？」

「……む」

「成功すればそれでよし。失敗すれば、それは遠くから眺めて笑い物にするだけだ。」

僕に言わせればむしろ、関わる理由をこそ見いだせないね」

言つて、今度こそ本当に立ち去る。

相手も、それ以上声をかけてこなかった。

洞窟の外に出ると、すでに夜が明けていた。

「思いのほか、時間がかかってしまったな……一昼夜以上もの間、手こずらされたとはね」

独白する。

と。

「あれー？ 生きて出てきたんだ？」

「……ずいぶん不穏当な言葉だね、フレイア」

上を仰ぎ見る。

洞窟の入り口の上。岩の壁に、まるで壁の方向が下であるかのようにならんと、彼女は立っていた。

「だってさー、キミ、アレの正体には気づいたっしょ？ そしたらキミがあの子にそれをバラして、それでひと悶着あるかなーって期待してたのに」

「あの子っていうのは老グラネルのことか。……まあ、べつに教える義理もないからね」

「冷たいなあ。先代はわりとそういうおせっかいを焼く子だったのに。キミたち、一代ごとにけっこう人格変わるよね」

「僕たちは記憶以外は継承しないからね。当然だと思うけど」

「そうかなあ？ 記憶って人格の源でしょ？ 2000年クラスの
大記憶に繋がったら、大抵の人格は押し流されて潰れちゃうんじゃないの？」

「そんなひとは継承者になる前に潰れてるよ。でも、まあ」

押し流されていくという喩えは巧妙だ。

潰れてしまわなくても、大量の記憶が入ることによる影響は確実に受ける。

そうして摩耗し、継承者はだんだんと人間性を失っていく。

魂が、劣化していく。

「そういう君はどうなんだ、フレイア・テイミアス。君だって1500年もの記憶を持っているだろう」

「んー、忘れた」

「忘れた？」

「そうだよ。わたし、実は自分がどういう人だったのかよく覚えてないの。旦那と初めて会ったときのことさえ、なーんにも」

「……それは」

言葉を失う。

相手は脳天気そうに、

「脳容量を増やす魔術は知っているし、使ってもいいんだけどさー。正直そこまで必要ないよね。いらなと思った記憶なんて捨てちゃうし。」

だからわたしは、わたしが必要だと思ったことしか覚えてない。

実を言うとき。もうわたし、自分の本名も覚えていないんだよ。あっけらかんと言う。

「……正直、理解できないな。君の言に従えば、記憶こそ人格の源だろう。人格を継承できない長寿など、それは」

「それこそ余分な発想でしょ。どんな状況だろうとわたしはわたしだし、それに」

「それに？」

「そんな程度で消える人格なんて、時間が経てばすぐに風化してなくなるもん。そんなの意味ないよ。」

よいしょ

すた、と地面に着地。

「永遠を生きるってのはそういうことですよ。時間が経てば余分は消えて、純粋な己だけが残る。」

「キミだろうとわたしだろうと、それはおなじはずだけど」

「その余分を楽しむ者もいるようだが？」

「あー、あの子ね。あれは例外。」

ていうかあそこまでガンコだとソンケーしちゃうよね実際。彼女にはたぶん、永遠すらどうってことない苦痛なんだろうな」

憎まれ口みたいに言う。

「ま、そんな雑談はどうでもいいよね。」

……そろそろわたしは行くけど、止めないの？」

「君も老グラールネルのようなことを言うんだな。僕がなぜこれ以上君たちに介入すると思うのか、正直わからないんだが」

「なによ。裏切ったこと、けっこう後悔してるくせに」

「……いや。裏切ったことは後悔してないよ。それは君の勘違いだ」
事実。自分はカイ・ホルサとして、当たり前前の振る舞いをしたに過ぎない。奥義の知識を回収し蓄える仕事は、義務を超えて至上命令に近い。

だがその欺瞞を、相手は一瞬で看破した。

「でも後悔自体はしてるんでしょ。自分の中途半端に」

ああ。

「そうだね。できれば僕も、彼らとはカイ・ホルサではなく、シン・ツアイとして付き合っけていきたかった。それが、悔いといえば悔いだな」

「そんなのいまからでも遅くないと思うけどなー。どうせじーさんはすぐ死ぬと思うし」

「……なんだって？」

「あれ。気づいてなかったの？ うそ、キミってひよっとしてバカ？」

「 大変率直な感想をありがとう。で、どういことさ」

「んー、気づいてないなら教える義理はないなー。ってさっきカイ・ホルサってひとが言っていました、マル」

「……悪趣味だね。だいたい、君はなんでそれを教えてこないんだ。老グラールネルは一応君の雇い主だろう」

「え、なんで？」

「……………」

「だってわたし、契約とか交わしてないよ？ いちおー専業主婦だし、働く気もないし」

明らかに本気で、彼女は言い切った。

「では、君は」

「うん。なんかヤバそうなじーさんだから、いっしょにいれば強いのと戦えるかな? って。」

あ、そーいえば最初の戦闘前に魔法石とかもらったけど、あれってやっぱりプレゼントなのかな? わたし既婚者なのにねー困っちゃうなーあははは」

「たぶん、彼は働いてもらう前払いとか思っていたんじゃないかな」

「そなの? でもわたし、基本的に誰の頼みも聞かないひとだよ?」
「そうだね。」

次にこういうことがあったら、君のそばにいる人には忠告しておこう」

「うんうん。なんだかわからないけどそうするといいよ。」

さて、とりあえずわたしは殺しに行かなくちゃ」

「誰を? 君の行く先に、君が満足できるほどの猛者がいるとでも?」

「うーん、これは未確定情報なんだけどさー」

「ふむ」

「この前戦った魔女が言ってたんだよね、『サリ・ペステイの次はフレイア・テイミアスか』って。なんか気になるっしょ?」

だから、とりあえずそのサリって子の様子を見て、強そうだったら殺そうかなって。ふふふ、楽しみだなあ」

にへらと笑って、そして彼女は挑発するようにこっちを見た。

「ね、これでもまだ動かないの?」

「しつこいな。彼らと僕はもう関係ないし、それに」

「それに、なに?」

「……正直。君がサリに勝てるとは思えない。止める必要は感じないな」

相手は、ふうん、と気のない答え方をした後で。

「上等。」

今の言葉、後悔しないようにね。シン・ツアイ」

言い放って、その場からかき消えた。

「…………後悔、ね。」

後悔なら、いつだってしてるさ。2000年も前から「
つぶやく独白は、誰の耳にも届かなかった。」

さて、状況を整理しよう。

俺、ライナー・クラックフィールドはリツサの術でサリの内面世
界に入り、魔物をぶっ倒して、無事帰還した。

そう、帰還したので、意識は元の身体に戻った。眠っていたのが
目が覚めた状態、という感じだ。

それはいいんだが。

「……………」

なんだ、これ。

「ん〜ふふふふう…………らいにーちゃん…………ばおばお…………おいしい
よ…………あちよー…………」

「試練ですつ…………試練なんですつ…………うつつ…………すぴー」

「…………こおら…………ガキども…………寝るな…………ぐー」

「殿中…………殿中…………殿中…………で…………」

「……………」

「……………」

ハルカ、マイマイ、ペイ、トウト、グリート。

なんで俺は、このメンバーに添い寝されつつ寝ているんでしょう？
ふと、目を開けたまま寝ているハルカと目が合った。

「……………」

「……………」

「死体です」

「つーかやつぱり起きてるのか teme 工」

「いいえ。それはボブです」

「……………」

いかん。起きてるのはいいが会話が通じない。

とりあえず、みんなを起こさないようにそつと立ち上がる。

(ま、ともかく)

外に出て、話せるヤツを捜してみよう。

「ち、生きておったか」

「のっけからそれがよオイ」

廊下でばったり会ったのは、よりによってサフィートの親父だった。

「ふん。言いたくもなるわ。まったく、余計なことを吹き込みよつて……………」

「ん、なんの話だ？」

「あの小娘の話だっ」

「……………一応上司じゃないのかオマエ。聞かれたらまずくないか」

「ふん。知るか。もう知らん。知ったことが、ちくしょう」

うわーブチ切れる。

「べつにいいだろ。結果的にみんな無事だったんだし」

「そういう問題ではなからう!? 聖職者が魔物に殺される危険を冒すようなこと、それ自体が問題なのだっ！」

それを、それをなあ! 情にほだされた程度で簡単に禁戒を破るから、あの女は左遷されるといふのだ、ちくしょうめ!」

「……………あー」

そついや左遷されてたんだっけ、リツサ。

まあ、器用に世渡りできるタイプには思えないから、ある意味当然だろっけど。

「ま、しょうがないだろ。アレは性分だろうし、たぶん死ぬまで直

らねえよ」

「しょうがなくないわっ！ 付き合っつて左遷されなければならぬ私の身にもなってみろ！」

「……いや、そもそもなんでおっさんが付き合っつんだよ。一文の得にもならないならさっさと手え切ればいいじゃん」

「馬鹿者、あのような愚行を繰り返されて、口出しせずになどいられるものかっ。

そ、それが……なぜか、いつのまにか私まであの女の身内と思われてしまっつて　！」

地団駄を踏む。

……それで一緒になっつて左遷されたのか、こいつは。

「そっか。いいヤツなんだな、あんた」

「はッ、たわごとを吐くな。虫酸が走るわ」

……言葉は悪いけど。

こいつは、他人が進んで損をしようとするのを見ると、我慢できなくなるタチなのだろう。

なまじっか功利的な思考をしているから、そういう思考から見て合理的じゃない相手を指導してやりたくなるのだ。

その欲求がじつは自分の合理性と背反していることには……たぶんコイツは、死ぬまで気づかないんだろうな。うん。

「まーいいや。俺には関係ない話だし。でもたぶんリッサはこれからもあのままだぞ？」

「……っ、貴様に言われなくともわかっておるわい。くそ」

吐き捨てて去っつていく。

……まあ、なんだ。

(いい年した中年男がいじけてる姿っつても、なんか、妙にわびしいなあ)

という感想は、あえて言わないでおこう。聞かれたら殴られそうだし。

「おや、お目覚めですか」

「よお」

今度はドッソと出会い、あいさつをかわす。

「つか妙におっさんとよく会うな」。などと思いつつ、相手を見上げた。

「……相変わらず、でけえ。」

前は単に食われないか心配だったが、ある程度落ち着いて見てもこのガタイは驚嘆を通り越してもはや面白おかしい。

「苛烈な戦い、ご苦労様でした」

「苛烈……かな？」

「はい。精神を舞台とした、非常に駆け引きの難しい戦いであつたと聞きました。」

それを、手探りながら見事な戦術で勝利に導いたのがあなたであると」

「そこまで大層なことをしたわけでもないんだけどな」

俺がやったことと言えば、腑抜けに活入れてやったことくらいか。なににせよ助かりました。正直に言えば、暴れ出した際の対処の準備はしていたのですが」

「対処つて……」

「はい。あの部屋の付近に待機し、手遅れになつた時点で彼女を斬る手はずでした」

「そりゃ無駄足だったな」

「はい。無駄になつてよかつた。やむを得ぬとはいえ、知り合いの形をしたものを敵に回したくはないものです」

「あー、ちよつと試みに聞くんだけど」

「なにか」

「……仮に失敗してサリが暴れ出したとして、あんだ、対処できた？」

俺の言葉に、気負いもせずドッソはうなずいた。

「無論。あの程度の相手であれば、どうとでもなったでしょう」

「……………あ、そう」

「それも、化け物が操っていければの話ですが。」

「いまの彼女が相手であれば、ひどく苦戦するでしょうな」

「違いはあるのか？」

「ええ。」

「技能や能力は真似できても、思想・精神で格段に差が出ます故」

「そんなもんかね。」

「で、そのサリはどこにいるんだ？」

「先ほどまでは、上の岩場が上がっていたようではありましたが」

「その後は、存じ上げません」

「さんきゅ。じゃ、ちよつと行ってくる」

「ええ。では失礼を」

岩巨人の住居の上、岩棚になっているこの場所に来るのは、これで二度目になる。

一度目は サリを助けるために、聖地を借りに来たとき。

あのときはあんまり周囲を眺めているひまはなかったが、こうして見るとここからの景色はやはり壮観だった。

(地の果てまで森が続いているみたいだ……………)

この前、地図を見せてもらったときに知ったのだが、ここは『くらやみ森』の東西のちよつど中間地点に当たる場所らしい。

人呼んでケセイの岩壁。『くらやみ森』を東西に分断する、山脈というにはちよつと背の低い、高台が続く場所。

その岩壁の北端付近、岩壁に寄り添うようにして突き出た岩を掘り、住居としているのがこの住人らしい。

もう少し北に行けば、ちよつと険しいものの東西を抜ける道があるという話なのだが

さて。

「……で、おまえ、なにやっつてんだ」

いい加減目をそらすのはやめて、俺はべたーと地面にうつぶせに大の字になっているセンエイに声をかけた。

「……………」

「ん？」

「不条理だ……………」

「なにが」

「なあぜだああああ！？」

「うわあああ？！」

がしっ！ とわけもわからずしがみつかれて悲鳴を上げる。

「なぜだ、なぜなんだサリい！ どーして私に足払いをかけて蹴転がしてつま先で浮かせた上でなんだかよくわからない足技で地面に打ち倒す！？」

「おおお落ち着け。ていうかそんな事細かなわりにはさっぱり状況を理解できない説明をされても」

「うるさい黙れ。せつかく、劇的な逆転勝利を演出すべく苦勞して最後の最後にかっこよく決めたというのになんでサリは、サリはああ！」

「……………そんなこと狙ってやがったのか teme 工」

どつりでタイミングよく本性を現したわけだ。

「くそ、なぜだ！？ まずは精神中のエフくんを籠絡すべくあの手この手で攻めていたのにいきなり世界の外に放り出されるし。」

それでしようがなくサリを探したら出会い頭に足蹴だぞ足蹴！

いやあれは足蹴なんていう単純攻撃じゃなかったがニューアンスは伝わるだろうええ！？」

「だから落ち着けつての。つーかおまえ、エフになにをした？」

「んんー、まだあんまり触ってないうちに放り出されたからなあ」

「つーかそれが原因に決まってるじゃねえかバカたれ」

「なぜ！？ いやだつてほらそれはカラダとカラダのスキンシップというか、ともかく相手をキモチヨクさせてあげたいという一心か

「らですね、」

「普通に気持ち悪いだろ。殺されなかっただけマシってレベルか？」

「うっうっうっうっ」

「ほかりっ。」

「いてて、なんだよっ」

「うっうっ、うるさい、おまえが悪い！」

「なんでだよっ!？」

「ふん、決まっているだろうっ、そこにライくんがいるからだっ」

「理由になってねー!」

「じたばた暴れ回る。」

「く、この、このっ」

「だー、やめろやめろ、痛いっっの!」

「ふ、ふふふふ、いまならサリも見えないし目撃者もいないなあ。

「殺っっちゃおうかなあーふふふふ」

「やめれー!」

「なんとかして相手をこっちから突き放す。」

「……ったく、ホントどーしよーもねーバカだなおまえ」

「ふん、そのバカにまんまと騙された大バカはこの誰だったかね」

「しゃーねーだろ。いくらなんでもあのフリーがおまえだったなん

「て気付いけねーっての」

「……ん？」

「なんか、いまこいつの表情が凍ったような。」

「おい、いまなんつった」

「え？ だからおまえだって気付くのは無理だったって」

「その前だその前」

「あー、どーしよーもねーバカだよっ?」

「戻りすぎ! つーかなんでそういうムカつくところを引っ張って

「くる!？」

「フリーがおまえじゃないって話？」

「それだ! なんて君がその固有名詞を知っている？」

「……いや、だっておまえ、それ自分で名乗ったじゃん」
「んなわけがあるか！ フリイったら明らかにバスカラ言語系の人名だろうが！」

私は偽名を使うならいつだって、地方に合った偽名を選ぶ！ だから今回だってラスローというカルメ・エハの人名をだな……！」
「そんなこと言っても、俺はちゃんとフリイって聞いたぞ。言い間違えたんじゃないか？」

「だーかーらー、そんなはずがないっつって……」
沈黙。

「おい？」

「やられた。精神世界ってのはそういうことが」

「あーそっか。つまり実際しゃべってるわけじゃなくて考えを伝えているだけだもんな。だから偽名は名乗れない、と」

「……………！」

「すつ。」

「いっ……てー！ テメ、いま手加減しなかっただろ！？」

「うるさいうるさいうるさい！ き、君は普段アホなのにどうしてこういう嫌な時だけ物わかりがよくなるんだバカもの！？」

「しらねーよ！ つーかポカやったおまえが悪いんだろうが！」

「知るか！ あーもう気分悪い！ 部屋に帰って寝る！」

宣言して、センエイはさっさと下に引っ込んでいってしまった。

「つたく、なんなんだよ……」

寝っ転がる。

……空は青い。

(考えてみりゃ、こつやってゆっくり空を見るのも久しぶりだなあ) いや、ゆっくり岩天井を見ることは多かったけど。

昔は路上で寝ることも多かったから、こついう光景はなんとなく郷愁を感じてしまう。

(んー、こついうところで昼寝、っていうのも悪くないんだけど……)

サリを探してたんじゃなかったっけ。

まあ、さっきのセンエイの様子でだいたいの状況はわかったが、やっぱり自分の目で完治したことを確認しないと気が済まない。

「じゃ、ちょっと行ってみようかねー」

つぶやいて、俺は立ちあが

瞬間、どごうん！ という轟音が大地を揺るがした。

「うおわあっ!?!」

じじじ地面が揺れてる揺れてる！ なんだなんだなんだ!?!

見ると、岩棚の奥、高台の森につながっているところのあたりから、ぷすぷすと激しい煙が上がっている。

山火事の心配まではなさそうだが、それにしても

(こんなことをやるバカは、そう多くは……うげ)

予感的中。

バカげたやり方で現れたバカ フレイア・テイミアスは、俺を見るなりにつこり笑って、あるうことかこんなことを言った。

「やー久しぶり。殺しに来たよー」

ずどおん、と、凄い音がした。

(おー、ハデに揺れてる)

まあ、気になるほどじゃない。この岩は頑丈そうなので、この程度の振動では崩れないだろうし。

それに、いま通路の向こうから走ってくる影を見れば、もうその話は解決したも同然だった。

あつという間に影は自分とすれ違う。

「ライは?」

「上」

交わした言葉は、ただそれだけ。

振り向くと、もうそこに相手はいない。

(せっかちなことだね、まったく)

つぶやいて、そのまま歩き続ける。

こっちはこっちで、やる準備がある。

そのためには、けっこ急がなければならないはずだった。

呼び出した光の剣を持って、思い切りよく振り回す。

「うらあああ！」

「ふふーん、甘い」

「ぐえ！」

どかんと吹っ飛ばされて転倒。

が、すぐ立ち上がる。

「ててて、いってえなこのやる……」

「……むう。思ったより強くなってる」

「ん？」

起きあがると、フレイアは不思議なことに動きを止めていた。

「むー、こっになるとちょっと、ここで殺しちゃうのももったいない

かなー」

「つーかテメエ、本気でなにしに来たんだ？」

「なにしにっていうか、わたしはいつもおなじ理由で行動している

はずだけど」

「……どんな理由だよ」

「ほら、よく言っじゃない。えーとえーと、俺より強いヤツを皆殺

しっ」

「言わねえ。ていうかどこの習俗だソレは」

「そうかなー？ でもまあいいや。ていうことでとりあえず殺すよー」

「さっきもつたいたいとか言ってたかったか？」

「ん、忘れた」

「やっぱバカだる teme ！」

「ふふん」

なぜか誇らしげに、フレイア。

「なんだよ？」

「たぶん援軍のために時間稼ぎしているつもりなんだろうーけど、この前いたレベルの連中が束になっても、わたしは止められないよ？」

「そりゃそーだな」

「ふうん、理解はしてるんだ。それでも諦めない、と……」

「あり？」

フレイアが固まる。

……気配とか、そういうものは感じなかったけど。なんとなく。俺はなにが起こったのかがわかった。

「よお。ずいぶん早かったな」

「そうね」

後ろから、聞き慣れた声。

魔女、サリ・ペステイは、音すらなくその場に立っていた。

「うそ。いつ出てきたのか、わからなかった」

フレイアが絶句する。……あ、やっぱこの芸、本職から見てもびつくりなんだ。

「あなたがサリ・ペステイ？」

「いまは、そう呼ばれている」

「ふうん。……で、装備、取ってきたら？」

「……は？」

「慌てて来たんでしょ？ たぶん魔技手工エンチャンターと見たけど、その分じゃ全力を出せる状態にはないんじゃないの？」

言われてサリを見る。

見た目、前と変わっているところはなさそうだけど……

「必要ない。あなただってベストじゃないでしょう、フレイア・テイミアス」

「あなたはそれでも勝てると思ってここに来たし、わたしも勝てると思ったからここに来た。

それが平等である以上、これ以上の駆け引きは不要。……相棒を出しなさい、フレイア。早急に早々に、決着をつけましょう」

呆然としたフレイアの顔が、やがて怒りに染まる。

「……なめられたものだわ、わたしも。いい加減、我慢の限界に来たみたい」

途端。

「うわ?!」

ずぶ……と、腰まで沼に浸かったような、嫌な感覚があった。

それほど濃い 物理的圧迫すら伴う、殺意のスープ。

「もう引き返せない。もう戻れない。完全召喚なんてずいぶん久しぶりだなあ。ふふふ。

さあ、出ておいで旦那！ 仕事の時間だよ！」

脳天が白くなるような、突き抜けた衝撃。

そして その、不気味な獣が、場に姿を顕した。

「……………」

「……………」

えーと。

いや、その。

殺意は変わらず濃厚。相手がすげー力量の持ち主だったこともわかる。

だが……………」

「……………パンダ？」

「ふふふ、どおだあつ！ 超かっこいいでしょーわたしの旦那！」「
フレリアさんおおはしゃぎ。」

俺はとりあえず、そのパンダ　パンダ？　を見た。
まず、微妙に浮いている。どういう原理か知らないが、このパン
ダは宙に浮けるタイプの生物らしい。

次に、でかい。ドッソよりも二回りくらいでかい。二足歩行し
ているからでもあるが、俺の身長と比較するとたぶん2倍と3倍の
間くらいってのは十分でかい。

そして目つきが悪い。態度も悪そうだ。

「……かっこいいか？」

「なによーかっこいいじゃないぶーぶー。そっちの子ならわかるで
しょー？」

振られたサリは、迷いもせず即答。

「なんか、おっさんくさい」

「がーんっ！」

痛いところをつかれてショックを受けるフレリア。

……あー、たしかにこいつぁおっさんだわ。

「ななななななよう。べつにおっさんでもいいじゃないかっこいい
んだし。ていうかかっこいいことに同意してはくれないの？」

「ライのほうがマシ」

「全否定されたー！？」

「待てやコラ」

いまの会話の流れ、微妙に納得いかなかったんですけど。

うつうつと精神的ダメージを深く負ったフレリアは、やがて狂気に
染まった顔でつぶやいた。

「ふふふふ、そう。いいわよ、旦那をかっこいいと思わないヤツは、
みーんな皆殺しにしちゃうんだから」

「おい、サリ。おまえがあんまり追いつめるからあいつ、アッチ側
に行っちゃまったぞ」

「それは勘違いね、ライ。」

あれは、最初からアツチ側の人間よ」

「……あ、そう」

俺は、なんだか手持ち無沙汰風味に立っているパンダを見た。

「苦労してそうだな、アンタ」

すると、

『……是非もない。我は我が仕事を果たすのみ』

「うお、しゃべった!？」

ていうか、しゃべれたことより返答が返ってきたことのほうが意外だった。

サリは、少しだけ眉を寄せて、

「いまのは音じゃない。音と感じるほど濃密な殺気を制御して、音を聞いていると錯覚させた……?」

『勘がよいな、人間の戦士よ。』

我は人語を発音する喉を保有して居らぬ故、このような無粋な通信を用いざるを得ぬ。許せ』

しかも礼儀正しかった。

(シヨックだ……)

『その、非礼の詫び、というわけでもないが』

パンダは、かぎ爪のついた手をゆつくりと前に上げた。

『全力で。我が秘奥、熊猫殺神拳^{パンダ}の極意をお見せしよう』

『おいサリ、あれ、本格的にやばそうだぞ』

「まともにやり合えば負ける。召喚者をつぶすわ。わたしがフレイアを狙うからライはヴォルドをお願い。足止めに専念して」

「よし、任せろ!」

「ふん、なめてくれちゃ困るわね。召喚で膨大な魔力を失ったけど、まだまだそう簡単には負けないわよー!」

『……参る!』

「「おおおおおー!」「」

「さて、このあたりでいいかな、っと」

「なにがですか、腐れ魔女」

「うお！？ いつの間に背後に！？」

ジロロの声に、思わず叫ぶ。

「不審な動きをしているからと追いかけてみれば 地上まで来て、なにをしようとしているのですか。センエイ・ヴォルテツカ」

「あん？ いやまあ、ちよつとな。

ていうか、なんか上のほうで爆発が連打してるが、そっちは放置していいのかい？」

「まあ、そのへんはガルヴォーンの君あたりに任せています。深刻になったら出て行くでしょう。」

で、さっきの質問に戻りますが

「ここでなにをしようとしているか、だったな。

なに、単純なことさ。ちよつと上の戦闘を強制的に終わらす仕掛けをね」

「……なにを呼び込むつもりですか？」

「ヤバいものさ。」

たぶん世界で2番目に強い、怪物中の怪物だ。あんたの身内にも、手を出すなと忠告しておいたほうがいいぞ」

「……………できれば、呼ばないでもらいたいのですが。そんなの」

「仕方ないだろ？ フレイア・テイミアスとサリ・ペステイの殺し合いだぞ。生半可なアクシデントじゃ止まらない。

私だつてけつこう苦労してるんだ。これ以上の解決策が見当たらないんで、やむを得ん」

「確認しておきますが、それは集落に被害を与えないものなのですね？」

「下手に触れなければな。」

というか、だから外に出てるんだっての。洞窟の中でやったらさすがに安全は保証しねーぞ」

「……ふう。わかりました。」

本来ならキスイさまの許可を得て欲しいところですが、この場合はラ・ジロロが特別に許可しましょう」

「ああ。事後にキスイくんにはあいさつに行くよ」

「それは却下。会わせません」

「なんで!?!」

「推して知るべし。というかあの魔女にも悪戯の挙げ句に嫌われたようですな、あなた。心底変態ですね」

「ばばば馬鹿を言うな。嫌われてなんかないぞ蹴られたただけだっ」

「……タフな精神してますね。迷惑な」

「うるせえ。」

つと、じゃあそろそろやるぞ。真儀、解放……つと」

ぴん、となにかを弾いたような音が、あたりに響いた。

「終わり終わり。さ、逃げるぞ。この場にいたら殺される」

「はいはい。」

……これでよかったのかしらね、本当に」

「ん……」

ふと、顔を上げる。

なつかしいものを見つけた気がして、自然と笑みがこぼれた。

……このあたりかと思つてたけど、そつちなんだ。

ずつと探していたものを見つけ、ちよつと得意になる。

喜びと、そしてちよつとだけ、不思議な悲しみがあつた。

……へんなの。

くすくす笑って、わたしは目を上に向ける。
ようやく、あのひとに会える。

あのひとに会って、それでわたしは

「……あれ」

会って、なにをするんだっけ。

思い出そうとするが、なかなかうまくいかない。なぜかその部分
が、記憶からぼっかり抜け落ちたみたいだ。

「……あれ。」

「あ、そっか」

ぼん。手をたたく。

会ったら、殺さないといけないんだっけ。

迷いが晴れてキモチイイ。

得意げになって、わたしはいつもよりほんの少し大きく、力を使
おうと決めた。

『 レッサー・散打^{シヨット}！ 』

声と共に左腕を振るヴォルドの、その姿勢を見た瞬間に横っ飛び。
直後、避けた空間をなにかが横切り、かすめて通り過ぎた。

「くそ、なんだこの飛び道具!？」

『 左のレッサーは広がり打ち抜く凶器。』

そして、右のジャイアントは一撃、打ち貫く魔弾!』

「!？」

やばい鬼気を感じて、とっさに構える。

『 ライナー・クラックフィールドの名において いけえ!』

『 ジャイアント・砲^{カノン}!』

俺の剣から飛び出した光の波動と、ヴォルドの拳から放たれた衝

撃波がぶつかり　そして、あっさり砕ける光の波動。

「うげ!？」

あわててかわしたその横をすごい勢いで飛び、はるか遠くに着弾して爆裂。

……うわあ。滅茶苦茶だこのパンダ。

『ほう。わずかとはいえ威力を削がれたか。』

だがこれならどうだ!？」

言つと同時に、パンダが華麗に宙を舞った。

「なにい!？」

『ふはははは、熊猫空中殺法72の奥義の1！』

神の

「う、うわー!？」

「ライ、援護する!」

ひゅん、と横から光の塊がパンダの目に飛んでいく。

だがそれには一切構わず、

『フィスト手塊!』

どかん!　どん!　ど、ばしん!

打ち降ろされる威力の塊を、かわし、捌き、避け、飛び、かろうじて避けきる。

(　さ、サリが援護してくれたから、なんとか避けられたけど) 危なかった。すげー怖い。

ちなみに横のほうでは、サリとフレリアがすごいスピードで打ち合っていたりする。

さつきからこちらを援護しつつ、目にも止まらぬ速度で斬り合うサリもすごいが、応戦するフレリアもすごい。

(くそ、普通人は俺だけかよ!)

『見事。避けきるとはな。』

だが、まだ我が奥義は71個あるぞ!？」

「か、勘弁してくれー!」

泣き言を言いながらなんとか剣を構えた、そのとき。

ずーん……という振動が、遠くから響いてきた。

「ん、なんだ？」

『これは 何事だ？』

ヴォルドも、異常を察して攻撃を止める。

なんか、地面の底からなにかがやってくるような……

次の瞬間、ものすごい轟音に俺は吹っ飛ばされた。

「だああああ！？」

なにが起こったか、最初はわからなかった。

かろうじて、暴力的な音がやってきたほうに顔を向けると、そこに信じられないものがあった。

島ひとつぶんくらいあろうかという氷が、地面を突き破って空へと伸びていた。

ぽかーん。

ばかみたいに口を開けて、絶句する。

(えーと……なにが……起きて……?)

「な、な、な……」

フレイアが、わなわなと口を開いた。

「なんてことしてくれるのよ!?」 スノウ・ホワイト白雪なんて誰が呼んだの!?

「 たぶん、センエイが動いたのね」

「センエイが？」

サリに尋ねる。

「センエイが、シンの真似をした。夢幻刀儀のまねごとで、彼女

スノウ・ホワイト白雪ルチアを呼び寄せるために」

「ばばば、馬鹿言わないでよー！」

アレすごい厄介なのよ!? コキョートス氷雪原野の支配者だけあって、殺さ

れたら即、転生の輪に送られちゃうんだから！ 一歩間違うと復活できなくなるんだからね、それわかっているの!?

「それはそちらの都合。」

来るまであと少し。まだやり合いましよ、フレイア・テイミアス」

「じよ、冗談じゃない！ 旦那、逃げるよ！ サポートお願い！」
『承知！』

「逃がすか……！」

「あ、あ、え……！？」

おたおたしているうちに。

フレイアはその場を去り、それを追ってサリも姿を消した。

後に取り残された俺は、ぽかーんとその場に取り残されるのみ。

「……えっと。」

なにが起こったの？」

つぶやいた、その直後。

ものすごい氷の塊が、雨のように降ってきた。

「う、うわわわわわわ！？」

避けるとかそういう次元じゃない。とりあえず伏せて頭をかばう。めちやくちやな量の氷が、あたりを蹂躪し尽くしていく。

もうなにがなんだかわからないが、ともかくがんばって氷の来た方向を見て、

「あ」

瞬間、死を覚悟した。

それは、そういうもの。

宙に浮かぶ少女は、見たものに「ああ、これは死ぬな」と思わせるだけのなにかを備えていた。

静かに、そのときを待つ。

気がついたら、周囲に氷が降ってくることは、なくなっていた。

彼女は、俺を静かに見下ろして。

「。

あれ？」

こくんっ、と、首をかしげた。

「あ、えっと……」

すいません。人違いでした」

ぺこり、と一礼して。

そして少女は、ふらふらと宙をただよいながら、遠くへ消えていった。

……

「あー……」

結局、なに？」

答えるひとは、誰もいなかった。

なお。

後で聞いたところ、案の定サリはフレイアを逃してしまったそう
な。

……ま、助かっただけいいか。

十一日目（1）：悪党、戦争に巻き込まれる

「ひ、ひ、はひ……！」

ものすごい振動の中で、老人が奇声を上げている。
不愉快だ。

そして、愉快でもある。

本来、自分の前にこの種の醜い生き物は存在自体すら許さぬのだが、醜い生物の醜態を観察するのもたまには悪くない。

「お、お、おまえ、おまえは、一体、何者だあああああ！？」

面白いほどうるたえて老人が叫ぶ。

「そう、驚くこともあるまい？」

お前が我を呼んだのであろう？」

「だ、誰が貴様なぞを呼ぶか！ 儂が呼んだのは、もつと、」

「もつと古ぼけた、役立たずのでかい塊だったようだな。」

まあ、魔王とはいえ

嘆息。

「知界年代からあれだけ経っていると神と一緒だな。つまらぬ。

……まあ、味は悪くなかった」

「き、貴様あ、何者だ！？」

「同じ問いを何度も繰り返すな、愚図めが」

罵倒する。

もつとも、彼の動揺も無理はない。

用意していた召喚を邪魔された　これはまあいいとしても。

ここは彼のアジトだ。当然、侵入者に対しては万全な備えをしている。
ある。

幾重にも張り巡らされた嚴重な魔術トラップ。それは、特に神格を武器とする神の眷属に対して強力な効果を発揮するものだ。

それを

「全防威の同時発動を、いともたやすく打ち破っただ！？」　あり

得ぬ！」

「……ふ」

ほほえましい言葉に、笑みがこぼれる。

なるほど、カイ・ホルサも愚弄しよう。あり得ぬ法則である魔道を操る者が「あり得ぬ」とは、なんとも滑稽だ。

「まあ、そう悲観することもあるまい。ねずみ捕りとしてはそこそこ優秀な罠であった。

ただ 惜しむらくは。ねずみ捕りでは竜の尾は捉えられぬのだよ。魔術師」

「き……！」

「しかし見事な花火ではあった。思わず我としても、褒美をくれてやりたいと思うものだ」

「褒美だと？」

「ああ。復活の祝いも兼ねてな。本来は名のある戦士にしか見せぬ技だが」

言い終える前に、老人は背を向けてこちらから逃げ出した。

「無駄なことを……そら！」

声と共に、光でできたいくつもの腕が老人の行く手を塞いだ。

「ひ……！」

「見せてやろう。数多の戦士どもを葬った、必殺の一撃をな！」

轟、と周囲の空気がうなり、そして。

ぱしゅ、と小さな音を立てて、老人の姿がかき消えた。

「……む」

急速に、興が醒めていく。

「打撃を受けると同時に発動し、転移して逃げる魔術か。

つまり小細工だ。そんなものが通用すると思ったか」

おそらく転移した先には、まっふたつになった老人の死体が転がっているだろう。

だが死体を確認できなかったという不快さが、どうにも鼻につく。「つまらん、つまらん。ああ、久々に戦士達の赤い血が見たいもの

だ

「独白して、そうしてふと気づく。」

「……そう。あるいは彼らなら。」

「そして、彼らには殺されるべき正当な理由がある。」

「ライナー・クラックフィールド……そして、その一味ども。そうだな。それがよい」

「にやりと笑って。」

「そして、彼は進撃を開始した。」

『は？』

「声が唱和する。」

「岩巨人の里の食堂である。久々に全員集まって食事でも、ということになったのだが、その最中にとんでもないことを言い出したヤツがいたのだ。」

「おかげでみんな、一様に『は？』という顔をして固まっている。というか、

「……なんであんたまで固まってるんだよ、サフィートのおっさん」
「うるさいぞ小僧。聞いていなかったからに決まっておろ。」

「発言の趣旨を伺ってよろしいですか、スタージン神官」

「勿論でございます」

「テンの言葉に恭しく一例して、そいつ　スタージンは説明を始めた。」

「よろしいですか。まず、サリ・ペステイ様は魔物にとりつかれて過ごすという、隠修士の修行中のような状態に数年もの間身を置かれていたわけです」

「まあ、元に戻ったけどな」

「左様。ライナー様のご活躍、流石でございました。

それで、問題はその後です。修行をこなされたサリ様は、当然のようにその結果を身につけられておられるのです」

「結果？」

「簡単に言えば、サリ様は聖者としての資格を得た、ということですよ」

「げ。」

「サリが……聖者？」

「聖者というのは語弊がありますな。サリ様の神格はすでに人の域にはありませぬ故、亜神とお呼びするのが妥当かと」

「どうなんだ、キスイ？」

「へ？ あ、えとその、」

「確かに神格は高いね。5級の上の方くらいかな」

いきなり話を振られてどもるキスイに代わって、センエイが言う。

「そうなんだ。へえ」

「……むしろ、なんで君はこんな莫大な神力に気づかないんだ？」

ほとんど視覚できるほどの神秘だろうに」

「んなこと言っただって、わからないものはしょうがないだろ。つかサリの雰囲気の前と変わってるわけでもないし」

言つと、今度こそサリを除く全員があんぐりと口を開けて俺を見た。

「な、なんだよ」

「……なんと表現するべきか。つくづく君は大物なんだな、ライくん」

「それは暗にバカだと言っただけかい？」

「うん」

「即答！？」

「ははは、まあまあ。……さて、本題に戻りますが」

こほん、と咳払いをして、スタージンが続けた。

「ともかく、生存しておられる亜神というのは非常に貴重であります

して、手前方といたしましても相応の処遇をしたい、と考えた次第です」

「それで、ファトキアに連れて行く　と？」

「左様です。」

聖者としての正式な認定を行えば、以後なにをするにしてもサリ様には都合がよろしいでしょうし」

「俺は反対だぜ」

言ったのは、バグルルだった。

柄にもなく、真剣な顔でサリを見ている。

だらーつと聞くともなしに聞いている感じだったコゴネルが、それを聞いて身体を起こした。

「なんでだよ？」

「いや、ていうかお前も反対しろよコゴネル。理由はわかるだろ」

「だからなんだよ。いいじゃん、あそこは金払いだけはいいから待遇は悪くないし」

「バカ野郎、そういう安易な気持ちでホイホイ近寄るモンじゃねえだろ！　プライド持てプライド！」

「それはサリに言えよ……」

迷惑そうな顔で、コゴネル。

テンがほがらかに笑って、

「ほほ、言いたいことはわかりますよ。」

つまり、ファトキア側に付いたと周知されるのがまずい、と言いたいのですね」

「む、まあ……それもあるけどよ」

「？　他になにが？」

「ふむ。　バグルル。あなたは、サリがそういう政争に巻き込まれること自体に我慢がならないのですか？」

「おう、そうだそうだ。それぞれ。ハル力の言い方が正解」

びし、とハル力を指さして、バグルル。

コゴネルはため息をついて、

「……なんで他人に自分の感情を説明してもらってんだ、バカ」

「いやー、いい言葉が思いつかなくてな。つい」

「まあ、あんたがそういうの嫌いなのは知ってるけどよ。それをサリに押しつけるのはどうなんだ？」

「いや、だからだな」

「あーすまん、さつきから話の展開について行けん
割り込む。」

こういうとき、神話とか知らないと困るんだなーとつくづく思っている」と、

「あ、あの、すみません。わたしもなんですけど……」

「あたしもあたしも！ もう、オトナたちで勝手に盛り上がらない
でよねっ」

「さんかく」

「……………」

案外多くの人間が同じ立場だったらしい。

キスイやマイマイもわからないってことは、アレだ。いわゆる大
人の事情ってやつか？

ペイがぼりぼり頭をかきながら、

「俺もよくわかんねーな。ファトキア側って、ファトキアの敵側が
いるってのかい？」

「あなたがそれを知らないのは勉強不足だと思いますがね、ペイ」

「あーあー悪かったよ。で、とつとと説明してくれよクソじじい。
どうせ説明したいんだろ？」

「ほほ、まあいいでしょう。ちょうどおいしい頃合いだと思ってお
りましたし」

ぼん、とテンは手をたたいた。

「さて、まずファトキアですが、諸君はファトキアとはどういう場
所だと思っておられますかな？ たとえば、ライ殿はどうですかな」

「えっと、昔は統一帝国の都だったんだよな？」

「そうですね。他には？」

「ええと、たしか法皇がいるって聞いたけど」

「左様です。神話の時代が終わってから脈々と続く神殿、その中心に当たる箇所がファトキアですな」

「……中心、なんですか？」

「みんなが一斉にリツサのほうを見た。」

「注目されたリツサは慌てて手を振りながら、」

「あ、いえ、あの、その、えと、なんでもないですっ」

「……そこでももるなよ」

「だ、だって、なんか水差しちゃって悪いしっ……」

「いえいえ良いのです。むしろ、ポエニデッタ神官の疑問は実に核心を突いているのですよ」

「まどろっこしいな。要はファトキアが中心だと思っているのはこの地方だけってことだろ、ドクトル・テン」

「はい、そうですよ、センエイ。」

「ですから異邦から来られたポエニデッタ神官などには意外と思われるのでしょうか」

「あ、はい。」

「……トマニオが中心だっと思ってました」

「ああ、それはたいへん中立的な視点ですね」

「いい加減本題に戻ってくれよ。で、ファトキアの敵ってのはなんなんだ？」

「ですから、ファトキアが中心ぶることを快く思わない勢力ですよ」

「あー、なるほど。」

「なんか典型的な政争なんだな。神殿のくせに」

「はは、バカを言うなよライくん。神殿ほど金と力が有り余っているらば政争なんて腐るほど起こって結果として腐り果てるさ。なあ、

神官？」

「ははは、全くもって否定できませんなあ！」

「笑いながら言うなよ……」

「前々から思っていたが、このスタージンという神官はなにかそう

いうリミットが突き抜けている気がする。

「ですがそれは杞憂というもの。なんだったらサリ様にはファトキア訪問の後、セレモニーとして大々的にトマニオを礼拝して頂きましょう。」

政治的にはそれでバランスが取れるはずです。事前に手配をしておけば上から横やりが入る心配も御座いませぬ故、問題は起こりません」

「む、むう。しかしなパズ」

異論を唱えかけたバグルルだったが、

「聞いたところによれば、どうやら魔人の方々に置かれましては仕事の手がかりがさっぱり消えてしまったとのこと。」

いったん大きな街に出て情報収集からやり直し、というのであれば、しばらく手の空いた時間があるはず。ですからその間にぜひ、と」

たたみかけられ、う、とうめいて沈黙する。そう。

例の、シンの師匠だっというじーさん。そのじーさんの気配が、ちよつと前に忽然と消えてしまったらしいのだ。

前は漠然とではあるが魔術的気配があつて、このあたりで悪さしているなーというのがハルカやセンエイには感じ取れたらしいのだが。

こういうことで抜群に鋭い知覚を持っているのはシンだっという話なのだが、

(なんだか行方不明って話だしなー。どこ行ったのやら)

で、仕方がないので魔人連中はいったん引き上げて新しいメンバーを雇って出直そうという話だった。たしかに、ヒマになったと言えなくもない。

「ふん。ま、どんな話をしたって、結局決めるのはサリなんだがね」

つまらなそうなセンエイの言葉に、我に返ってサリを見る。

さつきから一言も発していなかったサリは、重たそうに吐息して口を開いた。

「一日、時間が欲しい」

寝苦しくて目が覚めた。

(サリの心の中で暴れてから、一日くらい寝込んでたみたいだしなあ……要は寝過ぎなんだよな)

もそもそ起きあがり、窓の外を見る。

この、窓から外が見える部屋は、客間としては最上級のものらしい。

(それを、なんで今も俺にあてがっているのかはよくわからないけどな)

剣なんてもうなくなっただから普通にべつのヤツに当てればいいのに。

たとえば

(サリとかな。巫神だって言うんだから、待遇は良くしてしかるべきだろうに)

ぼりぼり頭をかいて、立ち上がる。

寝付けない以上、ここにおいても退屈なだけだが……さて、どこにいこう?

ふらふらとあてもなくさまよっていたら、広いところに出た。

最初にキスイと出会った、あの広間。

正面には巨大な穴があって、外を一望できる環境にある。

月の光に照らされて、幽玄な雰囲気漂うそこに、

「……なにやってんだ、ペイ」

「おっ」

俺の言葉に、ペイは片手だけ上げて応えた。

「つーか、その雰囲気ダイナシに放置された鉄の筒はなんですか。」

「そんな顔で見るなよ。だいぶ前の戦闘で設置した砲台だろ。」

「いや、片づけるよ。使ったのだいぶ前だろ。」

「だから今片づけてるところだろうが。」

「つーか、ここまで重いと簡単には持ち運びできなくな。一度分解しないと話にならん。」

「工具を片手に作業をしながら、ぶつぶつとこぼす。」

（そういえば、こいつはテンの弟子なんだっけか）

「まあ、弟子と言うより使用人に近い気もするが、いずれにしろえらく態度がでかい。」

「で、おまえさんはどうしたんだよ。」

「あん？ ああ、ヒマ。」

「……仕事がねーと気楽でいいな。」

「なんなら放り出すか？ それ。」

「バカたれ。そんなかつこわるいことができるかつ。」

「口論しながらも、手は休まることを知らない。」

「……あ、案外こいつ器用かも。」

「手つきが素人離れしてる。」

「でさ。」

「なんだよ。」

「サリ、どうするつもりなんだろうな？」

「知らん。サリが決めることだろ。」

「まーそうだけど。魔人連中はどうなんだ？ ファトキア行きて。」

「バグルルは猛反対。ハル力は放任。センエイはなに考えてるかわからん。」

「他は……聞いてないが、おおむね賛成なんじゃないかな。」

「へえ、そうなのか。」

「マイマイやミーチャはなににも考えてないだろうがな。コゴネルやうちのジジイは ちと、企んでそうだな。」

「なにを？」

「サリをダシにしてどうにかしようって話さ」
不愉快そうに言う。

「ダシ？」

「ああ。ほれ、魔人って連中はこれでもけっこう肩身狭いだろ」

「まあ、そうだけど」

「だからよ。魔人のなかに亜神がいるってことになれば、ちっとは風当たりもよくなるんじゃないかって思うだろが」

「あー、そういうことか」

………待てよ。

「でもさ、サリがこの後、魔女を続けるとは限らないんじゃないか？」

「なんだよ。神殿が圧力かけるってことか？」

「まあ、それもあるけど……」

「問題ないだろ。亜神に神殿が指図できる言い訳もないし、本気になったサリ・ペステイなんか誰も止められやしない」

ペイはこちらを見もせず言う。

………そういうことじゃないんだがなあ。

まあ、いいけどさ。

「でもそういえばスタージン、亜神が魔人出身だったことについてはなにも言わなかったんだな」

「そうだな。あれも腹に一物ありそうなクチだ。」

まあ、バグルルの友人じゃ一癖あつて当然か」

「待てやコラ」

「あん？」

「いや。初耳なんだけど、それ」

「俺も予測だよ。」

でもそうっぽいじゃねえか。バグルルはファトキア出身だし、なんかお互い知ってそんな雰囲気だったし」

「あー………まあ、そりゃあな」

「なんだかなあ。俺はやな予感がするよ。あのスタージンって

奴、うちのジジイなんかより一枚も二枚も上手な気がする。

ナメてると思わぬところで足をすくわれる気がするんだがな。まあ、サリを出し抜けるかどうかは知らんけど。

……っと。さて、じゃあそろそろ運んで行くかな

「おー。がんばってな」

「お前も、あんまり夜更かしするんじゃないぞ」

「はいよー」

言って、俺たちは別れた。

「……………ふう」

どっこいしょとベッドに腰掛けて、一息。

結局。散歩に行ったからって、眠れるようにはならなかった。

(まあ、最初からわかってたけど)

たぶんこの体調は、身体的なものじゃない。

要するに、俺は。

(気になってるわけだ。結局)

「あー、どうするのかなー、サリ」

「なにが？」

「うどわわわわわわ！？」

「ライ。夜は静かに」

しー、と言うサリ。

……………というかですね、サリさん。夜の自室で後ろに回り込まれたら誰だって叫びますよ。

「い、いつから？」

「ライの後ろにずっといたけど」

「だからいつから」

「集落を目的もなくうろつろしているみたいだったから、どうしたのかなって」

「……………」

それだと、俺はうろろして戻ってきてベッドに腰掛けるまで、まったくサリに気づかなかったことになるんですが。

頭を振る。サリだし、そんなこともあるだろう。

それよりも、今は聞きたいことがあった。

「で、どうするんだよ」

「……明日まで待つ」

「待つてなにが変わる？」

「グラールネルの様子を見る。ひよっとしたら目くらましかもしれないし、ハルカが再探知に成功するかもしれない。だとすれば仕事を放つては行けない」

「それでなにも起こらなければ？」

「……」

おや。珍しくサリが悩んでいる。

つつても、理由はなんとなくわかるけど。

「どうすればいいかわからない？」

こくん。サリはうなずいた。

（……やっぱりか）

「いままでは、心の中の魔物に対処するためだけに生きてきたから。だから、それがなくなりたいま、どうすればいいのかわからない」
ぽつ、ぽつ、という調子で言う。

（故郷に帰るったって……全滅してるしなあ）

要するに、そういうことだ。

いままでやらなければいけなかったことが一気に消えたせいで、逆になにをすればいいかわからなくなってしまった。

「ライ。あなたはもうしたらしいと思う？ わたしは、どうやって生きていけばいい？」

「俺に聞かれても困る。」

ていうか、自分がどうやって生きるかなんて、自分以外に決めようがないだろ」

「……でも」

「でもじゃねえよ。お前、俺がこつしろって言ったたらそうするつもりか」

「……ライが言うなら」

「参った。重傷だ。」

「おまえな、あんまり甘えてるとぐーで殴るぞ」

「……だって」

「だってじゃねえ。しっかりしろよサリ。他人の言いなりの人間なんて、なんにも価値ねえぞ」

「……」

「いや、そんな途方に暮れた顔で見られても。」

「ああもう、ともかく明日のことは明日考える。残ってもいいし、ファトキアに行ってもいい。」

「行くにしたって、途中で気が変わったら戻ってきてもいい。逆にファトキアが居心地いいんなら定住して魔女なんてやめちまってもいい。」

「ぜんぶおまえの自由だ。自由だから途方に暮れてるんだろが、だからって他人に頼るな。お前の道はお前が決めるんだ。俺には決められねえよ」

「……うん」

「わかったら明日に備えて寝ろ。いいな」

「うん」

「うなずいて。」

「サリは、元気なさそうに立ち上がり、ふらふらと外に出て行った。」

「ライ、おやすみ」

「ばたん。」

「……はあ。」

（迷子の子供みたいな顔しやがって けど、まあ）

似たようなものかもしれない。

「たぶんサリは、あの廃墟になった街にいたころから、なにひとつ成長していないのだ。」

結局。サリは、行くことにしたらしい。

「ファトキアには行ったことないから、ちょっと見てくる」という、端から見ればえらく安易な決め方だった。

……それでも、たぶん。

サリが一生懸命悩んで、自分でそう決めたのだから、それでいいと思う。

気が変わらないうちに、ということなのか、スタージンはえらく迅速に馬車を用意してきた。

「バグレルはどうしたんだ？」

「いじけてる。まあ気にするな」

「あ、そう」

で、俺はその見送りの場所でゴゴネルと雑談していたりする。

「サリ姉ちゃん、ばいばーいっ」

「……またえらく気が早いな、マイマイ」

「……つーかまだサリは馬車にも乗ってない。」

と、そのサリがてくてくこっちに歩いてきた。

「どうした？」

「忘れてた。ライ、手を出して」

「ん？」

ぼん、と重い感触。

見ると、サリのおなじみの短刀が俺の手に置いてあった。

「なんだよ、これ」

「後で取りに来るから、預かっておいて」

「……ああ、そういうことか。べつにいいけど」

なんとなく照れくさい。

あと、後ろからバカの殺意をひしひしと感ずるのですが。

「らーいーくん……」

「うわ、しなだれかかってくるなバカっ」

「しくしく。サリいい、私にはなにもないの？」

「センエイには放っておいても会うから。要らないでしょう」
「びた。センエイの拳動が止まった。」

そしてその身体が小刻みに震えはじめる。

「ふ、ふふ、ふふふふ……」

「ど、どうした？ 酒でも切れたか？」

「勝った！ 勝ったぞライくん！」

「ええい、うるせえから耳元で叫ぶなっ」

「わはははは！ そうとも！ 順当に行けばサリは用事を済ました
後真っ先にこちらと合流し、そのときには邪魔なライくんはべつの
場所にいる！

ふはは、いける、いけるぞ！ 今度こそサリの心は私のものだあ

ーっ！

「煩い」

「ずしゃあつ！

「あごふっ！？ い、いま、未知の角度から来た足払いがっ……！」

「……とりあえず、しばらくセンエイのお守りもお願い。ライ」

「責任重大だな」

「サリ様、そろそろよろしいですか」

「かまわない。ライ、それじゃ」

「土産を期待してるぞー」

「してるぞーっ」

「してますーっ」

「まるまるっ」

……こうして。

サリは、行ってしまった。

「行っちゃったねー、サリさん」

「……っーかなぜテメエが残ってる、リッサ」

「む。なによーそれ。まるでボクが残ってたからおかしいみたいじゃない」

「おかしいわけじゃないが……残りふたりはサリと一緒に行ったんだろ？　なんでおまえだけ残ってるの？」

「あのふたりはあのふたりだよ。ボクは任地に行く途中だからね。そっちを優先したの」

「任地って？」

「ヴァントフォルンの北の開拓村」

「……それは最果てとか言いませんか」

「まさかあ。東にはもつとすごいところいっぱいあるよ。半日歩かないと人が住んでいるところにたどり着かない神殿とか」

「いや、そんなのと比較されても……」

まあ、左遷なんてそんなもんか。

と、ふらふらしながらセンエイがやってきた。

「いいなー。その剣、いいなー」

「うるさいヤツだな。なにが言いたいんだよ」

「サリに『私だと思って持っていて（はあと）』とか言われるなんて……むきー！　憎い、憎いぞライくん！」

「だああ、暴れるなばかたれっ」

「ていうか、そんなこと言ってましたっけ……？」

「言っていた。ああ言っていたともさきスイくん。まわりには聞こえていなかったようだが私は聞きもらさんぞ！」

「幻聴だろ」

「うるさい。私が聞こえたって言ったら聞こえた！　聞こえたんだもん！」

「おー！　きこえたんだもんっ」

「きこえたんですっ」

「まるまる」

あたりの連中が盛り上がる。盛り上がり過ぎて俺はついていけねえ。

「ったくしょうがねえヤツだな。……ほれ」

ぼい、と剣をセンエイに渡す。

「……おい。どういうつもりだ？」

「どうせヴァントフォルンあたりまでは一緒に行くんだろ。それまで預かってろ」

「む。まあいいだろう。もともとサリの錬成術には興味があつたし、調べるにはいい機会だ」

「断つておくが、ちゃんと返せよ？ 幻覚とすり替えたりしたら後でサリが激怒するからな」

「ばばばばかなことを言うなよライくん。わわ、私がそんなことを考えるとお、思うのかい？」

「……きっぱり考えてたなテメエ」

「ちよつとな」

「ちよつとな、じゃねえよ……」

他愛もない話をしながら、上を仰ぐ。

天気は快晴。旅立ちの日としては上出来だ。

（ま、あいつなら大丈夫だろ。そのうち普通に生きていけるようになるさ）

だから、いまはお別れを。

次に会う日には、お互い胸を張って会えますように。

「はあ、はあ……！」

薄暗い洞窟を進む。

味方はいない。すでに兵たちはあの女の支配下だ。見つければ捕まる。いや、その前に殺されるか。

逃げなければ。逃げて帝国に戻り、『裏切り者が偽の《生贄》を擁立している』と報告してやるのだ。

そうすれば、自分の首は繋がる。あの女にも復讐できる。

私兵の大半を失うことになるが、べつに惜しくない。自分は皇帝になるのだ。この程度の出費は後からどうとでもなる。

「くそ、くそつたれ……！」

にもかかわらず。足が進まない。

なぜか牢から人がいなくなり、鍵が偶然壊れて外に出たものの、もうそれからずいぶん走ってきた。

いい加減、スタミナの限界であったし、それに。

「くそ、どつちが安全なのかわからん……！ 地図さえあれば、安全な移動経路を確保できるというのに！」

それというのも、あの女がすべてを奪ったからだ。

「ちくしょう、ちくしょう……！ 覚えているよカシル・ヴァロツクサイト、このままでは決して済まさぬぞ！」

「ふうん？」

声がして、そちらを振り向く。

そして。

「な……に……！」

声が詰まる。

自分の見た光景が、いまいち理解できず。

「運命律を操作して呼び寄せたはいいが 使い物になるのか、此奴」

「あ、あ、あ……！ 貴様は、貴様たちは、なんなんだあああ！？」

「ふん……まあいい。おい、下郎。力が欲しいか？」

「あ？」

「力が欲しいなら くれてやるぞ。これを」

言つて、男は背後を指さす。
薄暗い闇の中で、なにかがぞろりと蠢いた。

「……っ！」

跳ねるように椅子から立ち上がる。

今のビジョンは

(よくないものが近づいている　それも至近に！)

慌てて身支度を調べ、部屋を飛び出した。

どん！

「いたっ……」

「キスイ様？」

ぶつかつたジロロが、きよとんとした顔で覗き込んできた。

「ジロロ　皆は？」

「すでに動き出しております」

「そう。……いい手際です」

「キスイ様、この気配を感じられたのですか？」

「はい。相手は神ですね」

言葉に、ジロロが目丸くする。

「それと従者が大量に。妖精の類かもしれませんが、それにし

ては体格が大きいですね」

「キスイ様、……」

「はい？」

「なんでもありません。ともかく、いまのが事実であれば皆に
知らせないと」

「はい。お願いします」

「キスイ様は、何処に？」

問いに、ほほえんで答えた。
「カシルの下へ。正式に守護を依頼しに行きます」

休んでいたところを突然呼び出されてなにかと思っただら、敵襲だと言われた。

敵襲、と聞いてすぐ思い浮かべたのは魔人たちの敵のじいさんなのだが、

「じゃあ、やってくるのはじいさんのほうじゃないのか？」

俺が聞くと、ハルカは静かに答えた。

「わかりません。わからないとしたら答えようがないのです」

「けど、このタイミングで来たということは、やはりそれしか考えようがないんじゃない……」

「たとえそうだとしても、相手が爺さん本体とは限らん。この前みたいに誰かをけしかけてくる事もあり得るしな」

答えたのはゴゴネルだった。

「そりゃそうだろうが……で、それよりさ。どれくらいの規模なんだ、そいつらは」

「それもわからん。」

というか、それがわかるかと思っておまえを呼んだんだけどな、ライ」

「あん？　なんで俺がわかるんだよ」

「一応、前にも危機を『見た』ことがあったそうじゃないか。」

今回は神話に属する敵っぽいし、なにかわかるかもしれないと思っ
てな」

「んー、そうだなあ。でも意識してはできないからなあ、俺の場合」
キスイにやり方を教わっておけばよかったかもしれないが、なん

にせよ後の祭りだ。

そこでふと、ハル力が手招きをしていることに気づく。

「なんだよ？」

「いい方策があります。少年、こちらへ」

「む……」

「なんだ？ なにかやる気か？」

「いえ。少年の前で神力を大きくかき回してみようと思ったままで
す。うまくすれば彼の能力を惹起できるかもしれない」

「なんで？」

「多分に専門的な理由ですが、解説を求めますか？ コゴネル」

「あー、いや、いや。任せる」

コゴネルはあっさり理解を放棄した。

「というか……すごい不安なんだけど。」

「おい。安全なんだろうな？ それ」

「安全でしょうかね？」

「いや、問いかけても」

「運命律に干渉するわけですから、どうなるかは完全にはわかりま
せん。大した影響はないと思いますが」

「……まあ、いいけど」

不安は残ったが、一応相手に任せることにする。

ハル力は、小さくぶつぶつと呪文のようなものをつぶやきながら、
俺の額にそつと手のひらを添えた。

途端、

見る。

世界が暗転して、真っ暗になる。

その暗い世界の中を突進してくる、無数の

「なんか、光でできた狼みたいな獣だな」

つぶやくと、魔人ふたりがぎよつとした顔をした。

「マジか。ライ」

「嘘ついても仕方ないだろ」

「ハルカ、どう思う」

「どうもこうもないでしょう、コゴネル。光狼フェンリルで間違いないありません」

「光狼？」

「最強の妖精だよ。神族が巨人に戦争を挑んだとき、尖兵としてやってくるモノだ」

「じゃあ、相手は……」

「神だな。光狼を従えるモノなんて神くらいだろ」

「え、ええええ！？」

コゴネルは渋面になって言った。

「いまだき光狼連れてケンカ吹っかけにくる神ねえ……なんとなく、正体も想像がつかない」

「バルメイスか」

「おそろく」

「うわー、なんかすげー厄介なモノを解き放ってしまった気がする。」

「ともかく、この話は他の魔人連中にも伝えないと。光狼はともかく、神本体は岩巨人には手に余る。」

「2000年前から、厄介な神退治は魔人の仕事だ。どうにかしてやらねえとな」

「あ、あの……」

と、その場にいたリツサが声を上げた。

コゴネルはちらりとそつちを見て、

「悪いね、ポエニデッタ神官。神だからって殺しに来る相手は殺さなければやってられん。ここは黙認してくれ」

「いや、それはいいんです。元々神とか巨人って戦争好きですし、襲ってくる相手と戦うことは神殿的にも問題なしだと思います」

「じゃあ、なんだ？」

言葉に、リツサは答えた。

「ボクも戦いに参加します、って」

がらごろがらごろと馬車は進む。

隊商から買い取ったらしい、3台の幌馬車。その先頭。

そこにあの神官と一緒にになって座りながら、わたし、サリ・ペステイは茫洋と考えごとをしていた。

(そういえば、もうこの眼帯もいらないんだ)

前は、魔物に奪われた左目を隠すためにしていた。

だがその魔物もはやなく、左目も元の人間の目に戻っている。

紅くもないし、妖気を放出したりもしない。人間には見えないなにかを知覚することもない。

(それは便利だったのだけど、仕方ないか)

結局。フレイア・テイミアスとの死闘の中でも、なにかを見ることはなかった。

たぶん、それはすでに失われた能力。

なにもかもと一緒に消え失せた、過去の遺物だ。

(空っぽになってしまった)

がらがらと馬車は進む。

これから単調な旅が続いて、やがてファトキアに着く。

その後いくつかのセレモニーが終わって、わたしは自由になる。

自由になって……なにをするんだろう？

魔女をやめる？

ライはそれでもいいと言っていた。

でも、そうした場合、そこから先のビジョンがなにも思い浮かばない。

じゃあ、魔女を続ける？

けど、その理由はもうない。単調な魔物退治だけの生活を続ける

には、熱意がなさすぎる。

(結局は、なにも決まってるない)
憂鬱になる。自分は今ここまで空っぽだったのだろうか。

あるいは、……あのとき死んだのは、魔物ではなくて自分だったのか。

(だとすれば、皮肉ね。

魔物をあれだけ憎んだサリ・ペステイは、その憎悪だけしか生きていなかったのだから)

考えていると、だんだん眼帯の重みが邪魔になってきた。

どうせこれも死人の持ち物だ。どこかに埋めてしまおう。

吐息して、わたしは眼帯に手をかけ

そして、その光景を見た。

「!?!」

跳ねるように立ち上がる。

いまのは

(見えた まずい!)

走り出そうとして、身体が止まる。

目の前を塞いでいる、巨体の男 スタージンに。

「どいて」

「だめです」

「どきなさい!」

「行ってなにになるのです! あれは神話の軍勢だ。一人や二人程度がどうにかできるものではありません!」

言葉に、歩みが止まる。

「なにが起こっているか、わかっているのね。あなた」

「これでも聖戦士の端くれです。これほど強大な神力が動けば、嫌でもわかる」

「なにと戦っている?」

「具体的にはわかりませんが、おそらく大量の光狼を連れた神の類かと」

「光狼　　！」
　　歯噛みする。

神々が自らの手助けのために作る生物　　妖精のなかでも、それは特別なものだ。

戦闘という単一の用途のためだけにデザインされ、戦神に使役されて戦へ向かう。

その姿はまるで光でできた狼のようで、そして狼を超えた俊敏さで敵を打ち砕く。

「ならば、それはバルメイスか」

「可能性は高いでしょう」

「どいて。助けに行かなくちゃ」

「助けに行つてどうなるのです。あなたは　　」

「勝てる可能性はある！　わたしは勝算がなければ動かない！　なめるな、神官！」

「あなたは本調子ではないでしょう！　サリ・ペステイ！」

「　　！」

見抜かれた。

というより、見抜かれるほど自分が衰えていたことを、自覚させられた。

「力を失い、活力を失い、再生力を失い、目を失った。

その状況で、再び戦えるようになるには十分な再訓練が必要ですよ。今では無理です」

神官の声は真摯で、熱が籠もっている。

だから、心が折れそうになった。

そう。いまの自分は弱い。

伝説を作ったあのサリ・ペステイは、もういまは存在していないのだ。

それでも。

「それでも……身体は動く。いつも通り、最善手を打てれば、きつと」

「無理だ、とは言いません。ですが難しいでしょう。相手は百戦錬磨の戦神です」

「だからって、座視してはられない！ 相手を討てる可能性があるのに、ただ黙って見過ごすことなど」

「やむを得ませんな」

「がくん。いきなり膝をついた。」

「な、身体、が」

「失礼ながら。先ほど、気づかれぬように戒め《geasa》をかけておきました。」

「あなたが自ら死の危険を冒そうとする限り、あなたの身体は鉛となるでしょう。おとなしくすることです」

「身体を起こす。」

「確かに鉛のように重い、この程度なら。」

「相手は驚いたようだった。」

「なんと……流石です。この重圧に耐えて、なお手前が止められないほどの力をお持ちか」

「どいて。わたしは、行かなきゃ」

「無駄です。手前は押しつけられても、それでは敵と戦えない。行つたとしても犬死にでしょう」

「……………」

「悪しからず。不幸なことですが、我々はあなたまで失うわけには参りません」

「がくん、と膝が折れる。」

「わたしは……結局、なにもできないまま。」

「あの光景を、遠くから見てのことしかできない。」

「(ライ……………!)(」

「状況はどうだ？」

副官に尋ねる。

「おおむね、先ほどの状態を維持しているようです。カシル様」

「……ふむ」

《生贄》からは、第一に非戦闘員を避難させるための時間稼ぎを依頼されている。遅滞戦闘というやつだ。

それで、しばらくは陣をゆっくり下げながら応戦を続けるように指示したのだが

「気に入らんな」

「御意に」

「ほう、おまえもそう思うか」

「うまく行きすぎています。それに、オオカミどもの戦術が人間的に過ぎます」

「操っているヤツは人間並みの知恵があるな。あるいはやはり、神そのものが作戦指示を出しているのか　しかし。」

解せないのは、神自身がさっさと出てこないということだ。聞いた話ではいかにも前線大好きバカのようだったんだがな」

「それもあるのですが……」

「ああ、わかつている。戦の神が指揮しているにしようにも練度が低い。」

ヘンに時間を空けた波状攻撃や、中途半端な連携が目立つ」

単体の戦闘能力は高いのだが、うまく活かし切れているように見えない。

さきほどから前線が危機に陥り次第投入しようと待機させておいた一隊は、いまこの本陣の近くで待ちぼうけを食っていた。

「んー……こうなると、アレだ。陽動の可能性を疑いたくなるな」

「陽動、ですか」

「そうだ。　そこでだ」

ぼん、と肩をたたく。

「はあ」

「斥候を北のほうへ出そう。　ちょうど非戦闘員が避難しようとしている頃だ。　あのあたりに回り込まれると危ない」

「……斥候、ですか？」

「どうした？」

「いえ。　どうせならそちらに戦闘部隊を連れて行ってはどうでしょうか？　敵がいた場合、こちらに報告してから戦うのでは遅いでしょう」

「　　ふむ」

考える。

副官の言うことも一理あるのだが……微妙に引つかかる。

もし相手が戦力をかなりそちらに振り分けている場合、こちらとしては多正面作戦を強いられることになりかねない。

どうせなら、もう少し楽に戦いたいものだ。　少なくとも、相手の戦神が出てくる前に消耗したくない。

ならば

「よし、攻めよう」

「はい？」

「おい、そっちいったぞっ」

「わかってるっ。　ああもう、しつこい奴らっ。　迅雷《Lightning bolt》！」

ばちばちばち、と襲ってくるオオカミを焼き払いながら叫ぶ。

非戦闘員が安全な場所へ避難するのを護衛していたら、ヘンなのと鉢合わせしてしまった。

幸いにも魔人たちはかなりこちらに人員を割いてくれたので助かったが、それがなければどうなっていたことか。

「光狼つたつてしよせん神の眷属だ！ 魔術に対する防御は薄い、どんだんたたき込めえ！」

「だからおまえが仕切るなつてーの、バグルル！」

「ほほ、ふたりともケンカしていると私がおいしいところを全部持っていつてしまいますよー！ ほおら、発明はあ、火力うう！」

「……いいかげん、こいつを放つておくと魔技^{エンチャンター}手工はみんな火力バカつて世間に認識される気がするな」

「ぶつくさ言つてねえで働け！ おい！」

『右から敵！』

「ち！ おい、いくらなんでも多すぎないか！？」

「誤算でした。敵はライナー・クラックフィールド少年の神力を目指して来ると思っていたのですが」

「囷にしたつもりが、アテが外れたつてか？ へ、上等！ この場で全滅させてやるぜ、おらああ！」

「猪突するな。非戦闘員を抱えている以上、こちらがだいぶ不利だ。ああくそ、だつていうのに退く隙すらなく次から次へとやつ

てきやがるっ……！」

「ほら、無駄口たたいていっているヒマがあつたら次の魔術つ。こつちに来る量が増えるよつ」

「しよーがねーだろ！ 敵の数自体が増えてるんだよ！」

現状、狭隘な洞窟の地形がバリケードの役目を果たしてくれている。

だからそれを利用しておおざっぱに魔人達が相手を防ぎ、討ち漏らして後方に来た分をこちらが潰す。

そついう手はずなのだが、だんだんそれも首が回らなくなってきた。

「ねえ、ちよつと……！ これ以上来ると、矢のほうが先に尽きるよっ」

「 やむを得ん。ハルカ！」

「了解です、コゴネル」

途端。洞窟内をとてつもない怖気が支配した。

「ふん 予想を超えて無能か」

吐き捨てる。

光狼は理想的な兵隊だ。必要があれば使用者と目を共有して情報を提供し、遠方からでも精神のみで意のままに動く。

それを使つてこの程度……いや。

「無理もないか？ 皆殺しがヤツの宿願のようだからな。あんなどうでもいい目標に戦力の大半を注ぐのも、まあ理解できなくはないか」

しかしそれにしても不甲斐ないのは。

「ならばいつそ、全戦力をたたきつけてしまえば魔法使いどもも支え切れまいに。やはり無能故か」

考える。このまま推移すればどうなるか。

だいたい半分くらいの確率で連中は光狼を押し切り、目的地に達してしまうだろう。

そうならならなつたで、後で滅ぼしに行けばそれでよいのだが
「気に入らん」

雑魚を相手にするのは面倒だったが、幸い大半の雑魚は光狼に対処するために夢中になっている。

なら、このまま一気呵成に目標まで攻めかかってしまおうか？
「それも風情がないか」

思い直して、つぶやく。

「へえ、余裕だね」

ぴくん。と、眉が動いた。

「……ほう。光狼の監視網は万全と思ったが、抜けがあったか」

「いんや。そりや無理。あれだけひしめいてりや絶対見つかるよ」

「では欺瞞したか。成る程、当代の魔法使いも侮れん。

名を聞こうか、無謀なる挑戦者よ」

「ばーか。誰が教えるか」

「なに？」

相手 魔女は、ふうやれやれと肩をすくめた。

「バカだね君は。一騎打ち気取りのつもりかもしれないけどね、こ

っちは生物としてアンタほどデタラメじゃないんだ。故に」

「故に？」

「だまし討ちが基本さあ。そら！」

「!? ぬん！」

ざくん！

とつさに振った剣によって裂かれたのは、

光狼。

「な、に？」

「隙あり！」

「ち!？」

飛びかかってきた相手に、咄嗟に意識を集中させる。

「『地割斬域』！」

どすどすどすっ！

発動した神威カムイによって隆起した大地の槍に刺されて絶命したのは

やはり、光狼だった。

「……我をも欺瞞したか！」

「そうさあ！ おまえの知覚なぞもはや役にも立たん！

さあ、同士討ちで絶滅するか、本物の私に打ち倒されるか、どち

らか選べ！」

大仰に言う魔法使い「達」。

気が付くと、自分は大量の魔法使いに取り囲まれていた。
その、中で。

「素晴らしい。やはり名前を聞いておきたいな、戦士よ」

「……ふうん。切り札があるって顔だね。さしずめそれは価値干渉能力の類か」

「ほう。そこまで看破するか」

「いやーなことに定番だね。この業界が長いと読めちゃうんだよなあ、パターンが」

「ふん。で、名乗らぬのか、貴様」

「しつこいね。偽物の名前なんてどうでもいいだろう。できればさっさとくたばってくれないかな、くされ神」

聞いて、にやりと笑う。

「ならば無名のまま散れ。 我が最強の神威^{カムイ}、その身に受けるが

いい！」

ぼつん、と、座っている。

場所は、前に竜と戦った草原のあたり。

夜が近づいたのでここで泊まるう、ということらしい。

神官や人足たちは、外で野営の準備を始めている。

わたしは、空っぽのまま、死んでいる。

目を閉じてても、その光景は否応なく見せつけられてしまう。

圧倒的な暴威に崩され、なすすべなく死んでいくモノ達。

わたしはなにもできないのに、おまえのせいだと光景が告げる。

それは、苦痛を超えて、なにかの呪いのようだ。

このままだと、狂ってしまいそう。

いつぞ、目をえぐってしまえばこの光景も見ずに済むだろうか。

(刃物は取り上げられてしまったけれど、指でなら、すぐに)

鉛みたいに重い腕は、ろくに動かない。

それでも、ムリヤリ腕を上げて眼帯を取って、人差し指を目に向ける。

「ぐぐ、……うつつ」

指の先が、ぶるぶると震えている。

ぎりぎりど、歯がきしむ音がする。

わたしは、

「馬鹿か、貴様」

声がして。

振り仰ぐと、そこにそいつがいた。

ちよびひげの、小物っぽい神官補。名前は……ダメだ。思い出せない。

「どんな幻像を見たのか知らんが、くだらん覚悟を決めるくらいならさっさと動けばどうだ。ほら」

「ごん、ごん。」

彼が持ってきたものを落とす。

……わたしの、装備。

「これ、なに？」

「見たとおりのものだろう」

「……なぜ、わたしに？」

「はん、決まっているだろう。見ていて苛々するからだ、馬鹿者が。まったく、貴様は最初から有無を言わず幌でもぶち破いて脱走してしまえばよかったのだ。スタージンの馬鹿なんぞが無駄な術を発動させる暇を与えずにな」

「聞いていたのね、あなた。あのとときの会話」

「偶然な」

いつものように、彼はえらそうに言う。

……まだ、よくわからない。

「理解できない。なぜ、わたしを手助けしてくれるの？」

「べつに手助けしたつもりはない。貴様に我慢がならないというだけの話だ」

「魔女が聖者として扱われるのは気に入らない？」

「そんなものは些細な問題だっ」

どなりちらす。

「本当に我慢がならないのはな、貴様がどうでもいい理由で悩んで無駄に行動をためらっていることだ！

うじうじ悩んでないでさっさと行動しろ！ 貴様には力があつて

目的がある。他に考えるべきことがあるかっ」

……よく、わからない。

どちらにしても。

「でも、いまさら行こうとしても、わたしの身体は鉛みたいに重くて

「たわけっ。それが我慢ならんというのだっ」

一喝された。

「いいか馬鹿者、よく聞け。貴様の身体にかけられた呪はなんだ」

「それは、」

「死の危険を冒そうとすると動けなくなる呪いだろっ。つまり、貴様は死の危険を冒そうとしているということだ」

「けれど、あのレベルの敵を相手にする以上は」

「黙れ！ 死ぬつもりなら行くな馬鹿が！ 奴らを救っても貴様が死んだら結果的ににも残らんではないかっ」

「！」

脳裏に、言葉が。

『ここでおまえが死ぬ気なら、それで』

「呆れた魔女だ！ 聖女にでもなったつもりかもしれないが、それでは相手が救われたか否かの確認すらできん！

それは無責任な救いの押し売りに過ぎん！ 一方的な善意の押しつけなど迷惑なだけだ、阿呆め！

本当に貴様が他人を救おうとするならば！ 死ぬ覚悟など決めるな！ 死んで他人を救うなど患者の幻想に過ぎぬわ！」

『人死にはいつまで経っても人死にだ。そこに救いも希望も』

「いいか魔女。誰かを救おうというのならば、死んでも助けるなどという邪念は捨てる。

もとより自分の事を考えることもできんヤツが他人を救うなど笑止。真に他人を救えるのは、自分を救ってなお余力があるヤツのみと知れ」

『死人にならない限り、俺は必ずおまえを』

「ああ」

重圧が、ゆっくりと消えていく。

そう、これは心の重り。

……空っぽのわたしは、無意識のうちに自分の命を軽視していた。空っぽなのだから、それでいいと。

その思考が サリ・ペステイを死人たらしめていたのだと、なぜ気づかなかったのか。

結局は、ライの言うとおり。

生きるために足掻いてきた自分がそれを捨てたとき、残るものなんてなにもない。

だから、空っぽなのだ。

「ふん 息を吹き返したか」

「そうね」

「それでどうする、死に損ない。勝てそうにないからしっぽを巻いて逃げるか」

「まさか」

装備を拾い、身につけながらつぶやく。

「あの程度、どうってことない。相手が皆殺しにしようというのなら、相手を皆殺しにするだけよ」

「そうか」

「神官補。名前を聞いておくわ」

「サフィート・パリーメイジだ。

きちんと覚えておけよ。いずれ出世し、大物となる身だ」

「そう。」

礼を言っわ、サフィート。いつか借りを返せることを願っ

言って。

そして、わたしは駆けだした。

相手がいきなり眼前から消失したのを見ても、さほど感慨は沸かなかった。

(ふん、手間のかかる……だから小娘は嫌いだ)

うんざりした、という顔で、馬車の外に出る。

すると、スタージン神官に出くわした。

「彼女は？」

「さあ。この馬車の中にはいませんが。外で休んでいるのでは？」

「その形跡はなかったはずですが。……ふむ、逃げられましたか」

「いやあ、参りましたなあと言って頭を掻く。

(ざまあみる。偉そうにしているから馬鹿をみるの

だ、愚か者め)

「いやしかし、そうするとパリーメイジ神官補も残念なことになりましたなあ」

「え？」

「新たに現出した亜神殿をいち早くファトキアに保護したとなれば、法皇さまの覚えもめでたいというもの。晴れて出世への道が開かれたでしょうに。」

ま、逃げられてしまったものは仕方ありません。どうせもう彼女は仲間と離れようなどとは思わないでしょうし、諦めるしかありません」

残念ですなあ、はっはっはと言いながら、スタージンはその場を立ち去った。

「.....」

.....

.....

しまったあああああああああああああああああ！」

十一日目(2) : 決戦! 悪神バルメイス

「ほう」

それまでがむしゃらに走ってた足が、止まる。

大きな空洞。

前にもここに来たことがある。

もう6日も前。奴の本性が暴かれ、その野望がついえた地。

その場所に 性懲りもなくまたこいつがいるというのは、また皮肉なものだ。

「ひ!? な、わ、なんだああ!?!」

「貴様だったか、チリギリ・カミルヘイム。」

……そうだな。目撃者をすべて消して宝器だけ持ち帰れば、後の言い訳はどつとでもなる。甘い判断だが、貴様ならそんなことを企てても、おかしくはない」

「か、カシル・ヴァロックサイト……! なぜだ、なぜここにいない!? 貴様は我が狼の侵攻を集落の前で食い止めているはずで、」

「ああ、それか。なんだか狼の主力は北側にいるようなので、そちらに兵を割こうと思ってな。しかしそのまま行くのも芸がないと思つて」

ひよい、と肩をすくめる。

「こう、防御に必要な最低限の兵だけを残して、正面を突破してから大きく迂回して狼どもの背後に回ろうとしたのだがな。それで、ここに来た」

「ば、馬鹿な……!」

「この際だ。これ以上うだうだ動かれるのもなんだし、悪いがここで貴様には死んでもらおう」

じゃきつ、と剣を構える。

「き、貴様あ! 雇い主を裏切った上に手に掛ける気か!?!」

「ああ、それか。悪いが雇い主はもう替わったんでね。昨日の味方

は場合によつては今日の敵つてのが傭兵の掟だ。あきらめろ」

「ひ、た、助け……！」

「死ね！」

踏み込んで一撃。

ぢいんっ！

「な……につ！？」

「悪くない。未熟だが澄んだ一撃だ。女戦士」

その、男は。

まるで空間からにじみ出たように、その場に現れていた。

「驚いたな。上司がこれだから甘く見ていたが、意外なことに部下は一流の戦士だ。嬉しいぞ、岩巨人」

「貴様、バルメイスか！」

「然り。そういうそなたの名はなんだ。戦士の礼として聞こう」

「名はカシル。家名はヴァロックサイトだ」

「ヴァロックサイトか。心した」

「心するがよい。そして、そのまま死んでもらう。

生きて抜けられると思うなよ、戦神」

がしゃがしゃがしゃ、と周囲の兵達が一斉に槍を向ける。

バルメイスは それを見て、心底愉快そうに笑った。

「なにがおかしい！」

「魔法使いめ 逃げたと思えば、おびき出されたのは我の方ということか。つくづく、油断ならん相手だった。

それに貴様らもよく準備している。あらかじめ魔法使いどもに命じて精霊の加護を武器に仕込んだか。

確かに、神格の加護は精霊相手には効果薄だ。神相手となれば、

その技術は有効よな」

「見抜いたか」

「見抜かぬはずもない。

周到的な準備の礼として、本来ならば相手をしてやりたいところだが……」

「待て！ 逃げるな！」

「がきい、と空間に剣が止まる。」

「!?!」

「ちと、数が多すぎてな。貴様ら程度の格の相手に我が神威カミイを披露するのにも不愉快だ。ここはひとつ、こやつに相手をしてもらおう」

空間からうなり声が聞こえる。

それはやがて、うつすらと形を成し、白銀のたてがみを持つ大きな獣として顕現した。

「光狼……ではない！ なんだ、これは！」

「ふふふ、見切ったか。」

気を付ける若きヴァロクサイトよ。それは妖精のように見えるがな、れっきとした魔王の一種だ」

「な、にい！？」

「楽しんで遊んでこい。……では、この男は預かっていく」

「くそ、待て！ 取って返せ、卑怯者！」

声はむなしく、空洞に響くだけで。

そして、獣が牙を剥いて吼えた。

「帰ってきたよー」

「おー。ご苦労さん。リツサ、それにハルカ」

「ごくろうさまーっ」

「ごくろうさまですー」

「ひしひし」

「あ、あはは……どうも、ごくろうさまでした」

岩巨人の里の中。

どうも神とかにとって神力の高い生き物というのは目印になるら

しく、俺やキスイは目立って仕方がないそうさ。

だから、マイマイ達を念のためにこちらに残しつつ、非戦闘員が避難する間は囿として里の奥にいるようにと言われていたのだが。

「残りのみんなは？」

「まだ後片付けしつつこっちに向かってる。」

そのうち来ると思っけど……敵を警戒しながらだから、遅くなるかも」

「そうか。……その様子だと、かなり激しい戦闘があったみたいだな」

「まあね。途中までは危なかったよー。」

なんか、敵の本陣をカシルさんが突いたおかげで、あわてて退却していったみたいだけさ」

という結果を見るに、あまり有効には働いていなかったらしい。

「こちらの打撃は思ったより深刻です、少年」

「……いや、深刻なのはわかったけどさ。ハルカ」

「なにか？」

「その、獣はなんだ？」

ハルカの身の丈を軽く超える巨大な六足有翼の獣を見て、言う。

「飛雲蜘蛛と言います。高名な召喚獣です」

「……こっちまで持ってきたのかよ」

「消すと再召喚は無理ですから。もう少しは戦えるので、出したままにしておきます」

疲労した顔で言う。

「召喚まで使ってしまうとは思いませんでした。切り札を使った以上、だいぶ追い込まれた状況です」

「うーん、そうかあ。どっかしら、計画を変更するべきなのかな？」

「それは不可能だと思いますが　時に。センエイはどこに？」

「え？」

言われてみれば、だいぶ前から姿を見ていない。

「さあ。どこいったんだろう、あいつ」

「　　そうですね。」

「　　いない以上、どこかで戦ってでもいるのでしょうかね」

「　　一人で？」

「　　彼女はいつも一人です」

「　　無茶なヤツだな……」

「　　アレは無茶の塊ですから。今更止めても仕方ありません。」

「　　それより少年。準備は整っていますか？」

「　　え？　　いや、行けることは行けるけど、次はキスイじゃないのか？」

「　　その予定でしたが、変更します。この分だと二人を分けてもア・キスイが狙われるだけですから。」

「　　それよりは、あなたが移動しつつ圏になり、その間にべつの道からア・キスイに避難して頂くのが妥当かと」

「　　要するに。相手に標的にされそうなのは、このふたりなのだ。だから次からが本当の戦い。」

「　　相手がなにを狙っているのかはわからないが、おそらく目標は俺の首だろう。」

「　　故に。俺を移動させて相手をおびき寄せ、そこで決着する。本来ならば最初にキスイを避難させておきたかったのだが、

「　　わたしがいれば、狙われる可能性は上がりますから。戦えないひとの避難を優先しましょう」

「　　という言葉によって、それは見送られたのだった。」

「　　しかし、避難といっても、どこに行く気だ？」

「　　ええと、ジロ口の知り合いのところだそうですね。とっても強いひとだとか」

「　　……あいつのお？」

「　　すぐくうさんくさいんですね。ていうか逃げたい。とても。」

「　　なんですかその口調。実は信じてませんね？」

「　　うわ！？　　い、いつからいたんだ teme エー！？」

「　　ていうか、音もなくハンマー持って後ろに立つのはやめて欲しい」

ですジロ口さん。怖いから。

「で、どういうヤツなんだよそいつ」

「ふふん、秘密です」

「おーい。やっぱ作戦変更しようぜうさんくさいし」

「えー」

「なんだよその不満そつな口調は。嫌なら、さっさとそいつの正体を言えばいいだろ」

「むう。まあいいでしょう。ビックリするキスイさまが見られないのは残念ですが」

「この非常事態にそついうことを企むのはやめてください、ジロ口。それで、どのような方なのですか。それは」

「ふふん、驚きなさいっ。私のビッグでストロングでデリシャスな知り合い、その人は……！」

「その人は？」

「ずばり、竜母様ですっ」

「待てやコラ」「待ちなさい」

「はい？」

即座に突っ込んだ俺とキスイに、ジロ口はハテナ顔を浮かべた。

「……ナーガか。ナーガだな？ あの砂小人モドキの超弱そつな竜母」

「なな、なんてこと言っんですかあなたはっ！？ ていうかどうかしてナーガラジャさまの名前を？」

なんてこつたい。

「あーハルカ、本気で作戦変えたほうがいいんじゃないか？」

「却下します」

「えー」

「……というより、代替案などありませんから。その竜母にすべてを賭けるしかないでしょう」

「最悪だな」

「あ、あはは。でも竜母さまですし、きつとあれでも頼りになるん

じゃないでしょうか」

「本当にそう思うか？ キスイ」

「あ、あは、あははは……」

いや、笑みがひきつってますよキスイさん。

「大丈夫だつて。たぶんなんとかなるなる」

「おまえはそうやって、いつもどうして気楽なんだ？ リッサ」

「深く考えてないからじゃない？」

「自分で言っなよ……」

まあ、でもたぶんそれが正解。

考えたところで、俺たちにはもう、あんまり多くの手段は残っていないのだ。

「くそ、くそ！ なんであんなヤツに……畜生！」

醜い生き物が、わめいている。

どうやら、あの女戦士にしてやられたことがよほど悔しいらしい。

（まあ、無理もない。無能の下にいる有能というのは、いつの世も火種だ）

苦笑する。ならばさっさと処刑してしまえばよかるうものを、それができないあたりも無能故か。

「貴様も貴様だ！ あんな使えるヤツがいるんなら、どうして最初から私によこさなかつたのだ！」

（さて、我がそろそろ行動するべき時間になってきたが）

「なんとか言え、このお！」

「ん？ ああ、どうした。あまりにくだらないので聞き流していたが、なにかあったのかな」

「き、」

岩巨人が立ちすくむ。

「こつという殺気に触れたことがなかったのか。その顔が、みるみる蒼白になっていった。」

「……おそらく、初めて。」

「この男は、自分が近づいてはいけないモノに近づいてしまったことを、悟ったのだろうか。」

「魔王を渡さなかったのは、貴様はその程度で十分仕事ができると思っていたからだ。だが、予想外に無能だったな。」

「ああ、あ、ああ、……。」

「やむを得ぬ。それはくれてやるからせいぜい必死で足掻け。我はもう、自分の仕事に戻る。」

「ま、待ってくれ！ またあいつらが来たら……!!」

「その魔王がいれば、自分でどうとでもなるだろう？ 甘えるな、

愚図めが」

吐き捨ててその場を去る。

背後から聞こえる雑音は完全に無視して、心のなかでつぶやいた。

（先の魔女戦で力を使いすぎた。少々時間を置かねばなるまいが

その程度で逃げられると思うなよ。下等生物め）

「波状攻撃だ！ 相手を休ませるな！ 気を抜くと一瞬で吞まれるぞ！」

「カシル様！ 右手側よりさらに狼が大量に来ます！」

「……っ、わかった！ 予備の二番をそっちに当てる！」

指示を飛ばしつつ、心の内で舌打ちする。

（あの腐れ外道の神野郎、よりによってこんな化け物を残していきやがって……!!）

おかげで、こっちの作戦はめちやくちやである。

当該化け物の戦闘能力も正気の沙汰とは思えなかったが、それよりも際限なくヤツのまわりに沸いて出る光狼の群れが凄まじい。

ちよつと気を抜くと、大量の狼たちに囲まれてあつという間に劣勢になる。

それを防ぐためには攻撃を続けるしかないが、すると前線は魔物本体の攻撃に常にさらされることになる。

結果として、被害は増すばかり。軍のほとんどをこの場に集中させてようやく保っているというのが現状だった。

ふと、副官のほうを向き直り、尋ねる。

「ア・キスイは？」

「もうそろそろ、里を出ようという頃合いかと」

「仕方ないか。このままではジリ貧だからな。」

……だが、これでは戦力をあちらに割くことはできない」

「状況は伝えてあります。あちらにも優れた戦士達がいるのですから、それを信頼しましょう」

「そうだといいのだが……」

ふと思う。あの人間の少年のほうは無事なのか。

（ あっさりくたばってくれるなよ、ライナー・クラックフィールド。貴様のような馬鹿がいなくなるのはつまらん）

心の中でつぶやいて、

「いまだ、第三隊進め！ 攻撃の手を緩めるな！」

結局、身動きが取れない自分に歯ざしりした。

「ア・キスイ？」

部屋の外から、声をかける。

「ア・キスイ。お時間です」

返事はない。かわりに、どたばたとつるさい足音が部屋の中から聞こえてくる。

「ア・キスイ」

「ああもう、急かすでないドッソ！ わらわはいま忙しいのだ！」
「……………」

事情は把握した。しかし。

「ですがお急ぎを。神の軍勢が攻めて来ます」

「わかっておる。わかっておるから考えておるといつにっ。ああもう、地図、地図はどこかつ」

「失礼」

部屋に入る。

キスイは、机のあたりをひっくり返して調べている。

「ああもう、もっと詳細な地図はどこにいったっ。あの娘、わらわが出したものを勝手に片っ端から片づけよって。どこにあるかわからなくなるではないかっ」

「ア・キスイ。地図でしたら、ここに」

「む。苦しゅうない。」

……………というか、何故貴様はタイムリーに地図を携帯しているのだ。わが大臣よ」

「戦士のたしなみに御座います」

「そうか。見上げた心構えよの。」

「おお、これだこれだ！ これぞ我が求めていたものよ！」
「御意」

「ふむ。よろしい。初めには勝算の思いつかなかった戦いであったが、どうにかなりそうだ。」

ドッソ・ガルヴォーン！」

「はっ」

「貴様に密命を与える。張り切つてこなせ」

「畏まりました。我が全力を賭して、必ず」

「はあ、はあ……！」
息が切れる。

全力で。ともかく全力で走る。馬車でかなりの距離を行ったせいか、ひどく遠い。

それでも。もう集落は目の前だ。あと一息なのだから、急がないと。

あと一息で……

その足が、ぴたりと止まる。

「あ

集落の入り口近くにある、開けた場所。

そこに、見慣れたひとが待っていた。

「よお、サリ」

「センエイ 負傷しているの？」

「いきなりキングを狙ったんだがなあ。かつこわるいことに撃退されちまった。情けねえ」

地べたに座って休みながら、笑う。

「一応カシルの奴に押しつけてきたが、ありゃだいが苦戦してそうだな」

「……相手が相手だから。当然」

「そりゃそうだ。まあそれはおいおいどうにかするとして ほら

「よ

放られたものをキャッチする。

……水袋。

「センエイ、これは」

「消耗しすぎだ、サリ。ちょっと休め」

「でもわたしは、」

「サリ。いまの君には無限の回復力はないんだ。以前と一緒に考えると失敗するぞ」

言葉が止まる。

ため息をついて、わたしはセンエイの横に座った。

……あ、のど、乾いてる。

水袋に口をつけて、一息。

「まいったなあ。一応、相手の必殺技の正体は見切ったんだが。かわしきれなかった。かつこわりい」

「でしようね。」

アレは価値に直接作用する攻撃。斬撃による傷という「概念」を、相手の身体の上に召喚する価値干涉系の攻撃よ。

センエイでなければ、見切っても対処すらできずに切り伏せられたのではないかしら

「だろうね。」

へえ、その言い分だとあの技も見たわけか。勝てそうか？

「原理的には」

「頼りないね。こう、もうちょっと景気のいいことは言えないのかい？ 逆さ捻子のサリ・ペステイに不可能はない、とかさ」

「変な二つ名をつけないように。……そもそも、逆さ捻子山地の戦いはそれほど特別？」

「特別だと思うんだがなあ。ま、今回の状況は特に逆さ捻子にうり二つだったのもあるがね。」

時間を経て増えていく敵。サリ・ペステイの機構システムとは、最も相性のいいタイプだな

「そうね」

これからわたしがやるうとして、センエイはおおむね見切っているらしい。

やはり、彼女は大賢者だ。情報が出揃えば、見通せないことなどない。

だから少し、聞いてみたくなった。

「センエイ」

「ん？」

「わたしは 弱くなった？」

「そうだな」

即答。

わたしは、吐息した。

「魔物。取らないほうがよかったかな」

「バカ言え。それが君の悲願だろう。いまさら悔やんでどうする」

「……うん」

「それに、弱くなったのは魔物が取れたからじゃない。その前からずっと前から、サリ・ペステイは弱かった」
顔を上げる。

センエイは、なにを考えているかよくわからない顔のままで、

「だろう。私を圧倒した頃や、逆さ捻子の頃とは、今回のサリ・ペステイは段違いに弱い」

「それは」

「周囲が見られなくなっている。冷静な判断ができないことが多くなって、結果として魔物や竜に遅れを取ったこともあった。」

「いまもそうだ。……魔物がいようといまいと、今のサリはあのサリ・ペステイになりきれしていないんだ」

「そうね」

「後悔しているか？」

いつか聞いた質問。

あのかきは……そう。「今は、まだ」と答えたんだっただけ、もうそれは変わっている。

「後悔することなんてない。 だいたい、そんなことする暇もない」

「だろうな。……ああ、やっぱり憎らしいなーライくん。殺しちゃおうかな」

「わたしを相手にして勝てるなら、いつでも」
「ちえ」

笑って、そしてセンエイはなにかをわたしに差し出してきた。

「センエイ、これは」

「サリ・ペステイにはこれがないとな。自分で作ったんだっけ？」

「うん。このために、神聖文字ルインを勉強した」

そう。

かつては猛毒だったこの剣は、魔物にとっての猛毒にするためだけに癒しの付加効果を付けてあるのだった。

「まあ、弱くなったサリを見るのもたまには面白かったけどさ」
表面上はあくまで陽気に、彼女は言う。

「そろそろ飽きた。また見せてくれよ。」

『あの』サリ・ペステイを、もう一度見せてくれ」

剣を腰に戻して、立ち上がる。

「センエイ」

「あん？」

「助言、感謝しておく。……後は、あなたが見たいものを見ればいい」

センエイは、くく、とのどを鳴らした。

「いいぜ。凄くいい。やっぱこつでなくちゃな」

「行ってくる」

「おう」

声を残して。

そして、わたしはまた走り出す。

(まずは 雑魚を一掃する)

「ち、案外強いな！」

ざしゅ、と相手を切り払いながら叫ぶ。

「当たり前だろ、ライ！ 光狼つてのはな、伝説級の化け物だぜ！
？」

「おーら、無駄口たたくな！ 馬鹿やつてると死ぬぜ？」

ざくざく狼を切り刻みながらバグルル。……案外強いんだなー、
このおっさん。

いま、俺は魔人のみんなと一緒に戦いながら、ナーガの下に行こ
うとしているところだ。

戦力はバグルルとコゴネルとテンとペイ、それとリツサ。これら
に加えて、岩巨人の里の戦士たちも多い。おかげで、そんなに苦戦
せずに移動ができていた。

相手の狼は、もうほとんどこの場にいない。いまバグルルが倒し
た奴でほとんど最後だ。

これなら、わざわざキスイと別行動するまでもなかったように思
うのだが……

「 妙だな。少なすぎる」

「 え？」

コゴネルの言葉に、聞き返す。

「 攻撃が手薄すぎる。カシルがある程度足止めしているにしても、
この量ってことはないはずだ」

「 ……えーと、それは」

テンのほうを向いて、

「 どう思うっ？」

「 ふむ。どうでしょう。敵がア・キスイの方を攻めている可能性が
あるということですか？ 」

「 そうだったらまずいな、という程度だがな」

「 え、ええええ？」

慌てるリツサ。

テンはしかし、いぶかしげな顔で、

「しかし理由がありません。ア・キスイには神力を極力抑えて頂いておりますし、そうすると相手がそちらに行くはずは」

「関係ねえよ。相手の数に帳尻が合わなかつたら、そりゃ要するに他の戦場にいるってことだろ？」

「いや、コゴネルの言うこともたしかなのですが、相手の動機が

」

『そんな悠長な時ではないぞ、皆！』

「トウト！？」

突然響いてきた言葉に、身構える。

『増援を求めろ！ このままでは、こちらは長く保たぬぞ！』

『ちよつとお、この数多すぎい！ なによこれえ！？』

『しかく』

『早く！』

残りの魔人たちからの声が響いて、そしてぷつぷつりと途絶える。

周囲の岩巨人が、急激にざわめき出した。

無理もない。キスイを守るこそが、彼らの第一目的なのだか

ら。

「どうする？」

とりあえず、コゴネルに問う。

「仕方ない。防御の幾ばくかをあつちに振り分けよう」

「俺は？ 合流したほうがいいんじゃないか？」

「ダメだ。敵の狙いはたぶんあくまでライだろう。」

ライが行けば、バルメイスが来る。最悪の場合、どっちかが助かる選択肢を取っておかなければまずい」

「……そっか」

「ご本尊が出たらすぐに連絡しろ。」

いまは、俺たちもキスイ側に向かう」

「わかった」

ふと、リッサと目が合う。

「え、あと、その、ボクは」

「あんたはここにいろ」

「……はい」

「頼りにしてるぞ、リッサ」

「う、うんっ」

俺の言葉に、リッサはうなずいた。

静かに、目を開けて立ち上がる。

岩巨人の中でも特に大きなこの体躯は、比較的小さな相手を自然に見下ろす形になった。

「ふむ。驚いたな。なぜ、ここに戦士がいる？」

相手の声には、多少のいらだちと驚きが混ざっている。

「……」

「いまの主戦場はここではなからう。臆して逃げたか？」

「……」

静かに斧を構える。

相手の目が細くなる。

「どうやら違うようだ。貴様ほどの戦士が、臆して逃げようはずもない」

「……」

「すべてを予測してここにいたのか。それとも偶然か？」

「問いましょう。死合う前に無駄口をたたくのが戦神の流儀ですか」

相手は凄絶に笑った。

「それは、我と殺し合いをしようということか？」

「応」

「岩巨人ごときが大言を吐く。確かに立派な体軀をしているようではあるがな、単身でどうやって我が神格に対抗する気だ？」

「やってみればわかるだけのこと」

「それはそれは。で、どうするのだ、貴様」

言い終わる前に、すさまじい火花が散った。

神速で踏み込んでの一撃を、相手の剣が受け止める。が、圧でこちらが勝った。たたらを踏んで、戦神は数歩、後退した。

そして、凄まじい目でこちらをにらみ返す。

「……貴様、この斧は」

「アルクリメソウダの斧。かつてのあなたの御同輩から、我らが祖が奪った戦利品です」

平然と言う。

かつて、武者修行の際に得た斧。それは、対神格への攻撃に特化した、祭器の一種だった。

普通の武器ならイエルムンガルド外殻に押されて相手に当てることは難しいのだろうが、この斧ならば、当てることくらいはできる。「不意打ちで決着する卑怯を鑑み、加減しました。次からは首を取ります」

「貴様つ……！ なめるな！」

目の色を変えた相手が、剣を構える。

それが。死闘の合図になった。

人がごった返す洞窟の中で、知った顔を見つけた。

「お、なんか忙しそうだな、カシル」

「貴様か、センエイ・ヴォルテッカ。」

「ってうわ！？ なんだその傷、えらく負傷しているじゃない

か
「それでもないよ。仮にも戦神に斬られたんだ。こりゃ軽傷のうちさ」

「い、いきなりな奴だな。というか単身であれに挑んだのか。よく生きて帰ってこれたな、おまえ。信じられん」

「ん。まあ魔女なんて根本的に信じられないもんだがね」

「おまえは特別だろう」

「そうかな。んーまあそうかもしれん」

「治療するか？」

「いい。だいたいの処置は自分でやったし、君らも忙しいだろ」

あたりは、負傷者の搬送やらなにやらでだいぶごった返している。

「とはいえ、戦闘は終わってるみたいだな。なにがあったんだ？」

「いや、それがな。敵が急に消えたんだ。」

どこにいったのかもわからなくてな、いちおう周囲を警戒し続けてはいるんだが

「敵が消えた、ねえ。前触れもなにもなく？」

「いや。そのとき前線にいた兵士の話じゃ、狼たちが一斉に戦闘を停止して、後ろに向き直ったらしいんだ。それで、急にぜんぶ消えた」

「死んだって感じじゃないな、それだと」

「ああ。親玉の狼も倒してないしな」

びく、と眉が上がる。

「親玉？ 初耳だが」

「なんだよ。報告が行ってないのか？ バルメイスと遭遇して、あいつが魔王とか呼ぶでっかい狼を置いていったんだよ」

「ああ、そうなのか。」

いや、本隊とはちよつと別行動取ってたんでね。ここしばらく情報をもらってないんだ。

魔王ねえ。すると、それが狼どもの本体かな」

「……本体？」

「ああ、あんたたちは気づかなくても無理はないな。

この狼な、ぜんぶ影だよ。光狼みたいな風体を装っているが、本体は魔狼だ」

そこらに散らばった死体を指して、言う。

「土台からおかしいんだよ。魔狼を最初に見たところから、アレは量産できるものじゃないって思っていたからな。

で、影じゃないかと考えた。魔狼を影として使役する魔王を呼び出したとすればつじつまは合うからな。爺さんも考えたもんだ」

「すると、この黒幕は」

「ああ、いや、それはないよ。もし爺さんが黒幕だとすれば、バルメイスなんて生かしておかないだろう。

たぶん爺さん、間抜けにもアレに殺されちまったんじゃないかな。で、その設備を乗っ取ったアレが、こうやって襲いに来ている、と」

「そうかい。まあそれはどちらでもいいが……」
うんざりしたように、カシルが言った。

「問題はだ。どうして敵が消えたんだろうな？ それがわからんと警戒も解けん」

「ああ。それが。それは簡単な理由だろう」
「？」

「いいか。君らはこちら側の主戦力だった。いくら神話の軍勢だったってこの規模の戦士団は普通に脅威だからな。故に敵は主戦力を君らにぶつけたんだ。

それで、それが君らの前から姿を消した。 なら、答えはひとつだ」

「とどうと？」

「もちろん、君らを上回る脅威が現れたのさ。この戦場のどこかに」
な

「うわああああああ!？」

悲鳴。

その悲鳴とともに、空間から十数体もの狼が出てきて、わたしに向かつて突撃する。

わたしは 見向きすらしない。

しないが、周囲の短刀群が自動的に反応した。

ざくざくざくざく、という鈍い音。それで、その狼たちが一斉に絶命する。

……弱い。

いちおう彼らも微弱ながらイェルムンガルド外殻を帯びているのだが、わたしの短刀には魔術の加護がある上、いまのわたしのイェルムンガルド外殻の力がそれらを相殺してしまう。

そうするともう、この狼たちはただの狼でしかない。はっきり言えば、敵にもならない。

なるほど、たしかに逆さ捻子と同じだ。時間を経て増殖はするが、強くない敵。

わたしにとつて、最も相性のよいタイプだ。

「おまえ、おま、おあ、まえ、おまえは、なんだあああ!？」

「煩い。 雑音を囀るな」

鼻をつく異臭に眉をひそめながら、言う。

……あたりはすでに、人の領域ではない。

足の踏み場もないくらいの死体、死体、死体。数えてはいないが、たぶん千は超すだろう。

たいした量はいなかった。楽でいいと思う。

「親玉はどこ。言いなさい」

「ひ、ひは、ひ……!？」

「言いなさい」

「あ、あ、ああ……!」

震える指が、洞窟の一方の通路を指す。

「そう。じゃあね」

背を向け、歩き出す。

その、背後で。

「は、は、あ、あは、あははははは……！」

油断したなあ！ 魔王、行けえ！」

声とともに。ぞん、という音がして、空間からなにかが猛烈な勢いで飛び出してきた。

「そうね。それを忘れていた」

振り返りすらせず、つぶやく。

「フォーム陣形『ソードダンス剣乃舞』、レテイ準備

ついでだから。その首くらいは取っておく」

ぱちん、と指をひとつ鳴らす。

背後で、獣の悲鳴が響いた。

「ぐ、があ……」

どす、と、片膝をつく。

それでも、なお眼光は鋭く。

斧は手放さず、こちらをにらみつけている。

「我が最強の技を食らって、なお息絶えぬか

今日は二人目だ。正直、傷ついたぞ。岩巨人」

「……………」

「ふん。だが、それも終わりだ。素晴らしい戦士だったが、神格差を埋めきるには一人ではどうにもならん」

「そのようです。残念……ですが」

「で、そろそろよかろう。なにが目的だった、戦士」
問う。

「いい加減話してもよかろう。貴様の強さに敬意を表して、策略には乗ってやった。ならばそろそろタネを明かしてもらいたいものだ」
「……それはできません。私は、そのタネとやらを知らないのですから」

「なに？」

相手は苦しげに息を吐きながらも、淡々と答えた。

「ただ、私は主の指示に従ったまでのこと。その指示がなにを意味するかについては、なにも知りません」

「馬鹿な。では、貴様は自分がなぜ戦っているかすら知らぬというのか」

「然り」

呆れた。呆れた阿呆だ。

「理解できないな。貴様ほどの優秀な戦士が、木偶のように他人に仕えるなど。」

主に不満は持たぬのか？ 自在に力を振るいたいとは思わぬのか？
「そうでないならば、その力はなんのためにある」

「……理解できぬのはお互い様でしょう。我が力は、ただ、奇跡の実現のために」

言い残し、相手は沈黙した。

「気を失ったか まあいい」

とどめを刺そうかと思つて、思いとどまる。

「結局、名を名乗らなかつたか。これでとどめを刺すのは些か不本意だな」

あの技を食らつてなお、生きた褒美だ。首くらいはつなげておいてやろう。

ともかく、今は本来の用に戻らなければならない。

様子を見るために意識を集中する。

……？

(これは……なんだ?)

反応がない。

あの無能に権限の一部を委譲したとはいえ、自分が根本的にあの魔王の主であることには代わりはない。

だから、彼らを通じて情報が入ってくるはずなのだが……

(一切、情報が返ってこない　ち、まさか魔王が我が支配下を脱したか?)

それは神話の律からすれば恐るべきことだったが、自分にとっては今更どうということもない。

ただ、機能を使うことができないのが不便ではあった。これでは戦場の情報を見ることができない。

(　やむを得ん。奴の神力を頼りに追うか)

手こずったせいかだいぶ相手には離されてしまったが、まだなんとかなるだろう。

最悪、竜母とやらと戦うことになるが……

「この程度で切り札を使い果たしたと思うなよ、雑魚ども」

不敵に笑ってつぶやくその足下に、得体の知れない気配がうごめいた。

そして、ナーガの巣に到着。

「よう、来たぞ」

「どうもー」

「お、やっとか」

「ライ兄ちゃん、お疲れっ」

魔人たちと挨拶。どうやら、無事に合流できたみたいだった。

あたりは、岩巨人の避難民達でこった返している。

広い空洞ではあるが、やはりこれだけの人数がいると手狭に感じるものだ。

「案外、弱かったみたいだな。相手の襲撃」

「弱くはなかったぜ。ただ、不自然なタイミングで相手が退いていった。助かった」

「へえ？」

「あと、どうもア・キスイが事前に予知していたらしくてな。襲われることを察知して防ぐ指示を与えていたらしい。それで持ちこたえることができた」

「そうなんだ。……で、そのキスイは？」

「ああ、そっちにいるはずだが」

なぜか渋い顔で、コゴネル。

「どうした？」

「あーまあいいや。とりあえず行ってこい、わかるから」

首をかしげつつ、コゴネルの指したほうへ行く。

果たして、そちらにキスイはいた。

……いた、のだけど。

「ただだだっって怖いじゃないですか戦神ですよ戦神！？ ていうか逃げさせてー！ うわーんっ」

「ええい、貴様それでも誇り高き竜母の端くれかつ。根性入れてくれるからそこに直れっ」

「ひー、助けてえええー！」

「風情有りますねえ……」

「まるまる」

「うん、なにも見なかった」

「待ちなさい」

がしっ。とリッサに肩をつかまれる。

「離せ。あんなちびっこ怪獣につかまってたまるかつ」

「いいから来るのっ。ていうか、あれそろそろ止めないとまずいで

しよっ」

「知るかつ。ていうか他の奴に頼め」

「ライ以外に止められるひとがないじゃないっ。両方とも知り合いたいだし、立場的に仲裁しても格好が立つしっ」

「いつから俺はそんな中間管理職的な立場になっただよ……」

まあ、岩巨人たちや魔人が仲裁するのもアレではあるが。でも神官の仕事のような気もしなくもない。

「うひひ、貴様わきの下にはウロコがないな？ そーれ、こちよこちよこちよ」

「うひゃあああああ！ やめてー！ いじめ反対いじめ反対！」

「あー、そろそろじゃれ合うのは終わりな、ふたりとも」

「ああっ、あなたは!?!」

「む?」

振り向いたキスイが、不愉快げに鼻を鳴らした。

「ふん、誰かと思えばいつかのエセ神族ではないか。いまは忙しいのでおまえとの決着は後回しだ。命拾いしたと感謝するがよいぞ」

「あーはいはい。で、わかったからそろそろそいつは許してやれよ」

「む。まあよかろう。使い物にならない奴にこれ以上当たっても時間の無駄だしな」

「そう思うんなら最初からやるなよ……」

根本的にいじめっ子なんだろうなー、となんとなく思う。

と、ナーガが涙目で、

「そそそ、そうですよ。時間は一刻を争うことになってるんですから」

「え、なにが?」

「ただ、だって戦神が来るんですよ？ 逃げなきゃ怖いですよ」

「たわけっ。そやつから皆を守るのが貴様の役目であるっ」

「む、無理ですよ。怖いもん」

「……ま、予想できた展開ではあるが、やはりこうなるか」

そうすると、次はどうするべきかなんだが。

「仕方ない。非戦闘員は逃がして、俺たちで迎え撃つか」

「ふふん。その必要はない」

「あん？　なんでだよ、キスイ」

「こんなこともあるうかと、細工はしておいた。　ジロロー！」

「ここに！」

「ざしゃあつ！　と、無駄に勢いよくやってくるジロロ。」

「どうなった？」

「ちょうどいま、確認にいった者達が手当てをしているところだそうですね。再戦は無理でしょう」

「む。奴がいないのは苦しいがやむを得ぬな。名さえ名乗らねば生き延びられるであろうと予知したので投入はしたが　」

「おい、なんの話だ？」

「決まっておろう。戦力が足りぬのであれば援軍を呼ぶのが一番よい。時間を耐え抜きさえすれば勝てる女王が予言しようぞ」

「援軍、つてなんだよ。カシルのことか？」

「む。それも期待はしていたがな。だが　」

「なにかキスイが言おうとした、そのとき。」

「間に合わぬよ。悪いがな」

「!？」

轟、と烈風が吹いた。

否。あまりにも巨大な神的暴威が、そう錯覚させたのか。

空洞の入り口。そこに、そいつは立っていた。

「テメエ　バルメイスか」

「よう。来てやったぞ、人間」

バルメイスは邪悪な笑みを浮かべて、俺を見た。

「ふん……前に乗っ取ったときには気づかなかつたが、こんな餓鬼に手こずらされていたとはな。我ながら情けない」

「な、なに言ってるやがる！　おまえだってガキだろうが！」

「ん？　ああ、この姿か？　仕方あるまい。おまえの姿をコピーした以上、餓鬼にならざるを得ないだろう？」

「テメエ！ 俺はそこまでガキじゃねえ！」
『嘘つけ』

……そこでなんで唱和しますかみなさん。

バルメイスは小さく鼻で笑い、

「まあよい。 ずいぶん奇妙に引っかけ回されたがな。 いい加減、この茶番にも幕を下ろしたいところだな」

「……………おい」

「ん？」

初めて。そこでヤツは、キスイのほうを見た。

キスイはきつい顔で、バルメイスをにらみつけている。

「なんだ。 巨人の眷属か？」

「はは、慌てるな。 その人間を料理した後で、じっくり貴様もなぶり殺してやろう。 いまはしばし待て」

「目的はなんだ。 悪神、貴様はなんの目的で此処に攻め入ってきた」

「ああ。 目的ね。 目的。 そうだな。 かつてそいつにしてやられた憂さを晴らすため、というのはどうだ？」

「ふざけた言いくさだな。 まじめに答えろ」

「そんなことを言われてもなあ。 元来、戦とは大した目的があつてするものでもあるまい？」

まあ、あえて言えば。 その人間を殺せば我も完全に力を取り戻せるであろうが。 実はそれはどうでもいいので目的にはならんな」

「では、貴様は」

「そうだ。 別に理由はない。 ただなんとなく皆殺しにしたくなっただけだ」

どっかで聞いたようなことを言う。

……最近流行ってるんだろうか、そういうの。 迷惑だなあ。

「ははは、そろそろ観念したか人間？ だが残念なことにな、楽には殺さぬぞ」

「あーそーかい。 まあ殺されるつもりもないけどよ」

「ほざけ。 どれほどの隠し手があるか知らぬが 戦神に通用する

と思うなよ?」

「……ざけるな」

キスイが、小さくつぶやいた。

バルメイスはもうたいして関心がないという調子で、

「どけ、小娘。貴様の料理は後だ」

「ふざけるなあっ!」

「うわあああ!?!」

「どごう! と音すら響かせ、凄まじい神力の波がほとばしった。

「そんな理由で! そんな理由で貴様! わらわがしもべどもを殺したのか! 悪神!」

「驚いた。どの神格かは知らんが、完全に降臨させることすら可能な器とはずいぶん珍しい。

が。それでは貴様が保ためだろう?」

邪悪な笑みを浮かべて、バルメイスが言う。

「現状で3級。一瞬だけであれば2級。
主神クラスの神格を操れるのは立派だがな。すぐに倒れるのでは話にならない。

それにだ。たとえ2級の神格を持つとも、貴様の司るものは戦ではあるまい。格下とて戦神と対抗するには無理があるっ」

「……く」

「観念してどけ。面白いものを見た礼だ。素直に道を空ければ命だけは助けてやるっ」

「……くく、くくく」

「なにがおかしい、大巨人」

冷や汗にまみれた顔をゆがませ、キスイは相手をにらみ返す。

「一時はどうなることかと思ったがな 間が保った。後は任せろ、人間」

「なに?」

バルメイスが、背後を振り返る。

そこに。魔女が立っていた。

「サリ……?」

むっつり口にいつもの眼帯。手には血にまみれた剣と、そして、その身体を取り囲む、無数のきらめく刃。

……なんてこったい。

(せっかく、魔女なんて物騒なものから足を洗えるいい機会だったのになあ)

勧めはしなかったけど。べつの人生を歩むには、ちょうどいい引き時だと思っていたのだ。

けどそれは、どうも余計なお世話だったらしい。だって。

このサリは、もうこれが魔女でなくてなんだというのだってくらいに禍々しくて、そして綺麗に迷いがなかったのだ。

まるで。

それが自分の進む道であると、そう、無言で主張しているみたい

に。
「ほっ、見た顔だな」

「そうね」

「……それで。これっぽっちが貴様の言う援軍か、大人」

ざざざざざつ、と、魔人たちがバルメイスのまわりを取り囲む。

「サリ、援護するぞ!」

「要らない。下がってて」

「……は?」

コゴネルの目が点になる。

「ライ。相手の足下に注視して」

「え?」

「そこに魔王がいる。隠し玉のつもりみただけど、わかっ

ていればどうってことない。ただ邪魔されると面倒だから、そう

なったらみんなと一緒に倒して」

……あー。話についていけないです。

「ふむ。聞き間違いであればよいのだが」

ヤツが、嫌みったらしく言う。

「それは、我に一騎打ちを挑むということか？」

「そうなるわね」

「大変けっこうなことだ。貴様、見たところ亜神のようだが
じわり、と、バルメイスの身体から邪気が出る。」

「その程度で戦神たる我に勝てると思っっているのか。下郎」

「勝てるかどうかは、やってみないとわからない」

サリはあっさり言う。

「でも、多くいてもあなたには無駄でしょう。だから一人で十分」

「なんだと……？」

「ずいぶん多くの神威カマイを持っているのね。近づいた相手を下から串刺しにする技。視界内の相手を無数の見えない槍で滅多刺しにする技」

それらの前に、多くの戦士達は時間稼ぎにもならないでしょう。

だったら一人でやったほうが気楽だし、なにより誰も死ななくて済む」

……沈黙。

「貴様、我が神威カマイを何故知っている」

「見えるから」

「なに？」

サリが、眼帯に手をかける。

「わたしには見える。一瞬の後、一呼吸の後、一合の後に　あな
たに殺されるわたしの姿が、見える。」

その死が、わたしにあなたのすべてを教えてくれる。こうすれば
死ぬ、という未来がわかる。ならば……

未来が見えない行動を選択すれば、死なない。だから勝てる」
眼帯を捨てる。

突き抜けるようになにかを見通す目が、バルメイスを射抜く。」

「 貴様、何者」

たじろいた戦神の質問に。

「いまは、サリ・ペステイと名乗っている」

静かに、彼女は答えた。

そして。

「フォーム陣形『ソードダンス剣乃舞』、レライ準備。」

行きます」

「ぐ、亜神ごときがつ……舐めるなあ！」

叫ぶバルメイス。

その周囲に、光の腕が何本も現れて、

そしてそれらが行動するよりはるかに早く近接したサリの短剣を、

バルメイスはかるうじて剣で受け止めた。

ぎいん！ という澄んだ音。

「は、早い……!?!」

「そう こっちは、見えない！」

矢継ぎ早にサリが剣を繰り出し、バルメイスがかるうじてそれを
受けつつ後退。

「くそ、ならばこれで」

地面が割れ、そこから大地の槍が何本も現れ出てサリを狙う。

が、

「このルートなら見えない！」

空中に静止した短刀を矢継ぎ早に乗り移っていき、ことごとくを
避けきつた挙げ句、上空から短剣を一闪。

「！ 鎧よ！」

がちつ、と光でできた鎧が短剣を受け止める。

が、

「このタイミングなら攻めても見えない。」

フォーム陣形『カグツチ迦具土』、ゴ実

行！」

「な、にい！」

サリの号令と共に、それまで宙に固定されていた短刀が一斉にバルメイスに牙を剥く。

怒濤のごとく降り注ぐそれはバルメイスの鎧を傷つけつつも弾かれたが、そこからさらに魔術でできた短刀状のビームを出してバルメイスに向ける。

思わず顔をしかめ、数歩後ずさったバルメイスだったが、

「……だがいまなら、先ほどの回避はできまい！」

声とともに、ごう、と風がうなり、透明な槍状の力場がいくつも生成される。

「！ 陣形『ソードダンス』、復元」

「遅い！」

バルメイスの声と共に見えない槍が発射され、サリを串刺しにする。

「……はずだったのだが、そのサリの姿がかき消えた。

「な、幻影!？」

「見えないと言ったはずよ」

「ぐ!？」

がきい、と、背後からの剣閃をバルメイスがかろうじて受け止める。

すい。

状況は、もはや異常と言えた。

攻撃威力で言えば、サリがバルメイスに勝つ方法はまるでない。

バルメイスの攻撃は一撃でサリを殺すに十分だし、逆にサリの攻撃は当たってもほとんど気休め程度のダメージしか与えられない。

しかし 現実として、戦いは成立している。

否。サリが、バルメイスを圧倒している。

一撃死の可能性があるバルメイスの攻撃をすべて完璧に避けきり、防御のタイミングを的確に見通して攻め立てていく。

恐ろしいほどの行動速度、短刀との立体的な連携、魔術による追

撃　そして予知能力による補助。

それらが揃ったとき、人はここまで強くなれる。
まるで、ある種の芸術作品を見ているかのようだった。

(そういえば、サリの戦いを傍観するのは初めてだったっけ)
戦慄と共に納得する。

これがサリ・ペステイ。

伝説の　生きる伝説となった、偉大な魔女の姿だ。

「がはっ……あああああ！」

何度もの攻防でダメージを負い、怒りに顔を歪ませたバルメイスが、吠えた。

そして目にも止まらぬ速度で後ろに飛びずさり、構える。

「屈辱だ、屈辱だぞ！　まさか、日に三度もこの神威カムイを使うまで追いつめられるとはなああ！」

「そう。来るのね」
つぶやいて。

追撃に走ることはせず、サリはその場で身構えた。

「……は！　貴様、それで防げるつもりか！」

「何度も言っているはずよ。この選択肢を選べば　未来は見えない」

「ほざけ……！　亜神ごときが我を愚弄した罪、償ってもらおうぞ！」
ぐぐぐ、とバルメイスの剣に力がこもる。

……状況からして、あいつの技は一発にすべてを賭けた必殺技。
そして、サリはそれを見切つて返すカウンター！

次の一撃で決まる状況に、みんなが固唾を呑んで見つめている。
もはや戦いは、異世界と呼んでよい水準に達している。

あまりに異様なソレに、誰一人として口を挟めない。

(……あれ？)
だというのに。

俺は、それに気づいてしまった。

バルメイスが……動いていないはずのバルメイスが、ゆらりと動

き出す。

それはゆっくりとサリの前に歩いて行き、剣を振り上げる。

サリはそれにまるで気づいていないかのようにどこか遠くを
つて、

(やばい！ なにやってんだよ、あいつ！)

「ああもう、世話の焼けるっ」

「わ、ライ！？ ちょっとっ……………」

制止するリツサを振り切り、駆け出す。

(間に合え！)

「！？ ライ……………？」

「オオオオオオオ！」

ばきん、という音がした。

「うわっ……………！」

「あっ……………」

どさどさっ、と、折り重なって地面に倒れる。

慌ててサリを引っぱって回避させるつもりが、勢い余って押し倒
してしまった。

「いちち、頭打った……………」

……………おろっ？」

起き上がりながら、きよろきよろと頭を動かす。

さつきまでサリの目の前にいたバルメイスの姿が、ない。

それどころか。

にらみ合っていたときとまったく同じ位置で、相手は微動だにし
ていなかった。

というか、硬直していた。

もつと言つと、凍り付いたように動いていなかった。

「なにが……………なにが起きた」

「あん？ いや、サリを押し倒してどかしたただけだけ」

「馬鹿な 馬鹿な馬鹿な！ そんな馬鹿なことがあるかあ！」
「うわ！？」

相手が錯乱したように、光る腕を出してこちらに叩きつけようとする。

が、それは俺に届く前に消えてなくなった。

「なにいい！？」

「……………あれ？」

「おのれええええ！」

大地が盛り上がり、槍となって俺を貫こうとする。

だが、完成する前にあっさり砕け散った。

「なんだとう！？」

「えーと……………」

「くそ、くそおおおお！」

見えない槍が俺の身体を串刺しにしようとする。

が、届く前に砕け散って消えた。

「き、貴様ああああ！ な、なぜ我が神威カミイが効かぬのだああああ

！？」

「俺が知るかよ……………」

「くそ、食らえー！」

剣で斬りかかるうとするバルメイスだったが。

「よっと

「ぐえ！？」

避けつつ足払いをしたら、あっさりすっころんだ。

……………えーと。

「ひよっとしておまえ、すごい弱い？」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「うっ？」

「うわーん！ 覚えてるおおおおお！」

相手は泣きながら、その場を走り去っていなくなった。

後には、なんだか微妙な沈黙が残った。

(……俺か？ 俺が悪いのか？)

自問する。なんかガキをいじめたような罪悪感が。

「あー、まあ。なんだ」

つついつつぶやいた俺の目と、起きあがったサリの目が合う。

……まあ、いろいろあったけど、とりあえず。

「おかえり、サリ」

「ただいま。ライ」

十二日目：悪党、作戦会議をする

「ほう　生きていましたか」

目の前の幻像を相手に、彼は言った。

「まあ、ちと怪我したかな。」

事前にレイクルに身代わり人形を作ってもらっておいて正解だったわ。あれがなければ、いまごろ僕は真っ二つよ」

「あの変態的な人形遣いですか。案外役に立つものですね。」

と　それはそれとして。あの戦神とやら、どうするのです?」

「ああ、さしあたり魔王は回収した」

あっさり、幻像は言った。

「できたのですか?　そんなことが」

「ふん。僕を誰だと思っておる。」

あの程度の混沌、きちんと対策すればどうとでもなるわ。まあ、存在を消すのは少し難しいかな。

そうだな。タイミングを見て、本体にも働きかけよう。我らの仲間として働くように」

「御せる相手ですか?」

「餓鬼ひとりを操ることなど造作でもないわ。」

ま、そのへんは僕に任せておけい。貴様は　そうさな。もうその集落近辺は気にしないでよかるう。そろそろ、先手を打って動いておくがよい」

「ふう。仕方ありませんな。」

時に、我らが王子殿は?」

「ああ。予定が狂ったのでな。奴にも声をかける。」

どうせいまさらあちら側には戻れまい。ならば、交渉次第で奴もこちらにつくであろうよ」

「なるほど。しかし、そこまで人を集めるとなると……?」

「知れたこと。例の作戦に切り替える。」

おまえにとつては本望であろう？ 元々、推していた方向だからな

「まさに《Amen》。素晴らしいことです。

では、その形でよろしくお願いしますよ」「
幻像が消える。

「さて。うまく行けばよいのですがなあ。

これだけ投資したのです。元が取れてくれないと困りますな」「
つぶやく声を、誰も聞いていなかった。

「くそ、くそ、くそっ……！」
歯ぎしりする。

退いたのは正解だった。

あらゆる技が通用しないという異常事態に、いったん態勢を立て直すというのは悪い判断ではない。

そう、判断は正しかった。

我慢がならぬのは。退くという判断が自身の臆病風ではなく、正しいものだったというその一点。

「ちくしょう……！ ライナー・クラックフィールドめ！ 覚えていろよ、貴様に地獄、を……？」

ふと、あたりを見る。

森の中でも洞窟の中でもない。見たことのない砂漠。

遠くにはものすごいでかい建物があって、それが無限に続く砂漠の風景をさえぎっている。

……なんだ、ここは。

ふと足もとを見る。

自分がホールドしていた魔王の気配が、さっぱり消失していた。

「な、……なにが、起きた!？」

「あー!」

「ん？」

声に振り返ると、見たことがない岩巨人族のガキが　いや、見たことが、あ、る　？

「この腐れ戦神がー！　成敗っ」

「あいた!？」

いきなりすねを蹴られる。

「こ、この、貴様なにをするかー!」

「うるさい死ね悪神めがー！　わらわのしもべを傷つけた罪、その身体であがなわせてくれるわっ」

「うらー!」

「ふがー!」

じたばたと暴れ回る。

というか、

「か、神の力が出ない……!　おいちび、貴様なにをした!？」

「そんなもん知ったことか!　というかちびと言っな!　おまえだ

ってちびのくせに!」

「なにをこのー!」

「やるかー!」

「はいはい二人とも、その程度で止めておくように」

いきなり湧いて出た言葉に、ぎょっとして動きを止める。

女、だった。

東方風の衣装と、眼鏡が特徴的だ。年齢はよくわからない。外見から判断すれば17、8くらいか。

が、外見だけで計れそうにない、妙な重圧があった。

がきんちよのほうは、む、と眉を寄せて、

「パルメル工ではないか。貴様が図書館から出てくるとは珍しいな」

「騒がしかったので。」

初めまして、と言っべきでしょうか。混沌のバルメイス、戦神の

片割れよ。

我が名はパルメル工。現在、神託の巫女にして聖典の管理者、無限図書館ムレス・レコーズの司書を務めております」

「混沌の……！？　なんだ、その呼び名は！？」

聞いたことのない単語に、戦慄と共に尋ねる。

相手は、特に目立った感情を見せなかった。

「昔からそう呼ぶのですよ。神話システムのバグによって生じた実体のことを。」

普通は自動でフィックスされて消失するのですが　あなたの場合、複雑な事情によって消すことができなくなっておりますので。その子と立場は同じですね」

「む。そうなのか」

なぜか胸を張る、がきんちよ。

「こん、とん。神話の、バグ、だと？」

「ええ。」

まあ、ライナー・クラックフィールド＝バルメイス氏の影というところでしょうか」

なにかが切れた。

「貴様、訂正しろ！」

見えない槍を大量に出し、相手に叩きつけようとする。
が、

「『読み手は』『拒む』『神話の』『修正を』」

がつん、と世界が揺れた。

相手の、よくわからない、そのくせ意味だけは身体に浸透してくる言葉。その言葉を聞いた途端、世界そのものが揺れ　槍を、すべて打ち砕いた。

「な、にい　！？」

「聖典の読み手に運命律の操作は無意味。」

それ以前に、事実を暴力でねじ伏せようとしても無理でしょう。
落ち着きなさい、混沌のバルメイス」

「事実だと!？」

「ええ」

彼女は淡々と、まるで事務手続きでもしているかのように言葉を紡ぐ。

それが、こちらにとってどれほど致命的なものであると、一切意に介さないと宣言しているかのように。

「神話における次の記述 『バルメイスは狂神である』 『バルメイスの剣を抜けるのはバルメイス』 『ライナー・クラックフィールドはバルメイスの剣を抜ける』 の3点により、ライナー・クラックフィールド^{II}バルメイスは狂神でなければなりません。

そのため、彼は狂う予定だったのですが、誰か おそらく女王^{クイーン}とカイ・ホルサがその呪を被ってしまったようです。結果として、「狂う予定だったライナー・クラックフィールド」は宙に浮き、混沌となつて現世に残った。

それがいまのあなた。混沌のバルメイスです」

彼女は最後まで事務的に言つて、言葉を閉じた。

……意味が、よくわからない。

わからないけれど。

「では、我は……俺は、バルメイスでは」

「当然、別人です。本物のバルメイスなど、とつくの昔に死んでいきますから。」

まあ、神話はあるとライナー氏を両方ともバルメイスだと認識しているようですが」

司書、パルメル工は淡々と言う。

「本来なら混沌は消えるが定めなのですが、あなたは役割を終えていない。」

ライナー・クラックフィールド^{II}バルメイスが狂うか死ねばあなたも消えるのですが、いまのところその様子はありませんので。当面は消える心配は

バルメイス。聞いているのですか、バルメイス？」

呆然と、立ち尽くす。

狂神でないなら、俺はいつたいなんなのか。

否。……俺という存在は、そもそもなんだったのか？

単にそうあるべきと思つて暴れ、殺し、戦つた。

そうあるべきと思つたのに。

「俺は どうすればいい？」

問いに、司書は関心がなさそうに肩をすくめた。

「さあ？」

その程度、自分で決めなさい。せつかく生きてるのだから」

「で、俺はなんで本の片付けなんかしてるんだ……」

「ぶつくさ言つな。お菓子のためにきりきり働けーいっ」

「……………おまえも働けよ」

疲れた顔で言う。

『暇だつたら作業を手伝ってください。報酬のお菓子くらいは出しますよ』

とパルメルエに言われ、なんとなく流れ的に図書館の一室に通され、こうして片付けを手伝っているのだが。

(あいつには絶対見せられないな)

あの、ライナーとかいうガキ 否。俺の本体のことを思い返す。あいつはぜったい指さして笑う。根拠はないが、ぜったいだ。

「というか、俺はなんで無の砂漠イメンス・サハラなんかにいたんだ。さっぱりわからない」

「ん？ ああ。なんだ、そんなことで悩んでいたのか貴様？」

くだらない、というような調子で、言われる。

「なんかよく知らんが貴様もわらわと同じようなものなのだろう？
なら、同じように本体のところと聖典世界を行き来できて当然ではないか。なにを疑う」

「……………同じ？」

それは、つまり。

「おお。なんでもパルメルエによると、わらわはその、とんとん？」

「混沌」

「そう、それぞれ。それなのじゃと」

なぜか胸を張って言う。

「よくわからん。おまえ、あの巨人の中身に入っていた奴だろう。

自分が巨人の本体でない、それでいいのか？」

「ん、まあべつにわらわが女王クイーンであるということには変わらぬじゃろ？」

「えー」

「なんじゃその態度は。」

貴様だってそうであろう、悪神バルメイス。ほんたうだろつがなんだろつが

「混沌」

「……混沌だろつがなんだろつが。貴様はバルメイスでわらわは女王クイーンじゃ。

ほれ、パルメルエも貴様をバルメイスと呼んでおったではないか？」

「それはそうだが」

「おうおう、あつたあつたこの本じゃ！」

「……片付けてるんじゃなかったのかおまえ」

「いいから見よ。わらわについての記述がある本じゃ」

言つて、本を差し出してくる。

ラベルには、「外典 女王について」とあつた。

ぺら、とめくると、そこには。

終末の刻。

最後の王国に、七人の賢者が集う。

『女王』は座して視る。

賢者が剣を抜き、

かくして打ち砕かれた剣の塔は終焉を迎える。
混沌は放たれ、
終末は始源に至り、
すべてがすべてになる。

「……意味不明だな、って痛っ！」

「貴様わらわを侮辱するかー！」

「おまえマジブツ殺すぞこらー！」

「ふんぬー！」

「うらー！」

「やめなさい二人とも。……xxからxxxぶっ刺してxxの餌に
しますよ？」

びた。動きが止まる。

「パルメル工は、ふう、と吐息して、

「わかればよろしい。」

「……まったく、こんなに散らかして。これでは片付けを頼んだ意
味がないではないですか」

「ふん、わらわの本を侮辱したこいつが悪いっ」

「わらわの本……ああ。あの外典ですか。また取り出したのですか」

「外典？」

聞き覚えのない言葉だった。

「パルメル工はうなずいて、

「ええ。間違っていることが発覚した神託、あるいは間違っている
と推測される神託は外典と分類され、この書庫に移動されます。」

その本もそのひとつ。女王^{クイーン}について記された、神話における唯一
の記述です」

「……唯一、だと？」

「ええ。」

意外に思われるかもしれませんが。岩巨人族から信仰を集める女^{クイ}
王は、聖典にはほとんど記述がないのですよ」

それは、確かに意外だった。

あれほど強力な神格であれば、神話の中に記述がどっさりあつてしかるべきだと思うのだが。

逆に、それしかないのになんでその女王クイーンとやらは重要な神格として位置できるのか、疑問と言えば疑問だ。

……まあ、それより。

「間違つてるんだつたら意味ないじゃんその本、つて痛っ！」

「貴様わらわを侮辱するかー！」

「……いや、いやいやいや。実際問題そうだろ。神託とかそういうのが間違つてたら、ぜんぶ台無しじゃないのか？」

パルメル工にそれとなく同意を求めてみる。

が、彼女は苦笑して首を横に振った。

「いえ、意味ならありますよ。」

というか、間違つていようがなんだろうが神託ですから。神話の力的な意味を持ちます。たとえば、この記述をなんらかのやり方でなぞれば世界を滅ぼすことも可能でしょうね

「……なかなか物騒だな」

「それが神話システムなのです。融通利かないんですよ、わりと。」

さて、無駄話はともかく。お菓子の用意はできましたから、休憩にしますか？」

「わーいつ。お菓子お菓子っ」

言つが早いか、ガキは部屋を出て行ってしまった。

「こついつときは迅速だな、あいつ」

「ええ。まあいつものことです。」

さて、あなたも来なさい？」

「……なあ。俺は、ここにいてもいいのか？」

「特に問題ないでしょう。暴れたりすれば別ですが。」

ほら、早くしないと紅茶が冷めますよ」

急かされるままに、部屋を出る。

……どうも、この場は調子が狂う。

調子は狂うのだが。

(いまのところ、ここにいるのも悪くないか……)
それを心地よく思う自分があるのも、事実なのだった。

「は？ 魔王？」

ハルカに尋ねる。

場所はいつも会議に使っている岩巨人族の広間。いつもの魔人連中を始め、リツサやキスイやジロロなど、主要な人間たちはだいたい集まっている。

ただし傷を負ったセンエイとドツソ、それから大活躍なサリには休んでもらっている。二人はかなりひどい傷だったし、サリはまだ新しい環境に慣れていないせいで、すごく疲れたみたいだった。

……まあ、それはともかく。俺は意識をハルカに向ける。

「その通りです、ライナー・クラックフィールド少年。

神話の力の乱れから、強大な外領域 通称、魔王の発生を感知しました。北東から南へ。おそらくはトマニオに向けて南下中です」

「おいおいおい。それって例のバルメイスの奴 」「

「ではないようです」

「……というと？」

「占術の類で、神格を追跡してみたところ、バルメイスの姿はありませんでした。

その代わりにあれを指揮していたのは、グラールネル・ミルツアイリンボ。我らの宿敵です」

ハルカが言うと、コゴネルがため息をついた。

「あのじいさん、生きていたってわけだ。バルメイスに魔王奪われた以上、死んだと思っていたんだがな。」

ち、厄介なことになってきたな」

「なあ……要するに、なにが起こったって？」

「ああ、つまりな。魔王　この前の狼の親玉みたいなのだがな。

そいつが、どういいうわけか聖地トマニオを直指して侵攻を開始した、
ということらしい」

「へえ。なんで？」

「知らん。」

が、グラールネルのじいさんが絡んでいるってことは間違いなくヤ
バいことだろう。下手すると世界の存亡に関わるレベルの」

「スケールでかいなー」

「まあ、そんだけやばい相手なんだよ、あのジジイ。

それで具体的には、ジジイはなにをやる気だと思う？　ハルカ」

「^{ザ・フル}愚者の再現」

「……　最悪だな」

「おいちよつと待て。それって要するに　」

「ほほ。確かに世界の存亡に関わりますな」

にわかに魔人勢が騒がしくなる。

……が、ちつともついていけない。

「なあ。どういいう話だ？」

リッサに尋ねてみる。

が、首を振られた。

「ごめん、ボクもわかんない。ア・キスイは？」

「わ、わたしも……」

「うん。やっぱり魔人さんたちにしかわからないみたいね。

ええと、そういうわけでテンさん。解説お願いできますか？」

「ほほ。よろしいでしょう。」

ではまず、聖典世界の解説から始めたほうがよろしいですかな

ばん、と手を叩いて、テンは言った。

「聖典世界の概要についてはご存じでしたかな？」

「あの、壁画に描かれていた世界だな。あれってどこにあるんだ？」

「どこにある……とはなかなかいいがたいですな。なにぶん、この世界の表面には出てこない部分ですから。」

「そうですね……まずは、この道具を見てもらいましょう。」

「言ってテンが取り出したのは、えらく無愛想な鉄の棒だった。」

「これが、なんなんだ？」

「スイッチを入れますとな　ほら」

「うお、透けた!？」

「すごい!」

歓声を上げる俺とリツサ。

一方でマイマイが真剣な表情で、

「　わあ、すごい。あれ、リアルタイムで対面の光景を幻視させる装置だよ、ライ兄ちゃん」

「へえ、そうなのか」

「まあ……あの程度の大きさでないとムラがかすぎて透けて見えないっていう失敗作なんだがな。あと振ったりするとすぐボロが出る」

「これ пей、そのへんの裏話は隠しておきなさい。」

さて、と　「

テンはスイッチを切って、装置をただの棒に戻した。

そして、ぱか、と棒の表面のふたを取って、中身を見せる。

見て、俺たちはうめいた。

「うわ、なんだこれ……」

「小さい歯車と、配線の山ですね。こんなものが　「

「一見きらびやかなこの装置ですがな、中はほれ、ごらんの通りという次第です。」

わかりますかな。いま我々がいる世界が、いわば装置の外観。それに比して聖典世界とは、装置の中身なのですよ」

……あー、なるほど。

「つまり、世界の裏方が」

「左様。」

この現実の世界と比べて、聖典世界は限りなく生の世界に近い。こんな綺麗に整った外観などしておらず、我々からすれば荒野に等しい。

その聖典世界ですが、とある儀式を通じることで、原理的には我々の世界のどこからでも入り込めるということになっております」

「原理的には？」

「左様。実際は無理ですな。条件を整えた『旅立ちの門』と呼ばれる施設があれば話は別ですが、そうでなければ」

「そうでなければ？」

「塩の粒程度の単位で、移動した聖典世界での出現位置がばらばらになります。当然人体は元の形を保てず、塵となるでしょうな」

うわあ。それはグロい。

「その『旅立ちの門』も、今や世界に現存しているかどうかも疑わしいものです。結局、安全に聖典世界に行くためには、管理者を訪ねるしかないでしょうな」

「その、管理者ってのが」

「トマニオにおわします、神託の巫女。当代はパルメル工様と仰られましたかな」

テンの言葉を受けて、コゴネルがうなずいた。

「ま、そういうわけだ。」

で、トマニオを攻めるってことは、当然その聖典世界を狙っているとしたかと思えないわけだ。普通に考えると」

「そこで問題になるのが、2000年ほど前に聖典世界を強襲した、^{ザ・フィル}愚者ことフィーエン・ガステイートの話となるわけです」

話を継いだのは、ハルカだった。

「フィーエン・ガステイートは自身が創造神になるために聖典世界に乗り込んだと言われています。」

数多の守護者を打ち破り、道無き道を踏破していくその行程は、想像を絶する凄まじさだったと聞き及びます。そして、それまで現存していた神や巨人の過半数を、行軍の過程で殺害したとも。

その死の行軍の果てに 彼は、世界の中心にして最果て、世界庭園^{デジ}を目前にして、神話に記されぬ巨人スールトと遭遇します。
激しい戦いは七昼夜に及び、その余波を受けて炎獄回路^{ムスヘルヘイム・サーキット}の炎が溢れ出し、山という山が大噴火を起こして世界を焼き尽くしました。
ついにはファイエン・ガステイトも敗れ去り 世界はその戦いのせいで、滅亡の一步手前まで追い込まれたのです」
「……つまり、今回もそんなことが起こる可能性があるってことか」
「そうです。」

再創世 世界を思うがままに作り替え、創造神として君臨する。
そのような野望を抱く者は過去にも少なくない。

グラーネル・ミルツァイリンボも同様の野心を持って、魔王を動かしているのでしょう」

世界を思うがままに。なんかすごい悪役らしい野心ではある。

コゴネルが吐息して、

「しっかし、あのジジイどうやって魔王なんて手に入れたんだか。わっかんねえのはそのあたりの事情だよな」

「それよりどうやって止めるかだろ、コゴネルちゃんよ。」

俺たちの仕事復活ってわけだなあ。えらく規模はでかくなつたがバグルルの言葉に、コゴネルはうなずいた。

「まあ、そうだな。依頼を受けて動いてるんだし、俺たちが動くのは義務だろう。」

ただでさえ、相手が動く前に息の根を止められなかったのは失態なんだ。どうにか挽回しなきゃならん。

すると問題は、トマニオまでの交通手段、ということになるわけだけだよ」

コゴネルはジロロのほうを見て、

「このあたり、転移門とかないのか？ 栄光の時代^{フランクス}のころにはかなり整備されていたんだろ？」

「ないことはないのですが トマニオまでは、無理ですね。」

百日戦役の頃、トマニオは敵部隊の奇襲を嫌がってメギド砦付近

の転移装置を根こそぎ破壊したんです。だから、あのあたりには転移門はひとつも残っていません」

「……そっか。それがあつたか。くそ」

「前に使った靴は？ あれならだいが早く着くだろ」

提案したのだが、

「二足しかありませんがね。」

主戦力だけをトマニオに先に送り込むというのも手ではありませんが

「それだけでもだいが変わったりするんじゃないか？」

「俺は反対だな。サリがない状況で、おまえやア・キスイがバルメイスにまた狙われたら大事だ」

「あ、そっか」

言われてみれば、コゴネルに言われるまでその可能性を失念していた。

ていうか、敵、多すぎ。

「そうになると、ア・キスイには安全のために俺たちに着いてきてもらう必要があるわけだが……」

「あ、ええと、それは問題ありません。世界の危機なんで、協力は是非にもさせていただきます」

「そっかい。それは助かる。」

しかし困ったな。陸路でトマニオを目指せばだいが遠いぞ。途中で転移門を使うとしても、2週間はかかるか」

「おいコゴネル、途中で海路使おうぜ海路。もう4日は短縮できるだろ、ほれ、前みたいによ」

「……船どうやって調達するんだよ、ばかバグルル。もう昔とは状況が違うんだぞ？」

「あ、そっか。……くそ」

そこで、しん、と静寂が降りる。

万策出揃った という感じだったのだが、

ばん、とジロロが手をたたく。

「で、ですね。皆さん、この際ですから切り札使っちゃいましょう」
「切り札？ そんなものがあるのか？」

「ふふふ ええ。前は不発でしたが今度こそ。てゆうか戦争にさえ狩り出されなければあのひとは頼りになるはず」

「あーそれで誰かはわかったけど。頼りになるか？ ナーガ」

「ばつちり問題なしです。竜体に変化した彼女に乗ったことのある私が断言します」

「うへー、そりゃ豪華な体験だな」

「てことは、あたしたちも竜に乗れるのっ？」

「ええ。優雅な空の旅をお楽しみくださいな」

「やったーっ。すごい楽しみーっ」

「まるまるー」

「風情がありますね」

盛り上がるみんな。

……まあ、おおむねこれで交通手段は確保できたとしても。

「それで、いったい何人くらいまでは乗れるんだ」

「そうですね 50人程度なら十分乗れるんじゃないですか」

「……それはとてつもなくでかいんじゃないか」

「竜母ですから」

えっへんと胸を張るジロロ。

コゴネルは吐息して、

「じゃあそういう方向で決まりだな。

……いざとなったらカシルの部隊をピストン輸送してもらって手もあるな、それだと」

「呼んだか？」

みんなが一斉に扉のほうを見る。

やってきたカシルは、明らかに不機嫌そうな顔で椅子のひとつに着席して、

「で、用件はなんだ。言っておくがあまり大きなことはできんぞ」

「なんだ。兵士に三行半でも突きつけられたか」

「そんなようなものだ。」

被害も大きかったが、それ以上に士気が低下していてな。命令しても満足に動かん」

「……まー、そーだろうな。奴らからすれば、主人が自分たちを見殺しにしようとしたわけだし」

「それだけじゃないさ。カミルヘイムの私兵だけじゃなく、傭兵のほうもダメだ。いい加減報酬のアテがなくなったことにしびれを切らしつつある。」

食料もいつまで保つかわからんし、兵たちの中ではもう国へ帰ろうという動きが主流だ。正直、抑えられる時間はそう長くないぞ」

カシルは投げやりに言う。

コゴネルは少し思案して、

「食い物と金か。そのふたつがどうにかなればいいのか？」

「ん？ ああ、そりゃ問題はなかるうが。はつきり言うが、高いぞ」？

「8000でどうだ」

「もう一声。ていうか桁上げる」

「無茶な奴だな。じゃ9000。これ以上はちときつい」
「乗った。何日で調達できる」

「とりあえず二日待て。それで話が付いたら連絡する」

「おい、ちよつと待てやコゴネル」

「ダメだ。もう決めた。フリーナスタルの家から出す」

「ええええ！？ それって」

「あー、悪いけど話が飛びすぎ」

さっきからついて行けてない。なんかリッサがいまえらく驚いていたが、そーいやフリーナスタルってどっかで聞いたことあるような……

「つーか、さっき言ってた8000とか9000ってなに？」

「金貨の枚数だよ。それでカシル達を雇うって話」

「……………あ、そー」

「問題は糧食だな。すぐ調達するのも難しいからまずはトマー
才の備蓄を貸してもらわにやならんが、相手が応じるかどうか……」
ぶつぶつ言いながら、コゴネルは考え込む。

……さっぱりわからなかったが、ともかく。

「まあ、戦力だけは整った。てことか？」
と、つぶやいた、直後。

「いやいや、それだけじゃ足りないな。諸君」

聞こえた声は、ここにいないはずの相手のものだった。

「せ、センエイ!？」

「よお。起きてきたぞみんな。ついでにデカブツもいる」

「ドッソ・ガルヴォーン、ここに」
うわ、ホントだ。

コゴネルがあきれた顔で、

「なんだよなんだよ。怪我して寝込んでたんじゃないのか？」

「正直しんどいさ。だが」

「事態は深刻です。寝ていられる状況ではないでしょう。」

魔女殿も同様の心胆のご様子で「

「ま、そういうことさね。」

時間が惜しいから本題に入るぞ。正直、我々は後手に回っていて
切り札が足りない」

センエイは空いてる席にどっかと座って、話し始めた。

「相手が魔王を動かした始めたのにはふたつの意味がある。ひとつめ
は戦力が整ったこと。ふたつめはこちらの戦力が見切れたこと。」

このままぶち当たって、よしんば魔王に対処できたとしても。だ
がグラールネルのジジイの目的がべつにあったとしたら？ 実はべつ
の魔王を隠し持っていて、こっちが魔王と戯れている相手に魔王
2が別ルートで聖典世界を目指していたとしたら？

「そんなことが、あり得るのですか、センエイ」

「なんだよハルカ。あり得ないと思うほうがおかしいさ。」

老グラールネルをなめるな。アレは狡猾で頭の切れる魔人だ。勝算

なしに軽々と駒を動かすという考えはしないほうがいい」

「……じゃあ、どうしろってんだよ？」

コゴネルの言葉に、なぜかセンエイはちらっとこちらを見て、

「そこで、ライくんにがんばってもらおう」

「は？」

「は？ じゃないだろ。現在いちばんの不確定要因は君だろ、ライくん。君が超強化とかされれば相手の目論見をひっくり返すのは十分可能だ」

「いや、いやいやいや。しかしだな」

「短期間の訓練ってのはな、未熟な奴ほど伸びしろがあるんだよ。サリがいまから訓練して倍の強さになるのは難しい。だがライくんなら別だ。」

というわけで、切り札の養成を行うのが

「私は反対です」

きっぱり。

ハルカが、えらく強い語気で言った。

センエイは眉をひそめて、

「なんで」

「なんでもなにもありません。センエイ、あなたのやり方には賛同できない。無関係の一般人を流れてむりやり戦力として引き入れるなど、魔人のやるべきことではない」

「？ え、どういうことだ？」

「もう少し考えて下さい、少年。センエイはあなたを言いくるめて、本来関係のないはずの戦いに無理やり巻き込もうとしているのですよ」

「おいおい。そりゃちょっと言い過ぎ」

「あなたは黙っていなさい、センエイ。」

少年、あなたはここで身を引くべきだ。剣の力などすべて忘れて、戦線から離れなさい。

でないと 覚悟もない者が戦場において、よいことなどひとつも

ない。不用意なタイミングで、不必要に命を落とすことになるでしょう」

脅してではない。本気の目で、ハルカが言う。

センエイはふてくされたように、口を閉ざしてしまった。

……覚悟。覚悟ね。困ったな。

(正直に言えば。ずっと前から俺は、テキトーな理由でテキトーに戦ってきた) そう思う。

最初に街を飛び出したときも。竜の財宝を狙ったときも。キスイを守って動いたときも。罠にかかったときも。サリを助けたときも。ぜんぶ、きつかけは単純で適当。かつこつきたいからとか、ノリでとか、トモダチを守りたいからとか、ちよっとした恩返し気分とか。

それでも。戦うと決めたら手は抜かなかつたし、後悔も……まあ、あまり、していない、と思う。

だが、ここから先はべつだ。

ここから先は死地。たぶん全員が真剣にかかって、それでも勝てないかもしれない。

そして、たしかに戦う理由はない。なし崩しで戦おうとしていたけれど、俺の立場はただの隊商の護衛。この状況は変わっていない。ハルカの言うとおり。俺はセンエイのいいなりになって、そのまま戦おうとしている。

それは

「ああ、そうだな。ありがとうハルカ。俺は誤解していた」

「では……」

「うん。センエイに言われた通りに戦うのは、やっぱりやめた。俺らしくないし、疲れるし」

はあ、とあたりからため息が漏れた。

「まあ、しょうがねえな。正直戦力的に不安は増すが、こっちもプ口だしな。意地でもやってみせるさ」

「あん？ なに言ってるんだ、コゴネル」

「いや、だから……」

「トモダチだろ。おまえらが必要とするんならいくらでも協力するぞ」

「……………あ？」

しばしの沈黙。

それを破ったのは、案の定センエイの馬鹿だった。

「あつはつはつはつはつはつは！ やっぱ君は馬鹿だな、ライくん！」

「……………おまえに笑われるとやたらムカつくんだが。センエイ」

「呆れました。少年、あなたはそれでいいのですか」

「ああ。俺の戦う理由なんてそんなもんで十分だろ。」

大義のために戦うとか、理由がないから戦わないとか、大悪党らしくもない。そんなつまらない理由で行動を制約されるのは、ごめんだね」

「ほ、本当にいいの？ ライ、キミ、今度こそ死んじゃうかもよ？」

「大丈夫だって、リツサ。大悪党が死ぬのは、いつだってえらい人に捕まって火あぶりって相場が決まってるんだ。魔術師や邪神に殺される悪党なんて聞いたこともねえ」

「そ、そういう問題かなあ……………」

「ああ、そうだ神官さん。あんたも手伝ってくれんかね？」

「え？」

「センエイ！ いい加減に」

「ハル力は黙ってるって。」

「な、いいだろ？ どうせライのことが心配なんだろうが、それなら一緒に戦えばいいだけの話だ」

「あ、ええ、はい。それじゃあ参加させていただきますけど……………」

「よし戦力ゲット。これで戦力大幅アップだな」

「……………心底呆れました。もう知りません」

「ぷい、とハル力は向こうを向いてしまった。」

悪い事したかな、と思ったが、黙っておく。誰がなにを言おうと、俺の行動を決めるのは俺だ。

「それで、戦力アップって言ったか。具体的にはなにをするんだ？」

「ふむ。」

では、私が岩巨人の戦士に伝わる奥義を伝授するというのはいかがでしょうか」

ドツソが言った。

「……それ、使えるようになるのか？ 短期間で？」

「お任せあれ。」

我が岩巨人族に伝わる、秘伝の訓練術です。3日もあれば大幅に強くなれるでしょう」

「へえ。具体的にはどんなことをやるんだ？」

「そうですね。やや邪道ですが時間も差し迫っておりますし、まずは半日ほどで素振りから爆裂衝撃波を発生させる小技などを」

「待って待って待ってちょっと待って」

「なにか？」

「大事なことを聞き忘れてた。それ、人間にできる鍛錬か？」

「……ふむ。盲点でしたな。」

考えてみれば、岩巨人ならともかく人間の耐久力ではちとぎついかもしれません」

「ないから。岩巨人でも。普通に」

カシルがぼそっとつぶやいた。

「じゃあどうするんだ。いつそ魔術でも覚えるか？ 俺が教えてもいいが」

「魔術……ねえ。コゴネル、それってどれくらいかかる？」

「……読み書きがある程度できれば、教科書渡してやればすぐなるとかなるんだが」

「俺、自分の名前しか読めないし書けないぞ」

「だなあ。そうするとドクトル・テンあたりの武装でも使えるように訓練するしか」

「それじゃあダメだね。ろくな戦力アップにならん」
センエイが言う。

コゴネルはじろりと彼女をにらんで、
「なんだよ。ていうかセンエイ、最初におまえが言い出したんだからなんか案があるんだろ。さっさと見えよ」

「他にいい案があればそつちでもいいかと思っただがねえ。」

ま、いいさ。バグルル、ザナドゥ・エリア桃源領域にこいつを案内してくれないか？

「あゝ！？」

「……なんだよ。変な声を出して」

「い、いや。なんでその名前を知ってるんだよ、センエイ！？」

「あー、悪いね。ちよつとあのスタージンとかいう神官が気になつたんで調べてみたら、おまえとそのザナドゥ・エリア桃源領域の名前に行き当たった。20年くらい前だつて？」

「う……まあ、その、ああ、そのくらいだっけなあ」

「過去を暴いちまって悪いが、この際出し惜しみはなしだ。あんたたち神官戦士団が出会ったという神属の領域、あそこにライくんを連れて行けば、なにか得られるものがあるはずだ」

「けどよう。前は門前払いだつたぜ。今回はどうにかなるのかよ？」

「なる。と、確定で言えないのが癪だがね。」

私の占いでは、少なくとも前回と違うことが起こると出ている。それに賭けてみるしかない。成功すればバルメイス級の神が味方に一体つくことになる。この戦力アップは途方もなく大きい」

「おい、なんの話をしている？」

「行けばわかるさ、ライくん。さしあたり道すがらバグルルに聞いてくれ」

「あー、でもちよつといいか、センエイ」

「なんだいバグルル。まだ問題でも？」

「俺とこのちびすけじゃ戦力が足りん。もうちよつと余分に人数

を割いて欲しいんだが」

「ふむ。そうなると誰かな。サリは確定でこっちに残さなきゃいけないとして、あとハルカとミーチャは残しておきたいが」

「あ、はいはい！ ボク行きます！」

リッサが手を挙げる。

センエイはうなずいて、

「決まりか。あともう少ししてことになる」と

「ほほ、そこで我らが出番ですよ。弟子よ！」

『おうともさ！』

「うお、なんだ！？」

がしゃがしゃがしゃ……じゃきーン！

得体の知れないその金属でできた甲冑みたいなのは、広間に現れてかっこいいポーズ(?)を取った。

「えーと……巨人の残した決戦人型兵器？」

『違うわっ！ 俺だ俺、ペイ！』

「ほほほ、これが我々の新兵器、パワードスーツくん一号ですよ。

まあ実働テストはまったくしていませんが、計算通りならかなりの戦力になるはずですよ」

『そういうことだ。任せてくれよな！』

しゃきーン、とポーズを取りながら、ペイ。

……いや、これすっげえ対応に困るわ。

センエイはしかし、動じた様子もなく平然と、

「よし、戦力はこのくらいでいいだろう。

残りの人員はさっき言ったように竜母でトマニオへ移動。それを確認してから、ライくんのチームも桃源領域ザナドゥ・エリアに移動だ。

各人、明日の朝まで休みだ。十分に体調を整えておくように。以上！」

センエイはそう言って、強引に場を打ち切った。

「で、おまえらはとりあえず明日の朝を待ってナーガの背に乗って出発ってことになった」

夜。

ようやく起きたサリに俺が状況を説明すると、サリは不思議な顔をした。

「ライは行くの？ その、桃源領域ゼナドゥ・エリアに行つて、戦いに参加するの？」

「一応な」

「……なんで？」

質問というよりは、俺の決定に不満があるような声。

それに、

「サリが行きそうだったから」

「……それは、すごく卑怯」

「悪党なんて卑怯でなんぼだろ」

しれつと言つ。

「で、サリのほうこそ。行く気が？」

「うん」

「なんで」

「ライが行きそうだったから」

「……なるほど。卑怯だな」

「でしょう？」

参った。今日のサリは微妙に手強い。

「もつと言えばね。……死体を見たの」

「誰の」

「ライの」

「いや、生きてるって」

「わかつてる。わたしが見たのは、未来の光景よ」

「未来、って」

……それは、すぐまづいんじゃないありませんか？

「べつにおかしなことじゃない。誰かの死の未来を見ることなんて、わたしにはしょっちゅうだから」

「……いや、そう言われても」

「そして。その未来は「見えない」ほうに行くことで変えられる。そうやって、わたしは片っ端から見えた未来を変えてきた」
強い目で言う。

「ある意味、わたしには未来予知能力がないとも言える。わたしが予知した未来はほとんどひとつ残らず実現しないから。偽典カッサンドラ練りと、そんな名前で呼ばれたこともあったわね。

どうしてかはわからない。本来、わたしにはそんな余裕がなかった。自分の中の魔と戦うのに精一杯で、相手を気遣う余裕なんてなかった。

それでも、そうして見た『最後』を、わたしは許容できなかった。自分の味わった最果てを、誰であろうと再現させるわけにはいかないと思った。

……ライ。わたしはたぶん、あの街で死んだのよ。なにもかもを失って絶望して、魔物に取り付かれたときに、なにもなくなってしまう

だから……かな。サリ・ペステイはあそこで生まれて、あれを否定するために生きているんだと　そう思ったの。

間違ってるかな」

「さあ？」

「……言うと思った」

「だってわかんねーもん。サリの生きる理由なんてサリにしかわかんねーだろ」

突き放すようだが、そうとしか言いようがない。

……実際のところ、そんなに慌てて生きる理由決めなくていいんじゃないかな。とも思うけど。

でも俺だって自分の生き方は未来の大悪党と決めている。このあたり、あんまり他人の事は言えないのだった。

「そうね。」

わたしは相変わらず空っぽだけど、やりたいことはできたっ

てこと。それを、ライには知っておいて欲しかったの」

「やりたいことねえ。それが、世界を救うことってわけか」

「……世界じゃなくて、ライ」

「いや、まあ、でも同じだろ？」

「違う」

「同じだって」

「違う！」

ムキになって言う。

……いやまあ、その。

「照れくさいからって女の子をからかっちゃダメだぞーライくん」

「うおおっ！？」

「っーかセンエイめいつの間に後ろにっ……………」

あれ？

「いない」

「幻術を仕掛けられたようね。特定の状況で発生するようにな

っていたようだけど」

「幻術？」

「うん。」

わたしにはなにも見えなかったし聞こえなかったし感じなかったから、ライだけかけられていたんだと思う」

「あー、そーいうことね……………」

ははは。今度会ったら絶対シメる。

「状況から推察して相手はセンエイだと思うけど、なにがあったの？」

「不愉快だから思い出したくもない。」

それより、サリ」

「？」

「おまえ、なんで笑わないんだ？」

問う。

魔物をたたきのめしたあのときから、サリはだいぶ感情豊かになつたと思う。

さつきみたいに怒ることもあるし、泣きそうな顔をしたこともあったけど　なぜか。笑い顔だけ見たことがない。

「……………笑う」

「いや、深刻な顔で悩まなくても」

「ごめんライ。笑うのってどうやるかわからない。

たぶん顔の筋肉をうまく使って作るんだろうけど　　8年も使っ

てない筋肉だから。どう動かすのか覚えてない」

「つつたってなあ。その前は笑ってたんだろ？」

忘れてるだけなんだから、そのうちやりかた思い出すだろ。気にしなくても……………おい？」

サリは、俺が言うのもろくに聞いてない様子で悩んでいるようだった。

「　　ライは、見たい？」

「ん？」

「わたしが笑うところ」

「んー、まあサリは地顔がいいから、たぶん笑ったらセンエイとか泣いて喜ぶと思うけど」

「わたしは、ライの意見を聞いているの」

　　参った。マジで手強い。

「いや、そりゃ、まあ」

「……………（じー）」

「……………一度くらいは、見てみたいかな、とは、思うけど」

「そう」

サリはうなずき　　そして、なにかを決意したような表情になった。

「努力目標ができた。ありがとう、ライ」

「いやまあ、あんまりムキにならなくてもいいぞ？　べつに俺の希望なんてたいしたものじゃないし」

「そう。こういうのが今のわたしには必要だったのよ。茫洋としているだけじゃなくて目標がないと。そうよね」

……聞いちゃいねえし。

(つーか、実は俺、押しちゃいけないスイッチ押しちゃったっぽい?)

考えても、もう後の祭りなのだった。

「……で、いまさら僕になんの用だい、妖術師」

不機嫌な声で問う。

相手はかっかつかと笑って、

「そう言うでない、弟子よ。ちと、計画が狂ってな。人数が足りないので手伝ってもらおうと思ったのだよ」

「計画が狂った、ねえ」

思い出す。フレイアは、この老人が死ぬと断言していた。

(どうやら彼は君の思ったよりしたたかだったようだよ、フレイア)

「手伝えって、僕がその要求を素直に聞くと思うのかい」

「ほう。聞かないと言うか」

「当然だろう。元より、おまえと僕は一度絶縁した仲だ。ことさらに敵対する理由もないが、言われるままに手伝う理由もない」

「奥義、欲しくはないのかね？」

「……」

沈黙する。

相手は嫌らしい笑みを浮かべて、

「貴様の弱点はそれだ。迂闊にカイ・ホルサなどという巨大な力を手に入れたがために、至上命令という弱点をも背負ってしまった。」

そう　貴様の人格やあらゆる判断は、カイ・ホルサの呪縛に制限される。カイ・ホルサが奥義を集めることを優先している以上、貴様はそれに逆らえない」

「言われなくてもわかっているよ。そんなことだからこそ。」

シン・ツアイは、親しい仲間を裏切らざるを得なかった。

「それにしても奥義を複数用意できるとはね。」

なにを企んでいる？

「創世と言ったはずだが」

「それは知っている。だが魔王で直接攻めるのはやめたんだろう？
考えついたべつの手口とやら、教えてくれてもいいんじゃないか」

「ああ、それはな アレだ。賢人会議が隠している、秘口伝の類
を手に入れてな」

「賢人会議が？」

思わず聞き返す。

メサイたちの最高権威、賢人会議。

それが隠している口伝となると、入手ルートも内容もかなり限られることになるが

「女王、か？」

「ほう、知っておったか」

「あの外典を再現する気か。」

たしかに、スールトと直接対決するよりは成算があるだろうが

「鍵は7人の賢者だ。」

すでに人足に当たりはつけておる。あとは貴様が入れば完成、というわけだ」

「……なるほどね」

相手の企んでいることはわかった。

「まあ、よくわかった。で、報酬の確認は？」

「焦るでないわ。」

どうせ、トマニオで一騒動ある。それが終わった後で問題あるまい？」

「まあ、……いいけどね」

「商談成立じゃな。」

さて、では僕は行くぞ。必要なときにすぐ動けるようにしておけ
言い残して、妖術師は消えた。

……なるほど。なるほど。

(妙な誤解があるようだが　まあ、親切に教えてやることもない
か)

「とはいえ、これで彼がクロであることは確定かな」
　　独白して、彼は移動を開始した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6914v/>

神様の剣と懲りない悪党

2011年11月6日03時13分発行